

---

# 馬鹿の世界リフォーム記

零夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

馬鹿の世界リフォーム記

### 【Nコード】

N2550Y

### 【作者名】

澪夢

### 【あらすじ】

貧乳で普段着の和服がそれを助長される無表情で俺を椅子で殴りまくるあの子が好き  
貧乳で傾国の美声で優しくて心配症でちょっぴりおどおどしてる幼馴染なあの子も好き  
豊乳で私様でテンション高くて俺を奴隷扱いする血縁関係無いけど、姉貴なあの人好き  
豊乳で清楚だけどドジっ子眼鏡で巫女服何時も乱れてますよっぴいっうギャップのある幼馴染その2のあの子も好き

皆皆、好き、ダイスキ、愛してる

だから……悲しませるしか能の無い世界、俺が全部壊して綺麗にしてやるよ

誰も悲しみなんて望んでない、皆が、俺が、望むのは……きっと後から先にも笑顔だけ

（カッコいい事言ってますが主人公は馬鹿です、女の子が好きなので）「この作品は『愛された故に憎んだ青年の物語』に出る一人、葵〓ウインデル〓ひすい、が其処に至るまでのお話……」

## この世界の云々（前書き）

取り合えず、半分以上自分の為にまとめてみました（笑）

本編を見る際には別に見なくて平気です。てか、見ない方が楽しいかも？

長い間見てなくて設定忘れたー、的な方が見るのにオススメ……か  
もしれない

## 1)の世界の云々

・良く使う用語

アイコン（扉とも言う）

ディスプレイ画面のようなモノで、連絡を取り合ったりチャットのような事が出来る

他にも、

これを経由する事によって、扱うアイコン固有の属性の、特殊能力が扱える

また、高度な術式を扱う際これを経由すると、かなり身体的精神的負担が減り成功する確率もアップ

力の強い人なら幾つも同時起動出来るが普通は一つ、多くて二つとあった所

これに対する研究の度合いは国によって様々で、全ての機能は解析されていないらしい  
まだまだ謎の多いモノ

風の翼

幼少期には人と全く同じ姿をしており、大きな喪失を経験したと同時に羽が生える

羽の色は黒と白があるようだが、今の所その違いは不明  
能力としては、人離れた聴力と視力と高い治癒能力

そして羽が生えると同時に、扱えなかったアイコンやら術式やらを扱えるようになる

主人公の住む国では割と親交が深く、住んでいる人数も多かった

それ故に『羽有り狩り』と呼ばれる事件により大国の侵略を受けた際、全員が投降する事を条件に国に対する侵略を退けた心優しき種

族でもある

一方で、

他国では『羽有り』『生きた兵器』と呼ばれ心無きものとして扱われている

それは種族特有の『契約』により、多大な力を授かる代償の一番初めに払う対価が「感情」だからだと言われている

混血が非常に多く、純血は稀少価値が高く滅多にお目に掛かれない

術式

特殊能力のこと

高度な術式は、アイコンを通じて起動させるのが通例力が続く限り永遠と使役可能

・大まかな国

ウインダス国

主人公の居る国で割と国民皆が仲良し

島国で、周りが海で囲まれている故に、弱小国にも関わらず何処にも属さない中立国として存在出来ている

過去、『羽有り狩り』が行われるまでは大勢の『風の翼』達が住んでいた

政治体制としては王制だが、王様が割と緩い親馬鹿なので問題は無い模様

誰もが笑って暮らせる世界……を目指し、武力衝突の無い平和な世界を目指す

ダイヤモンド帝国

早くから『風の翼』の種族特有の能力に目を付け、積極的に集めた戦争特化国

国土面積は小さく、それ故に『生きた兵器』を使って資源豊富な国を乗っ取るのが趣味なような好戦的な国  
此方も王制で、徴兵制度がある……が、割と王様は国民に慕われている模様  
恐怖で反乱する意思さえも全て剥ぎ取ってしまったえば、最小の犠牲で平和は築ける  
武力行使の上にはか平和は成り立たないという理念の下、平和な世界を目指す

・属性について  
矢印の向き：優位 劣等

炎

(水 雷 土 風)

水は雷に弱い  
雷は土に弱い  
風は独立  
炎は、水、土、風に弱い

『天才（ジーニアス）』の救済を求めし紙切れ

□

強くなりないのなら言い訳なく戦え  
賢くなりたいたいのなら貪欲に求めろ  
富が欲しいのなら他人を騙せ  
名声が欲しいのならヒトを蹴落とせ

何か自らに能力を求むならば、  
それは即ちそれ相応の覚悟が要る

もしも、汝が全能である事を望むなら  
汝は孤独と共にあらなくてはならない、全てが可能なものは最早  
ヒトではない

故に、ヒトの理解など求めてはならない

もしも、汝が無能である事を望むなら  
汝は皆と共にあらなくてはならない、全てが不可能なものは必要  
とされることは無い

故に、ヒトからの救済を得られる為に絆を育まねばならない

様々な人種、能力、性別、感情  
それら全ての違いから、争いは生まれ命は絶たれ涙は止まること  
を知らない

私は思っただ

今まで無能なものはいただろうか、と



愚かなものは掃いて捨てるほど見てきたが、無能なものは見たい事がない

ヒトは何かしら才能を持って生まれてくるのだから

もしも、無能なものがこの世に生を受けていたのなら

その時初めて、セカイは救われる

無能故に持ち得る唯一の才能

絶対の信頼をヒトに寄せる、愚かしいほどに真っ直ぐで、比類なき程に尊いその才能で

私は信じている

何時しか、無能なものが王となり生きとしいける全てのものと共に、頂点の頂に辿りつくのだと

そして、その頂にて孤独と共に生きる全能へと

真っ直ぐに手を伸ばしてくれることを、

私は何時までも何時までも、信じ続けている……』 <名も無き』  
天才』の救済を望むモノ >

## 回想と日常

少し強めの風、柔らかな温かい季節

優しく差し込む木漏れ日、とても穏やかでまどろみを誘う心地良さが身体を包む

セピアと白の花弁が舞うその場所で、一人の少年がすやすやと眠っていた

栗色の髪が時折、その少女のように愛らしい頬を撫でてはゆるりと肩に掛かり、

分厚い本を抱えるようにして眠ったまま小さく、誰かの名を呟き幸せそうに笑い本をぎゅっと抱き締める

ふと、その少年に静かに少女が近づいていく

大きな眼鏡をかけ、眠っている少年と同じくらいの大きさの本を両手に抱えている

待ち合わせをしていたのだろうか……

待ち人が来たというのにまだ眠っている彼を見て、お人形のように整っている顔が苦笑の色を燈す

舞う花弁と同じ、白の長い髪をかき上げながら少女は少年にゆっくりと近づき、

『  
』

名を呼ぶその声に誘われたのか、

眠っていた少年が赤と黒、蒼と翠がそれぞれ入り混じった右左の瞳を開き、少女を見据え微笑む

少女へ小さく柔らかな手を伸ばし、彼は優しくその名を口にした

『 「お目覚め下さい葵様、殺しますよ？」 !? 』

嫌な予感……を越えた殺気に飛び起きると、サラサラのセピア色のツインテール、海を思わす青い瞳をした少女 セイレン が椅子を振りかぶり、つてええ?!

「つおおお起きた起きた起きたぜっ!!!!」

「ああ、お早うございます、バット……ぐつとなタイミングで私も嬉しいです」

親指をぐつ……と立てるが何時もの無表情は変わらない  
ちなみに、和風の服装が助長する貧乳具合も何時もどおりである  
(……つて、ちよつとおい待てっ!!!)

「ちよ、おまつ、今バットって言ったろ?!なあ、言った、言ったよな?!」

「うるさいです、おだまりなさい」

目が胸の部分にいったのに勘付いたのか不機嫌な顔を隠そうともせず、

夫婦喧嘩またかよーと、笑っている教室のクラスメイト達をも無視し、セイレンはそのまま重力の力も借りて……

せーの、という声さえも聞こえそうな勢いで俺の頭に振り下ろす

( つつつ!!!? )

ガツンッ、と音が頭に輪唱するように響き広がり、冗談抜きでリアルデフォルメお星様が目の前をチカチカと飛び抜ける  
何とか、強制シャットダウンしようとする意識に逆らったが、

「あ、まだお目覚めですね」

「つつ……お、まえが起こしたんだ、つが!!」

続けざまに来た、横からのフルスイングに視界がブレる感覚と腰辺りに来た激しい激痛に、何て理不尽なんだ!と、泣きそうになる  
薄れる視界で、三発目をチャージ中の俺のマイハニー(ただ今絶賛片思い!)が俺の頭に向かって大きく振りかぶって、

「こーらこーら!!セイレン=マクシス、二発までにしときなさいって言うてんじゃんよ!!」

パシッ、とセイレンの細い腕を掴み教師ジャンスが苦笑する

……丁度、俺の眼前5cmの辺りで椅子がピタリッと止まっていた椅子を持っている張本人は少し考えるような素振りした後、椅子を下ろし手をポンッと叩く

「……そうでしたね、忘れていました」

( つつて、忘れんなよっ! )

そもそも何で二回までは黙認されるんだ、と内心では暴れているが表面では正直喋れない

セイレンの言葉以外聞き取れない、はは、愛の差だけ

「教師ジャンス、もう殺してもいいですか？変態の目をして私を見  
てきます、破廉恥です、犯罪です、死ねばいいのに」  
「はは、最後のはちよつとねえ……」

何気に酷いことを言っている二人に、正直俺の意識はもうあの空の  
彼方へ旅立つ寸前である  
かなりどうしようか迷ってるんだZETZ　！！と、最早脳があじゃ  
ぱー状態である

……あ、元々だった

「せ、先生……あの……」

ふいに、小さいけれど鈴を転がしたような綺麗な声が聞こえた  
ああ、この儚く守ってやりたいと思わせる美声は恐らく、

「お、どしたフェルディーン＝アラン？」

傾国の美声の持ち主（姿も滅茶苦茶可愛いんだぜ！）フェルちゃんだ  
少しおどおどしているがそれがまた、いい……いいっ！

「……教師ジャンス、殺していいですよ、ええそうですよね許可  
を貰いましたので殺ります」

「ふええ、だ、だめえっ！！」

またもや俺の眼前3cm（近いっ！）で椅子が止まる  
直後、呆れたような教師の苦笑が聞こえ……

「じゃあ、葵＝ウィンデル＝ひすいを保健室までよろしくするわ、  
フェルディーン＝アラン」

「は、はいっ！」

「食われないよう、お気をつけください、何かあったら大声を上げて民家に助けを求めるのがいいかと思われます」

(俺は不審者かなんかかよ?!)

好きなヒトに此処まで嫌われているのはショックだ、ショック……カアルチャアアアショック!!!!

俺が精神的ショックでぐらついた所を、いい匂いのする豊かなクツシヨンが受け止めた

おお、マシユマ口通り越してなんだ、なんだこの感触は!!俺のゲージが上がるんだぜっ!!

てか、それ以前にこの感触をもつのは二人しか居ない!!ってことでこの俺と同じ洗髪料の臭いは……!!

「ふっふふふ!教師、私様もドレウィーを介抱しに授業サボるわ!サボるサボる、サボタージュよ!!クハハ、素晴らしいっ素晴らしすぎる!!ってことで行くわ!」

「おいおいおい……弟心配を建前にサボるなアイシス!!ウィンデル……また留年すつぞ?」

そう、俺の姉、学校で一、二位を争う豊富な胸の持ち主

教師の言葉に、姉は俺をその胸に押し付け、付け、うつつ息がっ……

(む、胸で窒息など、全国の美女が、まだ見ぬ俺の嫁が泣き過ぎて世界が沈むぜってか、まじ、し……っ)

急速に薄れていく意識の中、楽しいな姉達の声聞いた気がした

「あははははっ!!その時はこのドレウィーも一緒よ!!サラバツ!」

「あ、えと、その、待つてくさいアイシス先輩!」

「あー、しゃーねえから起きたら戻って来いよ!!」

「アイアイサー!!」

\*\*\*\*\*

あの三人、

約一名は気絶していたが、取り合えず送り出した後授業を再開しようとして黒板に向かうと、

「…………教師ジャンス」

あの三人が出て行った後をぼ…………と眺めていたセイレン「マクシスが僅かに寂しそうな顔でオレを見る

ん、何？と先を促すと口を開こうとするが、すぐ閉じて自分の席に着いてしまう

そしてまたちらちらと三人の出て行った扉を見ては、オレを寂しげにじつ…………と見るを繰り返す

（はっはーん、なんだあいつ…………葵も隅に置けんなあ…………）

葵、と癖で心の中で名前呼びになっている事に気付いて思わず苦笑する

血は繋がって居ないが、葵とアイシスとは家族…………養子、という訳でもないが何故か同じ家に住むことになった為、家族と俺は思っている

だからつい…………って、イカンイカン、教師は公平じゃないとな頭を振って思考から追い出すと、どうやら自分に苦笑したと思っらしいセイレン「マクシスが微かに赤くなる

初々しいその姿に自然とにやけかけるが、ばれないように黒板へと振り返る

と、

「先生えー、俺も葵んとこ行っちゃ駄目っすかー」

「あ、アタシも行っちゃ駄目ですか？」

「あ、うちもー」

「僕もー」

皆が皆立ち上がり挙手してオレを見る

(ああもう、コイツ等ときたら……)

普段は殴る蹴る笑うからかうのオンパレードなのに、

寝込んだり誰かがやり過ぎたりすると、途端に葵を心配しだす

愛されてんねー……と、微笑ましくなるがこんなに大人数で行けば

校長が怖い

そう、葵が心に傷を負った！などと勘違いして泣き喚き正直煩い  
のだ、何を命令し出すかも分かったもんじゃないし……

「……取り合えず、放課後まで後2時限だ、それまで我慢な」

そう言い、黒板に向かうと一斉に生徒全員がブーイングしてきた  
侮り難し、1年B組

取り合えずなだめつつ、何故葵がこんなにも皆に心配されているの  
か分かっていないらしいセイレンの戸惑うような不思議そうな顔を  
チラッと見て、苦笑する

(なんだ、アイツ好きだ好きだいう割には何も話してないのか)  
初心だねえ……と、ストレートな馬鹿を思い浮かべては、

「おら、嫌いぞおまえら……」

「にぎやっ……」

「おお、教師ジャンスは今日もチョーク投げ絶好調……あえだっ！  
？」

「はは、黒板消し飛ばしもみただね」



いまだ過去を引きずり回し、内側はあの時の……

死にかけゾンビのような青白い顔のままなんだろうなあと、不甲斐なく思い、笑った

乾いた笑いになっていないかが、少しだけ気になった

## 回想と日常（後書き）

主人公：葵ⅡウインデルⅡひすい

呼び名：葵、ひすいくん、葵様、馬鹿

参考：世界最大級の馬鹿 & a m p ; 女の子好き（現在はセイレンに猛烈片思い中…… だけど女の子好き）

ヒロイン1：セイレンⅡマクレス

呼び名：セイレン、セレン、マクレス

参考：貧乳無表情主人公に対してのみバイオレンスティックなお人形さん並みに整った顔立ちの少女

ヒロイン2：フェルディーンⅡアラン

呼び名：フェルディーン、フェルちゃん、アラン

参考：貧乳傾国の美声おどおど優しい幼馴染で皆の癒し系、ずっと昔のある事件をキツカケに右目を失っている

ヒロイン3（？）：アイシスⅡウインデル

呼び名：姉ねえちゃん、アイっちゃん、アイシス、ウインデル

参考：学校で一、二位を争う豊乳の持ち主で私様（俺様の改良版）で弟の主人公をドレウイー（訳：奴隷）と言うが大事な場面では空気を読む、てか弟が可愛いお年頃

教師：ジャンスⅡウインデル

呼び名：教師、教師ジャンス、ウインデル氏

参考：主人公のクラス1年B組の問題児を上手くやりくるめる凄い人で主人公、アイシスとは家族という括り、ちなみに血縁関係は皆無

トラウマ+馬鹿騒ぎ=平和な一日(前書き)

感想、鍵猫様、どうも有難う御座いますッ!!

## トラウマ+馬鹿騒ぎ=平和な一日

空が赤い

風も赤く、そして熱い

全てを飲み込まんとする炎が燃え上がり其処にあるだけのモノにさえ襲いかかる

『はあ……はあっ……!!』

むせ返るような暑さと、血の臭いと、炎の中……一人の少年が走る胸に少女と交換しあった大きな本を抱いて、息が切れるのにも関わらず荒れ果てた、別世界のような見知った場所をただただ走る  
目指すのはそう、少女と何時も約束を交わすあのヒカリ溢れる優しい空間

『はあっ……あ!!そんな……』

ガクンツ、と少年が膝を付く  
色の違う双方の目に映るのは、優しかった思い出を否定するかのように荒れ果てた場所

木漏れ日で何時もまどろませてくれた大きな木が、燃えていた  
少女を待つ間寝転がっていると何時も優しく受け止めてくれた芝生が、抉れていた

頬を撫でるように吹いていた心地よい風が、熱く荒々しいものに変わっていた

白とセピアの花弁を躍らせ舞っていた美しい花が、枯れていた  
全てがそう、優しい思い出を否定するかのように……

ただただ呆然としている少年の大きな瞳から、涙が零れる  
声は上げない、たが押し殺している訳でもない  
悲しみを感じる心が麻痺したかのように、ただただ放心した顔で涙  
だけを流す

『……………あお、い……………?』

ふと、立ち尽くす少年の耳に、聞きなれた少女の声が入る  
はっ、として振り向くと何時もと同じ姿の少女がいた

『っ、無事だったんだね!』

涙を拭い嬉しげに少女の下へ走る少年に、少女は怯えたように叫ぶ

『来ちゃダメッ!!!』

『えっ……………?』

あと少し、そのタイミングで少女の声と同時に風の音が聞こえ、

『いやぁっ!!!!あおいっ!!!!』

見えたのは少女の絶望と怯えに満ちた声と周りに飛び散る赤いアカ  
イ……………

「ドオオオオレエエウイイイ!!!!」  
「ぶふうっ?!」

よく分からない掛け声と共に、身体の上に何かが押し掛かる  
凄まじい弾力を持ったいい匂いのする何かが……ってかギブギブッ  
！！死ぬ、死ぬ！！

「あ、あのアイシス先輩っ！ひすいクン潰れてますっ」

「あら、このドレウイー私様の胸に潰れて圧死しそうなね！やっ  
てみたいけど呆気ないの嫌いだからやってやらない！！嫌い、嫌い  
よ呆気ないのねえ！！」

ああ、相変わらず姉ねえちゃんは姉ねえちゃんだな……

そんな事を思いながら、頬を容赦なくビンタされつつ上体を起こす  
きやは、とか言いながら体勢を崩した姉ねえちゃんを反射的に抱き  
とめると、まるで成長を喜ぶ母のような顔をし、頭を撫でられる

「ふふふ、ドレウイーも一端の狼紳士のスキルを手に入れたようね  
！これで赤頭巾ちゃんを攻略出切るわ！！」

「おおお、さっすが！！姉ねえちゃん、その狼紳士つてのかけえ  
！！」

きやいきやいと、そのままの体勢で何時ものように騒いで居ると、  
微笑みながら見ていたフェルちゃんがふいに、俺の額に触れる  
ひんやりとしたその感触と、優しく撫でられる感覚が思いの他心地  
良く……目を閉じて身を任せていると、思考が徐々にぼんやりとし  
てくる

「ひすいクン、撫でられるの、好きなんだね」

フェルちゃんだからだよ、と告げると嬉しげに笑うのが見えた

そのまま撫でられていくと、さっき見ていた嫌な 過去という名  
の悪夢 それを見たくない、と気張っていた身体から力が抜けて

いく

ああ、不味いなあ……ぼんやりと頭の隅で思った瞬間、姉ねえちゃんに柔らかく頬を包まれる

「葵、もう一眠りしなさい？今度は怖い夢見ないように、一緒に寝てあげるから」

「わ、私も……その、一緒に、側にいるから……安心して、ね？」

まるで子供扱い、だよなあ……ふと、そんな事を思い

(てか、得役だけど、さ……)

情けねえ、本当に……情けねえ、やっぱり、俺って……微かに抱いた自己嫌悪は睡魔と、ゆっくりと身体を包み込む二つの体温に掻き消され

「ん……」

トロン……と、意識が蕩けるように沈んでいった

二人して抱き締めると、頑なに拒んでいた眠りへと葵は誘われていった

こちらに身を任せ、子供のように幼い顔で眠る彼を眺めながら小さく笑うと、フェルが珍しいものを見たとも言いたげな表情でこちら見ていた

「なあに、そんなに珍しいかしら、私様の微笑」

「あ、え、その……はい、とつても……その笑みの色は……珍しいです」

「……笑みの色？」

（笑みに、色なんてあったかしら？）

少し首を傾げると、フェルがしまった、といった顔を少し焦ったように何でも無いですっ、と叫び

もそもそ……と、眠っている葵に更にくっつくように布団に潜り込む

（あらあら、葵も隅に置けないわねえ……私様ちよつと妬げちゃうわよーいやん、クリーム塗らなきゃッ！）

頬を押さえ腰を少し揺らすと、ギシッ、とベットが軋む音が上がる

「……………」

もう一度揺らすと、やはりギシッと軋む間違うことなく、ギシッと、軋んでいる

「あ、あの……アイシス、先輩……？」

フェルが眠る葵に抱きつきながら、怯えたような声をあげる

その様子と、以前より太ったかもしれない……という懸念に、何かがかみ上げてきて……

「っ、う、うらやましいなんて思ってないんだからね！いやんっ！」

「へ、え、せんぱ、ひうあ？！」

膝立ちになり、回りも気にせず激しく身体全体を思いっきり揺らす途中フェルの悲鳴のような声が聞こえた気がしたが、それどころではない



(ドレウィーの分際で、もうっ！私様に嫉妬の心を抱かすなんて……いやん、ステキッ！……)  
ギシッギシッギシッギシッ、と休まず揺らすと何となく腰辺りがシエイプアップされた気がした

「ふふん、これはこれでいい……いいわっ……！」

「ひいんっ、せんぱ、あややややーっ?!」

「よし、じゃあ今日の授業は此処まで写せたらオレに見せに来て、終わりな」

一瞬にして此れでもか、とばかりに黒板前面に書き殴るように今日の授業内容をまとめた教師ジャンスは、必死に写し取っている生徒達を見て微笑んでいた

(……何時もと違い、何故最後にまとめを……?)

奇妙な教師ジャンスの行動……理解は出来ないが、逆らう理由も無いので大人しく従う事にした

教師ジャンスの文字は、よく言つて走り書き……悪く言えば、ただのミミズが黒板中を這っているに過ぎない

一つ上の行に文字を重ねるわ、間違つた文字をそのまま何本か線を加えて無理やり文字にするわ、拳句の果てに……「あー、めんどいから教科書見るか、うん、うわあー……綺麗な文字だな、今度からこれ見よう、先生書くのめんどいわ」などと、給料詐欺もい所だ……と、客観的に分析して当て嵌まる

そうこうしている内に、一番早い生徒が終わり、二人目、三人目……

…と、次々と終わり許可を貰って教室を飛び出していく

(皆様、葵様を慕ってらっしゃるのでしょうか?)

ぼんやりと、手にノートや辞書、筆箱、鞆…何故かハリセーンを持って出て行くこうとする皆様を見てみると、教師ジャンスが苦笑する

「あー……お前ら、暴力はあんまし」

「愛・情・表・現ッ!!!!」

思わず、教師ジャンスも引く程の剣幕で返した彼らは廊下に飛び出し、そのまま失踪した

……しばらくして、何かを蹴飛ばした音と、何かが零れる音……そして、「貴様等……走るなやああああっ!!!!」と、事務のおじ様の悲鳴が聞こえた

(ええ分かります、皆様あのハリセーンでドメスティックバイオレンスのような事を早く葵様にしてさしあげたいのですね、暴力は愛情表現でありますから)

そこまで考えて、教師ジャンスの黒板消し飛ばしやチョーク飛ばしは、やはり愛情表現の一環……そういう結論に至った

(さすが、生徒思いでありますね……侮り難し、教師ジャンス) コクリ、と頷きながら書き綴っていると、

「うああああ?!おま、おまつ、おまえらちよっ」

「両手に花で眠ってるたあいご身分だなこの野郎」

「ああ?あ、本当だ……いい匂いがすると思ったら、俺ってば得役じゃん!!!!」

「……あああああああああつ成敗!!!!」

「げ、ちよ、あだだだだだっ!!!!」

聞き慣れた悲鳴とハリセーン協奏曲が聞こえ静かになった

ああ、皆様の愛情表現は無事成功したようですね……そう思い、最

後の一行を書き終え顔を上げると、

「……何時の間にか、最後となっておりましたね」

窓から見えるのは茜色に染まった空

視線を戻し前を見ると、教壇の机にもたれ掛かりながら教師ジャンスが眠っているのが見えた

(……どうしたものでしょうか)

許可が貰えないと帰れない……なのに、教師ジャンスは眠っているじっと見ているても起きる様子が無く……爆睡中のようだ、と結論付け、

手を軽く……透明な壁に添わずように上げ、静止させると、音も無くディスプレイ画面のようなものが現れる

「……この状態を記録し、後で咎められる状況に陥ったならば校長ライムに提出すると脅す事を選択します」

ピツという音と共に、

<了解致しました>と画面に表示され、それ     アイコン     がカメラモードとなり……難なく物的証拠を手に入れた

それを確認し、証拠隠滅……と上げていた手を下げ、アイコンを消す何事も無かったように帰り支度をしていると、

「あのお……」

廊下側の扉から、若干舌つ足らずの甘い声が聞こえた顔を上げると見えたのは、クラスメイトの……

「ああ、黒髪ロング巫女の豊乳マゾヒスト魔、楓様ではありませんか」

「あう、ま、マゾヒスト……ゾクゾクする響き……」

恍惚とした表情を浮かべる楓様は、今日もマゾヒスト絶好調の様子（ふむ、どうやら黒髪ロンゲ巫女の豊乳ドM魔、と改める必要があるようです……）

密かに、頭の中の情報を書き換えていると、

「って、こんなことをするつもりで来た訳じゃないのですよお！セイレンさん、今書き終わった所ですよねえ？」

「はい、楓様の目が胸に栄養を取られ過ぎて節穴になっていないならば、そう判断して頂いてよろしいかと」

「はうっ……な、なんかゾクゾク来ますねえ……って、私Mじゃないですよお?!」

「はい、大丈夫であります、楓様はドMで御座います」

「ううう……毒舌って、い、いい……じゃ、じゃなくて!!」

パンツ、と顔を真っ赤にしながら私の机を叩く楓様

（ああ、楓様は人外の、特に無機質な机にラブを感じる御方でしたか……新発見です）

メモメモ……と、楓様には見えないように記し本題に戻る頃合だと判断する

「それで、どういった御用ですか？」

「あ、え、ああ……葵クンを一緒に迎えに行きませんか？」

「なるほど、そうして私と葵様両方に苛めてもらう魂胆ですか」

「はあ、想像しただけでゾクゾク……って違います違います違いますうう!!!」

パンツパンツパンツパンツ、と私の机に愛情表現をする楓様

（……そんなに迫らなくても、机は逃げないのに……初心ですね、

ああそうだ、気に入っているようなので差し上げることになりました、明日くらいに)

代わりに私は、隣の葵様の机を貰いましょう……密かに明日の計画を立て、まだ顔を真っ赤にして否定している楓様に、

「煩いですよ、弄られたいなら御黙りなさい」

「あう！もって弄ってえっ！！じゃ、な、なななくてっ……！！！」

パクパク、と口を動かし、今しがた言ってしまった本音に混乱している楓様の頭から湯気が……

「……おいおいおい、お前さん等……何してんさ、神聖な教室で？」

「あ、日々楓様を苛めて悦楽を得ている自称紳士な黒髪DS、鴻苑様……葵様流に言えば、公園様」

「ってご挨拶さねえ、相変わらず……ってか、公園は止めれ、オレ、そんな口利かないように素直にしたくなるんさ」

「それはいけませんね、全力で回避させて頂きたくあります」

私の言葉に、にいつと鴻苑様が笑い、誘うような黒の瞳を向けてくる（ああ、そういえば、本に書いてありましたね……）

友情とは、時には殴りあい蹴りあい、動けなくなるまで戦いお互いの健闘を讃え合うのだと

と、いう事は鴻苑様は、私と友情を育みたいのでしょうか  
ならば……

「もちろん、実力行使を持って」

言葉が終わるか終わらないかのタイミングで、鴻苑様が何かを横に振った

反射的に楓様を教師ジャンスがいる方へ蹴り飛ばし（いつ、もつと蹴つてえ！！By楓）バックステップで飛び去る

見えたのは、白銀の棒状の何か 金属バットだった

（……用意周到な方ですね……女性に人気があるでしょう）

そんな事を考えている間にも、鴻苑様がバットを持って飛び掛つてくる

ふと、これは淑女暴行 もとい、犯罪 ではないのか……と、

思いあたった

すなわち、そう

「セクハラですね」

「っは、へ?!」

ピタッ、と鼻先5cmの辺りで金属バットが緊急静止する

心なしか、鴻苑様が震えている……その様子を表すなら、そんなまさかつ、いや、違つ……といった感じだろう

「もう一度います、男おのこの子から女めすこの子に言い寄る、それは正にセ

クハラ……セクシャルハラスメントではありませんか」

「うっ」

「当然、紳士の風上にも置けません」

「ぐあっ」

「しかも貴方は、私の返事を聞く前から武器を用意してらっしゃった……ただの野獣ではありませんか」

「ぶぐうっ」

わなわな、と震える鴻苑様

最早最初の勢いは何処へやら……の、状態に私はせめてもの情けに、静かに葵様の椅子を手取る

「紳士なドSと名乗っている割にはこの有様……ヘタレですね」  
「がはっ」

「いえ、最早……うじ虫ですね」

「あぐうっ」

「……ちゃんとしてんのかこのヘタレうじ虫変態野郎……で、あります」

「ぐはあっっ!!」

どうやら今の言葉がクリティカルヒットしたらしく……戦意消失したように膝を付く鴻苑様

ちなみに、眠っている教師ジャンスの近くでは、楓様が物欲しそうに顔を真っ赤にしてこちらを見ていたので、

「見てんじゃねえぞこのドMド変態めっ……で、あります」と言う  
と、鼻血を噴出しダウンした

取り合えず無視し、廊下を背に葵様の椅子を大きく振りかぶる

「敗者に情けをかけてはプライドを挫くらしいですね、ですので思  
いっきり……やります」

今まで殴ってきた中で……葵様を殴るスピードに続く二番目の速  
さで、椅子を振り下ろしていく  
狙うは、頂垂れている頭……

これできっと鴻苑様はプライドが挫かれる事無く、復帰できるだろ  
う……そう思い、振り切るうとした、瞬間

むじゅ……

「……………はい?」

胸に、何が触れた

加えて言えば、後ろから抱きすくめられている感覚がある

そこまでは理解出来たが、突然の事に思考が停止する

振り下ろしかけていた椅子も中途半端な場所で止まり、身体の動きまで停止する……それに気をよくしたのか、

むに、むにむに

胸に触れていた何かが、遠慮なしに動く

顔を蒼ざめつつも、真っ赤にしている楓様が、私の後ろを必死で指差す

何が……ようやく動き始めた思考で感じたのは、後ろから香ってきた見知った匂い

それと同時に、

「セイレン、そういう事していいのは俺だけだって言ってるだろ？  
確実に他の奴だと死ぬからさ……てか、セイレン……案外柔らかいんだな！！もつとハードなのを想像してたぜ！！」

本日二度目の、思考停止が訪れた

- - - - -

保健室での襲撃の後、あれだけの騒ぎにも関わらず寝ていた姉ねえちゃんとフェルちゃんに布団を掛け、何だか大変なことになると直感したので俺のやり方で止めてみたが……



(あつれえ、可笑しいな?)

俺はセイレンの胸を揉……めるほど無かった……触りながら、首を傾げる

もつとハードなのを想像していたのだが、存外柔らかい……ずっと触っていたと思える感触だ

と、まあそれはそれとして……困った、セイレンが動かない

殴られるくらいはしてくる、と思っていたのに、期待を裏切り動かない

(つて、べ、別に、セイレンに殴られるのが好きな訳じゃないんだからな!!)

混乱し過ぎて自分に言い訳を始めている、厄介な状況だ

ちなみに、何故か教壇の机で寝ていた先生が何時の間にか起きて……

…若干落ち込んでる鴻苑と、興奮したり蒼ざめたり忙しい楓を引張って出て行った

「セイレン?」

胸から手を離し、セイレンの身体から離れる

脇腹に手が掠めた時、ピクリツと反応があった……ふむ、弱点はあ

そこか……じゃ、なくて、

「えーと、怒った?」

顔を覗きこむと、微かに顔を赤くして……

不覚にも、その顔にドキツと胸が高鳴った

「き……」

小さく震えながら、セイレンが、き……と音を発する

おお、まさか……き、から始まる言葉といえば……

(え、何、もしかして「き」から始まる可愛らしい悲鳴あげちゃうわけ?! え、あのセイレンが、このセイレンが?! )  
期待と、ほんの少しの不安に頭が混乱し出す  
ここでもし、セイレンが「き」から始まる可愛らしい悲鳴を言えば、俺の中で過去が肯定される  
セイレンはやっぱり、『あの子』なのだ、肯定してしまう  
期待と不安が入り混じる嫌な時間がほんの少し流れる  
そして、待ち望んだ回答が今……セイレンの、彼女の口から……

「き、ちがい……っ!!」

(え、え、そつち?! )

びくびくドキドキして損したあ! !と、内心残念にも安堵にも似た気分陥った瞬間、  
視界がブレ、腰辺りに激痛が走るというデジャビュを経験した

「いいいいってえ、アガッ!!」

続けざまに、今度は頭に……またしてもデジャビュだ  
今日はデジャビュ記念日としておこう、と心の中にメモしてから、  
ふらふらする頭を押さえ何とか立ち上がると、同時に今度は背中に衝撃が来た

「ふっ……!!」

息が、詰まる

無様に床に転がり、続けざまに来た頭へのもう一撃に視界がぼやけると、その時やっとなセイレンが口を開く

「っつ、の、変態！うじ虫っ！ケダモノっ！……っ、はぁ……セクハラです」

途中から落ち着いたらしく、ドカ、ガンツ、ゲシゲシッ、とセイレンは蹴り飛ばしてくるだけになった

そして、抵抗すら出来ない俺をふみふみ……と、踏みながら、

「……私が折角……何時もより早く、ノート写し、したというのに……」

ポツリと、咳かれる言葉

正直蹴られ叩かれ過ぎて視界がぼんやりとしているが、寂しげなその顔（脳内補整でセイレンは何時もクリアなんだぜ！）を見て……無意識に、口端が上がる

（ああ……全然脈ねえと思ってたけど、良かった……嫌われてはねえみたいだ）

セイレンはただ、不器用なだけの女の子なのかもしれない言葉に、行動に上手く表せなくて……こういった暴力行為で表現するしかないのかもしれない  
そう思うと、蹴る殴る踏む叩きのめす、その一つ一つの行為がセイレンによって行われると思うと愛おしく……

「何蹴られて喜んでいるのですか、DMですか変態ですかキモいですよ、もう存在自体がセクハラですのでご臨終下さい」

そんな声と同時に視界が大幅にブレ、続けざまにガンツ……と、衝撃が襲い、

「……」

本日二度目のデジャビュを経験した、と認識したと同時に何も分からなくなった

……次に目が覚めた時思ったのは、  
セイレンと居ると、自分が何時か本当にドMになりそうで怖いなあ  
……ということ  
冗談で済めばいいと、本<sup>マ</sup>気で思った

## トラウマ+馬鹿騒ぎⅡ平和な一日(後書き)

ヒロイン4：比奈乃 ひなの 楓 かえで

呼び名：楓、比奈乃

参考：黒髪ロング豊乳ドMな巫女さん。兎に角物凄くドMで、苛められるのが大好き。鴻苑クンとは、結構仲良し、双子のお姉さんが居る

友達：東 ひがし 鴻苑 こうえん

呼び名：鴻苑、東、公園(笑)

参考：自称ドSな紳士、だが毒舌なセイレンには勝てなかったもよう……中途半端に紳士で中途半端にS、即ちヘタレ

## 無人島＋課外授業Ⅱ サバイバル

空が、青い

……昨日も青かったけど何となく改めて思ってみた  
目を閉じて、もう一度開く

「空、青い」

やはり、空はどこまでもどこまでも青い

この時期は何時もそうだ、天気は崩れず快晴が数週間と続く

「……嫌いじゃ、ねえんだけどなあ……」

んー、と伸びをしながら寝転がっていた芝生から身を起こし、頭を

掻きながら眼下　今いる崖の上から約50m下　を見やる

其処には、クラスメイト達が俺を除いて全員居る

なんせ、今日は地獄の課外授業　無人島で実戦模擬　だ

ちなみに手元にあるプリントからするに今回の内容は……「鬼」と

呼ばれる一人を「桃太郎」と呼ばれる他、1年B組全員が追いかける  
期間は開始の合図から日没まで

それまでに、どんな手を使ってでも「鬼」に触れれば触れた「桃太  
郎」の勝ち、逃げ切れば「鬼」の勝ち

単純なサバイバルである

「はあー……」

そして俺は、本日5度目の溜息を吐き下をぼんやりと見る  
聞こえてくるのは、先生と皆の声で……

「さあて、今日のサバイバルの『鬼』は皆も知っての通り、葵<sup>〓</sup>ウ  
インデル<sup>〓</sup>ひすいだ」

「おー、楽勝じゃん！」

「はは、そう思って今回の『桃太郎』の制約は『鬼』の半径3m以  
内は、自分から近づいちゃいけない、だからな」

「それでも楽勝っスよ!!!」

(おいおいおいおい、案外ひでえなー)

まあ事実だけだよ、と崖の上から笑いながら静観することにした

何せ、俺は今回のサバイバルの『鬼』だ

クラス全員で俺を含めて10人、王様ゲーム宜しくのくじ引きで引  
き当てたのには、正直運が無さ過ぎると泣きたいくらいだ

他のクラスから、「もう無理だ！」と追い出された問題児集合体の  
寄せ集めである1年B組を全て敵に回すことになった

しかも、俺以外はただ個性が強過ぎただけで戦闘能力がかなり強い  
のだ、皆何かしら特殊能力を扱える  
ははは、泣きたいぜこんちきしよう

「おいおいお前等、『鬼』が弱いと『桃太郎』同士でのやり合いが  
激しくなんの知ってんだろ？」

「あー……確かに、最初に触れたもん勝ちなんさまもんねえ」

「早い者勝ち、だもんねえ……は！も、もしかしたら……私が頑張  
つたら皆妨害に来てくれるかもお?!」

「はは……ドMさねえ、楓は」

「はう、鴻苑クン……一日経って復活してるう、素敵っ!!!」

頬を染めて鴻苑に抱きつく楓に皆が苦笑しているのが見えた  
心の中を代弁するなら、『もうお前等お似合いだからくっ付けよ』  
って所だろう

(さすが、真性ドMだよなあ……けど、ドMは侮り難し)

妨害されようと恐らく本気で頑張ってくる筈だ

飛道具が得意な比奈乃は、本気になればどんなに遠くとも命中させる事が出来る……ちなみに、本気モードのキーワードは、『頑張れば苛めてやるよ』だ

……ドMも此処まで来たら最早神だ、神

「ようし、お前等！気合入れていけよ！一番の奴にはなんと、授業サボり券6枚を贈呈だからな」

「おおっつ！！！」

先生の言葉に皆の眼つきが一瞬にして変わる、そりゃあもう色んな意味で……

まあ共通してるのは、

「かなり、張り切ってんなあ」

これは本気で逃げないと殺されるかもしれない

何せ相手は、倒れて保健室で寝ていた罪無き俺（昨日のあれは事故だ、故意であんなことする訳さすがにねえぜ！）を襲撃する外道共だ、鬼畜街道まっしぐらの鬼だ、鬼  
故に色々と現実逃避しちまう訳であって、

「あー……今日もセイレンは可愛いなあ……」

ツインテール+貧乳=最強だ、いや、正義だ



隣にいるフェルちゃんは可愛い、兎に角もう癒される、心の良心だ  
その前に居る姉ねえちゃんは……

「いい、いいわ！逃げるドレウィーを捕まえる私様……そしてその後お仕置きと称してあーんなことやこーんなこと」

「おいおい、授業中くらいは自重しろ、アイシス＝ウィンデル」

言うまでもない、絶好調だ

（にぎやー、とか言いたい気分なんだけどさあ俺……これって降伏  
なしだからなあ、負けたらペナルティだし……）

「おおう、本格的に落ちこぼれの俺を辱める授業だぜい！！」

言ってから想像した……なんか良いかもしれない、新たな扉が開か  
れそうな……

しかも相手がセイレンなら尚良し！！俺犬にでも下僕にでも喜んで  
なっっちゃうよ？！

「で、えー……大体こんな感じが、何か質問は？」

俺が妄想で悶えている間も眼下では真面目に授業が進む

皆黙って首を振っている姿に、

ふと、何時も何かは質問するあの二人 車椅子に乗っている儂く

も愛らしい金髪幼女、エリス＝リアライ（エリスちゃん）と、何時

もその車椅子を押す同級生B的な……もうお前等付き合っ（以下略）

的なウルシエン＝アズウィー（ウルシー、ロリコン） が居ない

ことに気付いた

（……今日はエリスちゃんの両足のメンテナンスの日、だっけ？）

彼女の両足は、義足だ

何故かは、まだ知らないが……いつか話してくれると信じている

この所はお互い様だから

(……俺も左腕が肩から義腕な理由話せてねえし……ってか何俺、愛らしい幼女とペアルック的な?!やべえテンション上がったあつ!!)

再び妄想世界にログインする  
と、

「さて……そろそろあの馬鹿が暇過ぎて犯罪級の妄想し始めてるか  
ら皆、殺つてこーい!」

「イエツサーツ!」

(って何か先生笑顔が恐ろしい……ってか、げ、始まった!!)  
妄想世界からログアウトするには十分過ぎる要因を与えられ、すぐ  
さま身を起こしその場から離れようとする、と

「あー」

「ひゃひい?!」

背後から聞こえた声に思わず裏返つた声を上げながら振り返ると、  
居たのは車椅子幼女、エリスちゃん

「って、僕のこと忘れてない?ねえ忘れてるよね?」

後ろのモブキャラである、珍しく眼鏡を着用している同級生Bはも  
ちろん無視だ

あ、何か落ち込んだ

「みなさま、何してらっしやるですか?」

きよとん、と首を傾げるエリスちゃん

表情は見た目に比べてかなり薄いが、何処となくセイレンを思わせ  
て愛らしい……って、俺はロリコンじゃありませんよ?……ホント

ダヨ？

「あー……今日はな、エリスちゃん、課外授業なんだよ」

「かがい……じゅぎよお？」

若干舌つ足らずで鸚鵡返しをするエリスちゃん

（ああ畜生カワウイーなこの野郎俺ロリもいけるわってかセイレンに継ぐ正義だわ、これ）

悶えかける……が、俺は狼紳士なので耐える

勇者よ、今はその時ではないのです……ほら、俺専用の妄想女神様（セイレン似）がこう言ってる！我慢だ俺！！

「そ、課外授業……『鬼』を『桃太郎』が追いかける奴、知ってるだろ？」

「あ、分かりましたです……エリスの好きなのですね」

ぱあ……と、花が咲いたように微笑むエリスちゃん

（ああ畜生萌える……セイレンに継ぐ<以下略>）

さつき叫んだしそろそろ危ない……そう判断して、詳しい事は先生に聞いてくれ、と言葉を残しカツコよく去ろうとするが、

「ちよ、ちよっと待ってくれないかい？」

影の薄いモブ扱いされてるロリコンが話しかけてきた

ストレートに思った事を口に出したら凹んだ、いや沈んだ、しかも頭に……先がトイレのスポスポになってる矢が刺さって……ああ、幸の薄さもモブ並みかウルシー……って、まさか！

「おーっほっほっほほいのほいっ！！見つけたわドレウィー！！さあ神妙にこの姉ねえ様に捕まりなさいっ！！！」

「あ、まだ捕まっちゃだめえー！！妨害沢山されてからあー！！」

(どっちだよ、おい)

目の前で姉ねえちゃんと楓が騒ぎ出しているので突っ込むタイミン  
グを失い、そのまま背を向ける  
その時、

「あ、あの……ひすいクン」

所在なさげで不安そうな声が響く  
守ってやりたくなる本能が騒ぐこの、ある意味で一番脅威な美しい  
声が泣きそうに震え……

「い、行っちゃ……やだあっ……」

「……つつっ！！」

(これ反則じゃねえ?!なあそうだよなあ、おい?!)  
反射的に振り返ってしまうのが悲しき男の性……振り返って後悔し  
た、本泣き5秒前くらいの状態だ

(こ、これが演劇部の力か?!そうなのか、そうなんだな?!何て  
けしからん、本能が騒ぐぜ!!)

一步、思わず足がフェルちゃんに向く  
安堵したような顔になるフェルちゃん、ポロリと涙を一粒流し……

「ひすいクンっ……」

零れた涙はそのままに、嬉しげに手を伸ばして近づいてくる  
更に一步、足がフェルちゃんに近づいた時、ソクリと……ソクリと、  
背筋に寒気が走った

「……葵様……私だけでは飽き足らず、フェル様まで毒牙にかけると言つのですか」

「あ、せ、セイレンっ?! って、毒牙にかけるって、俺まだ妄想の中ですらしてねえよ?!」

「当たり前です、そんな事をしていればこの世界から抹殺しますから、ええ痕跡一つ残さずに」

セイレンが、何かを水平に構える

手に握っているそれは正しく……刀ですかい?!

「え、ちょ、マジそれ死ぬって!!」

「ええ、ですから……死んでください」

ひゅん、と音が聞こえた……そう感じた瞬間、俺の身体は垂直に高く高く空に舞っていて

(え……?)

身体はちゃんと離れていない、そう認識したと同時に意識が白んでいく

微かに薄れる視界で見えたのが、俺の垂直真下辺りにセイレンが立ち、じつ……と落ちてくるのを待っている姿

目の前に俺が落ちてから拾おうとは、思っただけらしく、受け止めようと手を広げていた

そんなセイレンに、思わず温かいものがこみ上げてくる

(案外、優しいよなあ……バイオレンスティックで歩く毒舌だけど……って、あ)

ふと思った、セイレンに出会ってから毎日と言っていいほど気絶させられてるよなあ……と……

偶にはラブラブみたいなのしてみたい、と思ったと同時に視界がシヤットダウンした

セイレンの気配を感じ、安堵のような溜息が聞こえた瞬間、

「……………っ！！」

重力に従って落ちていく筈の身体が、急激に吹き飛ぶ感覚を感じて  
セイレンの気配が遠ざかり……………

「葵様……………っ！！」少しだけ焦ったような声が聞こえたと同時に、  
残っていた意識が途切れた

本日の課外授業……………

物凄い勢いで吹っ飛んで行く馬鹿が二回程目撃されたとかしなかつ  
たとか

そして、太陽が無人島の真上に昇りきる……………それが前半戦終了と共  
に、静かに……………後半戦が幕を開いた合図だった

無人島＋課外授業Ⅱサバイバル（後書き）

ヒロイン5：エリスⅡリアライ

呼び名：エリス、エリスちゃん

参考：儂く愛らしい車椅子金髪幼女で、両足が義足。年齢は10歳だが、何やら飛び級したらしく葵達と同じ学年

友達：ウルシエンⅡアズウイ

呼び名：ウルシー、ウルシー君、モブ男（笑）

参考：エリスの車椅子を押す役目として定着している、同級生B的なモブ並みの幸の薄さと、時たま影の薄さを誇るロリコン

順調＋予想外＝恐怖と不安と、泣きそうな叫び

(……身体が、痛え……)

ぼんやりとした意識の中で思うのは、そんな事  
身を起こすと、其処はどうやら森の中のように太陽も見えず、ただ  
森が続くだけだった

(此処、何処だ……いや、無人島だったのは知ってるけど……)  
んー、と伸びをしながら体を回す

パキッ、やらポキッ、やら不吉な音がした……もう年なのかもしれ  
ない

「って、俺はまだピッチピチの16だぜ！」

自分に突っ込んでみた、虚しさが3上がった気がした

(ってかてかてか！俺なんでこんなとこに寝てんだよ、桃太郎に  
見つかったらヤバスッ……って、今まで見つからなかった俺スゲー  
!!!)

鼻歌を歌いながら状況を確認する……うん、此処何処だー的なあれ  
だな、ははは

よっこらせっ……と、立ち上がり、

(あ……？滝の音が、これ？)

何もする事が思いつかないので、遠くの方で聞こえた音に向かって  
耳を澄ますと、何やら他の音も聞こえる

ちなみに俺はこれでも、聴力視力共にランクSSS並みだ

……ウソじゃナイヨ？

「んー……静かだなあ、俺こーいうの苦手だぜえー」



暫く歩いていたが、ひっそりとしたこの森の雰囲気に寂しくなったので、セイレンや皆は今頃俺を捕まえようと気張ってんのかなあ、とか思ってみたりしたが……

「……………うわ、寒気した」

鬼の形相で物騒なものを振り回している姿が鮮明に浮かび、すぐ頭から消しのんびりと音を辿る事にした

義腕が少し軋んだ音を立て、痛みが走るのに気付かないフリをして

……

夢を、見ていた

ずっとずっと長い間ずっと……

それだけを望んだのに、それだけが全てだったのに、叶わなかった消えてしまいたいのに、消えさせてくれずまた残され……何も救えず独りきりになった夢……

「……………忘れたと、思ったんだがなあ……………」

滝の真横にある古びた小さな小屋の中で椅子に座る、黒い布で両目を隠した青年が嘲笑を浮かべ呟いた

彼の腕や足には鎖が巻き付いており、椅子から立ち上がれないように繋がれていた

その肩や小屋には、埃が降り積もっている

「今日……来んのかなあ」

義腕の両腕で、無雑作に伸びた琥珀の髪を掻き、端正な顔に不釣合いな不精髭に触れる

ちくちくーとか、感じたら面白いのになあ……そうクスクス笑う彼は、独りだった

「どっちでもいいけど……眠らせて欲しいぜ、まったく……」

すると、少しずれて見えた右目の色は赤と黒の混ざった……血のように暗く澱んだ色だった

「……………」

無人島全てが見渡せる程高い崖の上で、私はただ黙ってすぐ横を流れ落ちる滝の水を眺めていた

止まる事無く、流れ続ける大量の水

まるでヒトの感情のようですねと、ただ淡々と結論付けた

ふと、視線を感じ……その視線の方を向き直れば、フェルディーン様がちょうど私に話しかけようとしている所だったらしく、安堵したように息を吐き言葉を続けようとする、が

「え、と……マクシス、さ」

「セイレン！ドレウイーの居場所が何となくだけど分かったらしい

わよつてもう凄すぎよね、フェルディーンは!!」  
「ふにゃ?!」

言葉をアイシス様に遮られるばかりか抱き締められ、その大きな…  
…女性を象徴付けるアレ　大きいのが女の価値という訳ではありません  
ません　で圧迫される

徐々に顔色が悪くなっている気がするのは、恐らく気のせいではない  
だろう

(……あなるほど、大きいと邪魔だと思いましたが使い方によつ  
ては殺傷機能を兼ね揃えるのですね、興味深いです)

女の武器、というのはこれで亡くなられた方が居るからかもしれな  
い……其処まで思い、アイシス様を見て、自分のを……見て見ぬ  
フリをして、視線を戻す

「アイシス様、フェルディーン様がご臨終一歩手前であります」  
「ふふふ、女武器は女にも聞くって訳ね!女つて最強だわ!!」

見せ付けるように大きさを主張するアイシス様に、ふと自分のを…  
…見なかった事にし、何とか会話を続行する

「……ソレより、葵様の居場所が分かったのでは?」  
「そう、そう、そうなのよ!!ねえフェルディーン……って、ちょ  
つと何寝てるの、起きなさい、ねえ?!」  
「きゆうう……」

ゆさゆさと激しくアイシス様が振り回すが、どうやら本当に気絶し  
てしまっているらしい

しつこく揺らすが、別な所が激しく揺れているのが目に入り……今  
度は明後日の方向を見てやり過ごした

(ふう、侮り難し……ですね)

正直、女性の武器とやらが此処まで強力だとは思わなかった  
直視し、自分のを見れば……確実に凄まじい敗北感に苛まれるだろ  
う、恐るべし、女性の武器……

「皆ー、こつちには居なかつたよおっ！」

聞こえてきた声に振り返ると、  
アイシス様に負けず劣らずの武器を装備している楓様が、  
鴻苑様より早く探索から戻って来た  
目に入るのはやっぱりアレで……

「……これはいじめですか」  
「ほえ？」

成り行きで一緒になった彼女等に、何時もと違って心が折れそうに  
なるのはきつと……

フェル様が気絶してらっしゃると鴻苑様が遅いのと、しつこいく  
らいに好意を真っ直ぐに伝えてくるあの、居たら迷惑で居ないと何  
となく手持ち無沙汰になる、彼が居ないからだろう

思い出すのはたった2時間前、予想外の妨害が入った時のこと  
初めて心の底から恐怖を感じた……あの瞬間……

2時間前……

半分気絶した葵様を受け止めようと、私は真下で手を広げて待つて  
いた

(……これなら、『鬼の半径3m以内に、桃太郎からは近づかない』というルールにも違反してませんし、私の勝ちです)

その慢心が、油断を誘った

半径3mを切った、後2m、1……勝利を確信し、手加減はしたが始めての峰打ちにも関わらず、思いの他無事な葵様の姿に安堵の溜息を漏らした瞬間、叩き付けるような音が聞こえ

「っ 葵様……!!」

葵様が重力に逆らい森の方へと吹き飛んだ

微かに、カクンツ、と全身から力が抜けていたのが見えたから、恐らく本格的に気絶したのだろう

何故か……神経を逆撫でられたような感覚が身体に広がり、音がした方を見据える

(あれは……エフェクト戦闘効果、アタック攻撃……『飛ぶ打撃』といった所ですか、これを扱う方は、クラスで一人……)

「卑怯ではありませんか、帷様」

帷様は将来、国の為に戦う事を選んだ、騎士学科専攻の攻撃特化タイプ

誇り高き騎士の理念を信仰している彼が、こんな卑怯な事を好んでするなんて……よほど、騎士学科は厳しいのでしょうか……

思考している間、攻撃する気配はない

葵様も飛んで行ってしまったので、刀を仕舞うと静かに……青の髪と金の瞳を持った鏡園寺 帷その人が、もう一人……赤髪の目立つ髪をした忍者装束した少女を従え姿を現した

(あ……彼女は確か、)

「隠密学科専攻にしてあまりに派手な髪で全然忍べてないブラコン

の柚李さんではありませんか」

「せ、セイレン殿酷すぎるでありますう！！せ、拙者はっ、ブラコン等と軽い気持ちで兄者を慕っている訳ではないで御座る！！」  
「ああ、世界が認めるラブの方で御座いましたか、これは失礼致しました」

別な所を弁解すべきでは、と思いつつ頭を下げると黙っていた帷様が焦ったように柚李様を嗜めていた

彼はまだこのクラスに居る稀有な……常識人というカテゴリーに居るようだ

「御見苦しい所をお見せして申し訳ない」

「いえ、構いません……が、どうして私の邪魔をなさるのですか？」

「簡単な事だ、某達は……いや、某は柚李の為に、彼を捕まえるのは某達の手で、と望んでいるからだ」

「あ、兄者っ……！！」

キラキラと、嬉しげに帷様を見つめる柚李様  
そんな彼女に、力強く頷き……

「柚李は、だらしが無いからな」

「ううっ……」

持ち上げて、叩き落とした

（要するにシスコンですか……）

そうは思いなながらも、無意識の内に飴と鞭を使い分けるその巧みさには油断出来ない

（さて、どうしたものですかね……）

そう考えていた瞬間、風切り音が耳に入った

「!?!」

「むっ?!」

「あでえっ?!?!」

三者三様の反応をし、その場から離れる

額に矢が刺さった　先はトイレのスポスポ　柚李様から目を離し、視線を戻すと

「ああ、みいなさん揃って邪魔のしあいつこ出来ますねえ、うふふう」

目が半分逝っている楓様が弓を構えていた

その隣には一日経って復活している鴻苑様がいる

……何気に、安全範に避難しているアイシス様達と、その影の薄さでエリス様の気配も掻き消しているモブ男……ウルシエン様が羨ましい

「存在感がある、というのも大変で御座いますね」

それだけ眩き　どうやら聞こえたらしく、ウルシエン様が頂垂れていた　刀を水平に構える

「こらこらドM、ちゃんと狙って打てよ下手糞さねえ」

「はあーい……あ、鴻苑クン何処行つたのお?」

「んー、オレにも色々あるんさ、色々……」

楓様の長い髪を弄りながら笑う鴻苑様に、楓様が蕩けた表情で寄り添う

ちなみにあっちでは、

「む、取れんな……」

「あ、兄者、い、痛い、御座りまするうっ!!」

「す、すまん、だか少し我慢しくね、貴殿の為だ、柚李」

「ああ兄者が拙者の為につ……わ、分かりました!!」

何やら兄弟でイチャコラしている

そして向こうでは車椅子幼女とモブ男が仲良くニコニコと（以下略）

もういつその事お似合いだからとととくっ付けばいい

そんな事を思い浮かべては、また頭に、飛んで行った彼の姿が浮かぶ（……何故でしょう？葵様の顔が浮かんで消えて浮かんで……）  
ああ、どうして彼はこの場にはいないのだろうか？  
居て欲しい、この場に……私の側に……そして、

「思いつきり、一発と言わず殴らせて頂きたい所望であります、ええ」

このやり場の無い胸のモヤモヤを発散すべく、このクラスの唯一の常識人を巻き込まない程度に、

「進化イコンへの扉よ、私、セイレン＝マクシスの能力解放を」

<出力パワー、戦闘効果エフェクト、戦闘種類ジャンルを選択してください>

「制限60、閃光を伴う疾風、種類は……」

前を、見据える

弓を構えるように指示し、自らも能力を発動させる鴻苑様と、頷く楓様

回避と退避を選択した兄弟、安全圏の4人……ふと、安全圏にいる一人が、笑う



「…………ふふ」

楽しみに此方を見る幼い瞳と、目が合った  
刹那、背中に走ったのは身が竦む程の悪寒

「っ、種類は退避……………!!」

自分より年下の相手に感じたのは、恐怖  
ただそれだけだった

<了解致しました>

無機質な声と同時に、選んだ能力が発動する

「っ?!」

「ひゃうっ?!」

目を開けていられない程の閃光と共に、吹き荒れる風  
安全圏と思われる場所まで近くにいた彼らと共に飛んだ、直後

バキ、ともビキッ……………とも言えない音が響き、さっきまで私が居た  
場所の地面が裂け、閃光の中……………黒い何かが蠢いた

「……………っ?!」

その得体の知れない何かは、閃光が消える前に消えた  
閃光が収まった後、裂けた筈の地面まで元通りに……………まるで、何事も無かったかのように、戻る

(理解……………不能、で、あります……………)

呆然と思つた言葉と同時に、身体に感覚が戻ってくる  
ふ、と力が抜けかけるが、何とか持ちこたえ振り返ると……エリス  
様とウルシエル様が、居なかった

『鬼』のひすいクンを探しにもう行っちゃったの

途中から目が覚めていたらしいフェルディーン様の言葉を聞いても、  
凍りついたような身体は中々言う事を聞かなかった  
それを心配した彼女達が、何処かで休もうと提案し……  
勝手に手を出さない、と誓ってくれた鏡園寺兄弟が葵様を探しに行  
った

そして、ようやく身体も落ち着き……今に、至っている

「……………」

(私も、恐怖……等を感じるのですね)

未知なるモノへの恐怖、といった感じだろうか？  
確かにこの身は竦み、咄嗟に選んだのは回避……

「葵様は……無事、でしょうか」

鬼を探しに行くと、彼女は言ったらしい  
ただこの授業に純粹に参加しているからこそ出た言葉なのか、それ  
とも……彼を狙っているのだろうか

その考えに至った瞬間、心がざわめく

それだけはならない、と  
彼だけは守らなくてはいけない、と……

「セイレン」

ふいに、

むに……

何かが、後ろから胸に触れた  
加えて言えば、物凄い弾力を背中辺りに感じる

「あ……？」

「ふふふ、隙ありーってね」

遠慮なしに触りながら、後ろでアイシス様が笑う  
さすが兄弟と言った所か、まったく同じ触り方である

「っ……は、破廉恥です……」

「何、照れてるのセイレン？」

「そ、そのようなこと……せ、セクハラですっ」

「ふふふ、残念ねセイレン、セクハラは異性に対してあーんな事や  
こーんな事をした場合であって、同性ならセクハラじゃないのよ？」

ふと思った……なんて理不尽なんだ、と

決して多くは無いが、そういう趣向の持ち主は居る……そんな人か  
らの熱烈過ぎるアピールがあったとしても、それで気を病んで……  
いけない道に走る人が居たとしても、罪にはならないのだという

(な、なんて理不尽なんでしょう……)

固まっていると、「私様ばかりが触ったら理不尽よね、理不尽って素敵だけど此処は平等だわ！私様偉い、大人ね！！」と言いながら私の手に胸を押し付けてきたその瞬間、

（っそ、そんな……！！）

格の違いを見せ付けられた

ああ……月とすっぱんという例えを通り抜けたら人はなんと形容するのだろうか？

最早色んなショックでキャリアオーバーしている私に、アイシス様が小さく笑う

「……ドレウィーが、そんなに心配かしら？」

心配……正直、分からないがその言葉が一番馴染むような気がしただから、小さく頷く……するとぽんぽん、と頭を優しく叩かれ、

「大丈夫よ、ドレウィーは丈夫なんだから」

貴女もよく知ってるでしょう？そう言う彼女は何時もと違い、温かくて……

本来なら、二つ年上なのだという事実……身体だけじゃなくて心の面もそうなのだと、頷けた

「……アイシス様は、葵様が心配ですか？」

「んー、そうねえ……あの子は、馬鹿だから」

思い出したように笑い、

「馬鹿だから、守るって決めた誓いは絶対守るのよ……だからドレウィーは、例えどんな怪我しても、大丈夫なのよ」

「そう、ですか……」

葵様なら有り得ますね、と思えない程度にしか彼を知らないのだと、今更ながら気付いた  
その事に何か思う前に、

「ひゃ、わ、ひゃうっ……！！」

短い悲鳴のような声が聞こえた  
振り返ると、バランスを崩したらしい楓様が崖の上から空中にその身を投げ出していて、  
フェルディーン様がいち早く手を掴むが、そのまま二人して宙に……  
鴻苑様在必死に手を伸ばすが、その手は空を切るだけで届かない  
二人の瞳が、絶望に染まったのがハッキリと見えた

「っ……はは……」

その時微かに、鴻苑様が笑った  
そしてそのまま、

「っな……！？」

身を、投げ出した  
一瞬にして二人の場所まで辿り着き、フェルディーン様と楓様を掴み、崖の上に放り投げる

そして彼はそのまま……

「あー……ちょ、くっ……はは、はははっ……」

何故、人は飛べないんさねえ……ふ、と悟りに至ったような顔で彼が呟いたのは、そんな事で

泣きそうな楓様を見て、なんとも言えない顔をして、一言、

「悪いっ!!オレこれ………确实、死んださねえ………」

叫び、呟き………困ったように、諦めたように、笑った

そして私達が口を開くよりも早く、鴻苑様の身体が、重力に従い……

「っ 鴻苑クンツッ!!!!」

叫ぶ声も虚しく、30m下の滝へと落下していった

順調＋予想外Ⅱ恐怖と不安と、泣きそつな叫び（後書き）

ヒロイン：鏡園寺きやうえんじ 柚李ゆい

呼び名：柚李、鏡園寺

参考：「兄者を助ける忍びになりとう御座る！！」という理由から  
隠密学科を専攻としたが、その鮮やかな赤い髪から忍ぶ所が目立ち  
まくりなブラコンさん

友達：鏡園寺きやうえんじ 帷とほり

呼び名：帷、トバッチリ（笑）

参考：騎士学科専攻の、将来お国のために頑張る気満々の割と常識  
人に入る貴重な人。無意識なシスコンで、飴と鞭を見事に使い分け  
る人

## 公式？：圧倒的な力Ⅱ危機

東 鴻苑、彼が滝に向かって落下する少し前……  
セイレン達がその上に居るとも知らず、葵は飛沫を上げる滝の真下に来ていた

「お？でっけえ滝だなあ！！って、何か家ある……そうだ、道聞いたら教えてくれっかな？」

古びた小さな家……小屋と言った方が正しいようなその建物に俺は近づき、何の躊躇いもなく扉に手を掛けると、

「み、見つけたで御座る……てえ！！ちょ、ちょちょちょ待ったで御座るよ！！」

妙にどもったような御座る口調の声が聞こえた

（この声は柚李ちゃん……って、まさか桃太郎に俺見つかった?!）  
しまった、と振り返るとやはり桃太郎の一人、ブラコン忍者が木の辺りに居た

「って、何気に失礼な事を思って御座らんかその顔は?!」

……思ったとおり、全然忍べては無いがその分他の要素が優秀らしく無駄に鋭い

が、今は無視だ無視



(ブラコン忍者の側にシスコン騎士あり、って方程式が成り立つちまうんだよなあ、マジやべえ……俺はセイレン以外には捕まる気はねえっての!!)

始まってすぐくらいにフェルちゃんに惑わされたとかは……あーもうきっぱり忘れたんだぜい!!

逃げ場を無駄とは知りつつ横目で必死に探すと、別なモノを発見

(畜生、シスコン騎士なんて見つけてどうすんだよ俺の馬鹿!!) 心の中で自分の無能さに溜息を吐きながら、ばれたと分かったらしいシスコン騎士も姿を現したのでマジ困る

(はーあーマジどうしよう)

リアル万事休すだ

じりじりと追い詰められるように後ずさりトン、と軽く音を立てて小屋の扉に背がぶつかる

無意識の内に扉を探るように動いていた手が、ドアノブに手が触れたその瞬間

入れよ、なあ葵……

頭の奥に語りかけるような声と共に、身体が痺れる  
頭の隅までもが痺れたように思考が停止し、身体が勝手に……

「お、おい!？」

「えええちよ、葵殿?!」

驚き、手を伸ばしてくる二人を見た

……もつとも、その事を認識出来たのは小屋に入り、閉めた扉に鍵をかけた後だったか……

無意識の内に流れ作業をこなした身体と頭はまだ痺れており、自分の意思で動かせない

（ああ、何か機械みたいだなあ……）

何故か勝手に動く身体にぼんやりとそんな感想を抱く

外に居るであろう二人は、必死に扉を叩き何か叫んでいる……が、残念ながら何を言っているかまでは理解できない

靄がかかった思考……手放した方が楽になれる気もするが何となく、身体のままに従いそのままにいることにした

埃だらけの玄関……と思しき場所から遠ざかり、ある部屋に辿り着いた瞬間、突如頭の中がクリアになっていき……

「……………はっ?! 俺何勝手に人ん家入ってんだよ、不法侵入じゃねえ?!」

どうでも良い事を、思い切り叫んでいた

某達が近づくと、葵が後ずさった

そこまでは納得出来た、だが扉に触れた 正確にはドアノブだろ

う 瞬間、まるで電流が走ったかのようにビクリッ、と身体を震わせ……

今まで見たことのないようなスピードでまるで別人のように……何も感じていないかのような無表情を浮かべ、小屋に立て籠もってしまった

「あ、あああ兄者、ど、どどどどうしたらよいで御座ろうかつ？！」

隣であわわわっ……！！と慌てふためく袖李に、逆に落ち着けた明らかにさっきのは葵の様子がおかしい

（何らかの力の影響を受けたのか……？）

現状ではそれが一番可能性が高い、とそう結論付けドアノブに手をかけ開けようとする、が

「……開かない？」

蹴破ってしまおうか、と背中に背負っている大剣を構えた瞬間、

「ああ、あああ兄者！！そ、そんな事したら器物損害罪で捕まってしまう……！」

そう叫ぶ袖李に思わず、頭をなでたくなる衝動に駆られた

（臨機に弱い癖に、割と冷静か……其処は評価出来るな）

と、何時もの癖の採点付きで

……確かに此処は今戦場では無い為、通常の方法に縛られるが……友を助ける為だ、と言えは見逃して貰えないだろうか……

某が困っていると、ここぞとばかりに袖李が針金を取り出し、

「拙者に任せてくださいれ！！」

そう宣言し、鍵穴に突っ込みガチャガチャと動かし……

すぐ、カチャッ……と音がした

「……凄いな、久方に見直したぞ」

「あ、兄者に褒められたで御座るっ……えへへ……」

何故か微かに頬を染め、意気揚々と袖李がドアノブを回す  
ぎい……と音と共に扉は少し開く、が

ドカツ……

「……？」

何かにぶつかつたような音を立て、途中で扉が止まる

パタン、と何事も無かつたかのように扉を閉め、何かの間違いであ  
つて欲しい……と、傍から見ても分かるような顔で向かって拝み、  
もう一度開ける、が……

ドガッ、ドガドガッ……

「……」

「……」

どうやら、思った以上に法律を守り救出するというのは困難なようだ  
次の案が失敗したら扉を粉碎しようとして心に決め、さっきから存在を  
主張している滝の方を見上げると、

「っ……?!」

よく知っているクラスメイトが遙か上から落下し、派手な音を立て  
て滝へと突っ込んでいった

「い、一体何が……って、兄者?!」

扉と格闘していて音しか聞いていない柚季の声を無視し、少し流れの早い滝ツボに飛び込む

さつきちらつと見えたのは黒髪、恐らく鴻苑だろう

相当上から落ちたらしくその衝撃で気絶しているのか、もがくような素振りさえない

(っ、流れが邪魔だっ……!!)

近づこうとすれば、まるで水が意思を持っているかのように邪魔をしてくる

息がもたず一度水面に顔を出し、

「はあっ……く、致し方あるまいっ」

左手を大きく掲げ守護への扉を呼び出す

黒い画面に文字を打ち、入力画面を表示する

<主殿、ご命令を>

「我に刻まれし水の刻印によって命ずる、流れを止めよ」

言うだけいい、そのまま大きく息を吸いもう一度潜り

<御意>

耳にそれが届いたと同時に……一時的に止まった水の流れに安堵しながら鴻苑の元へ泳いでいく

(くっ……今日程この大剣が憎いと思った事は無いなっ)

今度から少し小さめの……セイレンに刀の入手を頼もうか、と密かに思う

「っぷは……!」

大分時間が掛かったが、何とか水面に顔を出す  
兄者っ……！！と、泣きそうな顔の袖李には申し訳ないが、それ所  
ではない

「鴻苑、おい、大丈夫か」

軽く片手で頬を叩くが、反応が無く……ぐったりと力が抜けている  
その身体は思いの他重い  
(大分水を飲んでいいのか……なら、御免っ！！)  
心の中で謝罪しつつ容赦なく鴻苑の腹を殴ると、

「がつ、は……！！げほ、げほっ!?!」

激しくむせつつも水を吐き出したようだ  
少し安堵していると鴻苑がだるそうに片目を開け、状況報告を乞う  
かのように某を見る

「某は、落ちてきた貴殿を拾っただけだ」

簡潔明瞭な答えを返すと、納得したような顔をした後、

「う、腹……痛いさ……」

腹を擦すり恨めしい目で某を見る

少々やり過ぎた感は確かにあったが、咄嗟の事だ……許せ、とだと  
告げ、袖李に手伝ってもらい何とか引き上げる事に成功した

「ふう……鴻苑、貴殿何故紐なしバンジー等を試みたのだ？」

「はぁ……あー……紳士だから、って痛っ!」

「……ふざけるなら手を挙げさせてもらうが？」

「もう挙げてる……って悪い悪い、もう殴らないで欲しいさ……」  
弱弱しく頭を庇うその様子に、少し罪悪感を感じ顔を逸らすと、

「……いきなり地面が揺れたんさ……んで、楓とフェルが落ちかけて……」

地面に倒れたまま、目を覆うように腕を被せ言葉を続ける鴻苑  
口は笑みの形を作っているが微かに声が震えて聞こえる

「失うかと、思ったんさ……ほら、オレってあれじゃん、紳士だし、だから、だから……」

「……分かってる、もういい……ほら、紳士が何時までも寝てる訳にはいくまい……起きろ」

言葉を遮るように、ぐいっと半ば強引に鴻苑を立たす

黙って一部始終を見ていた柚李が珍しく空気を読んだらしく静かに離れ、一人で扉と格闘し出す

(……柚李も少し大人になったのだな……少し、誇らしい)

少し頬が綻んでいたのか、「柚李見て何にやけてんのさ、シスコン」と指で頬を突つかれながら鴻苑が笑う

……報復として支えていた手を離すと、無様に地面に転がった、はは、ざまあみろ

「つつ……いい性格してんさね、帷」

「ふん、お前ほどではない」

其処まで言っつて、ふと……

鴻苑が崖の上に残したらしい彼女等は大丈夫なのだろうか、と氣に

なり上を見上げると

「……………は？」

「へっ?!」

某達の眼前に淡い紫色で輝く転移陣が現れ、其処から……

(な、足……人か?!)

その場から離れる、と脳からの反射的な警告に従うには些か遅すぎた

「わ、わ?!」

「ひえ?!」

「っ!」

「あらら?」

崖の上から転移してきたらしい女性陣四人に、容赦なく押し潰される事となった

(どうやら今日は運が悪いようだな……)

泣きそうな表情で「だ、だだだめで御座る兄者から離れてくだされええっ!」と、駆け寄ってくる袖李を見ながら、そんな事を思った

はい、今どうでも、どーでもっ!! 良い事だけど俺、葵!! ウィンデル!! ひすいはプチパニック継続中です

何か勝手に身体は動くは、変な部屋に入ってしまったは、オマケに天才かと思える流れ作業で鍵まで掛けちゃった

って、俺天才、天才だったのか俺?!



すっげえ俺マジ無意識の方が最強じゃね?! え、ちょ、訳分かんねえけどヤベえ!!

(ちょ、おいおい俺!! いや、ちょっと前の俺、出てこい!! んで此処開けてくれよ俺開け方分かんねえんだよ!!) (いくら心の中で叫んでも、もちろん答えなんて返ってこないぎゃー!! と、もう一度叫んでいると、

「……賑やかな百面相だなあ、おまえ」

幽霊よろしく誰もいないと思っていた後ろから声が聞こえた

しかも、砂を噛んだ時のようなざらざらとした感覚が残る、嘎れて掠れた声

(ああああ悪霊?! え、悪霊悪霊悪霊?! マジヤベえ、もう何がヤベえか分かんねえくらいヤベえよセイレン助けて!!)

思い人に助けを求めるといふ情け無い頭の中とは違い、何故か身体は率先して後ろの声の元へ行こうと奮闘してくる

「え、ちょ、待って俺の身体!? そっちマジ危険って俺のアンテナが訴えてるんすけど?!」

にぎゃー!! と叫ぶが虚しく……

後ろ向きで数歩足が勝手に歩き、ぐりん!! と身体が回転し声の主が見えた

無雑作に長く伸びた琥珀の髪、整っている顔立ちに生える不釣合いな不精髭……

目を覆う機能を中途半端にしか果たしていない黒い布、その隙間から見える俺と同じ、黒と赤の入り混じった右目

座っている椅子同様に埃が肩に積もっていて、

オマケに鎖で両腕両足をぐるぐると椅子に結わえ付けられていた

「……………よお、葵」

ニコ、と……………手が動かせるなら手を挙げて言っているだろうと容易く想像できる程の気軽さで、何故か俺の名前を呼んだ  
教えてもないのに、俺の名前を……………今日初対面なのに、俺の名前……………

「おおお俺もう呪われターゲットオン?!?!」

(ヤバイ、俺誰かに怨み買うようなこと……………)  
頭に過ぎるのは、ワザとでは無いとはいえ壊した数々の物と怒る人々の姿

胸に触れたのはワザとは言え(?)謝ったにも関わらず真っ赤な顔で殴ってきた女性陣の姿  
その他諸々が一瞬にして頭を過ぎる

(……………ははは、怨み買い過ぎてもう訳分かんねえ!!)  
開き直ろう、うん、それが俺だ、美学だ、座右の銘にしよう!!  
何とか落ち着かせ、俺の名前を知っている幽霊<sup>ゴースト</sup>くんを見る  
……………心なしか、何処かで見たとような顔だと思い、

「幽霊くんさ、俺と会ったことねえ?」

「いきなり喚いて混乱して収まったと思っただらそれかよ、まあ予想はしてたけどさあ……………」

ぼりぼり、と頭を掻きたそうな顔で苦笑する幽霊くんは、無い、とハッキリと否定した

(……………俺の勘違い、なのかあ……………)  
まあ正直俺も今日が初対面だと思う  
だけど、根拠も何も無いが……………見た事あるような気がしてならない

「幽霊くんさあ、やっぱり俺と」  
「無いって」

(あれえ?……やっぱり勘違いなのか俺の……)  
んー、納得いかねえ……そうは思いつつ、在り来たりな口説き文句を口にするのもテンションが下がってきたのでこの話題はやめにした(だって俺やっぱ男だし、言うなら女の子がいいし)

「んー……幽霊くんさあ、此処から出る方法知んねえ?」

早く俺セイレンに会いたいんだよなあ、と告げると苦笑される  
幽霊くんの肩が揺れる度に、鎖のぶつかり合う耳につく音が静かな部屋に響く

(……あれ、邪魔じゃねえのかな?)

「知ってるけど……そうだなあ、もうすぐ……」

「……あ?もうすぐ?」

ニツコリ、と笑いながら幽霊くんが一言、

「来た」

その瞬間、地響きとも言える揺れと共に幽霊くんのすぐ横の床が割れ、

「お、おおおおっ?!?!」

黒い触手のような(やべえ触手って何か破廉恥な響きだぜ!!)が現れる

正直な感想を言えば、見ているだけで気持ち悪い

「ちよ、幽霊くん危なくねえ?!」

「ん? ああ……迷惑だよなあこれ、俺の小屋壊してさあ」

(危ねえとは思わねえのかよ!)

じ……つと触手を見ながらそう呟く幽霊くんは、俺の言いたい事が分かったのか苦笑し、

「だって、ほら……」

カチ、カチ、ジャララ……耳につくのは、金属の擦れ合う音

音に反応したのか、触手がゆっくりとその鋭く尖った先を幽霊くんにあわせ、

「俺さあ、動けないし」

諦めきつた声色に、幽霊くんの姿がある少女と重なり……俺は気付けば、反射的に飛び出していた

お世辞にも俺は反射神経、運動神経、学力……全てが良いとは言えないが、

(音に反応すんなら、話は別だぜ!)

側にあつた小さな椅子を握り、壁に当てながら幽霊くんの元へ走るダンドンダンドンツ!!と派手な音につられ触手の標準が幽霊くんから外れる

それを横目で確認し、出来るだけ遠くへ椅子を放り投げ幽霊くんにタツクルするかのよう飛びついた

微かに驚いたような顔と目が合った、瞬間……

「つつつ!!」

狭い部屋を押し潰すかのように触手が、扉付近に投げた椅子目掛け  
て大きくしなり、壁を突き破った

1 + 1 + 1 + …… 〓 意外と大きな力

(今日は本当に訳が分からない日ね)

とても不可解な現状を思いながら思わず笑ってしまっ

て、退屈しなくて素敵だと思おう自分は相当可笑しい女なのだろう、元々だから気になんてしてないが

(鴻苑が無事なのは良かったわ、楓もフェルディーンも泣いちゃって大変だったもの)

彼が落ちてから、特に楓が酷かった

泣き喚き後追いかけるかのような勢いで暴れる彼女を気絶さそうかと企んでしまったくらいだ

まあ、結局フェルディーン of 転移陣で移動させてもらったが………思った以上に元気だったので満点だったのだが、

「……アフターサービス等もご理解致している触手様で御座いますね」

「ふふふ、花丸あげたいくらいだけど………ちょっとサービスし過ぎだわ」

臨戦態勢を取っているセイレンの横で高みの見物しゃれ込みたいところだが、少し刺激が強すぎるかもしれない

そんなことを考えながら、少し真面目に状況を分析してみる

一度目の地響きと共に、ドレウィーが立てこもっているらしい小屋から触手が出てきた

そして二度目の地響きでは、小屋の扉を破壊した

あのドレウィー、セイレンによって新たな属性が目覚めかけている途中だというのに……

(いきなりハードル高いものにチャレンジだなんて、何て向上心豊かなのかしら！！)

私様に言えばいくらでも調きよ……ゲフンゲフン、教育してあげるというのに

いつの間に内気な子に育ってしまったのだろうか？そう思っていると、やあ、僕椅子と何処でも一心同体さ！！と言いそうなスタイルのちよつと好きなタイプの男性と一緒に、ドレウィーが床に転がって居るのが見えた

(あらやだ、ドレウィーだったら……そつち系属性もいけたのかしら？)

これはこれで私もいけるかもしれない

脳が確実に一歩、禁断な方へ進んだと同時に、

隣のセイレンが猛スピードで触手の近くで倒れているドレウィー達に近づいていく

(こ、これは……嫉妬、嫉妬ね！！ドレウィー、段々と確実にフラグ成立に向けて準備が整っているじゃないの！！)

助け起こされるドレウィーと椅子と一心同体な男性を熱烈な視線で眺め、思わず舌なめずりをする

退屈しないですみそうね……普段の喧騒に加わるであろう一波乱を思い浮かべ、『享樂の扉』を呼び出し一つの命令を下す

「いやん、妬ける、妬けちゃうわ!!」

毎度の事ながらアイシス様が頬に片手を当て、楽しげに叫ぶ

もう片方の手は高速に命令を打ち込んでいるらしく止まる事がない

(葵様に続く不思議な方でありますね)

助け起こすと同時に飛びついてこようとした葵様に、大人しく運べるように一発ぶち込んだ後静かになったのを確認し、

「……大丈夫ですか？」

椅子が倒れている為、する事が無いのか空をぼーっと眺めていた男性に話しかける

(ふむ……鎖で椅子と身体を繋げる程椅子にラブな方がありますか……これは楓様と近いものがありますね)

一瞬で頭の中に情報を付け加えていると、

「セイ、レン……?」

その男性のものらしい、掠れた声が耳に届いた

ざらざらとしたようであるが何故か不快ではなく……寧ろ逆の念を抱かされる声に、思考が一瞬停止する

喜びの様な、悲しみの様な……複雑に入り混じった瞳に、私が真っ直ぐに映る

何処かで見た事がある、そう感じた瞬間

「あ、」

ふと、視線を少しずらし彼が呟いた

それでやっと、もう一人(一つ?)の存在に気付き近づいてくる風



切り音の軌道に合わせ刀を向けた瞬間、

「くっ……!!」

腕が痺れるような衝撃と共に、身体が吹き飛ばされる  
しまった……鋭い尖端が迫ってくる中、それだけが頭に過ぎる  
直後、

「守護<sup>アイコン</sup>への扉よ、某の仲間を守れ!!」

「活<sup>アイコン</sup>かしの扉よ、兄者を援護するで御座る!!」

目の前に現れた大きな青いベールに包まれた盾が触手を一時的に止めた

(戦闘中に考えることなど……私も役立たずですね)

ビキリ、と盾にひびが入るのを横目に、『進化への扉』を呼び出す

「選択を、私セイレン!!マクシスは決断する」

見慣れた画面が浮かび、それと同時に帷様の「セイレン!!」という叫びと共に、盾が崩れ去っていく  
それを確認し、

「北方より来るは冷たき風!!」

倍速の力を足に宿らせ、大きく跳ぶ

一拍遅れて触手が地面を抉るが、それと同時に

「はいはいはあい!!」

「準備完了ですう!!」

テンションが上がり切り、高揚しているアイス様と少しぐったりしている鴻苑に抱きつきながら弓を構える楓様が叫びを上げる

「ねえねえ見たい？私様のおきおきのショー、見たいわよねえ？！」

「み、見たい、です！！」

「ふふふ、なら見せてあげるわ！！隅々まで魅了して胸を熱く焦がしてあげる！！！」

「いきますいきますいつちやいますよお？！開け『破邪の扉』<sup>イコウ</sup>古代より比奈乃家血族にのみ受け継がれし力、我が弓に宿れえ！！！」

「っはあ……派手にブチかますんさ……判決は下り戒めは解かれたり！！東家頭首、鴻苑が今此処に許可する！！！」

<条件、満たされました>

無機質な機械音と共に、それぞれが求めた力が展開されていく

アイス様は炎、比奈乃様は雷……

それぞれが自らの属性を纏い、狙いを定めていく

その間、鏡園寺兄弟が触手を引き付け準備は少しずつ整っていき、

(いけますっ……！！！)

そう確信した瞬間、鴻苑様の息が段々と荒くなっていつているのに気付いた

楓様の力が増大するに従って、反比例するかのようにな彼の力が減少していく

楓様は気付いてない様子で……

「鴻苑様……？大丈夫で」

「セイ、レンっ……！！！」

まるで私の言葉に被せるかのようになり、声を荒げる鴻苑様に、思わず

言葉が止まる

にいつと笑い、視線だけで葵様達の方を示し、

「あそこの馬鹿共を、頼むさっ!!」

それだけ告げ、弓を持っている楓様の手に自らの手を添える  
すると弓に集まる力が増したが逆に鴻苑様は……

(ああ……そう、だったのですか……)

鴻苑様の扱う『扉』は恐らく譲与……つまりは、そういう能力だった訳だ

「……あちらはお任せを」

それを返事とし、触手が生えている根元辺りへ急ぐ  
走りながら、何時か何処かで誰かが言っていた言葉を思い出した

愛する男の誇りプライドを立ててやるのも女というものだ

なら、その誇りのせいで大切な人が失われてもそれで良しと出来る  
のだろうか

其処まで考えて、ふと我に返る

見ると、いつの間に復活したのか葵様が慣れない手つきで椅子と一  
心同体の男性から椅子を引き離そうと鎖を弄っていた

「……何をされているのですか」

「ん、ああセイレンも手伝ってくれよ!!この鎖中々外れなくてさ  
あ」

こういうの俺の専門外なんだよなあ……ぼやく葵様に、何専門なの  
か聞こうと思ったが、止めた

何故だか激しく後悔しそうな気がしたからだ  
どうしようか、と少し迷っている間にもあちらでは緊迫した戦闘が  
行われている

(時間が惜しい、ですからね……)  
スツ……と水平に刀を構えると、少し男性が青ざめた

「き、切るなら此処にしてくれ」

そう言い、自分の足元辺りへ視線を向けた

それを辿ると、結び目のように雁字搦めになっている部分を見つけた  
ふと、初対面にも関わらず私の次の行動が読まれた事に違和感を覚  
えたが、時間も無い為無言で刀を振り切る  
風に加護を付けている為、刃こぼれせず鎖が切れ、

「ふう……サンキョ」

ニコ、っと笑みでそう言われた

その笑みに、やはり何処かで見たとあるような錯覚を覚えたが、

「踊りなさい炎、魅了の火の粉を纏いて動きを止めよ……!!」

「破邪の矢よ、我等に仇為す闇打ち射ぬかん……!!」

炎と雷、享楽と破邪……同時に開かれた扉から、力が溢れ出し、

「舞え!!」

「射抜け!!」

容赦なく触手へと、襲い掛かった

(相変わらず開くべき扉と鍵をセットで持つてる奴はすげえなあ…  
…)  
目の前で圧倒的な力を見せ付ける二人と目の前の光景に、息を呑む無能である自分とは違う、力ある者の戦い方…素直に、すごいと思っただ

「……………何、呆然としてらっしゃるのですか」  
「ん、あ、いや……………何でもねえよ」

やはり触手も痛みを感じているのだろうか  
痙攣を数度起こし、ゆっくりと地面に倒れ伏す

「……………割と、あっけねえんだなあ……………」  
「葵様が言いますか……………今回気絶してばかりで足で纏いだった葵様が言いますか」  
「に、二回も言うなよセイレン！！俺が理解力悪い馬鹿みてえじゃん……………」  
「ああ、気付いてらっしゃいましたか、それはとても残念です」

それだけ告げ、まだ喚いている葵様を刀の柄で殴って大人しくさせ  
(またの名を気絶)、  
やっと椅子から離れられたらしい男性に振り返る  
いつの間にか触手が消えており、同級生も集まってくる

「……さっそくですが……椅子がラブな貴方は何者ですか」

「思ってた通り滅茶苦茶いきなりだなあ……えーと、其処の葵が言うには幽霊くん」

「ひ、ゆ、幽霊?!」

「ほ、ほほ本当に居たで御座るか?!」

「神社家系のうちでも見たことありませんですよ?!」

「あ、あはははは! ゆ、ゆゆ幽霊なんて怖くありませんわよ、ええ全然これっぽっちも!」

私を除く此処に居る女性陣全員が顔を少し青くする

(幽霊、ですか……確かに、声だけは当て嵌まりそうですが……) 目の前の男性をちらっと見る

黒を基調とした埃だらけのジャージのような上下を着ている……見た所、ちゃんと足が……足が?

「両腕だけでなく、両足も義足……ですか?」

「ひ、ひい!! 足が無いって事は本当に幽霊なんですね?!」

横から茶々を入れてくるドMを鴻苑様に半ば押し付けてもう一度尋ねると、苦笑される

「見ての通り、だ」そう言い、少し裾を捲ってみせる

見えたのは、確かに機械だが……見たことの無い素材のように感じた深く考える前に見えなくされ、仕方なく次の質問をする事にする

「幽霊様、貴方お名前は?」

「ん? 俺? 俺は、あおい……あ」

(え……? 何処かでかなり……聞き慣れているような……?)

同じく、怪訝な顔をした同級生が見え、怪訝は確信へと変わった、

だがその瞬間、

「お、俺は藍「イウィーア!!!」

「え……さつきと少し発音が違うような……」

「いやいや!!俺は藍、藍「イウィーアだ!!!」

少し必死に、頼む信じてくれ!!!的なオーラで言う彼に、皆して勢いで頷いてしまう

すると、ぱあ……っと子供のように目を輝かせ、嬉しげに宜しく、とまで宣言される

(何だか、名前だけではなくて……少し馬鹿な所まで葵様に似ていますね)

其処まで考え、

ああ、雰囲気的な何かが葵様そっくりだったから知っているような気がしたのか……と、妙に納得してしまった

取り合えず、彼の住んで居た小屋も壊れてしまった事だし、藍様を此処に放っておくのも何なので……

「……で、結局なんだ?鬼を捕まえた報酬無しでいいからコイツの宿探しを手伝えと?」

「はい、お願い出来ないでしょうか教師ジャンス」

ロープでぐるぐるにした葵様と藍様を横に並べて言うと、少し困ったような顔をされる

学生にしちゃちょい大人過ぎだし……かと言って得体の知れない奴を無責任に放るのもなあ……思いつきり顔に思っている事が表れている教師ジャンス

恐らくだが、今日も校長ライムの我俣に付き合わされたのでしよう

……ご愁傷様です  
少し合掌していると、

「なあ、なあ、先生！藍を先生として学校に雇ったりって出来ねえのか?!」

何があつたのか知らないが、藍様に懐いている葵様が提案する  
少し考えてみたが、悪くないようなことに思われる

「葵様にしてはまともな意見ですね、私も賛成です」

「確かに馬鹿にしちゃ、気の聞く意見さねえ……オレも賛成さ」

「確かに、葵クンにしては……でも、私も賛成です」

「ドレウィーにしてはまともね、私もいい男が教師となったら目の保養出来て……素敵!!素敵過ぎてよだれが出ちゃうわ!!はしたないっ!!」

「あ、アイシス先輩落ち着いてください……で、でも、私も賛成です」

「うむ、某も珍しくまともな葵の意見に賛成だ」

「拙者も!!馬鹿な癖に、良い事言うで御座るな」

「ひ、ひでえ!!皆俺を馬鹿にし過ぎだろ!!」

「だって馬鹿じゃないか」フェルディーン様以外の皆様ではもるよ  
うに口調を揃えて言うと、撃沈した

これはこれで静かになつて話易くなる為、非常に便利である

(今度から皆で相談してレパトリーを増やしておきましょうか……)

そんな事を考えていると、唸っていた教師ジャンスが藍様に向き直る

「オレも割と生徒達の意見に賛成なんだが……お前、何が出来る?」

「は……?何が出来る、って言う……?」



「だから、まあ簡単に言えば……教師として雇うには秀でた一芸が必要だった」

そう言われ、少し困ったような顔で何故か私達を振り返ってくる視線がどうも私に向かっているようなので、そのまま後ろを振り向くと……

「……いらっしやったのですね、モブ男様」  
ウルシエン

「い、居たよ?! エリスちゃん共々皆が此処に集合した辺りから居たよ?! ってかモブ男かつこウルシエン様って言うの止めようよ!」

最後のは無視し、未だ私を見つめている藍様に少々困る

後ろのモブ男様が撃沈しようが構わないが、出会って僅かなのに全幅の信頼を置いているような顔で見られるので、取り合えず思いついたことを、

「……校長ライムの好みのタイプです」

言ってみた

まじまじと教師ジャンスは藍様を見た後、確かに……と頷き高速でアイコンを呼び出し、

「っ、わ?!」

写真を撮り、そのまま校長に送る

すぐさま返事が返って来たらしく、教師ジャンスが笑って私を見る

「ビンゴみたいだな、許可来たよ……まあ、何を担当させるかは後で考えるとして、これから宜しくだな、藍先生?」

「はあ……つて、え、え？」

状況が上手く飲み込めて居ない藍様は疑問符を飛ばしまくるが、如何せんもう授業は終わり暗くなってきた

「話は後でするから、取り合えず来い」と、半ば誘拐のような形で教師ジャンスが藍様を船に乗せ、

「よし、帰るぞお前ら」

『操作の扉』を起動させた

公式?・遠足Ⅱ家路に着くまで

少し、色々な事があつたが何とか無事家路につけそうな気がする  
そう思い甲板から空を見上げていると、少し真剣な顔をした葵様が  
近寄ってきた

「……………何か御用ですか?」

「ん?ああ……………まあ、うん……………」

心此処に有らず、といった表情で私の隣に腰かけ、葵様がぼつりと

「俺って役立たずだよなあ……………」

そんな事を呟いた

横目で表情を確認すると、嘆いている訳でもなくかといって自暴自  
棄になっている訳でもなく……………ただ、静かだった

(……………今日あつた戦闘に、触発されたのでしょうか)

『何時も通り』と違った授業に、イレギュラーがあつた

二つの予定外が重なつた……………恐らく、少なからず誰もが役立たずだ  
と思つていることだろう

正直、私自身も……………酷く、自分は役立たずだと思つている

それは確実に事実なのだろうか……………

「そうですね、戦闘では役立たずです」

「はは……………セイレンきついなあ……………まあ、分かつてんだけど、な」

鍵も扉も持つてる皆と違って、俺は自分の扉さえもどんなものか知

らねえ……オマケに、鍵もねえ……ほんと、役立たずだ……そう言い、藍様と似たような顔で葵様が苦笑した  
やはり、この年になってまで能力が開眼していないのを気に病んでいるのだろうか

ああ、また柄にも無い事を考えている……彼に元気がないと、少し調子が狂ってしまう

私だけではなく、皆が皆……彼が馬鹿をしていないと、不安になっ  
てしまう  
だから、

「……話は最後まで聞いて下さい、戦闘では役立たずですが……他は、そうでもないです」

「他……？」

「葵様が……葵様は、皆様を疑念の余地もなく信じてらっしゃいます、ですから、皆様は自分を信じる事が出来、最大限の力が出せるのです」

ですから足手纏いではありません、そう告げると、彼が驚いたような顔になり、

「そっかあ……そっ、かあ……」と、噛み締めるように何度か呟いた  
その後、しばらく無言が続く……が、ふいに彼が吹っ切れたような顔で笑う

「俺、セイレンのことも信じてんだぜ」

真っ直ぐな瞳で、そう言い頭を撫でてくる

その言葉も、彼の動作も、嫌では無かった……だから、

「私も……信じてますよ」

ただ、

「だからと言って、セクハラ行為をすれば全力で吹き飛ばすのでそのつもりで居て下さい」

彼の顔が、少し引き攣る

（気付かれないかと思ったのですかね……やはり、葵様は馬鹿です）

ゆっくりと、私のお尻辺りに伸びていた手を掴みそのまま……

「それでは葵様、到着次第起こしますのでお休み下さい」

「え、ちょ、待ってセイレン！！マジごめんなさ、い……っ！！」

地面に全力で叩き付け、撃沈させる

油断も隙も無い……そう思い、本日四度目の気絶を経験した彼を抱き抱える

恐らく、起きていれば煩いであろうお姫様抱っこで割り当てられている簡単な個室へ彼を寝かすと、ふと……妙に左腕がブラブラしていると気付いた

「……ちよっと、失礼致します」

長袖に黒い手袋と、夏だろつと変わらず少し嚴重過ぎるくらいに着込んで居るその服を崩すと、見えたのは義腕

今日飛ばされたりと色々あったからか、義腕に損傷が見受けられたがそれ以上に、

（葵様の左腕は、肩口辺りから綺麗に切り落とされて、いた……？）  
知らなかった事実に、ショックを受けた

呆然としている私の目に飛び込んだのは、はだけている服から除く白い肌走る、太い傷跡

今度は思考までもが停止する

（葵、様……貴方は、一体……？）

彼に、昔何があつたのだろう？

それを聞くには、些か今の自分では役不足なように感じた  
だから、何も見ていなかったように……服をきちんと正し、備え付  
けの毛布を被せる

こんな、こんな酷い傷跡が身体に残るような過去を経て尚……何故  
彼が、あんなに人を信じられるのか、笑ってられるのが、少し気  
になった

「……お休みなさいませ、葵様……」

微かに感じた胸の苦しさの理由も分からないまま、毛布を被って目  
を閉じる

彼と部屋は別なのだが、どうしても今は……離れたくなかった

か  
この胸の痛みには私は何と名づけて受け止めればいいんでしょう

答えはまだ、手に出来ず……

静かにまどろんでいた瞬間、大きく船が揺れた

咄嗟に葵様の無事を確認し、立てかけてあつた刀を手取る

彼はまだ起きる気配が無いようだ

「……原因を、突き止めなければ」

呟き、私は葵様を残し部屋を飛び出した

帰るまでが遠足だと、誰がそう言ったのかと知らないがその通りで

……

微かに混じった『イレギュラー異変』は一つや二つでは、終わらなかつたのだ  
楽しい課外授業はまだ……家に帰るまで終わらない

## 恐怖＋支配の鎖＝届かない手

「…………ふふ」

静かな海の上を進む船の甲板で一人の少女が小さく笑う  
思うのはこれから行う事への期待か、それとも楽しみか……  
小さく目を閉じ、彼女はアイコンを呼び出す  
そして、

「開け扉…………誘うは、…………」

度重なるイレギュラーの最後の一つが今、呼び出された

部屋は今の生徒分しか用意していなかった為、オレは藍と相部屋……  
……ということになった  
だから、今後の事や……何故無人島と成り果てているあの島で一人  
で居たのか、能力は何なのか……詳しく話し合おうと思った  
その矢先に、アクシデントが起こった

「うお、と、ととっ…………?!」

咄嗟に壁に手をつき、何とか転倒は免れる



(何だつてんだ、これは……?)  
オレが今操縦しているのに、船が大きく揺れた  
そりゃまあ海の具合にもよるが、今は凧いでいる……にも関わらず、  
この有様だ  
同じく、壁に手を当て揺れに耐えたらしい藍が少し困った顔をして  
オレを見る

「っと……ジャンス先生……一体、これは？」

「オレにも分からん……けど、何か起こったのは確か、だっ?!」

さつきよりも激しい揺れに、これは本気でヤバイと頭の中で警鐘が  
鳴るが、  
ゴチンツ!と、大きな音が聞こえ思考を中断し、慌ててそちらを  
見ると

「クリ、ティカル……きたあ……っ」

「お、おい藍?!」

頭を壁にぶつけた状態で、ずるずると座り込む藍はどうやら揺れに  
耐えれなかつたらしい

(って、それもそうか……コイツ、両足両腕全部……)

理由は教えて貰えていないが、偶々葵が左腕が義腕なのを知った時  
でさえ驚いたというのに、藍はそれ以上だ

何をすればこうなったのか……少々ドンくさい面があるので、案外  
事故とかだろうか……?

考えているとまた小さく揺れ、それによって我に返る

「取り合えず……オレは原因を探る、お前は……此処で待機」

「つつ……って、へ?あ、ちょ、ジャンスせんせ」

何かを言いたげな藍を残して部屋を飛び出した

生徒達から聞いた話だが、藍はずっと椅子と一心同体だったらしいそんな状態だったなら、歩行にも少し支障が来ているかもしれない……そう思っただけの判断だ  
出来るだけオレも、新たに仲間になるかもしれない奴を危険に晒したくは無い

(オマケにアイツ……妙に、葵に似てるんだよね……)  
葵程ではないが、馬鹿だ

時たま、話を理解しているのかしていないのか分からない所もそっくりだ  
似ている所を探せば探す程、可笑しいくらいに見つかってくる……ふと、一瞬だけ

(まさかアイツ……葵の、実の兄貴かなんか、か?)

頭に過ぎったが、すぐに否定する

葵曰く、アイツは孤児ボーイだからだ……まあ、アイツが知らないだけかもしれないが……そんな事を言い出せば、葵の親父という線も疑わねばならない

もしそうなら、随分若い親父だ……藍の見た目は、上に見積もって26、7だ

葵が今15だから……明らかに親父という線は無い  
むしろ、兄貴という線が濃厚だ

「って、オレ何考えてんだよ……集中しろ集中」

呟きながら制御室へ入り……異変が無いか確認する為、自らのアイコンを船の制御装置へと繋いだ  
その瞬間、

「なっ……っ?!」

ボタン、と音を立てて扉が閉まる

それと同時に、アイコンに凄まじい勢いで文字がスクロールされていく

(く、一体何が……まさかこれは?!)

流れる内容は、制御装置の内容の変更の詳細

恐らく能力を使つての乗っ取り行為だ、普通に打ち込むだけではこんな素早くは選択出来まい

つまり、誰かが本気で……この船の所有権を奪おうとしている

「はっ、オレと勝負しようつてのかい? いい度胸じゃないか……アクセス!」

<アクセスポイント、模索中……発見、5秒後に開始します>

アイコンから響く言葉に、無意識に口端が上がる

(何処の誰かは知らないが……)

<残り3秒>

(粹なことしてくれんじやないか)

<2>

(最近仕事と言や教師かただの機械弄りだったからな)

<1>

(だから、礼がてらに思う存分)

<0>

「後悔させてやんよ」

高揚する心のままに……

生徒達の安全を脅かした誰かへの、復讐劇を開始した

「楓、お前は部屋で待ってるんさ!!」

「い、いやっ……私も、鴻苑クンと一緒にいきますう!!」

固い決意の意志でオレを追ってくる楓に内心舌打ちしたい気分に陥りながら、先ほどから強い気配のする甲板へと走る

まだ、楓はオレの力を理解してはいない

出来れば一生……隠し通したいと思っている

何故なら楓の力を呼び出す為にはオレの力が必要だからで、

(本質知っちゃ……楓が、戦えなくなっちゃうさっ……)

ただ彼女からもう何も、奪いたくないだけなのに

握り閉めた拳は何時の間にか白くなって……

能力の代償である軽い発作に、胸を掻き毟りたい衝動駆られた

けど、それでも、オレは

楓を傷付けたくはないから……隣に並んだ彼女に小さく頷き、甲板へ続く階段を駆け上がった

そして、そこで見たのは……

「何で……っ」

「う、うそ……だ、だって、私達があの時皆で頑張っ……倒した筈ですよねえ?!」

昼間、無人島で倒した筈の真っ黒な触手が、堂々と甲板の一部を陣取っていた

何故か甲板の床は所々穴が開いており、  
すでに応戦していた5人も、深くは無いが傷を負っていた

「鴻苑！楓！気をつける、コイツは甲板の床からいきなりその身体の一部を出現させる！！」

「床の穴はそういうことか……了解！こっちには気にしなくていいさー！！」

（とは言ったものの、厄介さねえこれは……！！）  
敵からの攻撃は予測不可能  
最早反射神経で避けるしか無いのだが……

「つぐ、はっ……」

「こ、鴻苑クン?!」

息が苦しい

思わず膝を付くと、慌てて楓が駆け寄ってくる

（く、そ……こんな時に発作が……！！）  
じんわりと嫌な汗が浮き出る……と、その時

「こ、鴻苑クン！楓ちゃん！危ない！！」

フェルの声が響き、咄嗟に楓を抱き締め横に飛んだ  
直後、下から触手が床を突き破って現れる

「っはは、穴設定されてねえモグラ叩きさね、こりゃっ……！！」  
「も、モグラ叩きは好きですけど、これは楽しくないですよー！！」  
「違いねえさっ……っっ?!」

（ウソだろ、触手がまだ伸びて……?）

どれだけの長さがあるというのだろうか

甲板を突き破ったそれは、まだまっすぐにオレ達へと向かって、

「っ守れ我が扉よ!!」

ガキイツ!!と、帷が出した盾にぶつかり、激しい火花のようなものが散る

その隙に体勢を立て直し、フェルを中心として戦っている皆の下へ合流した

「サンキューさ、帷……一体これは何なんさ?!」

「某達も知らん、ただ異常事態であることだけは確かだ」

「これだけの長さを誇るとは……一体この触手はどれだけ長いで御座るかなあ……」

ぽーっと、袖李が向かってくる触手を弾きながら呟く

「ふふ、きつとこの星を一周できるわね……あら?!ならこの触手を橋にすればタダで世界一周も夢じゃないわ?!」

「わあ、本当ですう!!」

「おお、真に御座るか!」

キラキラと目を輝かせる三人に思わず

(……きよ、今日のイレギュラーのせいで頭が葵並みに馬鹿になってきているさ……)

合掌しつつ、真面目に応戦している三人に向き直る

「本体を何とか叩かねばならないが……如何せん、近づこうにも埒が明かぬ」

「折角、フェルディーン様が察知してくださるのですが、数が多い

ですからね」

「う、ごめんね……」

「いや、貴殿のお陰で何とか凌ぐ事が出来ておるのだ」

「そうですよフェルディーン様、貴女の能力がなさければ今頃海の藻屑と化しています」

冗談でも笑えない事をセイレンが言う

一瞬本気で想像して背筋が凍ったが、

「こ、鴻苑クン、後ろに五歩！」

「っ、とー!!」

フェルの言うとおりの場所から飛び出してきた触手に持っていたトンファーを叩きつけると、引っ込んでいく

（なるほど……昼間より弱いさね……分裂してる分、能力も分散されるのか……）

これなら能力を発動せずともオレや楓でも、凌ぐ事が出来る

アイコンを開き、音声認識モードに切り替え皆の言葉が何処からでも拾えるようにし、トンファーを構えなおす

「現状、五分五分辺りさね?!」

「ああ、そういう所だ!だが、」

「先ほどから教師ジャンスに通信が通じません、ですので此処は私達が……」

（何とかするしかない、か……はあ……）

ただの課外授業だったはずだ

何時ものような、サバイバルゲームをして終わって帰って休める……

…筈だったのに

<今日とはことん、キツイ課外授業になりそう>

誰が呟いたのか知らないが、アイコンに現れたその言葉に同意しつつ

……

機を待つ為に迫る触手と相対した

「ん……」

船が、揺れている

皆の気配が甲板に集中してる、ああ……行かなきゃ……

ぼんやりとそう思い、揺れまくる船の壁に何とか手を付き、立ち上がった

「って、あれえー……」

(俺ってば……いつの間に気配とか分かるようになったっけ……)  
徐々に覚醒していく思考の中でそう考え、ああ俺すげえじゃん!!  
と思った瞬間、感じていた気配が消える

「え、えええ皆一気に消えたのか?! ってそれはねえから……俺の  
察知能力って寝起き限定かよ?!」

意識が覚醒してねえ方がすげえって俺どんだけなんだ!!  
ガビーン、と少々落ち込みつつ甲板に向かう



さっきの感じたものがただの寝起きの錯覚じゃなければ、皆の他にも何かが居て、そいつは……

「怯えてた……」

怖いと、痛いと、助けてと……声無き声で、泣き叫んでいた。ただの錯覚かもしれないが、確かにその悲痛な声は届いた。だから、

「救いにいかねえとっ」

ソイツは俺を信じてる

だから必ず俺はソイツを助けだせる……何故なら、

「俺は俺を信じてる、んで、そいつも俺を信じてる……なら俺、最強じゃん？」

そつだ、俺は最強だ

無能だけど最強だ、何もすげえとこねえけど最強だ、世界一だ、俺は最強最強最強最強……

昔からずっと続けてきた、何が何でも、何があっても全ての事を信じ続けること

それが俺の……

「俺の唯一の才能だぜ!!」

叫び、一気に甲板への階段を駆け上がる

見えたのは穴だらけの床と、疲労が現れている仲間達の姿、そして

……

「おまえか……俺を、ずっと呼んでたの」

助けてと、悲痛な声無き声を上げていたのは昼間会った時と同じ種類の触手だった

「葵、様……?!」

驚いたようなセイレンと、目が合った

所々かすり傷のようなものが見えたが、どうやら無事なようで安心した

皆も似たようなモノで……驚く視線を浴びながら、俺は『怯えている』そいつに話しかける

「なあ、俺の言葉分かるよな？俺、おまえを助けに来たんだ」

何を、といたげな顔で俺を凝視する皆

普段と違い、呆れたような視線じゃないのが新鮮だ  
そして一歩、俺が踏み出した瞬間

『イヤダ、コワイ、コナイデ』

幼子のような声が頭に響き、同時に触手の一本が俺へと向かってきた  
ああ、思った以上に早いなあ……視覚は問題なく触手の動きを細やかに捉えるが、如何せん俺は運動神経が皆無だ

(あれは痛いな、ぜってえ……あー、嫌だなあ……当たる)

一発KOとかカツコわりいから耐えろよ、俺……歯を食い縛り、来るべき衝撃を受け止めようと歩みを止めた、瞬間

「遠方より来るは疾風!!軌道を逸らしなさい!!」

セイレンの声と共に、真つ直ぐ俺の額へと伸びていた触手が少し逸れた

それは、ピツ……と掠った頬に傷を残していく

「何を考えているのですか葵様！逃げて下さい戦闘では役立たずと仰ったはずです！！」

「はは、相変わらずセイレンきついなあ……」

『コナイデ、コナイデ』と叫び続けるそいつから目を離さず苦笑すると、他の皆からも怒鳴り声のようなものがあがる

「おい葵！！ふざけてる場合じゃないんだ、お前は下がれ！！」

「それで御座る！！危のう御座るよ葵殿！！」

「其処に居ちやいい的になってんさ！！下がるんさ、葵！！」

皆の声を受け止めながら、また一步踏み出す

それと同時に叫びも大きくなり、触手が向かってくる

「あ、危ないですう！！」

ビュ、と音を立てながら比奈乃の撃った弓が触手に当たる

先についているトイレのすぼすぼの感触に怯えたのか、触手の狙いが少し外れ、肩先を掠めていく

一層皆の声が大きくなるが、俺はただ……目の前に居る触手が、ただ怖がっている子供にしか見えない  
だから、

「大丈夫だ、な？俺は、おまえを傷つけねえよ……コイツ等だって、おまえに驚いたただけで皆良い奴なんだ、大丈夫だ、何も怖くね

えよ、な」

手を差しだし、異形の触手に安心させるように微笑み近づくその行為に、何一つ恐れは感じなかった

「…………ドレウイー…………」

ふと、姉ねえちゃんが静かに俺を呼ぶ

視線を向けると、まるで仕方ないわねえ…………と言いたげに苦笑される

「貴方のその妄想に侵食されてる頭では、その子が怯えてる可愛い美少女に見えるのかしら」

「んー、可愛い美少女ってか…………小さい、子供みてえな？」

俺の言葉に皆、固まる

その表情は一樣に…………あ、頭ついにぶっ壊れたのか…………って、失礼だなあ皆…………俺まだ妄想とリアルの中間点に居るって

口に出して言うと、更に引かれた…………皆俺を苛めて楽しいのかこの野郎……！

沈黙する空間に、姉ねえちゃんが相変わらず、

「まあドレウイー……！貴方いつの間の子供好きになったの！？まさか将来の為の妄想し過ぎて頭の中でだけパンになってたりするのね？！そうなのね？！」

ぶっ飛んだ発言をする

時折姉ねえちゃんは俺よりすげえんじゃねえかって思う…………ナニがって言うと、もう自明の事実だろ

だが何故か周りの視線が痛い

痛すぎだろこの野郎…………

「ち、ちげえよ姉ねえちゃん！！あーもう、だから……」

なんとさえばいいのだろう

選択肢？：俺はアイツを助けたいんだ！！ 触手なのに？

？：アイツはただ怯えてるだけなんだよ！！ だから、触手なのに？

？：ただアイツは怯えて、助けを求めている子供なんだよ！！  
頭可笑しいんじゃないの？

(やべえ、どう言っても俺変人扱いだぜ……)  
今日ほど自分の何時もの言動を反省した日はない……そう思っているよ、

「分かってるわよ……葵」

ふいに、姉ねえちゃんが静かに笑う

不覚にも、ドキッ……とするほど綺麗な微笑だった  
そして、形の良い唇が告げた言葉は、

「私様は、貴方の姉ねえちゃんだから……頼りなさい、私様は貴方を信じているから」

その、一言

「……はは……サンキュ、姉ねえちゃん……これで俺は、誰よりも完璧に俺を信じられるぜ！！」

ぐっ、と親指を立て合い、やはり言葉を理解しているらしいそいつ

に向き直る

( 待ってたって事は、救って欲しいんだよな、お前は )  
そう思いながら一步を踏み出そうとした瞬間、俺の隣でフェルちゃん  
のアイコンが現れる  
其処に書かれていたのは……

< み、皆ひすいクンの事信じてるよ？ほら…… >

< よく分からんが、某もお前を信じてやっているからな >

< カッコつけ過ぎなんさ、お前は……信じてるから思っようじやる  
んさ！ >

< 葵くん、私達だって信じてるんだよお？だから、思いっきりゴー  
！！ >

思わず、苦笑してしまう

俺の仲間達はなんて良い奴なんだろう……悔しいが、そう思ってしま  
う

口を開こうとした瞬間、セイレンのアイコンが俺の目の前に現れた  
そこにあっただのはただ一言

< 葵様を信じます >

「……………はは……………」

( やべえ、何か、何て言っていていいかかんねえくらい…………… )  
親指を立てて、小さく頷く皆に胸が熱くなる

( ああ、最高だぜおまえら皆……………！！ )  
一步、踏み出しそのまま待っているソイツに走り出す

『 イヤ、コワイ、イヤ、イヤ、イヤイヤイヤヤっ、コワイ 』

向かってくる触手を、皆が弾き飛ばしてくれ  
それでも何本か身体に掠り、傷を付けていくが……時には眼前すれ  
すれで弾かれるものもあるが、歩みは止めない  
(俺は死なねえ、絶対死なねえんだよ!!!)

「おまえ、聞こえてつか？！俺はおまえを助ける！！だからお前も  
今以上に信じろ！！俺を、皆を信じろ！！」

必ず助ける……！！

ふいに、一瞬触手の姿がブレ……幼い少女の姿へと変わる  
その子は涙で濡れた顔で、その小さな手を必死に伸ばし、

「たす、けて……！！」

はつきりと……

頭ではなく耳にその声が届いたと同時に、遠くから冷たい声が聞こ  
えた

「開け扉……ふふ、邪魔は、させない……さあ……」

目の前の少女の身体に鎖が巻きつき、その瞳が絶望に染まる

「に、ゲテー！！」

『貫け』

直後、身体に衝撃を感じ世界がぶれる

(あ、れ……なんで……)

其処まで思った瞬間、ゴポリツ……と何かが口から溢れ、

（あ、あ……なんだ、よ……まっか、じゃん……）

少女へと伸ばしていた右手が、赤く染まっていた

まるで見えない壁に縫い付けられたかのようにそのままの体勢で静止していた体が、

ズルリツ……と突き刺さっていたソレが抜けていく小さな衝撃が合図だったかのように、沈んだ

（なんだ、俺……はは……）

痛い、ものすごく……死にそうなくらい、痛い

痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイイ  
イ……

（死ぬ、死ぬのか？痛い、イタイイタイ痛い死ぬ？イイイイタイ、死ぬ、イタイ、イヤだ、こんな、こんな……おれ……は……）

急速に狭まっていく視界に、鎖に絡め取られ姿が変わっていく少女の姿が目に入った

彼女は、必死にこちらへと手を伸ばしていて……

その目にあるのは救済を求めるものじゃなく……逆に俺を助けようとしているかのようで、



「いやあああああああつっ！！！！！」

何処からか響いた悲鳴を合図に、彼女が鎖に飲まれ形を変えた

(と、り……………?)

大きな黒い……………鎖に絡まったかのような、鳥

(ああ、たすけ、ないと……………ないて、る、いまも、あそこ、ないて……………)

左腕を、何とか持ち上げ彼女へ伸ばす

そして無事だった右足だけで、床を這う

「たす……………たす、け、る……………から……………」

前が段々と見えずらくなっていく

それでも俺は、泣いてるあの子を助けなくてはいけないくて

何が何でも助けなくちゃ、いけなくて……………

進めているのか止まっているのかすら分からない

ただ分かるのは、あの子が、『彼女』のように……………手を伸ばしてくれた人を傷つけた事で狂いそうな程苦しんでいること

「葵様……………っ！！……………れ……………か……………を！！！」

ふと、セイレンの声が聞こえた気がした

その後皆の声も響く

何を言っているか分からないけど、泣きそうで……………

（おれ、また……）

見えていた筈の何かが、消えていく  
それと同時に、深い深い闇に意識が沈んでいった

命題? : 『最善』ならば『不可能』を覆す事が出来る

触手だと思っていたものが、少女の姿へと変わり叫んだのは、

「たす、けて……!!」

ただ一言だった

だから私達は彼を信じてよかつたと、心の底からそう思った  
その油断が、こんな事態を招いたのかもしれない

(な、にが……)

何が起きたか分からない

それは私達も同じだった……ただ、彼の身体をいきなり現れた鎖が  
貫いた

脳がそれを認識するよりも早く、彼の身体から鎖が抜かれた  
当然、それは彼の血で赤黒く染まっ……

ドサツ……と床に伏す彼の口から大量の血が溢れたのが見えた瞬間、

『!!!!!!!!!!』

ただの音なのか、それとも声なのか……

聞こえたのか自分が言ったのか分からない程大きく悲痛な悲鳴が辺  
りに響いた直後、身体がやっと動き出す

「葵様……！！」

まだ、生きている

その証拠に彼はまだ、彼女　鎖に絡め取られた鳥　に手を伸ばし、床を這うように進もうとする

口からは絶え間なく血が溢れるが、焦点の合って居ないその虚ろな目はまだ彼女へと向けられている

(っ……！！)

何故かは分からない

怒りに似た、けれどももっとドス黒い何かが心に溜まっていくのを感じた

それは誰に、何に向けたものなのかは分からないけれど、彼が私を微かに見た瞬間それは収まって……

(一体、何だっけ言うのですか……こんな……っ今はそれどころではありませんね)

「誰か、治療を……！」

自らを痛めつけるかのように船に何度もぶつかる大きな鳥を横目で見ながら、叫ぶ

叫んだ後、思わず舌打ちしなくなった

生憎とこのクラスには治療を本業とする者は居ない

そんなことは、分かりきっていたはずなのに……

(っ落ち着いて下さい、動揺など……私らしくもないですっ……) 取り敢えずは止血をするが、ただ宛がった布が赤く染まるだけで、意味など一つもなかった

「っ……この、傷はもう……」

多少の治療の心得がある鴻苑が、唇を噛み締める  
その先は言われなくても分かっていた  
誰の目から見ても、もう……

「な、何を言っているで御座る!!皆……なんでそんな、黙るで御座るか?!そんな、そんなことありっこないで御座る!!兄者、違うで御座るよね?!葵殿は、葵殿はまだっ……!!!」  
「っ……」

詰め寄られ、帷様は苦悶の表情を浮かべる  
その様に、柚李様の瞳から大粒の涙が溢れ始め、

「あ、兄者……?ど、どうして、どうして何も言っ下さらぬ?!何か、何か言ってくだされっ!!」

絶るよつに叫ぶ

微かに、震えた帷様の言葉が聞こえた

「すまぬっ……」

誰もが一番言いたくない、聞きたくない言葉だった

「そん、なあっ……」

押し殺したような泣き声が聞こえて、それが段々と伝染するように広がっていく

(ああ、悲しみというのは痛いのですね……)  
自分ではどうしようもない無力さの果てにあったのは、痛みで

何かが、頬を伝って……目を閉じる彼の瞼に、落ちた  
その直後、彼の瞼が微かに震えた

「葵様……?!」

思わず跪き、近寄った

僅かに開いた瞳が私を捉え、

「せ……ね、ん……」

掠れた声は、上手く言葉を成さない  
だけど何故か彼が『セイレン』ではなく、今聞こえたように『せれ  
ん』と呼ぼうとしたのだと頭が勝手に認識して、

ああ、起きたのかセイレン……

一瞬脳裏を過ぎったのは白く長い髪をした少女  
大きく厚い眼鏡を掛け、冷たい表情で何時見ても古びた本を手に大  
事そうに抱えている……

……『何時見ても』？

何かを思い出しそうな、何か大切な事を忘れているような……そんな  
錯覚のような感覚から抜け出せない  
何かを知りそうで、知りたくない何かを思い出しそうで、身体が震  
える

頭のどこかで警鐘が鳴った、その直後、

「あー……こりゃー……派手に遊んだんだなあ」

私の思考を遮るかのように掠れた声が聞こえた  
そのざらざらとした声質と、困ったように義腕で頬を掻く来訪者に  
乱れた心が静まっていくのを感じた  
理由は違つが、皆も少し落ち着きを取り戻したように見えた

「藍、様……」

悠然と、優雅とも思わせるような足取りで私達の元へと近づき手を  
挙げ笑う

「ん、よおセイレン」

「よお……では、ありません……葵様がつ……」

また胸に痛みが甦って来る

どうしようもないのだと、頭では分かっているのに……

「ひつく……助けて……」

ふいに、フェルディーン様が藍様の服にしがみ付き、

「あ、葵、クン、をつ……助けてっ！！」

叫びを、上げた

それを合図に、口々に彼に縋るように私達は……葵様を助けたいと、  
叫んでいた

そんな私達に、少し困った顔をした後彼は、

「……俺、確か今日から教師だよなあ……よし、じゃあ一つ授業をしようか」

誰もが予想していなかった言葉を、口にした

「……………は……？」

固まる私達を他所に、彼は鼻歌混じりにアイコンを起動させ、

「それじゃあ皆さん、授業を始めようか」

ニヤリと不敵に笑った

そして彼が左手を上げると、同時に二つのアイコンが現れ……

「なっ……………?!」

「う、うそ……………い、アイコンが同時に……………」

「三つ……………?!」

驚く私達の前で彼はニツコリ笑い、

「一人に扱えるアイコンは生涯多々ある可能性がある……………お前達が今目にしているように、な？その種類は同系列だけではなく……………例えば、」

葵様の前に手を翳し、

「開け扉、我望むは癒しのヒカリ……………」

「っ……………!……!」



みるみるうちに、葵様の傷を治していった  
言葉を失う私達の前で、彼は……

「つーことで、と……ほーら起きろ、俺の授業では居眠り厳禁」  
「うぐつ?!」

葵様を蹴り上げて目覚めを促した

「ちょ、え、あ、藍?!」

「ん、なんだ?」

「な、何だじゃないさ!ええええと、葵は今まで重症でっ」

「ああ、みたいだな」

「みたいだなって……」

ああ、どうしよう……藍様はやはり何処か葵様に似てらっしゃる  
何処かといえば……いや、止めておこう  
何故か一気に脱力感が体中を襲ってきた  
すると、

「つつ……い、てえ……」

「っ葵様?!」

蹴られた葵様が薄っすらと目を開ける

顔は血が足りないのか蒼白だがどうやら大丈夫そうだ

「よし、起きたな」

「起きたなって……あ、れえ……?俺……ああ……?」

「説明は……そうだなあ、皆に聞いてくれ、さて、今日の講義内容  
だけど」

其処まで藍様が言った瞬間、ぶつかり続けていた鳥の動きが止まる  
心なしか意思というものが感じられなくなっている  
それをただ静かな笑みで見た後、彼はゆっくりと話を再開する

「……さて、『最善』ならば『不可能』を覆す事が出来るかどうか、  
って謎を今日は解いてみようか」

「そ、それはいいですけどお……って、藍さん危ないですうっ!!」

楓様が声をあげたと同時に、背を向けている藍に向かって鳥が襲い  
掛かるのが見えた

(っ、早い……!!)

触手だった時に比べ段違いの速さ  
今度こそ本格的に……

(葵様と藍様だけは、何とかお守りしなければっ……)  
咄嗟に彼の背に躍り出ようとしたが手で優しく制止される

彼の背に鳥が飛び掛るまで僅かな時間しかないというのに、何故か  
時が遅くなったように感じ、

「あーあーあー……だからなあ……授業中はちゃんと大人しくしな  
くちゃいけません、めっ」

振り返る彼がゆったりとした動作で鳥に向かって手を翳し、

「授業中は席立ち厳禁……ほら、」

手が、鳥の額に触れた瞬間

「座りなさい」

ズウンツ……！！

まるで地響きのような音を立てながら鳥が床に這いつくばる  
呆気にとられている私達の前で、藍様は……いつの間に取り出した  
のか大きな分厚い本を手に持ち、朗々とした声で言葉を紡ぐ

「最善ならば不可能を覆す事が可能か……この命題は、偽だ」

話している間鳥がもがくが、もがけばもがく程床に押し付けられて  
いく

一体これは何の術式なのだろうか

彼の翳した手の先に小さく現れているのは見たことのない陣の紋様  
で、どういったものかさえも分からない

「判例を挙げるならば、命あるものはどれだけ研究を尽くしても不  
老不死を望めないといった所だなあ」

けどまあ皆強欲だから、何かと噂聞きつけては手に入れようとすん  
だけどなあー

クスクスと……何かを思い出したように藍様は笑い、翳していた手  
を下げ指を鳴らす

直後、

ガキインツ……！！

(鎖が……)

「先も言ったけど、最善では不可能とされたものを覆す事は出来ね  
えんだあ」

鳥の鎖に亀裂が走り、それが徐々に全体へと広がっていく

「最善もただ初めから決められた道筋だからだ、なら、不可能を覆す事は出来ねえのか」

ピシピシと音を立て、鎖が微かに砕けた

「これは人によって色々だけどなあ……ま、俺から言わせて貰えば必要なのは願い、イメージだなあ」

クルリと、私達が、鳥が、聞いているのを確認するかのように辺りを見渡し笑う

「ならば、不可能を覆す事は出来ないのか」

まるで藍様の言葉に呼応するかのように、何かを待っているかのよう  
に鎖はひび割れて、

「その命題が導くのは、」

鳥の姿が揺らぐ

「問う者が乞うならば真為り得る扉への鍵」

そして其処に現れたのは、

「これにて簡単な講義は終わり、復習は各自するように」

藍様がアイコンを仕舞い優雅に一礼をする

その視線の先に居るのは先ほど見た少女……

「っ、お、まえ、さ……」

よろけながらも葵様が立ち上がるうとする

何が言いたいか、その時だけはすぐに分かった

肩を支えながら立ち上がらせると、彼は息を吸いゆっくりと先ほどは届かなかった手を差し伸べ笑う

「来いよ、こっちに」

手を伸ばしかけるが、少女は不安げに私達を見てから彼を見て、

『……………』

音を発した

彼には言っている事が分かるのか、苦笑しながら

「大丈夫だって、皆怒ってねえよ……なあ？」

笑いながら私達を振り返った

少し、皆で顔を見合わせた後……当たり前だと、頷きあつ  
それで少し安心したのか少女がゆっくりと手を伸ばし……

彼の手に、触れた

直後、

「……ついよっしやああっっ！！！！」

葵様がガッツポーズをしながら大声で喜びの声をあげる

(……先ほどまで死にかけていて、皆で泣いたというのに……)  
少し現金過ぎやしませんか……同じ事を思ったのか皆が苦笑する  
中には脱力の余り、膝を付く人も居たが……

「いやあ良かったぜ！！ん？あ、お前ルナリスっつーんだな！んー、  
んー……じゃあルナだな！！」

「ん、そうだ！俺は葵、葵！！ウィンデル！！ひすい！宜しくな！！」  
「……、……」

少女を抱き締め心底嬉しそうに笑う彼を見ると、何故かイライラとしてくる

ああそういえば、だ

今日は彼に色々と隠し事をされていたり彼が勝手な事をして死に掛  
けたり今も……

(……原因は分かりませんが、葵様の今の行動は私をとて不愉快に  
しております故に、)

「おお？そうか、ルナは見た目ちっこくて可愛いのに俺と同年か  
ー……って、うん？どうしたセイレン？」

「……葵様、何か言い残すことはありませんか」

「へ？って、セイレン何その握り締めて今にも殴り出しそうな拳……  
……あ、もしかして嫉妬か？そうなのか？！ってことは俺もまだ捨て

たもんじゃねえって事だよなあ!」

「っこの破廉恥男っ……言い残すことは無いと判断しますいいですよね、ええそうします」

「は、へ、えと、セイレン……?」

この鈍感男は私が……私達がどれだけ心配したと思っているのだろうか

それを礼の一つは、まあいいとして少し殊勝な態度を心がけるとかくらいしてもいい筈だ

(いえ、するべきです)

私が殴る体勢を整えた瞬間、

「そっだ、皆……ありがとな」

葵様が嬉しげにニツコリと、笑った

「その、なんだ……あー……あれだ、あの……あの言葉が、すげえ嬉しかった……」

思わず体勢を正し、照れたのか少し俯きがちになってしまった葵様を見る

顔は見えないが耳まで真っ赤になっている

後ろに皆から、忍び笑いのようなものが聞こえ……それが耳に入ったのか彼が勢いよく顔を上げる

羞恥のあまりか少し涙目になって……不覚にも可愛いかもしれなないと思った直後、

「と、とか仕方ねえから言ってやったんだからな!!か、感謝感激雪霰だこの野郎!」

色々と限界だったのだろう、言うだけ言って

「畜生馬鹿にすんなよ馬鹿野郎ーっっ！……！」と、走り去ってしまった

(……っふふ、分かり易い人ですね……)

彼のそういう所は、嫌いじゃない

何故だか少し穏やかな気分になりながら……ルナリス、と彼が言っていた少女を連れて彼の部屋を後で訪ねる事にした  
ふと、空を見上げると薄っすらと明るくなってきていて……

「今年もまた、課外授業があつた日は帰宅出来なかつたな」

「まー……中等部の時からだから、毎年恒例さねえ……」

「そうですねえ……でも、キツイものはキツイですよ」

苦笑しながら船が進んでいる先を見ると、

遠くの方にやっと見慣れた島国が見えてきた

ああ、今年は例年に比べて大分ハードな内容だった……そして、思うのはやはり

「あー……お風呂に入りとう御座るー……」

そう、入浴の事

家に帰って早く汗を流したい……そして少し遅くまでまどろむのだ  
温かい陽だまりに包まれた感覚を思い浮かべていると、

「そうねえ……少しべとべとだしね、ふふ……ドレウィーに何時も  
のように洗って貰おうかしら？」

(っ?!)

思わず、自分の耳を疑うがフェルディーン様も同じ様に聞こえたらしく耳まで真っ赤にして動揺していた



付け加えて言えば、ルナリス様も真っ赤になっていた

「え、えええ？！あ、あ、アイシス先輩、おふ、お風呂、あ、ああ  
葵クンと入って……！？」

「っ……あ、アイシス様、は、破廉恥で御座いますよっ……！！」  
『……！！』

三人で抗議すると、ニッコリと彼女は笑い

「あら、ナニを想像してるのかしら？私様はただ、何時ものように  
服を洗ってもらおうと思ったんだけど？」

そう勝ち誇ったように告げる

ああ、やられた……！！

物凄く大きな敗北感が心を占め、正直立ち直れなくなりそうだ

(……アイシス様は、人が悪いです……)

溜息と共に聞こえないように呟き、ふと……講義終了と言った後か  
ら何時の間にか藍様が居なくなっていたことに気付いた  
どうやら甲板には居ないようで

(何処に、行ったのでしょうか……?)

可能性から言えば部屋に戻ったと考えるのが無難だろうと結論付け、  
少しずつ近づくと自分達の帰る場所へと目を向けた

制御室……そう書かれた扉に静かに手を当て鍵を外す  
中に居たのは、やはり……

「……こんな所で寝たら風邪ひくだろお、普通……」

ぐーぐーと寝こけているジャンス先生だった

（あんだだけ揺れてよく起きなかつたよなあ……）

苦笑しながら何とか肩に担ぎ上げる

少しよろけるが耐え、立ち去る前にジャンス先生が格闘していた制御装置の内容を念のため確認する

記憶に間違えがなければ問題ない内容だ……さすが、機械関係強いだけはある……

小さく微笑みながら部屋を出ようとした

その瞬間、

「……俺に何か用かなあ？」

後ろは振り返らず、呟く

すると、

「さすがですね……驚いちゃいました、アレも、コレも」

クスクスと楽しげな甘い声が耳元で響いた

（ああ……）

「そんなことねえ癖に……口が上手いななあ、

？」

（俺はまた一つ、歴史を変えてしまった）

嘲笑とも自嘲とも取れる笑みを浮かべた俺の耳元で、

「お褒めにお預かり光栄でありますわ」

声の主が妖艶に微笑んだ

晴れ+雨〓モヤモヤとした天気(前書き)

今回は特にダラダラとした、日常(?)をメインで書きました!  
「ダラダラとか嫌よ!」や「さつさとお前お得意の中二病出せやゴ  
ラア!」な人は今回のお話は見なくても特に影響しませんので:  
…って、そもそも見てる人居るのかな(笑)

## 晴れ＋雨＝モヤモヤとした天気

(鳥の声が聞こえる……)

微かにそう思い、身を包む温もりを抱き締め身を丸める  
まだ少しまどろんでいたい……そう思った瞬間、少しだけ意識が覚  
醒した

「ああそうか、俺は何時の間にか眠っていたんさね……」

昨日の課外授業は色々と重かった……  
思い出して少し苦笑して、日課である水遣りをしようと微かに肌蹴  
っていた薄い着物の前を直し外に出る  
木々の間を風が駆け抜けていく

「ん……気持ちいいさね……」

母が生きていれば洗濯日和だと笑っているのだろう  
花が咲き乱れる横にある、小さな母の墓を見てそんな事を思った  
そして目を閉じ、一つ息を吸う  
新鮮な空気で肺を一杯にしてからゆっくり目を開けた  
桶に映ったのは見慣れた自分の顔……それを見つめながら一言、小  
さく呟く  
すると、

「ん、今日も狙い通りさ」

黒から碧へ瞳の色が変わった  
それを確認し、ニッコリと微笑む

昨日大分譲与の方に力を注いだが今日も衰えては居ない  
それに安堵しながら、桶に水を入れて母の花に柄杓で撒いていると

……  
風が、見知った気配を乗せて届けてきた

「……来た、のか」

振り返らずとも分かる、この気配は……

「来るな、って言いたげだね……酷いなあ、一応僕は……君のお兄  
さんなんだけど、な」

アスベル「ロワード」ウィンダス、この国 ウィンダス の第

一王子……俺の、腹違いの兄

（何度、来るなって言ったら分かるんさ、ね……）  
無視して水遣りをしていると、苦笑しながら近寄ってくる音が聞こ  
え、

兄は俺の母さんの墓に小さく手を合わせた

「喜代美さん、亡くなってからもう5年、か……はは、通りで僕達  
も大きくなる筈だ」

「……そうさね、大きくなった……なのに何時まで、ロワード家は  
王位継承を先延ばしにするんさ？」

「そつだな……何時までも、かもしれない……」

何を馬鹿な事を……そう思い兄を見るがその視線は真剣そのものだ  
った

何が言いたいのか何となく察し、

（アスベルも父さんも馬鹿だ……）  
ただ思った事を心の中で毒づく

幼少より身体の弱かった兄  
だから彼は並みならぬ努力をした  
全ては王に、この国の未来を背負う為に……なのに……

「僕も父上も、王位を継ぐのは僕より君の方が良いと……」  
「っ、黙れっ!!」

叫んだ拍子に、桶の中の水が零れた  
それすらも予想はしていたとばかりに、アスベルは動揺しない  
それ所か……

「鴻苑……考え直さないか？君が知らないことは全部僕が教える、  
側で手伝うから……」

王宮に戻っておいでと、そんな事を口にする  
もう何度目の事か……怒鳴ることなど意味が無いと、分かりきる程  
繰り返された平行線の要望に力なく首を振る

「オレは、東……東 鴻苑だ……」  
「……分かった……今日の所は、引き返すよ……でも僕は、諦めな  
いからね」

意思の籠った強い瞳……  
真っ直ぐに見つめ返す事は出来ず、ただ黙って俯いてその背を見送  
った

「……オレに、王なんて……」

(ああ、くだらない話さね……)  
何故、努力したのにオレに譲ろうとする？  
昔語った夢をその手で叶えられる所まで来たというのに  
何故……？

「はあ……関係ないさ、全部……オレは、東家最後の一人なんだから」

空を見上げると雲ひとつ無くて、まるでアイツみたいだと思った  
ふと……こんな話を話したら、

「王様?! いいじゃんいいじゃん!! え、おまえなるの嫌なのかあ  
? なら俺に王様ならせろよ!!」  
そう返してきそうだなあと、そう思った

「はは……アイツは、相変わらず馬鹿だから、なあ……」  
少しだけ、笑えた気がした

香ばしい匂いがキッチンに広がっていく  
鼻歌混じりに料理をしていた私は、出来上がったジャムを一口味見  
する

「うん、美味しく、出来たっ」

父が家の農園で作っている果物を使ったのだから、当然といえば当



然なのだが、嬉しくなる

(だって、今日は……今日から、増えたもんね)  
居候……という括りらしいが、それでも新しい住民が増えたことに喜んでいると、

「おや？なんだいフェル……今日は一段と張り切ってるじゃないかい」

「ふふふ、きつと昨日から住むようになった『男前』さんのお陰かねえ？」

クスクス、と笑いながら頷き合う父と母に思わず顔まで真っ赤になっ  
てしまう

否定してもただ「はいはい、冷やかしさんは退場しますよー」とニ  
ツコリと出て行ってしまった

「も、もう……お母さんもお父さんも……」

確かに、新しい住民が増えたから張り切って朝食を作った  
それはそうなのだが……

(好き、とかじゃ……な、ないもん)

昨日、勢いで彼を面倒見ると言ってしまった時には驚いた  
皆も驚いていたが……あまり詮索されずに決まってしまったのは正  
直有り難かった

「……葵、クンに……ちよっぴり、似てる……もん、ね」

大切な大切な幼馴染の彼に似ていた

だから、困った顔をさせていたくなって……笑って欲しくて……

「わ、わた、私何考えてるの……!?!」

これではまるで自分が、幼馴染の彼の事が……  
(ち、ちちち違うもん!!だ、だって……だって、葵くんは……)

「セイレンが、好きだもん……」

小さく呟いてから後悔した

どうしようも無く、胸が痛んだ……だから、やっぱりそうなのだと、  
自分の本当の気持ちに気付いてしまって

「……どう、しよう……」

葵クンの笑顔を見るのが好きだ

彼が自分に笑いかけてくれると、すごくすごく嬉しい

けど葵くんはセイレンの事が一番……そう思うと、泣きたくなった  
その時、

「……フェルさん、何がどうしようなんだ?」

「ほ、ほえ?!」

振り返ると、藍さんが居た

朝起きてから剃ったのか、無精ひげが無くなりかなり若く……学生  
でも通るように見える

「あ、えと、なんでも無いです……そ、その、藍さんご飯食べるっ  
?」

「ん?ああ……頼むわ」

ニッコリと、彼と良く似た笑顔を浮かべる藍さんに心が温かくなっ  
ていく

はい！と、元気良く返事を返し朝食を並べていくと、その間藍さんはニコニコと微笑みながら見ていて……  
(な、なんだか……少し恥ずかしいかも……)

「ん、どうしたフェルさん？」

「はへ、な、なんでも、ないよっ！！」

頬に熱が上ってくるのが分かる……きつと今、私の顔は真っ赤だ  
藍さんに見られないように気を付けながら準備を終え、席に付く

「んー、いい匂いだ……フェルさん、料理上手だなあ」

「ほえ、えと……そ、そんな事無いよ……お母さんとお父さんが、  
作ってくれたお野菜や果物使ったから……」

「……それだけじゃないって、フェルさんが作るから、美味しいんだよ」

カリッ、とパンを一口食べてから藍さんは微笑む

その言葉が、その微笑が……初めて葵クンに料理を作った時とそっくりで、思わず手が止まる

「ん？どうかしたか、フェルさん？」

心配そうなのその瞳も表情も大好きな彼にそっくりで、

トクン、と微かに胸が高鳴った

「う、ううん……な、何でも無い、早く食べて、学校行かなきゃ、  
ね？」

まだ心配そうな藍さんに尤もらしい理由を述べ、朝食を再開した

……この後急ぎ過ぎた私が盛大に咽せ、逆にもっと藍さんに迷惑を掛けてしまった

それでも苦笑しつつ怒らないでくれる藍さんは、葵クンと同じで優しいんだな、と……少し嬉しく思った

「ドレウイー！！さあ、さあもつと早く走りなさい！！」

「ちょ、姉ねえちゃん！！あんまし俺の背で暴れないでって、ちょ、色んな意味でヤバイって！！」

朝、最日常と化してしまっているこの騒ぎ……

それを合図に起き出し、仕事へ行く途中のおばちゃんやおじちゃんが手を振ってくれる

が、如何せん俺両手は姉姉ちゃんの太もも辺りにある

残念ながら手を振っている暇が無い

必死に走っていると何故か羨望の眼差しを向けてくる、モテない学生が居た

「って、今ぜってえ誰か誤解したろ？！したなっ？したなっ！したんだろっ？！！」

俺の声にそそくさと退出していった

（畜生つ薄情モノめ！！アイツの名前はもう、えーと……モテ無い学生だから、モテナま！！モテナま、だこの野郎！！）  
拳を握り（締めれていないが）心の中で叫んでいると、

「ふふふ、不甲斐ないドレウィーの代わりに貴方の分も振ってあげるわ！！ハロー隣人さん達っ！！」

姉姉ちゃんが背中でもた暴れる

何とか落とさないように頑張っていると、

「ははは、大変だな葵……んじゃ、オレはさっさと行ってきまーすっ」

「あ、ちよっ……汚えぞジャンスせんせええっ！！！！」

ジャンス先生が、軽やかに姉姉ちゃんを負ぶって走っている俺の隣を走り抜けていった

起きたのは俺より遅かったのに  
家を出たのも俺より遅かったのに……

「大人つて汚ええええ！！！」

毎度叫ぶ俺の言葉に、おばちゃんやおじちゃん達が笑っていた  
疲れてるけど、ちよっとしんどいけど、

(ああもう仕方ねえなあっ！！！)

俺を見て、馬鹿してる俺を見て、誰かが笑えるなら……

「今日も遅刻なんだぜこんちきしょおっ！！！」

俺も幸せだ

そう思い、背で同じく楽しげに笑っている姉姉ちゃんと何時ものように学校に急いだ  
そして……

「はい、今日もお前等二人、連続遅刻新記録更新つと……学校入

つてから遅刻の皆勤って馬鹿だわ、お前等、はははっ」

ジャンス先生の笑い声と共に、皆の笑い声が聞こえた  
やっぱり俺達は何時を通り、一限目に遅刻し廊下に立たされた

「あー……何か廊下に立つの、慣れてきたぜ」

「ふふふ、ドレウイー……貴方まだ慣れてなかったの？未熟者ね、私様はもう慣れ慣れよー！」

「おお、なれなれ……何だか破廉恥な響きだぜ姉姉ちゃん！」

二人して叫ぶと、教室の中からチヨークが飛んできた

胸の中心にクリティカルヒットし撃沈しながら暫く待っていると、

「よし、お前等入ってこーい」

ジャンス先生の声が聞こえ、教室に入ると

「おお？！藍！！おまえ、本当に教師になったんだなあ！！」

「はは……まあなー」

ニツコリと笑っている藍が居た

教師服のロングタイプを着込んで髭も剃り、無雑作だが髪もちゃんと束ねており、割と普通の教師に見えた

「なあ、なあなあ？藍は何教えるんだ？」

「ん？俺は……」

「あ、分かったわー！！」

ふいに、少し大人しくしていた姉姉ちゃんが声をあげる  
そしてそのままズイッ……と藍に顔を近づけ、

「破廉恥な内容の授業ね?!」

とんでもない事を口にした

「な、え、は?!」

「は、はれ……っ!?!」

「え、ええええええっ?!」

何を想像したのか顔を一齐に真っ赤にして言葉になって居ない皆に、  
姉姉ちゃんは笑う

「ふふふ、皆初心ね!! 此処は私様が先輩として、」

理解が追いつかなかったのか、若干固まっている藍にズズイッ……  
と更に近づく

そう、まるで……この勢いはまるで……って!!

「お、おいおいおい姉姉ちゃんっ!?! だ、ダメだって!! 藍今日が新任初日だし?! いきなり毒牙に掛けちゃダメだろ、こういうのはちゃんと手順踏んで教え込んでやらねえと!!」

「えええそっちいつ?!」

更に顔を真っ赤にした皆から突っ込まれる

(あれえ、俺何か間違っただこと言っただかあ?)

首を傾げるが、別に間違っただこと言っただかあ?

そうこうしている内に、復活したらしい藍が困った顔をしながら、

「え、と、俺はそういう授業教えるんじゃないやなくて、だなあ……って、何笑ってんですかジャンス先生!!」

腹を抱えて笑っているジャンス先生に憤慨する

「ぷはは、悪い悪い……プククツ」悪気度マックスなその返事にホトホト困り果てたのか溜息を吐く  
そして、

「ああもう……取り合えず、授業始めるから」

すう……と、右手を顔の位置まで上げ、

「取り合えず立ってる皆、着席」

指を鳴らした

直後、

「っうわ?!」

「わお?!」

立っていた俺と姉姉ちゃんの身体が、重力に逆らい浮いた

呆気にとられている間に浮いた体が自分の席の上まで勝手に移動し、椅子の上まで来たらゆっくりと下降し椅子に座らされる

「よし、皆……座ったなあ」

何事も無いように笑う藍を呆然と見つめた後気付いた

「っ藍!ーい、いいいい今の何だ?!俺浮いたぞ?!浮いた、マジ浮いたぜ?!」



(ヤツベエ俺人類の夢達成出来ちゃった的な?!こんなあつさり良  
いのかよ?!)  
混乱する俺と違って姉姉ちゃんは……

「ふ、ふふふふ!!ヤバイわ、私様の身体が軽過ぎていとも簡単に  
浮かされてしまったわ?!いやん、なんだか破廉恥で素敵!!」

興奮し過ぎて途中から願望が入っていた気がしない事も無い  
他の皆も驚いたらしく、呆然と藍を見つめていた

すると、笑っていたジャンス先生が立ち上がり、藍の隣まで行き笑う

「見ての通り、藍は俺等の知らなかったアイコンの力の扱い方を知っ  
てる……聞く所によるとな、これは何とか大陸つつ……まあ、俺  
等の知らないところじゃ、普通にやってるらしい」

「何とかって……まあいいか……そう、その大陸ではさ、普通に色  
々とこつちじゃ『有り得ない』こと出来るんだよね」

例えば……そう言い、アイコンを同時に二つ起動させる

「こつちやって、多い人は同時に二つとか……扱っちゃってたり、な  
?」

ニコニコ笑いながらアイコン二つ同時起動を見せてくれる藍  
だけど、ふと脳裏に甦るのは昨日の事……

(あり?そつちや、昨日って……)  
カタ、と小さく音を立ててセイレンが立ち上がり発言する

「……多くて二つ……なら、三つ扱った藍様は凄いで、という事にな  
りますね」

「っ、ちょ、それ言っちゃダメだって!!」

すると何故か、藍が焦る

何故そんなに焦るのか……訳が分からず皆で首を捻っていると、

「……ほお？お前、自分も扱えるのは二つまでです、って言ったよな？」

「いつ……」

黒い笑みを浮かべているジャンス先生が、藍の肩をがっしりと掴む  
セイレンはソレを見て、手を叩いて

「ああ、そういう事でしたか……申し訳ありませんでした」

カタン、と小さく音を立てて座った

顔に「いや、ちょっと頼むお願いだからそれ以外に何か言って?!」  
と、ヘルプミー的な表情を浮かべる彼に、

「オレにウソつくたあ……いい度胸だなあ、おい？」

「ちょ、いや、あの、い、いやだなあ、はは……う、ウソだなんて  
っ」

黒い笑みを浮かべ迫り来るジャンス先生にたじたじの藍

トン、と背が黒板に付いた……逃げ場はもう無い

彼の顔が青ざめた、瞬間

「あ、あ、あのっ!!」

フェルちゃんが、大きな声を上げた

(え、あ、フェルちゃん……大声、上げたのかあ……)

皆も同じ様な所に驚いたらしく、呆然と……ジャンス先生までもが、注目する

が、途端に彼女はオロオロと視線を彷徨わせ始めた

(あ……そう、か……フェルちゃん、優しいもんなあ)

きつと藍が困っていたから声を上げたんだろう……やっぱりフェルちゃんは優しいなあ、うん

微笑み、

ガタンツッ！ワザと大きな音を立てて席を立つ

「せーんせ、授業、押してるぜ？俺等つてば、普段何もしなくても中々進まねえんだからさあ、俺等が大人しい時くらいだろ？授業進められんのさあ」

笑って言うつと、溜息と共に額にチョークが飛んできた

「あでっ！！」

思わず額を押さえて椅子に座り込むと、

「お前なあ………だったら、オレの時も大人しくしろよな」

呆れたような笑ったような声が聞こえた

そして、

「はあ、二人に免じてお咎め無しにしてやるよ、藍先生………けど、隠し事とかはよくない、だから今後すんなよ？」

嚴重注意、とだけ言って軽く小突くだけだった  
それに藍は軽く頭を下げ、呟いた

「……すいません、気をつけます」

「おう、気をつけるよ……あー、じゃあ残りの授業はオレが乗っ取ってやる」

「って、はあ?!」

(ちよ、いきなりだなおい?!)

さっきまでちよびつとシリアス……じゃ、なくて俺ってばいい人だなあ的なオーラが漂ってたのにブチ壊し?!え、マジ生徒の努力を打ち壊しすんのこの人?!

意義有り、と手を挙げようとしたが、

「文句ある奴は便所掃除な?」

「大人しく授業を受けさせて頂きます」

やっぱりジャンス先生には勝てなかった

そして……今日も割と平和に賑やかな一日が過ぎていった

ずーっとこう、だからだと続けばいいなあ……

窓の外の青空を見て、心の底からそう思った

雲ひとつも無い昼下がり

葵達が住む小さな島国、ウィンドラスと遙か離れた古びた塔のあるその場所です……

黒いローブを目深に被った人影が空を見上げ、

「ああ……今日も雨が降る」

晴天、と呼べる天気にも関わらず溜息を吐きながらそう呟く  
そして塔の扉を開けその嚴重な扉の鍵をかけた、直後、

ポツ、ポツポツ……

灰色の雨が降り始める

そしてあつと言う間に土砂降りとなり、地面に小さく芽生え始めた  
若葉を全て押し流していった

まるでこの場所に咲こうとする事が間違いだと、嘲笑うかのように

……

「……ああ……何時か君と俺だけで、同じ雨を浴びたいよ……」

塔の中で呟かれた小さな声

それはすぐ、雨音に掻き消され誰にも届かず消えていった

そして今日も、

孤独な天才は幼き日を夢見て……心を殺せず命を壊す

全てはそう、世の為人の為……

非道で無慈悲な正義を盾に、多くのモノを壊し尽くしてその先へ進む  
足元の屍を見つめても、ただ一言

「運が悪かったね」

眩きバキリツと踏み潰していった

喧騒 + 距離 || 傍観者 (前書き)

## 喧騒＋距離＝傍観者

「よし、今日は此処までだ！お前等、予習と復習を忘れんなよ」  
「お疲れ様でした！！」

授業の終わりを告げる挨拶を済まし、一息付く  
そして、

「ああああ！！授業終わったぜっ！！」  
「煩いです、馬鹿さ……葵様」

「はは、息苦しい授業が終わったからなあ！……っで、ん？セイレンお前、俺の事馬鹿様って言いかけた？！」

葵が細かい所に気付きました何時もの痴話喧嘩が始まる

周りを見ても、ああ何時ものが始まった……と言った具合だ

（アイツ等も毎日毎日、よく飽きないさねえ……あ、椅子スイング  
参連続ヒット、痛いさねえ、あれは）

数日前に自分も同じ事をされそうになった事を思い出し身震いする  
セイレンは、いい意味でも悪い意味でも容赦がない

よくあれを喰らってすぐ立ち上がれるさねえ……葵の丈夫さは国一  
番かもしれないと時たま本気で思う程だ

「鴻苑クン！！」

「ん……？あ、楓、どうしたさ？」

パタパタと走ってくる足音と声に振り返ると、居たのは楓と……



「あ、涼……今日はA組の方も、あがり一緒だったんさねえ」

違いは眼鏡を掛けているか否かだけ、と……楓と色んな意味で瓜二つの双子の姉、涼が居た

何が瓜二つかは言うのが憚られるので察して欲しい

誰に言い訳しているのか分からない状態のオレに気付いていない涼は、上品に笑う

「ええ、確か……藍先生？彼が新任として来られてから、日が浅いので……先生達も、会議というもので忙しいそうですわ」

「なるほど……会議、ねえ……」

（大方、飲み会って所だろうさねえ……無駄に騒ぐの好きな奴ばっかだし）

酔っ払ったジャンス先生が藍に絡んで困らせている姿が容易に想像出来る

思わず苦笑していると、何を勘違いしたのか涼が赤くなる

「あ、あの……私、何か可笑しな事を言いましたでしょうか……？」

殿方と話す機会などあまりありませんので……そう言い、少し俯く……っつて、

（ちよ、そのアングル地味にヤバイさっ……てか、涼また制服……）とても清楚でおしとやかな性格をしているにも関わらず悲しいかな、涼のある部分はそれを吹っ飛ばすくらい成長していて、

簡単な話が俯いたりするだけで少し肌蹴っている制服の間から大きな

……

「おお！おまえ胸おっきいのな、谷間までくつきりだなあ……」

「っ馬鹿……お前馬鹿、女性にんな事言う奴が何処に居るさね……」

いきなりオレの後ろの、良く見える位置に現れた葵が破廉恥な事を  
大声で言う

ああほら、涼が真っ赤になって固まって……って？

「……と、殿方に……そんなにストレートに褒められたこと初めて  
ですわ……」

何故に、今の何処にウツトリする要素があつたのだろうか

(女というものはよく分からんさ……)

少し脱力しながら、帰り支度を終えたらしい皆が集まってくるのが  
見ていると会話が耳に入ってくる

「んで、胸のデツカイ楓似のお前は誰？何か清楚な雰囲気＋御嬢様  
口調とデツカイ胸＋制服の肌蹴具合とのギャップで俺ドギマギしそ  
うなんだけど」

「そ、そんなに褒めないで下さいまし……」

赤くなった頬を押さえ、少し体を振るとそれに合わせてある部分が  
揺れて……って、いただだっ？！

急に頬を引っ張られ、引っ張った本人に抱き締められる

てかハツキリ言うマジ窒息しそうだ、なんだこれ、オレを殺す気  
なのか……とまで思いそうなほど、顔を胸に押し付けられる

押し付けている張本人……楓は少し不機嫌な顔で、「鴻苑くんは見  
ちゃダメなのっ」と押し付ける力を強くしてくる

なんだ、あれはオレだけ有料なのか……酸素が足りなくなってきた  
頭は、残念ながらそんな事しか考えてくれなかった  
オレが地味にピンチな間も、葵と涼の話は続いてた

「あ、申し遅れました……私は涼、楓の双子の姉で御座いますわ」

「へー、どつりで似てると思ったぜ！なあ、セイレン、似てるよな？」

黙って待っていたセイレンに葵が笑いながら声をかける

微かに不機嫌そうに見えるのはオレの気のせいじゃない……と言いつ切れるかどうか危ういな、そろそろ酸欠で頭が回らなくなってきた

……

「はい、そっくりで御座いますね……ですが……」

セイレンは其処で言葉を切り、真っ直ぐ……涼の胸を見据えて、

「女の価値は、ソレの大きさでは決まりませんから」

睨みつけるように言い捨てた

(……せ、セイレン……)

やっぱり悩んでたんだ、本気で……デリケートだもんな、ソレについては女の子って……

楓の力が緩み、少しだけ自由になった思考でそんな事を考えていると、葵がああ、と手を叩いて笑う

「大丈夫だぜ、セイレン！俺はおまえがどんな胸のサイズでもストライクだぜ！！」

「……そんな事を聞いてなんて居ません、そもそも……破廉恥です、消えてください」

「うぐっ?!」

(あー、腹に決まったさねえ……はは、ご愁傷様さねえ……って、あれ)

腹を抑えて痛みに呻いている葵の横に慥然とした表情で立つセイレ

ンの頬が、薄っすらと赤いまさか、

(セイレンが……照れ、てる……?)  
それ故に頭ではなく腹に打撃、と……へー、こりゃあ葵苦労するさなあ……

どうやら見ない所でこの二人、少しは進展しているようだ  
尤も、

「あ、葵くん、大丈夫っ?」

「ふふ、ドレウィー、愛の一撃は重いものよ?さあ立ちなさい!!  
立って愛を受け止めたと証明するのよ!!」

「あ、葵さん大丈夫ですのっ?」

葵に気があるのは他に三人も……ああ、自宅待機してるらしいルナも居た

兎に角沢山居る、アイツは何気にモテるからなあ……ダメなところが良いのだろうか?

ふと、そんな事を思ったが復活したらしい葵が顔を上げ、

「あ、鴻苑兄貴じゃん」

オレの後ろの通路を指差し笑って言った声に、思考が停止した

(今、アイツ……何て言った……?)

ゆっくりりと、もう完全に力を入れて居ない楓の腕から離れ後ろを振り返る

葵の言葉がウソでありますようにと、ただそれだけを願って振り返った先に居たのは、

「っ……なんで来た、アスベルっ」

「……はは、そんなに怒らない欲しいなあ」

苦笑しながら言葉を紡ぐ、葵の言葉通り……オレの兄だった

(一人ならともかくっ……みんなの前で何で……)

「何度も言った筈さ、オレはならないっ!!」

「あはは、真っ向から否定されると辛いものがあるね」

「茶化すなっ!!」

兄が、どんな意図を持っているかは知らない

だが……

(オレは、幼かったとはいえ……自分の判断で王宮から離れた)

「オレにはもう、あの場所に戻る資格なんて無いに等しい」

だからもう、諦める

そう告げようとした瞬間、

「ひっがーしこーうえんっ」

真後ろで間抜けで馬鹿な声が聞こえた

しかも、オレを呼んだであろうその発音は……

「……だれが東公園だ、葵……」

「お、気付いたのか! さっすが公園!!」

「だから公園じゃないっ!!」

馬鹿にするのもいい加減にしろっ

そう言いかけた所で何故か首に腕を回され、頭を突き合わせるよう

な形になる

離せ、と怒鳴ろうかと思ったオレに葵が小声で

「おまえ、切羽詰り過ぎだぜ？口調、変わってる」

それだけ呟き、あつさりと離れていった

思わず振り返った所で見たのは、

「鴻苑兄貴さあ、あんまし俺の友達苛めんなよお？」

「苛めてるつもりはないんだけどね……そう見えたかい？」

「おお、見えた見えた、バリバリな！だから……今日の所は此れで帰ってくんねえ？」

俺に免じて、さ……そう言いニツコリと笑う葵と、

「……仕方がないね……それじゃあ君に免じてまた何時か、って事にしておくよ」

苦笑して去っていく兄の姿だった

兄の背を見送り、

何時までも固まったまま動けないオレに、葵が少し呆れたような顔をして突付いてきた

「お前さあ……なあに呆けてんだよお、も、もしかして……俺が東公園って言ったのが相当シヨクだったのか？！」

うわー、俺親友の心に消えない傷跡残しちゃったよ！！ヤベエヤベエ！！

本気なのかワザとなのか分からないが騒々しく騒ぎ出す葵に、漏れたのは苦笑

「お前なあ……………そもそも、オレ等親友だったんさねえ……………」

「つちよ！突っ込むとこ其処にされちや俺滅茶苦茶悲しいんだけど！ちきしよう、泣くぞこの野郎！！」

「おー、泣け泣け、泣き叫べ……………何なら地面に這いつくばるがいいさ」

「え、Sな鴻苑久々に降臨！！ヤツベエ俺なんだかゾクゾクすんぜつ……………！！」

ドMかこの野郎

取り合えず背中に一蹴りし（その後はセイレンが何時も通りに相手してやってた）普段通りが戻った教室を見て、

（……………有難う、さね……………）

唯一事情を、オレの素性を知っている葵の行動に心の中で感謝した何故なら……………

「ほう、葵様はドMになられたのですか、なら私はもう手加減なしにしていると言う事ですね？」

「い、いや、ドMになった訳じゃ……………つて、痛っ！！せ、セイレン、マジ痛えって！！」

「ええ、葵様なら……………痛いと言ってくれろと信じてました」

「な、何だこのなんとも言えないこの感覚……………バイオレンス的な行動の後に信じてた発言はギャップ魂が刺激されて萌えるぜ！！」

「……………なら燃え死んでください」

「どわっち？！ちよ、マジセイレン、マッチ近づけないでえっ！！」

（……………はは、今日も平和だ……………）

触らぬ神に祟りなしだ

気にしない方が長生きできる……そう思い、苦笑しているだけに留めていと

ぎゅっ……

微かに楓に服の裾を握られた

だけど、まだ今のオレは何も答えることが出来ない……

だからその手を取って握ってやる事も出来ず……ただ黙って、段々と参加者が多くなっていく目の前のドンチャン騒ぎを眺めた

ふと、何時からアイツはあんな風に馬鹿をやり始めたのだろうと……喧騒の中心で弾けるように笑うアイツを見て、そう思った



## 喧騒＋距離Ⅱ傍観者（後書き）

先生：藍Ⅱイディーア

呼び名：藍、先生、イディーア

参考：葵達が無人島でサバイバルしてる時に椅子と一心同体になるべく鎖でグルグル巻きになっていた、結構必死に自分の名前は藍と名乗った青年。異国を旅した事があるらしく、様々なジャンルの知識が豊富。髪の色や仕草や言葉等が葵そっくりな変なところで馬鹿な、新任となった先生で、今はフェルディーン宅に居候中

ヒロイン：ルナリス

呼び名：ルナ、ルナリス

参考：サバイバルの帰りの船で、触手く鳥へと変形したその物体の正体……見た目はロリ系な少女だが、葵と同じ年。詳しいことは分かっておらず、普段はジャンス先生宅でお留守番

王子様：アスベルⅡロワードⅡウイングス

呼び名：アスベル、王子様、鴻苑兄貴

参考：葵達が住む島国『ウイダス』の王様の息子。第一王子で、将来は王になる為に幼少の頃から病弱にも関わらず努力し続けてきた人。なのに何故か今は腹違いの弟である鴻苑に王の座を譲ると言っていて聞かない、鴻苑から言わせれば理解不能な人物、葵と知り合い

ヒロイン：比奈乃ひなの 涼じょう

呼び名：涼、比奈

参考：眼鏡を掛けていて口調御嬢様、雰囲気清楚だが豊乳で着ている服は何時も少しはだけてるといった訳の分からないギャップを持った、楓の双子の姉。少し、いや大幅に常識からずれる時がある



公式? : 馬鹿は空気感染していく

葵様が馬鹿になってしまった

……ワザワザ再確認する必要があったかどうかは別として、だ  
兎に角、葵様が激しく馬鹿になってしまった  
何故かと言つと、

「よし、おまえらアレだ!! 今日祭りしようぜ!!」

「……葵、仮に今から準備するとして、間に合うと思っているのか  
?」

「そ、そつで御座るよ……た、例え、万が一間に合ってもシヨボイ  
祭りにしかならないで御座る」

「ああ? んー……じゃ、明日! 明日の夕方辺りからさ、祭りしよう  
祭り!!」

先ほどからずつとあの調子だ

触発されるような何かがあった訳でも無いのに祭り祭り……

「……祭り馬鹿にまでなってしまうて、馬鹿の頂点でも極めるつも  
りですか」

「お、祭り馬鹿って何かいいな!! いや、これぞ男!! って感じだ  
ぜ!!」

(ああ、馬鹿に馬鹿と言つても聞かないのと同じ原理でしたか……)  
(悲しいことに) 慣れてきたとはいえ、いきなりの提案に少し啞然  
としている皆様にも関わらず、一人で鼻歌を歌いながら、

「よし、ちつこい国だし、皆巻き込んで祭りしちまおう!!」

とんでも無い事を笑って告げた

一瞬停止し、下校途中の為鞆しかなかったので、

「寝言は寝てから言ってください」

「おぶつ?!」

一回転しながら、遠心力を利用して後頭部へ鞆を直撃させた

(…………ふむ、今日も絶好調ですね)

地面に無様に転がった葵様の背に足を置き、せめて話だけは聞く体勢を取る

「…………それで?何故、祭りをしたいのですか?」

「せ、セイレン痛えっ…………ってか、この体勢ってアレだな!!上を見上げたらセイレンのスカートの中身、が、あぐうッ!!」

破廉恥な事を口走りながら上を見上げようとしたので、体重を掛けて背を踏むと少し大人しくなる

取り合えず勢いで後三発程踏むと、皆様からのストップを受けたので最初の体勢でちゃんと喋るよう促すと、

「いててっ…………えーと、それはなあ…………何てかさ、最近この国微妙じゃん?だからさ、景気付けにパーッとしてえなあって!!」

「…………うわ、オレ馬鹿の口から割りと真面目な言葉出てきてビックリな…………」

「う、うん…………ね、熱でもあるんですかねえ…………?」

恐る恐る…………と言った感じで発言する皆に葵様が抗議しようとするので、取り合えず踏み潰しておく

(地面に這いつくばるのがいやに似合う人ですね……)  
ふと、そんな事を思ったがまだ起き上がるうともがいてきたので再度踏み、大人しくさせる

「確かに、年中冬のような所が多々ありますからね……」

「……こ、こころは割と活気があるんだけど、ね……」

「王宮が、見える位置にありますものね」

王宮、と聞いて微かに鴻苑様の顔色が曇る

何か嫌な思い出でもあったのだろうか……

少しそう思うが、三度葵様が動くのもう踏むのも疲れたので退くと、

「橋の辺りでさあ、花火しようぜ!!水にこつ、二重に花火映って綺麗だと思うだよな!!」

ニコニコと笑って言う彼に暫し沈黙し、

「ああ、またマトモな意見を葵様が……明日辺り、雨でも降るのでしょうか……」

「いや、いつその事雪でも降るのでは……」

「いやいや、霰とか……」

「雹とか……」

しばらく彼だけを置いて皆で話し合っていると、

「あ、藍!!丁度いい所に来たなあ!!」

「ん?……え、何、お前等何やってんの?」

少し困惑気味な藍様がやって来た

何気に長い髪を束ねている紐のようなものが蝶々結びになっているのは……

「ご愁傷様です」

「え、皆して何？！てか、蝶々結び見ただけで分かるってあの校長やっぱり何時もこんなことしてるのか……」

少し遠い目をし出した藍様に皆で合掌した後、

「なあ、藍藍！！あのさ、広域に声届ける術的な何かってねえのか？」

またもや不可解な事を言い出す葵様に首を傾げる

その間にも「あるなら早く早く！！」と急かす葵様に藍様は苦笑しながらアイコンを起動させた  
そして、

『あーあー！！！皆聞こえるか、聞こえてるかあつ？！』

どういう原理かは知らないが、葵様の声が国中に響き渡る

「ど、どういった技で御座るかこれは？！」

「わ、分からん……だが、一つ心配なのは」

「国中に聞こえてる中でドレウイーが何を言い出すか……ってとこよね？！ふふ、ドキドキするのは素敵ね……」

途中から逸れたアイシス様を皆でスルーし、ふと……

「こづいづいのはフェルディーン様がやった方が宜しいのでは？」

そんな事を思った

『おまえら聞いてるか？聞いてるよな、うん、今日はさ、お知らせ  
ーって奴があるんだよなあ！！』

自宅に帰っているにも関わらず、すぐ其処に居るかのような音量で  
聞こえる葵の声に動きが止まった

アイツはアイコンやら術やら全然習得していない

オマケに、こんな技を持つている生徒もない……なら、

(藍……何考えて……ってか、オレにこんな能力あるって報告して  
ないじゃないか！！)

後で絞めるっ……悪態をつきつつ、大人しく葵の声を聞いているル  
ナと一緒に耳を澄ませる

『あのさあのさ！！明日の夕方辺りからさ、比奈乃神社で祭りすっ  
からー！！』

「ちよ、そんな事聞いてないですよー！！」

「た、確かに……葵さん、そういうのはその、事前に言って欲しか  
ったですわ、心の準備とか有りますし……」

(っって、何故に涼は其処で顔を赤くしてるんですかあ？！)

自分も相当ズレているとは知っているがそれ以上にズレている姉に  
心の中で叫び、急いで此れを聞いているであろうお父様に連絡する  
すと、

「ああ、一週間ほど前から葵クンから聞いておるよ、準備万全だわ

い

と、返ってきた

(……目の前で楽しみに喋っている葵クンをこんなにも!!弓で撃ちたい衝動に駆られたのは久しぶりですねえ……)

思わず弓を構えかけると、やんわりと苦笑している鴻苑クンに止められた

彼は、私がこの笑みに弱いのを知っているのか知らないのか……私も苦笑を返し、弓を仕舞った

『んでさー、屋台とか色々並べてさ、後花火!!暗くなってから花火しようぜ!!ほら、神社の近くって川流れてんじゃん?綺麗だと思っただよなあ!!』

また皆の度肝を抜くようなサプライズを容易してた葵クンが嬉しげに誘う姿に、私も何だかワクワクしてきた

(花火なんて……とっても、久しぶりだもんね)

前に花火が夜空を彩ったのは何時だったろうか

思い出せない程に幼い頃だったような気が……セイレンやエリスちゃん、ウルル君が居なかった頃、皆で見たのが最後だったと記憶している

(ま、また……皆で見れるかな)

あの頃と違って増えた友人達と、皆で一緒に……

『つーわけで明日!!明日祭りな!!来いよおまえら?!てか、なんだあ?来てください?』



(おいおい、慣れない敬語なんて使うなよ)  
クスクスと笑うと、ルナが首を傾げてくる

「ああ、葵が慣れないお願いなんてしてっから、可笑しくってな？」  
膝に乗せて笑うと、ルナも分かったのか……大きな黒い瞳を細めて笑った

『だー！！もうめんどいなあおい！！あれだ、おまえらよく聞けよ！！』

大きく、息を吸うような音が聞こえ、

『俺が明日の夜、デツケエ夢見させてやる！！おまえ等ぜってえ馬鹿だなあコイツって思うだろうぜ！！だから……』

声だけでも関わらず、得意げな顔で笑う葵の姿が見えたような気がした

相変わらず馬鹿なまま全然変わってないなあ、と……皮肉とも賞賛とも取れる笑みが自然と浮かび、

(ああ、アイツなら続きは絶対こう言うな)

我こそは真の馬鹿だと思っ馬鹿は来やがれっ……！！

呟いた言葉と聞こえた言葉が全く一緒で……  
オレも相変わらず馬鹿だなあ、と目を閉じそして思うのは、

「ったく……オレが心配するよりもずっとアイツは強くて、」

一息、そしてニイツと

「馬鹿だったんだなあ!!」

声を上げて、笑った

\* \* \*

「あー、すつきりしたあ!!サンキユ、藍!!」と、礼を言う大馬鹿……もとい、葵はオレ達を見て笑う

(ああ……ほんとにコイツは、)

「馬鹿だなあ……」

見事に皆でハモリ、それに抗議する馬鹿を笑いながらあしらった  
ああ、オレ達は何だかんだでこの馬鹿に救われているのかもしれない  
戦闘能力、知能もほぼ皆無……だけど、  
今まで見てきた誰よりも馬鹿で放っておけない……どうしようも無い、友人  
(っはは……コイツの馬鹿は伝染するんさねえ)  
だって、ほら

「おいおいおいおい！！皆、俺見て笑い過ぎだぜこの野郎っ！！！」

皆が皆、笑ってる

コイツと、皆と……誰かと居ることがこんなにも楽しくて仕方がない  
そう思えるのはきっと、時代遅れの理想を追い求め続ける無能な馬  
鹿のせいだから

追いかけてこのような無駄でしかない……だけど、楽しい時間を少  
し過ごして

ふと、

「そついや葵……とうさ……王に許可は取ったんさ？」

行事を行う時は必ず居る王の証明書……

それを持っているか疑問に思い確認すると葵はニッコリと、

「あ？んなもん……取ってねえよ？」

満面の笑みで親指を立てみせ……笑った

直後、

「っ馬鹿かお前はあああっつ！！！！！」

皆の蹴りが、綺麗に決まった

問?・伸ばされた手を取る方法、そしてこの世界の病気とは。

「おおー!! デッケエなあ!!」

長い階段や廊下を歩いたびに葵様が大きな声を出し、キョロキョロと辺りを見渡す

(田舎者丸出しで、ありますね……)

ぼんやりとそんな事を思ったが、頭を占めるのは別の事

(……皆様は、知っておられたのですね……)

鴻苑様が王の子だという事を

八割方、鴻苑様がこの国の未来の王となる事を……

藍様はこの間来たばかりなので仕方ないが、まるで自分だけ除け者のようだと感じた

独りぼっちになったかのようなその感覚に苛まれ……何時の間にか歩みが遅くなっていたのか、

「セイレン?」

随分先に行っていた葵様が、一人で私の隣まで引き返して来た

「……葵様」

「うん?」

どうしてだろうか?

こんなこと思うなんて自分らしく無い……ましてや、思いを声に出すなど……

「私は……皆様にとって、信用出来ない……者でしょうか……」

何故か、声が震えた

そして何故か……

「ばーっか」

「……あおい、様……?」

優しく頭を撫でる彼の手が、温かいと感じた

何時もと違い、真剣でいて……そして優しい笑みを浮かべ葵様は、

「おまえは俺等の仲間だよ、セイレン」

力強く、言い切った

そのまま私の手を取り、指を絡め……苦笑する

「ほら、見てみるよセイレン？俺が不安がってるおまえに何かしねえか、皆心配してるぜ？」

顔を上げて見えたのは優しく微笑む皆の姿

そして、

「馬鹿を放っておくと貴殿が危ないからな、セイレン……」

「そうよ、ドレウィーは狼紳士なんだから警戒しなさいっ！」

「そ、そういう訳じゃないと思うけど……セイレン、皆、友達だよ？」

「そうですね、セイレンは友達ですう！！だから、セイレンが危ない時はブスッと葵クンをやっつけちゃいますから！」

「ええ、楓の弓は凄いですのよ？」

「……二人とも、なあんか話ずれて来てるさよ？」

「確かに……相変わらずと言えば相変わらずで御座るが」

皆が、手を差し伸べてくれる

「……差し伸べてくれる手を握る方法は分かるだろう、セイレン？」

慈愛に満ちたような藍様の声に一つ頷き、

私は一步踏み出す

「こちらも手を、伸ばせば……届きます」

この手を取ってくれたのは誰が一番初めだったのだろう

それすらも分からないくらいに皆が……受け止めてくれた

「ほらな、俺の言った通りじゃん」

おまえは俺等の仲間だよ、セイレン

だから何も遠慮しなくていい

仲間って、そういうもんだろ？

そう笑う彼に頷いて、微笑みを浮かべる『仲間』に囲まれて……  
一つ気付いた

(そう、だったのですね……この世界は、今……)

私のように病気なのだ

踏み出す事を恐れ、かといって置いて行かれることを何よりも恐れる

だから、

(だから無理に進んで、無理に立ち止まって)  
笑えない、何が本当なのか分からない

自分は一体何処に居る？

そんな闇の……何も無い、虚無に飲み込まれ戻れなくなる  
何も、全て無くなってしまふ  
そんな悲しく寂しい……病気

「……葵様……」

「うん？」

彼の左手を握り、小さく

「教えて下さい、様々な事を……貴方のことも、貴方が見せようとする……」

大きな大きなユメの事も……

ゆっくり、彼が頷き……

その顔にあるのは、

「もちろんだぜ、セイレン」

強くて優しく……守りたいと思える、大好きな笑顔

## 公式？：馬鹿が誘うは人の笑み

島の中央に位置する王宮……

其処の最上階にあるのは王の謁見の間

そして、今オレ達の目の前には其処に繋がる大きな扉がある

(……此処まで来て、手が震えるとか……オレはどんだけ臆病な  
さねえ……)

別に父が怖い訳でも何でもない

それなのに、いざ対面……と、なると中々踏ん切りが付かない

逃げたい、そう思う心に溜息を吐いた

その時、

「なんだあ鴻苑？武者震いか？」

からかうような葵の声が聞こえて、

(ああ、コイツは何時もどうして……)

「大丈夫だ鴻苑、俺等の無敵計画はワクワクするまでもなく……結  
果なんざ、目に見えてんだ！」

どうして何時も、こんなにも馬鹿なんだ

目をキラキラと輝かせる葵に、苦笑を一つ返して

「そうだな、無敵さね……」

黒い大きな扉を開けた

そして王の、父の目の前に跪き



「お久しぶりで御座います王……突然の参上をお許し下さり、真に有り難く存じます」

10年来の言葉を掛けた

小さく、面を上げよ鴻苑……そう聞こえて、ふと……

(あれ、アイツ等は……)

振り返ると、何故か扉の向こうで隠れるように此方を見ていた

(なっ……お、オレに全部任すつもりか?!)

目が合うと、全員に親指を立てられた

後で見てろよ……そう念じながら立ち上がると何時の間にか目の前に居て、

ガシリツと……肩を掴まれ、

「鴻苑!!大きくなったのだな、うむ、母さんによく似て……立派になりおったなあ!!」

先ほどまでの威厳は何処へやら、ニコニコと笑いバシバシと背中を叩いてくる

(っ、10年経ったのに何も変わってないさ……)

一人だけ時を止めていたのではないか、そう思える程に変わらない父に苦笑いしか……出てこなかった

\* \* \*

「……なるほど、この国の王は親馬鹿に御座いましたか」

「ちょ、しーっ……!」

隣で凄まじい事を言い出すセイレン殿に注意を促すと、大人しく黙ってくれた

しかし最近思うのだが、セイレン殿のこの空気やその他諸々を全く無視した発言などは、

(……葵殿と一緒に居るせいで御座ろうか……)

そう思わずには居られない

感情が面に出てきたのは大いに良い事だが、悪い方にも影響が出てきている気がしてならない

これは要するに、

「突っ込みが大変で御座るなあ……」

「……？」

首を傾げる者5人……他は、

言わずとも分かるだろうが苦笑しかしていない

そして視線の先……

にこやかに会話をしている王に少し困っているような鴻苑殿が、とうとう本題を切り出した

「……王、オレのお願いを聞いて下さいますか？」

「むむ、鴻苑からのお願いか……わははは！10年ぶりじゃのお！」

「！」

軽く流されかけ、思い出話が勃発しそうである

(が、頑張るで御座るよ鴻苑殿!!)

思わずこっちが拳を握っていると、

「んでな、セイレン……この国は、王様だけ何人でも側室ルール有りなんだよ羨ましい事に」

「なるほど、それでアスベル様と鴻苑様は姓が途轍もなく違い過ぎるというのに、腹違いの兄弟ということなのでしょうね」

「あれえ、セイレン俺の後半の台詞無視？」

「複数の相手が居なければ意味の無いことだと判断しましたので……それより、どうして鴻苑様は王に躊躇いのようなものを持っているのでしょうか？」

「んー、そりゃあ親馬鹿過ぎて困ってたんだ」

「ああなるほど、過保護過ぎる親というのは厄介だと聞きます、逆もまた然りだそうですが」

「お？セイレンよく知ってたんなあ……あれだなあ、セイレンいい母さんになれるな……！」

「……読んだことのある本では葵様、それはプロポーズに繋がるであろうシチュエーションを作れる言葉だそうですね？」

「え、俺そのつもりだけど？」

「……今は、聞かなかったことにおきます」

「えええ？！ちょ、セイレン待ってって『今は』聞かないって何時かまた言ったら聞いてくれんの?!」

また（主に馬鹿約一名が）騒ぎ出した

（な、なんで今このタイミングで色々と教えてるで御座るか葵殿？

！しかも後半ずれ過ぎてノロケみたく聞こえるで御座るよ……！）

背後の会話に気取られていたのは自分だけではないらしく、

兄者と楓殿、藍殿を除く皆が集中していた

（分かり易過ぎるで御座るなあ……）

あまり人の事は言えないが、そんなことを思ったと、

「……鴻苑、お主王宮に戻らんか？」

急に、王のそんな声が聞こえた

慌てて視線を戻すと真剣な王の顔と

「何度も、言った筈です……オレは、東 鴻苑です……ロバート家とは、関係ありません……」

苦しそうな鴻苑殿の顔が見えた

（ああ、少し不味いで御座る……）

王は鴻苑殿の返事を予測していた筈……なのにこのタイミングで切り出した、それはつまり、

「そうか、残念じゃのう……お主が王宮に戻れば、否定された提案も通る可能性が出ように、のう？」

此方の提案を自分の要求を叶える交渉のカードにするつもりだ

王が一旦提案を却下すれば、もう二度とその提案が通ることは無いのを利用して……

つまりは早い話が

脅し……

意図が分かったのか微かに表情を曇らせ俯く鴻苑殿に、王は口を開き言葉を発した

その言葉は、

「おいおいオッサン、鴻苑脅して苛めてんじゃねえよ、ばーっか」

あまりにもこの場に、王に向かうには不釣り合い過ぎる声に掻き消された

そして声を発した彼は、堂々と王の前まで歩いていく

そのまま王を睨み、

「ばーっか!!」

もう一度叫ぶように言い、不敵に笑った

「葵……お、お前っ」

「っば、馬鹿かお前!!」

「あでっ?!」

たつぷりと5秒は過ぎたであろう後に、

一番早く硬直の解けた鴻苑殿と兄者が規格外の馬鹿をしでかした葵殿を殴った

その音に我を取り戻した拙者達も慌てて出て行くと、

「ほう?ワシを馬鹿扱いとは……いい度胸じゃのお、小僧」

扉に隠れていたの知らないフリをされていてやったのに、と言いたげな表情をした後、笑う

正直に言おう、不味い

(や、や、ヤバイで御座るよちよつとちよつとちよつとお?!!)  
何してくれんだ馬鹿この阿呆!!と、皆で詰め寄ると不機嫌そうな顔で葵殿は、

「ああ?友達苛められて黙ってられる訳ねえだろ?てか、小僧じゃねえよ親馬鹿ヤロー!!」

思いつきり、王に指を差し言い放った

「ぎゃあああっつ?!?!」

「ちよ、お前一回黙れ!!」

「あ、あわわわっ……こ、これ反逆罪とかなりませんかねえ?!」  
「ど、どうなのかしら……もしなったら、死刑……うーん、困りますわ……」

「死刑、しけい、詩形!? ふふ、意味分らないけど何だかロマンティックね、素敵ッ!!」

「うーん、まあ、確かに……死刑なんて宣告されるのって久しぶりだしなあ……」

若干三名、全然困ってないような……  
つて、今ちよい発言可笑しな人が居た様な?!

「ちよ、あ、藍殿?! し、死刑宣告されたことあるで御座るか?!」  
「うん? ああ……昔何回かねえ……はは、とつても懐かしいなあ」

は、鼻歌オプシヨン付きそうな勢いで御座るよこの人!!  
拙者が思わず突っ込みの言葉さえ出なくなっている中、

「え、えと……結構皆、困ってないように見えるのは……な、何でかな……」

常識人の呟きで何とか皆暴走状態から我に返る

そんな拙者達をじっ……と見ていた王は、兄者に胸倉を掴まれたままの葵殿に目を向け、

「親馬鹿はまあ……認めるが、お主の方が馬鹿じゃとて」

(もつともなことを言っておられるで御座るよ!!)  
心の中で叫び、ふと、

案外王つて寛容な方で御座るな……そう思い、

何故そんな王がそうまでして鴻苑殿の王宮入りにこだわるのか……

それが気になった

「ああ？あー……まあ、それはいいや……それよりも、おまえ鴻苑困ってんの分かって言ってるだろー！」

「そうじゃな……じゃが、本人の為を思っ言っておるのじゃ、今この国は他国から脅されておる」

「……脅し？」

若干ハラハラしながら見ていると、王が気になる事を言った

まだ喋ろうとする葵殿を皆で抑え聞き返すと、王は静かに頷き……話し始めた

「この国は……お主等も知っておると思うが『風の翼』と呼ばれる種族と親交があり、ワシ等と同じ、命ある者として多くがこの国に住んでおった」

「『風の翼』……って、今は何か『生きる兵器』として戦争とかで暴れてるって種族ですよね？」

「え、えと……もう、大きな国とかが……その、『五年前の事件』で……」

「うむ、他の国の言葉を借りれば、『狩りつくされた』と言った所じゃろっ」

『生きる兵器』、『五年前の事件』……そして、『狩りつくされた』その言葉に、微かに葵殿の顔色が変わる  
心なしか、震えているようにも見えて……

(……葵、殿……?)

フェル殿が『風の翼』と間違われ片目を失った事件を思い出して怒っているのだろうか？

それとも……何故か、彼自身が何故か左腕を失い瀕死の状態で倒れていた時の事を思い出して？

そういえば、だ

その二つが起こったのはちょうど五年前だった

(偶然……で、御座るのか……?)

考えながら、話を続けている王の声にもう一度耳を傾ける

「各地で戦争はまだ起きとらん……じゃが、近い内に起こる筈……ならば、『生きる兵器』は今の内に集めておけば有利と考える国が多くなるのは当然じゃろう、壊れれば使えんのじゃから」

其処まで言い、俯いて黙っている鴻苑殿を、

ただ黙って王を見つめる葵殿を見て問いかけるように、言う

「そして、この国は島国故に何処にも属さぬ中立国、オマケに『風の翼』が大勢住んでおった国じゃ……分かるじゃろう?」

王の言う通りだ……その先は言われなくても分かる

そして考えている事が起こった時、脅威はこの国を統括している王族並びに、

「これは鴻苑だけでは無く、お主等を守る処置でもあるのじゃ」

拙者達、王族と友好のある一般人にまで及ぶ

だから身を引け……そう言ったことだろう

王の言うことは正しい、だから、誰も何も喋らない  
その時、

「あのさあ……」

「なんじゃ?」



ただ静かに、葵殿が口を開いた

「だから何で、最初から負けーみてえな、もう打つ手なし的な感じになんの？」

王から返ってきた答えは、沈黙だった

「だからさあ、やる前に結果見えてます、だからもうダメです、的な理由で俺から友達引き離さねえでくれる？」

「お、おぬし……言ってる意味が分かっておるのか？」

王が、私達の前で初めてうるたえた

それはそうだろう、何故なら葵様が言っていることは

「たった一人の友の為に其処に居る全員、強いては学校全体、その全ての家族の命さえも危険に晒すと言うのか?!」

一つの、自分の命を差し出す事など容易く思える程の横暴過ぎる要求  
気付いて居るのか居ないのか、

「あー、取り合えず叫ぶなよ、血圧上がるぜ?」

真面目な顔を崩し、何時ものようにへらへらと笑う

(……短い真面目モードでしたね)

また何か怒鳴る王に、軽く返す葵様……正直収拾がつかなくなりそうなので、

（取り合えず叩けばまたスイッチ入るでしょうか？）

そう一抹の疑問を胸に、蹴り飛ばした

あうぐつ！？と、いい声で地面に伏してくれたので少しスッキリしたふと、視線を感じ顔を上げると親指を立ててニコニコしている藍様と目が合ったので私も親指を……

「ちょ、いい仕事した的な顔で親指立ててる場合じゃないだろう？！」

「え、ええええと、だ、大丈夫、葵クンツ……！！！」

「ふ……ふふふ、いい声ねドレウィー！！やられ役にピッタリよ！！！」

「き、綺麗なフォームでしたわ……」

「りよ、涼……喰いつく所そこなんですなぁ……」

「ななな、何だか今日一日色んな事があり過ぎてついていけないで御座る……」

「あ、ああ……オレもそう思うさ……」

すっかり雰囲気呑まれていた皆様が少しだが、ペースを取り戻すこれで例え、葵様がふざけモードでも何とかかなるだろう……そう思い、彼を助け起こすと、

「この国、てか世界はさ、今病気なんだよ」

言い放つように告げ、真剣な顔をする

どうやら真面目スイッチが上手く入ったようだ

「病気……？」

「ああ、病気、臆病な病気だ……初めからダメだ、これしか無いん

だ、失敗だ無理だ後悔しか残らねえって……失っただけだって決め付けてる馬鹿じゃなく、臆病愚か者病にかかっている」

「最善を見極めて、何が悪い……？」

「あー……俺らな、授業で習ったんだよなあ！」

王は急にニコニコ笑う葵様に理解が出来ない、と言いたげな顔をする（……でした、ね……『最善』……その意味を教えてくださいのは、）私達の視線を受け止めた新任教師は、ニコリ笑い頷く  
そして葵様は、

「最初から行き着く場所決め付けるから、『最善』も『不可能』なんてものも存在すんだよ……だから諦めるしかねえ……あのさあ、」

あの時の藍様のように、  
圧倒的な自信という名の自信を持って

「デッケエ夢、イメージしてみ？んで馬鹿みてえなくらい信じてみるよ、そしたら……失敗なんて後悔なんて、不可能なんてもん存在しねえよ、だって」

不敵な笑みと共に、  
彼だけが言えるセリフを口にする

「何かあっても、信じ続ける前には終わりなんて、んなマイナスなもんなんて存在しねえんだしさあ……！」

そして最後に……  
と前置きを置いて大きく息を吸い、

「俺は最初っから何も信じねえような奴と友達苛める奴なんてダ

イツキライだ!!」

噛み付くように、言い切った

どうだこの野郎!!と、踏ん返り返るかのようなその態度と言葉に  
王は……

「っ……せ、世界最大級の馬鹿じゃの、お主っ……く、くくくっ……  
…ははっ、わはははっっ!!!!」

大声を上げて、笑い始めた

その声に釣られたのか葵様も笑い始め、謁見の間に忍び笑いのよう  
な声が溢れ出しやがて……

何処でどうなったのか分からないが、王宮中に笑い声が響いた

そして、

「いいじゃろう、お主の提案、受けようぞ!」

快く引き受けてくれた王に礼を言い残し、王宮を後にした

その帰り道

皆色々あったが、

そもそも何故、ただ花火の許可を貰いに行っただけなのにこんな事  
になったのだろうか……そう苦笑し合いながら皆自分の家へと帰っ  
ていった

そして、「やだ、もうこんな時間?!見たい映像録画してないわよ  
?!いやんっ!!」などと言いながらアイシス様が先に帰り……葵  
様と二人きりになった

しばらく世間話のようなものを、葵様が話しかけてきていたが、

「あのさ、セイレン」

真面目な声で話しかけてきた

「……なんでしょう？」

「ん、なんてかさ……明日な？明日、俺……」

少し照れたように視線を迷わせた後、  
大きく息を吸い

「俺、デツケエ夢語るうと思うんだ」

真っ直ぐ、私を見つめて言った  
だから私は、

「葵様が願うなら、きっと……途轍もなく馬鹿で、どうしようもな  
くて……」

「ちょ、セイレン！！キツ過ぎだぜその台詞！！なんか、斜め45  
度じゃなくて90度くらいから掘り下げてきてる感じだぜ！！」

「葵様はこういうのが好きでしょう」

「いや、キライじゃねえけど……って、け、決定事項かよ?!」

それ以上に、素晴らしい夢でしょうね……と、それを抜かして告げ  
……

苦笑しながら騒ぐ彼と歩き、何時ものように家路に着いた

「明日が、少しだけ……楽しみかもしれません」

小さく呟いた言葉は彼に届ける気はないから、  
自分の胸にだけ仕舞って……静かに、眠りについた

## 祭り＋不穏な空気＝開始の合図

空が薄っすらと暗くなってきた頃

比奈乃神社周辺に並んでいる屋台が賑わい始める  
皆口々に言うのは、

「ああ、あの馬鹿本当にやる馬鹿だったんだなあ」

そんなこと

だが皆楽しげに、嬉しげに、久方の祭りに笑っていた

「祭りが行われるのは何時以来だろう」

「王妃が亡くなってからずっと……この国の王は元気が無かったからなあ」

「ああ、今日はなんていい日だろう」

「そういえば、葵の馬鹿が今日何か大それたこと言うらしいな」

「そうだな、きつとまた馬鹿なことだろうけど……」

楽しみだなあ……

声を合わせてそう言って、

彼を知る皆は声を上げて笑い出した

「……すっかり期待の星って感じだなあ、葵」

屋台から少し離れた橋の上で、俺達は女性陣を待ちながら笑いながら話している屋台の皆を見ていた

そして、橋にもたれかかっている俺に笑いかけながら藍がそんな事を言うから、

「あー、何かドキドキしてきたぜ……」

余計に緊張してきた

らしくは無いが、俺は今マジ本気、マジにマジの大マジでビビッてる（まあ……あれだなあ、大勢の前でなんて話すことあんましねえし）そもそも俺馬鹿だし？

大見得切った後で怯えるのもある意味馬鹿らしいのかもしれないそんな事を思っ居ると隣に居た鴻苑と唯が、

「おいおい、どっちかというとかクガクなんさろ？」

「……ブルブル、にも見えるがな」

なんて笑えないことを言ってきた

だから、「うるせえ公園にトバッチリ!!」と返すと背中をしばかれた

セイレンよりは緩い力だが、痛かった

「ははは、あんまし苛めてやるなよ?……大勢の前って、始めは割と緊張するんだし」

見ていた藍が、クスクスと笑ってそんな事を言う

ふと、藍もそんな時期があったのか……と思い、気になったことを聞いてみた

「そついや藍ってさあ、若いのに割と色々経験してんよなあ……てか、ぶつちやけ藍幾つ?」

「え、あ?……あー……俺は……22くらい?」

「つて、オレ等に聞くんじゃないさ……」

「あれかあ？年数えるの飽きたくらいの年とかか……？」

「あ……割とそうかもなあー」

ニコニコとそう言う藍に、一言断ってから男三人で円陣を組む

むさい絵に見えなくは……ないはずだ、だって俺等って割と細身だし？

「オレ思っただけさ……実は藍って相当年いつてんじゃないさねえ？」

「確かに、各国を渡ったと言っていてその知識も本物……しかも、能力も豊富過ぎるしな……」

「んーと、取り合えずあれだな、10歳以上来ねえと国から外出れねえからなあ……それからだとして、一国分の力と知識吸収すんには……」

「少なくとも見積もっても10年くらいは要と思うさ……」

「……ちょ、ちょっと待て、世界にはなんだ……この国入れて、大まかに分けると4つの国に属しているはず……」

「……え、50以上?!」

三人で振り返る

藍はどうやら今日の花火のデザインでも考えているのか、アイコンを呼び出しパチパチとやっていた

故に俺達は円陣に戻る

「ちょ、50に見えなくねえ？」

「……もし50代なら、究極の若作りということになるさねえ」

「世の女性が羨むだろうな……」

「確かに……てか、そうならあれか？藍は俺等のお爺ちゃん的な感じになの？」



「何処をどう間違ったか知らんが、若過ぎるだろ」

「てか、逆にあんな爺様居たら居たで怖いさ」

ふと、感嘆するような声が聞こえ三人で顔を上げると藍がまだ真剣にパチパチやっついていて、

それに気付いたらしい人達が藍周辺に集まり手を叩いていた

ちなみに藍は集まっている人に気付いておらず、無心状態である

「って、おいおい藍!!」

「……右の炎はもう少し赤く、逆に左はもう少し薄い青使えば……」

どうやら声は聞こえていないらしく、次々と小さく火の花を咲かせていく

正直凄い、本当に凄いのだが……

「藍!!おいこら!!」

「……後高度2、3、密度は1.25上げて……」

「あーおーっつ!!……!!」

「色素はやはりもう少しこつ……ならもう少しイコンで光を展開してバックアップして」

(ああ、こりゃあダメだ)

半分、いや、完全にあつち側に行っている

ブツブツブツブツ……と、喋り続けながら模索している姿に何だかあれなので……

「そっとしておこつ」という結論に落ち着き、三人で溜息を吐いている、と

「あ……みなさんも、お祭り見にきていたのですね」

「あ、皆、今晚は」

ふいに、声が掛けられた  
振り返ると見えたのは、浴衣を着て車椅子に座っている小さな女の子と、それを押す何ら特徴の無い青年

「エリスちゃん！……と、モブ男」

「ひ、酷いよ相変わらず！！」

涙目で抗議してくるモブ男……もといウルルーを無視し、エリスちゃんに駆け寄るとニコニコ笑みを返してくれた

（あー……マジで癒されるぜ……）

最近、何だか癒しが足りない気がして……

いや、フェルちゃんという癒しはあるのだが、それを掻き消す程の最近の女性陣の行動が……其処まで考えて背筋がゾクゾクして振り返ると、

「ほう？ 葵様は幼女を誑かすようなお人でしたか」

思ったとおり、浴衣を着ている……少し不機嫌そうなセイレンが居た（って、俺全然誑かしてねえ……って、あれえ？）

何時もは不機嫌そうな顔をしないセイレンが、微かにだが不機嫌そう  
うだ

それってもしや……

「セイレン、もしかして嫉妬した？」

一瞬の沈黙の後、

こめかみ辺りに凄まじい衝撃を感じリアルに吹っ飛んだ  
ふと思ったのは……

（あ、セイレン否定はしなかったなあ）

そんな事で、ほんの少し幸せな気分になった……所で、地面に叩きつけられ息が詰まる

最近これも慣れてきたが、痛いもんは痛い  
むせながらも何とか立ち上がろうとするが、四つんばいになった所で踏まれ撃沈

「いだっ?!」

「あ、すみません、今日は下駄を履いていました」

(謝るとこ其処かよ?!)

取り合えず満足したのか退いてくれたので起き上がると、皆揃っていた

おまけにどうやら藍も意識が現実世界に戻ってきたらしく、あまりの人だかりに照れたように一礼し、拍手喝采を浴びる始末である

「ついてて、と……皆揃ったのか……んじゃ、花火………てか、俺のすばらしーっ!! 演説まで、屋台回るかあ!!」

俺の言葉に一樣に「素晴らしいかは別として、」と手厳しい事を言いながらも皆賛同してくれた

そして、

賑わってきた屋台で射的をしたり食べ物を買ったり……

途中、ルナとジャンス先生やライム校長と会って一悶着あったり……  
…したのだが、

「……あれえ?……皆何処だよ?」

辺りを見渡すが、さつきまで一緒に歩いていた皆が居ない  
何時の間にか俺一人になっていた

「まいったなあ……」

( いい年して俺迷子かよ……うつわ、俺だっせえ!! )  
だー!! と、頭を思いつきり掻き……少し落ち着いたので、

「取り合えず……誰かに皆見てねえか聞かねえと」

そして、少し多過ぎやしないか……そう思う程の人ごみを見渡して  
気付いた

この場所には何故か屋台が無い  
それにも関わらず人が多い、しかも

「……え……お、おいちょっと待てよ……」

この国は小さい  
とてつもなく小さく……故に、殆どの顔は見た事がある筈だ  
なのに、

「見たことねえぞ……誰も……?」

面影一つ取っても該当する国の住民は居ない  
訳が分からない、何が起きている?  
微かに、頭の隅で警鐘が鳴り……

「あ、ちょっといいかな君……」

知らない声と共に、左肩に誰かの手が触れた瞬間、

「って、ちっ……おい待て!!」

俺は弾かれたように森の中に駆け込んだ

何処に逃げるべきかも分からないが、兎に角走った

すぐに息が上がり、苦しくなるが恐怖に背を押されるように足を動かした

ただただ、知らない何かが迫ってきているようで怖い

(な、何なんだよっ……誰だよアイツ等っ、何で知らない奴等が一杯でっ、追いかけてっ……)

分からない、ただそれが一番恐ろしかった

「はあっ……っ、はあ……」

撒いたのかどうだ分からないが、足音も声も聞こえなくなった  
近くの木に手をつき、肩で息をしながらぼんやりと……

(ああ、もうすぐであれじゃん……? 重大発表って奴……の時間だぜ……)

早く戻らないと、皆怒ってる絶対……きっと蹴られちまうなあ……  
無理やりにも何時もどおりを思い……大きく息を吸い、走り出そうとした

その時、

「みーつけた」

耳元で笑みを含んだそんな言葉が聞こえ、

「あ、っ?!」

振り向いた直後、頭に激痛が走る

咄嗟に手で頭を抑え無理やり目を開けるが……次に来た背への衝撃で全てが一瞬にして吹っ飛ぶ

全てが止まったかのような錯覚を感じ、無抵抗な身体はそのまま沈んでいく

冷たい何かが顔に当たって、目の前に地面が見えて……

そこでやっと、自分は倒れたのだと気付いた

それと同時に呼吸を忘れていた肺が思い出したかのように機能を再開させ、無様に咽せ返り、

「お、まえ……は……っ」

小柄な身体、闇に浮かぶ翼のようなシルエット……それを認識した瞬間、

何かが振り上げられる……そして、キラリッと刃のような物が月明かりに光り……

そこで俺の意識は途切れた

「邪魔なのですよ、貴方は……ふふっ」

刃が振り下ろされ、闇夜に切り落とされた何かが高く舞い……

それは地面に落ちる前に、切り落とした彼女によって受け止められたそしてそれに小さく彼女は口付けを落とし、

「さて、これからが楽しい祭りの本番ですわよね？」

ただ黙って見ていた連れに合図を送り……

<始めまして御機嫌よう、弱小国の人間様達？>

楽しい祭りの開始を告げた

憎悪＋悲しき誇り＝無力は、罪

(……葵様は、何処に行ってしまったのでしょうか?)

少し目を離れた隙に、居なくなってしまった

ちゃんと待っているように言い聞かせたというのに……世話の焼ける人だ

そう思いながら……何故か、不安のようなものが心に広がり始めるふと、設置されている時計を見ると彼の素晴らしい(自称)演説の時間が近づいて来ていた

「……困りました」

そう、本当に困った……何故ならば、

「私は、この場所に詳しくないのですが……」

早い話が、迷子だ

(……こういう時くらい、カッコいい所を見せて欲しい所でしたが、)

あまり彼に期待するのも酷というものだろう

そう思い、取り合えずアイコンを起動させ皆に連絡を取る

<えええ、そっちも葵クンとはぐれたですかあ?!>

<オレ達もはぐれたんさよねえ……>

<同じく……しかし、アイツは一体何処へ行ったんだ?>

<もうすぐ演説の時間で御座るよね?>

<うん……でも、どうしてか葵クンと通信出来ないし……ど、どう



すればいいのかな>

<ヒーローは遅れてやって来るって言うけど……ドレウィー、何だかヒロインっぽいからねえ>

一瞬の沈黙

お姫様抱っこされたり、気絶率ナンバー1だったり、最弱だったり  
と……

思い当たる事が多々あるので無理やり思考の向こうに追いやると、

<ええと、取り合えず……葵さんも、ちゃんと付いてるものは付いてるので大丈夫だと思いますわ>

またもや一瞬の沈黙

そして、

<え、えええええと、そ、そろそろ時間が近づいてるから、皆で会場の方へ行かないで御座るか?!>

<あ、ああそうだな、もしかしたら先に行ってるかもしれない>

<そ、そうさねえ、じゃ、じゃあそこで皆落ち合つたよ>

<え、えと、りよ、了解>

無言の中に含まれていた「この話題には触れるな、話を終わらせよう」といった見解が一致し、

慌しく皆話を終わらせていった

少し疑問そうな涼様が最後に切り、取り合えず……

(会場に、行っておきますか……)

国全土が見渡せる程高い……傍から見たら崖の上のような場所が、  
会場だ

其処ならこの位置からも見える

そう思い、その会場に向かっていくと、

(あれは……藍様……?)

流れる人並みに逆らうように、悠然とした足取りで会場とは反対方向に歩いていく

「藍様……?」

声を掛けると、ビクリッ……と肩が跳ねた

(……様子が可笑的?)

そう思い近づくと、

「あ、セイレンか……びっくりしたよ」

やっと私を見つけたらしく安心したように微笑んだ

その様子に違和感を感じながらも気付かなかったフリをして会話を続ける

「藍様、演説が始まる時間が近づいてますが……もしかして、迷子でしたか?」

「ああ……実は、そうなんだよなあ……俺、早めに行けって言われてるんだけど……」

そして、会場とは反対方向を指差し、

「こっちであつた?」そんなことを言う

だから、少し強引に手を掴みぐいぐいと引っ張っていくことにした

「わ、ちょ、せ、セイレン俺こけるって!」

身長差が問題だというのは分かっているので、何となく少し……

背が低過ぎだと言われている気がする

「小さい方にあわせるのが大人ですよ」

私小さいのでまだ子供ですから

そう屁理屈を並べ、そのまま会場へと向かった

「あ！セイレン殿、藍殿、こっちで御座るよ！！」

国中の人間が集まっているだけに、凄まじい人だかりとなっている  
会場で着いてすぐ、柚李様が私達を見つけ手招きする

（さすが忍者、気配には聡いですね……その反面、全然忍べてはな  
いですが）

口に出したら彼女が泣くであろう事を思いながら行くと、やはり葵  
様は居ない

「葵様は、居ないですね」

「う、うん……葵くん、時間にはちゃんとしてるから……」

「……心配、ね」

アイシス様までもが口数少なく、嫌な予感が心の中に広がる  
どうしたものか……そう思い、ふと

（藍様なら、人探しの術を知っているのでは……？）

そう思い振り返る  
が、

「居ない……？」

藍様までもが、姿を消していた  
一体何が……そう思った直後、

<始めまして御機嫌よう、弱小国の人間様達？>

聞いたことのあるような声が、いきなり響いた  
そして、

「っ?!」

「な、でっかい……」

「まさか、アイコン?!」

<ええ、正解よ>

まるでこちらの声が聞こえているかのように、響く声は笑い……

<ハロー、皆様……ご機嫌は如何か？>

巨大なアイコンに映像が映る  
其処に映っていたのは、

「エリ、ス……?」

<ふふ、正解>

ニッコリと笑っているその女性は、クラスメイトのエリス様らしい  
ただ見慣れている姿と違う……幼かった筈の彼女は、今や私達より  
も年上に見える

呆然としている私達に、画面の向こうのエリス様は微笑み、

<改めまして自己紹介を……私は、エリス……ダイヤモンド帝国所属特殊部隊に属する兵士……エリス＝リアライ>

(ダイヤモンド……帝国……)

その国の名は、最近藍様の授業で頻繁に耳にしていた

『生きる兵器』のいち早い導入によって、資源や領地が乏しいにも関わらず今や……

その武力によって様々な国を制圧し、他の有数の国々と肩を並べるまでに成長した、戦争に特化した帝国

そんな帝国がこの国になんの為に……

「何のために、帝国がこんな国に来たのか……と、言いたげな表情ですわね？」

「っ?!」

直に聞こえた声に振り返ると、映像通りのエリスが其処に居た

優雅に、美しいとも思える足取りで王の……壇上に居る私達の目の前までやって来て、笑う

そして、

「王、ダイヤモンド帝国帝王代理、エリス＝リアライが告げる……」

冷たい瞳で告げたのは、

「隠している『羽有り』を差し出さない」

そんな、一言

(……『羽有り』?)

聞き覚えの無い言葉に違和感を覚えるが、そんな私達をお見通しだというように彼女は言った

「貴方達が『風の翼』と呼んで仲良しごっこをしている種族の事よ……さあ、差し出さない？」  
「……わざわざこの国に潜入したのはその為か……？」  
「もちろんですわ、『羽有り』を渴望する国は大勢ある……それを  
出し抜く為には、私はなんだってしてみせますわ……帝国に逆らう  
者は、殺す事も厭わない」

(……この人は、敵です)

正直、帝国や世界の事情等あまり知らない  
だけとただ一つ分かった

「エリス様、貴方は敵です……私達とは相容れません」

この人は敵だ

告げた私に賛同するように、皆が言う

「そうだ、お前は敵だ」

「拙者らは、皆が仲良く暮らせればいいと願っているだけで御座る」

「ええ、其処には種族など関係ないわ」

「そうですう！」

「う、うんっ、皆、同じ大事な命、持つてるもん」

「そうさ……それに、例えばオレ等がそれを是としよう……」

「ふふふ、是と出来ない馬鹿も居るのよ……」

国中の皆が頷く

彼をよく知る皆様が、例えば誰が『風の翼』であろうと断固拒否する  
とそう叫んだ

「……帝国の者よ……これが、我らの意思じゃ」

ただ黙って、王の言葉を聞いていたエリス様が微かに俯き、

そして

「ふふふつ……貴方達が是と出来ない馬鹿、と呼ぶのは……これの事かしら？」

そう言いながら彼女が私達の前に見せ付けるように取り出したのは、肩口から切り裂かれた左腕

(え……?)

それには見覚えがあつて、

それを確かに私達は何時も間近で見ている……息をするのも忘れる程に、思考が止まる

皆の時が、止まる

「全部持つてくるのはさすがに重くて……」

クスクスと笑うエリス様の声だけが、響き渡る

与えられた情報を、飲み込むことを脳が拒絶して……そして、

「本当にいい声で泣いてくれましたわよ？久しぶりにゾクゾクしましたわ」

彼の左腕に口付け妖艶に微笑む、彼女を前に何か音が立てて崩れた誰が、何が最初だったのか分からないだけで、

「お前はだけは絶対許さないっ！！」

心のままに叫んだ言葉はだけは同じだった

(許さないっ……よくも、よくもよくもよくもよくもっっ！！！！)  
浮かぶのは、何時も何処か抜けている彼の姿  
馬鹿をやっつて、我俣と思える理由で騒いで……怒って、

「お前だけはっ……！！」

何時も最高の笑顔で楽し気に幸せ気に、  
心の底から笑いかけてくれた、優しい優しい……

「許さないっ……許さない許さない許さないっ！！許してたまるかあっ……！！」

心が、頭が、ぐちゃぐちゃに混ざり合って分からなくなってくる  
ただ一つだけその中でぶれること無い感情があって、それが肥大し……行き着いた先は、

(憎いっ……)



たった一つ、それだけ

\*\*\*\*\*

(ただ怒りに身を任せて突撃してくるなど浅はかだ)

怒りなど、憎悪など……ただ殺気を垂れ流して動きを察知してくだ  
さい、と言ってるようなものだ

やはり、人間など所詮はこの程度……

命のやり取りも戦争も、理不尽という名の略奪も経験したことのな  
い人間など、

(私の足元にも及ばない)

さあ、

「身の程をしりなさい？」

弱小国が力ある強国に楯突くとどうなるかということ、  
手遅れになる前に身を持って教え込んであげましょう……

「あああああああつっ!!!!」

ああ、まるで獣みたいだ

真っ直ぐに向かってくるなど……折角、アイコンという力があるのに  
台無しだ

(まあ、仕方ないのかもしれないわね)

こうなると見越して挑発したのは自分

思い通りのこと

「『支配の扉』よ……風操りて吹き飛ばせ」

夢物語など、所詮キレイゴト……風の前の塵と同じ

「っ！」

「ぐっ！！」

本当に頭に血が上っていたのである……

向かってきていた面々、あっさりと吹き飛ばされ地面に叩きつけられた

なんて浅はかな……最早笑いしか出てこない

この程度の力で、誰かを救いたいなど反吐が出る

「もう終わり？大切な人を奪われて私が憎いんでしょう？」

「くっ、『享樂の扉よ』！！」

やはりまず立ったのは彼の姉か

だが、悲しいかな

「火の粉舞い踊り焼き尽くしなさい！！」

自らのアイコンの性能をまだ理解していない

（あらあら、それはそういう風に使っんじやないのよ）

「舞え、氷の花……無効化してしまいなさい」

炎と氷なら、氷を溶かしてしまえる炎の方が強い

故に、属性劣等のペナルティがこちらに付与される……だが、

「なっ……」

「扉はね、ただ開けるだけじゃ意味なんてないのよ？その先を見極めなければただの飾りでしかない」

全ての炎を氷が包み込み、ゆっくりと溶けていく

(……まあ、貴女は割と頑張ったわよ)

最愛の弟を失った憎しみの中で、冷静な判断が出来たのだから

「お返しは、3倍返しがいい女のセオリーよね……氷の礫よ、さあ……降りかかれ」

「っ!!」

「危ない!!」

全弾、アイシスに命中する筈だったが……

突如割り込んで来た彼の背に命中した為、どうやら不発だ  
だけど、面白い

「……あらジャンス先生、家族には優しいんですね？」

「ぐっ……」

「きよ、教師っ……」

強者が弱者を庇い、戦闘不能に陥る  
これだから人間は見ていて飽きない

「今の……待て!!貴様、人間じゃないな!!」

この国の王子……アスベルが、声を上げる

(……よく、分かったわね)

どうやら彼は『本物』を見た事があるようだ

ならば彼から聞くのが手っ取り早い……だがその前に、

「ええ、よくお分かりね」

此方には絶対に勝てないと、思い知らせておく必要がある  
小さく目を瞑り力を解放させる

「私は帝国所属の『生きる兵器』……」

そつだ、私はただの兵器

使う者の意のままに力となるただの……

「忌み嫌われる『羽有り』の一族の一人」

「っ……黒い、羽……」

「本物を見るのは初めてかしら？」

そつだ、ただの意思を持たない道具

驚いている皆を前に、見せ付けるようにクルリと回り……

「これが『羽有り』として蔑まれてきた、ただの兵器として生きる  
道を選ばされた者の姿よ」

昔は悩んだ

まだ、幼かったから……まだ、夢を見ていたから……だけど、今は  
もういい

ちゃんと理解した

強ければ認められる、強ければ、全てを手に入れる事が出来る世界  
なのだ

「対価は払いましたのよ？」

見せつけるのは両足

奪い取ってきた彼の左腕と同じ、作り物

「『羽有り』は、初めは力なんて、翼なんて無い……けど、ある時のある瞬間の……心の底からの喪失と絶望……それと同時に、自らの何かを対価に差し出して始めて最強の力を得るのよ」

勝ち誇ったように笑ってみせるが、先ほどまで憎悪しか宿って居なかった皆の目にあるのは、

(……哀れみ、といった所かしらね)

滑稽なもんだ、人間というものは

先ほどまで殺したいとまでも思っていた相手に、同情してしまうとは……

ああ、なんて愚かしい

「だからね？私達、『羽有り』は……」

そつだ、私達は違う

イコンの全てを理解し扉を先の先まで進む事が出来る

犠牲とは何たるか、対価とは何たるかを知っている強い存在

「犠牲を是としない人間なんかには負ける訳がないの」

力こそ全て、愛など幻想、全ては力、力はウソを付かない

人間には負ける筈ない

だから、

(もう、終わらせようましょうか……)

皆も分かった筈だ

どれだけ思いが強かろうと、力有る者の前では意味の無いものだと

……

「此れを機に、帝国の一部になる事を考えなさうたらどうかしら」  
今ならこの反乱も黙っていてあげる、もちろん、『羽有り』を差し出すならばね？

そう告げ……持っている力の半分を総動員し、イコンを起動させた

## 兵器＋人間Ⅱ暗転

圧倒的な、力だった

もう指一本動かせない

唯一立っているのは、『生きる兵器』として任務を果たそうとする元  
クラスメイト一人だけ

(無理、だったんさ……ねえ……)

地に伏してぼんやり思うのは、そんなこと

自らを友と、デツカイ夢を見ようと……そんなことを語ってくれた  
親友も、もう……

(絶望というのは、こういうものなんだろうさねえ……)  
ただ心に穴が空いたような喪失感が広がるだけ

「……さて、私は人間に興味なんてないの」

ふと、彼女がそう言いながら辺りを見渡す  
そして静かに、

「出てきなさい『羽有り』……さもなくば、皆を殺す」

アイコンを起動させ、先ほどと同等くらいの力を起動させた  
思わず、目を瞑る

(ああ、此处で死ぬのか……呆気ないさねえ……)

これで終わるのだ、全部全部……終わる  
ただそう思い、その瞬間を待つ……が、

凄まじい光に包まれるけど衝撃は来ない

(っ…………?)

一体何が…………そう思っただけ目を開けて見えたのは、黒い羽の生えた兄アスベルの姿

「アス、ベル…………?」

アスベルは、オレの声に振り返り悲しげに笑った  
それは見たことの無い、笑みだった

「ごめん鴻苑…………僕は、『風の翼』の一人だ」

告げられた言葉に理解が出来ない

(『風の翼』の一人?アスベルが?)

何を笑えない冗談を…………そう思いかけるが、ただ見えたのは父の悲しげな顔とアスベルの静かな決意の顔で、

(おいおい…………笑えねえさ…………)

何一つ、言葉が出てこなかった  
そして、

「僕の母は『風の翼』の一人だった、だから僕にはその血が流れている」

アスベルは淡々と語る

まるで人事のように…………書かれている文章を読み上げるように、何の感情も含まない声

(本当に、アスベルなのか…………?)

違うと、誰か言っただけ



その願いは虚しく、

「混血が生まれるのは稀で、生まれてもすぐ死ぬかどっちかだったけれど……父の尽力で何とか生きながらえたんだ」

ごめんね、隠してて……

そう言う時のその笑みは、何時も通りだった

そして、

まるで最後までも言いたげに……オレに、皆に、背を向けた

「やっと見つけた、選びなさい、共に帝都に来るか、此処で死ぬか、合理的な判断は出来るでしょう？貴方は心なんて無い『羽有り』なんだから」

(合理的判断？心なんて無い『羽有り』？)

会話に、頭が付いていかない

ただ思うのは、『羽有り』と呼ばれている者は文字通り、『生きる兵器』と認識されているのだろう、ということ

(あす、べる……)

ただ見守るしかなくて、

黙って余裕に笑ってみせるアスベルの背が、何故か遠い

まるでもう近づくなと、そう言われているかのように遠くて……

「『羽有り』は全て生け捕りか、無理だと判断すれば抹殺の命令が出ているわ」

「其処には罪の無い人を殺すことも含まれて居る？」

「基本は無い、けれど……邪魔するならば殺してよし、そして場合によっては、帝都と全面戦争になるわよ」

(ああ、分かったさ……)  
最初から、アスベルは知っていたのだと  
全て知っていた……  
自分の正体も、他国から『羽有り』と呼ばれる者が居ればどうなる  
かも……だから、

「アス、ベル……お前は、『風の翼』だから王位継承を断っていた  
と……？」

呟くようなオレの問いに、アスベルが振り返る  
其処にあるのは、何時もの困ったような顔じゃなく……

「……僕は、汚らしい血を引いているから」

さっきみたのと同じ、諦めたように穏やかな笑み  
(なんなんさ、それ……)

どうして、種族の違いで何もかも諦める？

受け入れられないとでも思ってるのか  
それほどに、それほどまでに……

(そんなにも、オレは、弱く……見えるんだろう、か?)  
言葉よりも先に目から何かが零れた  
何も守れないのだと、何も力が無いのだと……言われているようで、  
そして思った

ああ、この手を伸ばす事さえ許されないのだろうか……と  
諦めるしか、無いのだから……頭にそう過ぎった  
その時、

「ぎっ……けんなよ、てめえっ!!!!」

そんな声と共に、二度と聞く事は無いだろうと思っていた声が響いた

「あ、ああ、い……？」

呆然と、ただ呆然とした声が響いた

それに思ったことは一つ

（ああ……少し時間を掛けすぎたようね）

そんな小さな後悔

そして表面上は笑みを浮かべ、心の中でだけ溜息を吐く

折角彼は死んだと印象付けて戦意も、抵抗の意思さえも奪い取った

というのに……全てが無駄だったと、悟った

「折角、生かせてやっていたのにわざわざ命を捨てるなんて馬鹿な人間ね」

（彼は……殺したくないのに）

言えない言葉飲み込み、冷たい目で睨んでも彼は此方を見やしない

それどころか、何かを見ているのかすら危うい

（それもそうか……）

彼にしたのは所謂半殺しというものだった

気絶した後も、すぐ目覚めないよう……死なない程度に痛め付けた  
想像を絶する程のスピードで目覚めたのには驚いたが、ただそれだけなのだ

「はあ……っ、『風の翼』の血が汚い……？ふざけるのも、いい加減に……しやがれっ……！！俺等、と、同じ人間じゃねえか……っ！！」

その証拠に、足を引きずり、右手で左肩を抑えながら焦点の合っていない瞳で……

彼は、私に無防備に背を向けアスベルを睨んでいる

（今ならこれ以上余計な事を言う前に殺せる……）

頭の冷静な部分は囁くが、身体が動かない

まるで……その先が聞きたいかのように、微動にしない

「ただ笑って、泣いて、怒って……っはあ……違う所、なんて何処にもないっ……！！」

まるで遠くに居る誰かに届けるかのように声を張り上げる彼は、ただ必死で、

「羽が、あるから、とかっ……無いから、とか、んな理由で……死んでいいとか、ねえんだよっっ！！！」

泣き叫ぶようなその言葉に、純粹に葵は馬鹿だと……皮肉でも何でも無く、素直にそう思った

彼は息を整えるように大きく吸い、微かな血と共に空気を吐き出して今度は、

私の方へと向いた

まるで、安心させるように笑っ

「な、あ……エリスちゃん……っ俺は、君の事……信じてる」

そんなありえないことを、平気で言った

(ああ、彼は何を言っているのだろう……)  
こんなにもボロボロにしたのは私だと言うのに、恐怖の対象でしかないだろうに、  
何故か真っ直ぐで……私から目を逸らさない

「エリス、ちゃん……悪い子、じゃないもん……なあ」

何を思い出しているのか、小さく彼は笑った

(どうして……どうしてこの人はこんなにも馬鹿なの)  
訳が分からない

第一、少し考えれば分かる筈だ

私は今、殺そうと思えば彼をすぐさま消す事が出来る  
なのに、

「苦しいだろ、今……」

また一步、無防備にふらりと近づいてくる

唇が、無意識の内に動きかける……だけど、

(……今更、もう……私にはそんな事を言う資格なんて……)  
拳を握り締めて、無理やり嘲笑う

「何を言うの？死に掛けの状態で、それだけ言いに来たの？」

馬鹿馬鹿しい、折角拾った命なのにね

吐き捨てるように言っても、彼は優しく笑うだけ

「大丈夫、だ……エリスちゃん……俺が、助ける、から……」

そしてまた一步、踏み出し告げる

「みんな、な、俺の……友達、だからっ……皆……俺の、大事な……仲間、だから」

だから、大丈夫

何の恐れもなく、かといって自棄になっている訳でもない……正気の瞳が、私を見る

纯粹過ぎるその目に思わず、身体が勝手に後ずさる

そして理解してしまった

今、何故身体が勝手に後ずさったのかを……分かってしまった

(弱い、癖に……っ)

私より遥かに弱い、搾取されるだけの弱者な癖に、

(どうして私に怯えないのよ?!)

どうして、私はこんな人間に怯えている

許せない、こんな許すわけにはいかない

死を前にしても屈しなかったというのに、

(こんな人間一人に、こんな……ただの、言葉なんてっ)

「煩いつ!!誰も助けなんて望んでいない!!これ以上近づくな、人間風情が!!」

今更助けてなんて、少女のように縋れる訳がないでしょう?!

逆上する心そのままに、荒れ狂うそのまま私は、

(こんな……こんな人間っ、力を使うまでもない!!)

常備携帯している鉈を握り……今度こそ首を刎ねようとした

瞬間、

「つと、つとととと!?!」

「っ?!」

近くで大きな爆発音した  
思わず動きを止めそつちを見ると、

「ケホ、ケホッ！……あー、はははー……花火モードにしていた  
の忘れてたよ」

「ふざけてる人間にしちゃ、やるね……藍先生」

所々切り裂かれている藍とウルシエンが居た

（つウル、ルー……）

数少ない、仲間、同族……

そう思いながら縋るような目で見つめると、少し驚いた顔をした後  
手を握ってくれた

その温かさに荒れていた心が少しずつ落ち着き、息を吐く

そして……

（もう、大丈夫）

もう、ブレないと……

もう一度、『敵』として皆の前に立ちはだかった

「藍?!」

「な、なんでウルルーが?!」

弟の副担任と同級生が何故か揃って出てきた

しかも、お互いに傷を負って……だ

ただ普通の衝突……と、いうのはありえないだろう

あの切傷は明らかに何らかの能力によるもの……

そして、辿りついた結論は一つ、

(…………まさか彼も僕と同じ……………)  
視線の先で、ウルシエン君がニッコリと笑みを浮かべる  
そして、

「知らなかったの、馬鹿だねやつぱ君達はさあ!!」

そんな嘲りと共に、  
契約済みの『風の翼』の証……………黒い羽をその背に現した

「お前も、『風の翼』の一人?!」

『生きる兵器』は疲労や傷も普通の人間のように溜まっていく  
にも関わらず、帝国は平気で何年も二人同時に送り込んでいた  
帝国は其処まで本気だったという訳、か  
ならばかなり不味い

『風の翼』二人を相手にするにはあまりにも分が悪い  
オマケに、此処までの本気……………此処で失敗したとしても、恐らく  
(彼女の言ったとおり、前面戦争へと発展させるつもりだ……………)  
そう思った矢先に、

「さて、と……………正体も状況も皆飲み込めたっばいし……………あ、でもその前に、」

言葉を切り、立っているのもやっとな葵クンを見て笑う

(っ、不味い、)  
細められた目にあるのは、獲物を見つけた狼のそれと同じ……………

「エリスちゃんを惑わす悪者は、殺さないと、ねえ?」

素早くアイコンを展開し、そのまま力を発動させた



(っ、守らないとっ)

今此処で葵クンを失うのは惜しい……

『風の翼』としての合理的判断なのか、人間として友を守る為の判断かは正直分からない

ただ、脳の指令のままにアイコンを呼び出し

(なっ……このままじゃ、)

振り返り見えるのは、腰の抜けている群衆

(皆巻き添えになってしまっ)

起動を躊躇った、その瞬間

「危ない！！」

そんな声と共に藍さんが葵クンを抱き締めるようにして此方の防御範囲に飛び込んで来た

(っ、ナイス！！)

心の中でだけ賞賛を送り、力を惜しみなく注ぎフル活動させるただ、

(間に合え……っ)

と心に念じながら、

「我が願うは友を守る力！！『救済の扉』よ、蔽え！！」

ボックス状の盾を展開し、爆発や爆風から皆を守り、

(っ、やっぱり専門じゃないから長くは持たないか……なら、)

「帷クン、袖李さん！！二人は戦えない者達を守って！！」

そしてそれが消え去る前に、大分回復している二人に指示を飛ばした

やはり学生といえど、実戦をメインに扱う彼らはすぐさま反応し此方の意図を察知してくれた

「了解致した！！『守護への扉』よ、共に歩む者を守れ！！」

「『活かしの扉』よ、強化するで御座る！！」

二人がほぼ同時に叫び、

一瞬にして薄い膜のようなものが観衆を包み込んだ

(よし、此れで無関係な人達に危害は……)

それに安堵したのも束の間、

「……礼を言うよ、帷クン、柚李ちゃん……」

ニツコリと、心の底からの笑みを浮かべたウルシエン君が可笑しなことに礼を告げた

一瞬の思考停止の後辿り着いたのは

(彼らは……国の民を、巻き込みたくない……?)

おそよ戦闘慣れしている『風の翼』に相応しくない、人間的な思考

(まだ、彼らは人なのか……)

そう思った時、

彼がアイコンを起動させ終え、

「これで思う存分殺れるよ！！」

直後、突風が僕等を襲った

(くっ……！！)

前が見えなくなるほどの風……恐らく彼は風を扱うのが得意なのだ  
ろう

彼女の方も、鉈は持つてはいるが主に使っていたのは体力に関係の無い術式だけだ

( なら、接近戦の方が有利か？ )

そう結論付け、

「『救済の扉』！！僕に力を貸せ！！」

自らに力の倍化術式を施し、レイピアを手に接近戦へと持ち込む  
狙い通り、二人は遠距離戦を得意とするらしく、何とか二人分捌き切る

が、

( つ……細振りの剣じゃ、マトモに受けたら折れるかつ！！ )

此れが、戦争国と非戦争国との違いだろう

勝つ確率を限界まで追い求めた彼や彼女に与えられている武器はそれ相応のもの

つまりは、

( 正面から向かえば圧倒的フリ…… )

其処まで思った瞬間、

「はあー……」

戦闘の場に似つかわしくない深い溜息が聞こえた

思わず力が抜けかけるが、何とか持ち直す

すると、溜息の主はもう一度溜息を吐いて

「あんましこれ好きじゃないけど、なあ」

愚痴のようなものを呟いた

危ないぞ、という声が口々に耳に届くのは恐らく、溜息の主が防衛区域から出たからだろう

だけど、

「藍さん！遅過ぎる、よっ！！」

心配など、しない

何故なら彼は覚醒してなかったとは言え、それでも種族補整のあったウルルー君と同等レベルの力を持っていたならば、彼は十分に戦える

「あー、悪い悪いー……うん、そうだな、警沢は言ってもらえないよなあ」

彼が苦笑したような気がした

そして、

「具現化せよ、全てを縛る鎖……」

そんな声と共に、次に耳に届いたのはジャリツ……と、まるで鎖が擦れるような音  
そして続けざまに、

「我望むは疾風を止めるが如き拘束……縛れ」

具現化と起動とをほぼロスタイム無しでやりきった

(藍さん、やるねっ)

人間ではかなり上位の位置に付くであろうその速度に内心舌を巻く  
そして、

僕の横をすり抜けるように目の前の二人に鎖が迫った

「なっ……」

「ちっ!!」

気付いた二人がほぼ同時に羽ばたき、垂直に逃げるが、直後……

聞こえたのは、獲物を追い詰めた狩人のような

「逃がすかよ」

そんな、捕食者の声

そして鎖は意思をもっているかのように追っていき二人の翼を絡め取った

もがくが簡単には外れないらしく、彼らの動きが中途半端に止まった

「藍さん、ナイスプレイだよ!!」

彼がどういう原理でこの鎖を操っているのかは知らないが、チャンス好機だ

そして羽を羽ばたかせ、飛び立つ

見えたのは驚いたような彼の瞳……

そして庇つかのように隣に居る彼女を抱き締めた姿だから、決めた

(これで終わらず、よっ)

狙うは彼の利き手の右腕

そしてそのまま狙い通りに……突き刺した

「ぐうっ!!」

押し殺したような呻き声が響いた

そして、歯を食い縛って耐える彼が何故か此方を見た目と目が合ったその瞬間、

(笑った……?)

思わず停止する僕に、ウルルー君は言葉を発した

「ぐっ……君、は……確かに、強い……だけど、一つ……間違った、ね」

それは、予想外の言葉

一瞬思考が停止し、思わず彼を凝視した瞬間、

僕の、勝ちだ……

唇だけでそう喋り、もう一度彼は言った

君は、強かったと……

頭の中に反響する言葉……そして、賞賛の混ざった笑みを浮かべた彼の表情を見て、

一つの可能性が過ぎった

(つまさか帝国は……)

『生きる兵器』の一部分を欠損させてでも、他国に渡したく無いと判断しているというのか……？

そう思った瞬間、

「契約をつ、我が右腕を対価と差し出す!!」

彼が叫び、可能性は肯定された

(不味いっ……)

直後、何かに噛み切られたように右腕が？げ其処から血が溢れ出す途切れ途切れの悲鳴を上げながらも、彼は叫びをもう一度上げた

「ぎ、が、ああ、ぐっ……けい、やく、はっ、果たされたりっ!!」

！血よ、我が意思に従えっ！！」

その声に、覚悟に答えるように溢れ出した血が刃となり

(甘かったのは……僕だったか……)

僕の胸へ吸い込まれるように迫り

そして、

ドスツ、と……あまりにも軽い衝撃と共に……

(やは、り……僕は……)

兵器にも、人間にも、なれなかった……

そして、

「アスベルっつ！！！！」

名を呼ぶ悲痛な声に包まれて……身体は自由を失い、

(おち、る……)

かつて憧れた空の上とは正反対の場所へ……

ゆっくりと、落ちていった

喪失＋覚悟＝語りし夢は果て無き希望

何が起こったのか分からない  
ただ落下するアスベルへが見えて、ほぼ無意識の内に手を伸ばして  
駆け出して……

(とど、かない……)

手は、あの時のようにまた空を切って、  
飛び出そうとした瞬間、オレより早く動く影があった

「っ父さん?!」

躊躇いもなく崖から飛び、  
落ちていくアスベルを捕まえぎゅっと頭を抱き締めたのが見えた  
(このままじゃ二人とも死ぬっ……!!)  
頭を過ぎった最悪の結末に思考が凍り付く  
その瞬間、

「っ、鎖よ我が意に従え!!」

オレの横を凄まじいスピードで鎖が過ぎ……  
振り返ると、走りながら藍が鎖を具現化させていた  
そのまま崖下へ向かった鎖は、寸でのところで父とアスベルの身体  
に巻きつかせ落下を止めた  
が、



「ぐっ!!」

落下が止まった瞬間、その衝撃からか藍が崖下に向かって引きずられていく

(このままじゃ三人とも、落ちる……!!)

ほぼ無意識の内に身体が動き、引きずられる藍の身体を捕まえた直後、

「みんな、なっ……」

我先にと守られていた皆が飛び出し、鎖に群がり……父さんとアスベルを引き上げていく

「アスベル様、しっかり!!」

「王、もうすぐ上がるからな!!」

「皆もうちょっとだ、全力で引けええええ!!!!!!」

その必死な掛け声と共に、徐々に二人の身体が引き上げられ、そして、

「アスベルっ!!」

引き上げられた時には血を失い、真っ青になっていたアスベルに駆け寄った

血を軽く吐き出したが、オレに気付いたのか、静かに……  
何時もの困った様な笑みを浮かべた

「ごめ、んっ……げほ、かはっ!!」

「アスベルっ!!っ……もう、喋るんじゃないさ……」

何か喋ろうとして、また血を吐きだした

そんなアスベルに、思わず声が震える

言葉を紡ごうにも、嗚咽が先に出て邪魔をし、何一つ言葉をかけてやれない

(っ、何でオレは何時もこうなんさ!!)

大事な時に何時もそうだ、何も言えない

今だってそうだ、言いたい事が沢山あるのに

「どうして今まで黙ってたんだ」、「今度から隠し事は無しにしろ」

、「勝手なことばかり独りで抱え込むな」

沢山沢山、あるのに……

「助けてくれて、ありがとう」、「今度からはオレも力になる」、「

「もう独りで悩まなくていい」

(あるんさっ……沢山、たく、さんっ……)

何も言葉が出ない

ただ、そんなオレを見かねたのか……涙だけが、言葉の代わりに止まる事無く溢れ続ける

そして、やっと絞り出せたのは

「にい、さんっ……!!」

たったの四文字で……

それでも、アスベルは心底幸せそうに笑った

「は、は……10年……まえ、みたく……やっと……やっと……きよ、だい……もど……れ……」

ああ僕は、幸せ者だ……

吐息に紛れるようにして呟いたその言葉がオレの耳に届いた瞬間……  
ゆっくりと……アスベルの頬を涙が伝って地面に吸い込まれ、  
そしてアスベルは、

「あす、べる……っう、くっ……あああっ、うあああああっつ！  
！！」

全てを守り、人としても、兵器としてもなく……  
ただ一人の、世界でただ一人のオレの兄として、息を引き取った  
後に残るのは……誰のものとも言えない叫びの木霊だけ……

\* \* \* \*

悲痛な声がまだ木霊している  
そんな中僕は、

（彼は……たった一つの存在として、一生を終える事が出来たんだ  
ね……）

最も僕らしく無い事を考えた  
何時もなら、そうだ

同族の死が、貴重な『生きた兵器』が死んだ  
惜しいものを亡くしたと……そう思うだけだというのに……

今思うのは、ただただ……

彼は最後の瞬間、幸せだったのだと  
心の底から、合理的判断などなくああ言ったのだと……  
そして行き着いたのは、

（彼は、最後まで……）

最後まで人間だったのだ

結論でも答えでも何でもなく、ただ抽象的な『思い』だった

「……帰ろう、か……」

ふと、

此処に居るべきではないとそう思った

幸い血はもう、種族特有の治癒の高さで止まっている

恐らく帝国に着くまではもつだろう

だから、一刻も早くこの場所から去らねばならない

なぜならば、彼の死を……穢してしまうような気がしたからだ

（『羽有り』は……此処には、居なかった）

そう思っ背を向けた

直後、

「っ……待て、よ……」

ふいに、声が掛けられた

幾分か回復したのか、その声は芯を取り戻していた  
案外、彼もタフだ……そう思った瞬間何故か、

(これから、彼の声も聞けなくなるのか……)

そう頭に過ぎり、

一瞬足が止まりかけるがそのまま歩みを続ける

すると、もう一度だけ……待てよ、と声が聞こえた

だから……立ち止まった

強いて言うなら、気まぐれだった

そんな僕達の耳に、

「俺、は……王に、なる……」

叫びが、聞こえた

それは止まることなく紡がれていく

「おまえ、等の、帝国の……っ王さえも、従える程の王に」

そしてそれは段々と力を帯びて、

此処に在る静けさと絶望を塗り替えていくかのよう

「誰もがっ……誰もが自分を誇れるような世界を作るから」

反射し、大きく大きく広がっていく

(これ、は……)  
思わず振り返る  
見えたのは真つ直ぐに此方を見る強い瞳……

「もう誰も……泣かないように」

その瞳が見据えるのは何なのだろうか  
どうして彼は、失って尚信じることを諦めないのだろうか……  
分からない

合理的に、ただ最善を求める『羽有り』には……

(彼を、理解出来ない……)  
そして、

僕達を越えた先にある何かに向かって叫ぶように、彼は言い放った

「悲しませるしか能の無い世界、俺が全部ぶっ壊して綺麗にしてや  
る……誰も悲しみなんて望んでねえ……皆が、俺が、望むのは……  
後から先にも笑顔だけだ」

ゾクリとするほどの力のある瞳……

まるで先に息を引き取った彼が、乗り移ったようだと……そう感じた

(……これは……帝都と、正反対の……)

彼の思想は危険だ

感覚的にそう思った……

そして、彼を此処で殺しておくべきなのも、理解した  
だけど、

「詭弁だね……」

出てきたのは言葉だけだった

(……僕も、まだまだ甘いな……)

最善を今此処で選べない

だけど、もしも……彼が言う、そんな世界があつたならば？  
そう考えてしまう

「詭弁で、しか……ないよ」

だけどもしも、

本当に彼の言う世界があつたなら……

(僕達も、共に……殺し合いなんてせずに、笑い合えてたかもしれ  
ないね)

そして、

きっとそれは誰もが心の奥底で望み、

誰もがその儚さ故に諦め……そしてそれを信じる者を羨望と共に潰  
そうとする、微か過ぎる希望

藁に縋るよりも馬鹿な……

其処まで考えて、ふと納得した

(ああ、彼は馬鹿だったね……)

彼は馬鹿で真っ直ぐで、純粹で……そして、綺麗だ

(……壊れて、欲しくないね)  
合理的判断を超えた理論よりももっと先のような……  
おぼろげな場所で、そう思った

だから、

「だから、」

君が、不可能だと、絶望を、喪失を知る前に

「此処に宣言する、」

せめて僕等の手で、

「我がダイヤモンド帝国は、」

その綺麗な心のまま、

「ウィンダス国に宣戦布告を行う」

殺してあげる

「降伏は、認めない」



それが、僕等に出来る君への最大の恩返し

返ってきたのは、沈黙

それを了承と受け取り、振り返らず歩き出す

それはきつと、二度と交わることのない道……

「……ウルルー、エリスちゃん……今は、さよなら」

微かに、聞こえた声

それにただ黙って頷いて、僕等は足を止める事無くしてこの国を出た

240

船の上……

小さくなっていく温かだった思い出くれた島を見て、

先ほどの言葉を思い出した

『今は、さよなら』

(今は、か……)

ふと、空を見上げると島の方で花火が上がっていた

恐らく、藍先生が上げているのだろう……上げ損ねていたらしいから

それを見ながら、ただ思う

(なあ、葵クン……)

君は彼の喪失をどう受け止めたんだい？

恐らく彼が目の前に居て問いかけても、答えは返ってこないだろうけど

いや、違った……

全て、最後の言葉に答えはあつたね

恐らくこの先、彼に対する疑問が生まれ続けるだろう……

だけどきつと……あの最後の言葉が彼なりに出せる僕等への、僕等のこれから抱く疑問全てへの回答だろう

だから、

(あの言葉に込められた思いは……まだ『今』は、知らなくていいんだろう?)

時がくれば分かると、そういつた事なんだろう

結論付けた答えはなんの根拠も無いのに納得してしまっていて、

(……可笑しな人だよ、ほんと)

見上げる先の空に、赤と青の火の花が咲いた

綺麗だと……素直に、思えた

だから、それに答えるよう小さく呟いた

彼にはきつと……後一度、結末がどうだろうと同じ事を口に出すの  
だろうと……確信めいたものを抱きながら……

もう一度だけ、心の中で呟き目を閉じた

……さよなら、僕等の友達、葵くん

喪失＋覚悟＝語りし夢は果て無き希望（後書き）

取り合えず……

此処までで、序章的な何かが終わりました！ え

当初この回（世界の王になるぜー的な下り）は、ギャグで終わるつもりだったんですが……

ちよっと、てか大分調子に乗り過ぎましたね！ 乗り過ぎ

まあ、そんなこんなで……やはりグダグダですが……

どうやら見てくださっている寛容寛大仏様がいらっしやるので頑張ります！（ノリが続くまで（笑））

それでは失礼致しました、敬礼ッ！

変わりなくやってくる朝＋決意＝享受の先へ

「……………朝……………やっぱり、何時も通り、だよねえ……………」

目覚めたら、何時もと何ら変わらない朝が来た  
昨日あれだけのことがあったというのに、

昨日世界で一人しかいない、かけがえの無い人を失ったというのに

……………

（それでも、この世界は……………まるで気にも止めていないように）  
何度も繰り返し朝はやってくる

（ああ……………私は、弱い）

溜息と共に零れたのはそんな言葉だけじゃなくて、

「私はっ……………なんで……………なんでっ、こんな……………弱いんですかあっ！  
！」

泣くまいと、昨日必死に堪えていた涙

それが今頃になって心に波を生み乱していく

（止まらないですよあっ……………）

誰のために、何のために泣いているのか分からない  
けれどただただ、

「ふえっ……………ひっく、うあっ……………うっく……………」

胸が押しつぶされそうなくらい、苦しかった

泣いて泣いて泣いて泣いて……  
ぐちゃぐちゃになった思いを外へ追いやらないと、どうにかなって  
しまいそうで  
怖くて悲しくて悔しくて……  
彼に、申し訳なくて

( 鴻苑、クンっ…… )

浮かんだのは、大好きな人  
家族を失い、喪失の中無理やり微笑んだ強くて脆い彼……  
分かっている、一番辛いのは彼だ  
なのに自分は彼を支えること所か……泣く場所にさえなっただけであげら  
れない

昨日、藍さんが上げた追悼の火の花をただ黙って見つめていた彼は、  
思わず目を逸らしたくなる程に、虚ろだった

「私じゃっ…… 鴻苑クンの、力にっ……!!」

なれないのっ……?!

叫んだ言葉に返ってきたのは……

「っ……ひっく……うう、あっ……」

押し殺したような微かな嗚咽だった

そして気付いた

( 涼……も、泣いて、るんです……ねえ…… )

皆一緒なんだと、

この喪失の痛みは、空虚は、皆共有しているのだと……

(前をつ、向かないと……)

強引に涙を拭き、身支度を整える

今日は、学校だ

無理やりにも何時も通りを演じなければ、耐えられない  
昨日一致したのはそんな見解  
だから、

「行か、ないとお……」

一人だけ、立ち止まる訳にはいかないのだ

何らかの形で皆必死に喪失を受け止めようとしているのだから

「っふう……涼！学校、行きますよお！！」

苦しい、悲しい、辛い、悔しい

自分たちが強かったならば、彼は死ななかつた  
だからもつともつと、

(強くなりたい……)

二度とこんな喪失を出さないように

(強く、なろう)

今よりもっと、彼を支えられるように  
そして……  
願わくば、

「世界の王となる葵クンが歩む道を」

ただ繋げるのではなく、共に歩めますように……

小さく呟き、まだ泣いている涼と共に何時も通り何ら変わらない日  
常へと、  
確実に迫り来る非日常へと、一步を踏み出した

例え、

この先何がどうなろうと

支え続けるのだと、守り続けるのだと、共に……

(共に、皆で歩み続ける)

それが彼への饒

それが自分への、覚悟だ

ふと見上げた空は青い

全てを見透かすかのように全世界に平等に広がっていた



何処までも何処までも、壮大に……広がっていた

私達は、

昨日一つのかけがえの無い人を失った

それによって手に入れたのは喪失

生まれて初めて理解したのは犠牲

だから、

(負けない)

強く……強くなるんだ

このまま無力なままでは終われない

そして……

「絶対に、絶対に負けない」

失い続ける戦いが、今始まった

温もり+涙=明日には笑って見せるから

比奈乃 楓達が戦いへの決意を固めたその日  
重症と診断されている葵は学校を休んだ  
性格に言えば起きない為、休まされたのだが……

教室の皆は、  
まるで日常をなぞるかのよう経過す時間に、居るはずの彼が居ない事を

居るはずの二人が居ない事を、ただ黙って受け止めたフリをしていた  
それは、

火を見るよりも明らかで……  
(いくら決意があっても……厳しいわよね)  
己もそうだと、嘲笑と共に思い静かに……教室を抜け出し、弟が眠っているであろう我が家へと向かった

\* \* \*

静か、だなあ……  
ぼんやりとする視界で思ったのはそんな事で、次に思ったのも  
(あ……あれえ？俺何時寝たっけ……)  
そんな……何処が無理やりに何時もの日常と関連付けたようなフワフワとした物だった

気付いて、そして、

(…………昨日…………)

微かな後悔と共に思い出すのは、  
痛みと喪失と、去り行く友に叫んだ誓い……

「そ、か…………」

(俺、言ったんだ…………)  
思い出すのは昨日のこと

幸せだったと、微笑み息を引き取った……  
最後のその瞬間に、たった一人……世界でたった一人の兄、という  
存在として生きた彼と、

『羽有り』だと、『生きる兵器』だと…………だから共には居られない  
…………

背中ですう告げ去っていった友人二人  
そして彼らに告げた、誓いの言葉

世界の王になる…………

(…………俺、言ったんだ…………)  
ベットの、真白な天井に手を翳す  
その手の色だけが、薄い白の中に鮮やかに映える  
そして、ふと思う  
そういえば『風の翼』の羽はこれと正反対の黒だったと  
だけど『風の翼』と言われてすぐ浮かぶのは黒の翼ではなく、

(アイツ、は…………白かった…………よなあ)

一度だけ見た、大切な友達だった彼女の翼  
穢れ無き純白の色

そして、

(……何年前だっけ、あれ……あー……五年、前か……)

思い出すのは他国による『翼狩り』が行われる前のこと

俺の左腕が、まだあった頃の事

正直色々有り過ぎて思い出すのも億劫だが、一つ……

たった一つ、

「……初恋、だったかなあ」

(ああそうだ、あれは……甘酸っぱい……)

赤と黒が、血だけが……

全てを塗り替えた昔々の過去の中で、ただ一つ消えずに残った希望  
の灯火

『羽有り』だったと、告げられてもどうでもいいと叫び、

手を伸ばしたあの思い出

「あれって、振られちゃった……ってとこになんのかなあ」

結局伸ばした手は、届くどころか無くなってしまった

そして気付くと彼女は居らず、

彼女を連れ去ろうとしていた男が一人死んでいただけ

(……あれ、俺ってよく生きてたよなあ……)

倒れていた俺を見つけてくれたらしい姉姉ちゃんや、フェルちゃん

……幼馴染達が言っていた

夥しい量の血に塗れていた、と

色々分からない事も、知りたい事も出来たがあれはあれで後悔は無い

ただあるのは、何故あの時

(腕落とされて……なんでそこで……)

無様に気絶したか、だ

あの頃からどうも俺は気絶癖があったらしいく、唯一の残念な所は其処だ

溜息を吐き、

寝返りを打とうとして体中に走る激痛に悶えた

俺ってば滅茶苦茶カツコわりい

「あー、これだから何時も皆に……」

其処まで呟いて、

(あ、やべ……)

今かなり不味いとそう思った

何故なら、

(俺今、)

昨日の事を記憶の隅に追いやるように別の事考えていた

それはつまり、

ただ逃げているだけで……見ないフリをしているだけ

(……ダメだろ、俺)

王になると、言ったのは自分だ

あれはただの勢いで言った訳じゃない……それは確実だ  
なら、

「逃げんなよ俺……」

せめて自分にだけでもカツコ付けさせてくれよ  
嘲笑が浮かんだ地点で相当まいってんなあ…… 人事のように思った  
そして、

少しだけ頑張って真面目に考えてみる

昨日の事を、あの二人の事を、アスベルのことを……  
自分なりに目を逸らさないよう、考えてみる

「一つ、」

俺はあの二人に裏切られたとは思って居ない  
だってアイツ等は殺せる時に俺を殺さなかった  
まあ、ただの結果として殺せなかっただけかもしれないが俺は今、  
生きている  
ならば、

(殺す意思が……無かった、って思って良いよなあ……)

もしも例え抗議があったとしてもそれはこの場に居ないアイツ等が  
悪い

そう、結論付けた

「んで……次、ひとつ」

語ったあの言葉はウソじゃない、語ったあの思いもウソじゃない  
昨日言った言葉は全て俺の本心

馬鹿と思われようと愚かと呼ばれようとあれは、

(あれだけは本物だ)

そして、

「……………」

一つ、そう口にしようにした瞬間頭を過ぎるのは落ちていった彼の姿  
上がる花火をただ黙って見つめていた親友の姿

声を上げて、声を押し殺して……叫ぶように、吐息を漏らすように

……泣く、親友達の姿

(……っはは……こりゃあ、参ったぜ……)

そして漏れたのは乾いた笑み

静かに頭に浮かぶのは嫌な考え

ただの可能性でしかない、もはや『もしも』としか考える事の出来  
ない考え……

あの時俺が死んでいれば、アスベルは……？

ただ、そんなこと

今更考えても何も変わらないくだらない……

そもそも何がくだらない？

(ああ……よく分かんねえけど、)

「くだらねえのは……どっちだろう……」

比較する対象無しに呟いた言葉

それは誰にも届く事無く消えていく……

筈だったが、

「っ馬鹿葵!!」

言葉が、返ってきた

それも泣きそうで……怒っているかのようで……震えている、声  
声の先に視線を向ける

僅かに開かれた扉の向こう……立っていたのは、

「姉……姉ちゃん……」

微かに乱れている長い髪はそのままに、此方を睨みつけるかのように見ている姉姉ちゃんだった

目の下に薄い隈が出来ているのが見えて、

（あんなに……美容には、気い使う……のに……）

アスベルが死んだことがやはり彼女も相当ショックだったのだと、当たり前だが、改めて思った

そして、

（アスベルは……やっぱりさあ……）

皆の為にも、死んじやダメだったんだよ……ぼんやりと、そう思った  
そんな俺に気付いているのか居ないのか、慥然とした足取りで姉姉  
ちゃんは近寄ってきて、

大きく手を振り上げ、て……

パンツ……！！

そんな音と共に頬に軽い衝撃を感じた  
痛みなんて殆ど無かった……だけど、

（重、い……？）

叩かれた所からじんわりと重みのような物が広がり満ちて……

フワフワと、まるで自分の物ではないかのように軽く感じていた身体が、重みを取り戻していく

（なん、で……姉姉ちゃんには、そんな力なんて）



動かない左手に代わって右手で頬を抑え顔を上げると、  
目があった

今まで見たことないくらい、酷く怒っている目だった  
呆然と見ている俺に向かつてまた、姉姉ちゃんの手が振り上げられ  
たから思わず目を瞑った  
瞬間、

「ちゃんと帰ってこれた……？」

優しい声と同時に、叩かれた頬にそつと……手が添えられる  
目を開けて見えたのは悲しげに微笑む姉姉ちゃんの顔  
そして、

「大丈夫よ……少し学校で皆の様子を見たけど、大丈夫……」

優しく、抱き締められた  
ふんわりと……甘い、姉姉ちゃんの匂いを感じた  
そしてそのまま、頬を寄せ合うかのように、隙間を埋めあつかのよ  
うに近づかれ  
ゆっくりと押し倒され……

その瞬間思い出した  
そうだ、俺はまだ……

「葵……貴方の親友は、貴方の手で救いなさい……」

そうだ、その通りだ  
俺はまだ、まだ救わないと  
だから俺は救われてる暇なんて、悲しんでる暇なんて……

(だって、沢山、救われてねえ人が居る……まだ、悲しんでる、人が……あ……?)

目の前が見えなくなる

手で両目を塞がれたのだと、そう気付いたのはすぐのことだけで……  
だけど、抗議を挟む間もなく優しい声は言った

「けれどそれは明日でいいの、だから今は……」

泣きなさい……

「あ……ああ、あ……」

耳元にその声が届いた瞬間、

身体が震える

まるで制御を失い崩壊する建物のように、何かが歪み、何かが崩れ落ちていく

無意識にガクガクツ、と痙攣する身体を包んだ温もりは、

この世で唯一……無条件に俺を愛してくれる家族のもの  
そしてそれは……

せめて皆が悲しみを乗り越えるまでは俺だけでも馬鹿やって無理やりにでも笑おう……

そう決意し、押し殺したものを呼び覚ますには十分過ぎるもので

目の奥からこみ上げてくる何かは、意に反し止まる事を知らず、

「っう……あ、ああ、ああっ……」

言葉にならない声を引き連れ、溢れ始める

始めはゆるりとゆっくりと、

最後は激しく終わりを知らぬかのように流れ続けた

「良いのよ、今は……よく頑張ったわね、葵……」

眩き、

子供のように泣きじゃくる彼を抱き締める彼女……

彼から見えない位置にあるその頬を伝い落ちたのも、  
彼と同じものだった

明日には、笑うから……

声無き声で

愛する家族に誓った誰かは、これが最後とばかりに……  
最後の涙を零して目を閉じた

本当の決意＋歴史Ⅱ進む者と憂う者

終わった

何が何だか分からない内に、全てが終わった  
胸にあるのはただそんな思いだけで、

あれから……『敵となった友』からの宣戦布告宣言から、あつとい  
う間に2日経った

学校に行けば皆は何時も通りの中に、過剰なまでの笑顔をオレには  
振り撒いて……

(まるで腫れ物扱いさねえ……)  
気を遣わせているのだと、ぼんやり思った  
席に着き、何もする事なく黙っていると楓の声が聞こえた

「あ、えつとお……私、今朝お料理失敗したんですよねえ」

そして、

ちらり、と皆がオレを見たのが分かった  
何か言う事を期待されているのは分かる  
が、

(こういう時、何……言えば良かったっけ……)  
少し考えても何も浮かばない  
だからただ黙った

すると、少し落胆した雰囲気の流れ、話が再開される

「そ、それで楓殿から焦げ臭い臭いがしたで御座るか」

「え、と、失礼ですよお、柚季さあんっ」

「あ、あは、あはは……すまんで御座るっ」

不自然な間が分かりやすいくらいに挟まれた会話

喋ったのは二人だけで、他の二人は喋らない

オレと同じで喋る言葉を持ち合わせていないのか、それとも……

(この先のこと、考えてるのか……)

二人いる内の王子が一人死んだ

それが意味するのは酷く簡単なことで、

(ああ、もう……)

「もう、いいだろ」

喋っていた二人が、不自然な笑顔のまま会話を止めた  
だから、

(そうだ、もういい……)

吐息のように漏れた言葉が自分の物だと言う事に気付いたのはすぐ  
だった

「……アスベルが……王子が一人死んだ、それが意味する事を、皆  
分かってるよな」

言葉が思いの他淡々と口から出てくる

オレは以外と薄情な人間なんだと、思った  
だから、

「オレはもう……此処には居られない、だって、王位を継ぐのはもうオレしか居ない」

泣きそうな顔でオレを見る楓が、いつかこんな最悪のオレを嫌ってくれたらいいな……と、思う

アイツは優しいから、一生懸命だから……オレなんかより、ずっと強いから

だからオレを置いて、何処までも自由に進んで行って欲しい  
何故なら、

東 鴻苑は、比奈乃 楓が好きだから……

「……さよならだ、皆」

今オレは上手く笑えているかな

今オレは悲しんでいないかな

今オレは、

「こっえっ……くんっ……やだ、やだよお……っ」

涙を流しすぎる様に震えて手を伸ばす楓を、

(オレ、は……)

振り払えるかな……

口から漏れたのは空気だけで、

だから目を伏せて、彼女に背を向けて、

(っ……さよなら……)  
心の中でだけ、呟いた  
そして、

ダァンツッ!!

ふいに、背を向けた瞬間扉が大きな音を立てて開いた  
そこに居たのは、

「葵……」

表情の無い、左腕が無くなったままの親友だった

扉を開け放ったまま、それに置いた右手はそのままに葵は教室の中  
を黙って見ていた  
何を思ったのかは知らないがその後、  
ゆっくりと扉から手を離し

「っ!?」

オレの頬を殴り、とっさの事によるけたオレを蹴り倒し、馬乗りにな  
り……

「何してんだよ、なあ……おい……」

胸ぐらを掴んで、静かに笑ってそう言った

「なあ、」

胸ぐらを掴んだ手を離し、右手で頬を殴られる

「何でおまえ、泣かせてんの？」

また、殴られる

「俺が居ねえ間にさあ……なあ、おい、なんで皆泣いてんのかなあ」

笑顔のまま、オレに喋る暇を与えないかのように葵は殴り続ける  
何度も、何度も……ただ、殴る

見に覚えがある為暫く殴られていたが、ただ思った事がある  
コイツの一発は痛くない

なのに、

(重い……)

殴られた場所からじんわりと広がるように、体が重くなってくる  
それが何故か酷く不快で、まだ殴り続ける葵を睨んだら笑われた  
そして、



「何時までうじってんだよ、くだらねえ」

全てを否定するかのように、言った

「くだら、ない……？」

「ああそうさ、くだらねえ」

また、吐き捨てるかのように言った

くだらない、くだらない、と……アスベルが死んだことも、この国のことも、全てが、

「どうでもいいんだよ」

また葵が笑った

そして、

「兄さん死んで悲しいね、とか言っただけなのよ」

ただ言葉を、

「兄さんは最後まで立派だった、けどおまえは何も出来なかった役立たずとでも罵って欲しいのか」

繋げてはその度、何が面白いのか笑みを浮かべ

「ああ兄さんは兄さんは、アスベルアスベル……って、自分卑下して比べて酔って……楽しいかよ」

ただ言い放つ

その笑みが、その言葉が、全てがオレの神経を逆撫でるかのようで

……  
気付けば、葵を殴っていた

お前なんか何が分かるっていうんだ……

沈黙が下りる

殴った拍子に倒れた葵は、切れた口の端を触り、ただ無表情で言った

「軽いなあ」

「此処に居ない奴の拳なんて、軽過ぎて笑えるぜ」

意味が分からない

オレは此処に居る……コイツは何が言いたい？  
分からない……

（何を、）

何を考えてる……？

「俺の言ってる意味分かんねえのか……」

葵は、オレを

「くだらねえなあ、おまえも……アスベルも、なあ？」

アスベルを、嘲笑った

その瞬間、何かが……

張り詰めていた何かがブツリ、と切れた

「っふざけるなよ！！」

( そうだ、ふざけるな……何も、何も知らない分際でっ )  
ぐるぐると回る醜い感情の数々に後押しされるように葵に掴みかかり、力のままに殴る  
それでも葵は笑うから、

「オレを愚弄するのは良い、だがな、お前にアスベルの何が分かる？！アスベルは立派だったんだよ！！ずっとずっと王になるうと努力してっ、オレなんかよりずっとずっとこの国に必要な奴だったんだよ！！」

言葉が口について溢れ押し寄せる

ただ悲しかった……ただ、悔しかった

( どうして分かってくれなかったっ？！ )

誰の目から見ても明らかだった、アスベルの方が素晴らしいと、王に……

( オレなんかより、オレなんかよりずっとずっと……ふさわしかったのにつ……！！ )

「アスベルは、誰が見ても立派だったんだ！！その反面オレは何も出来ないっ！出来なかった！！オレはっ……」

悔しくて悲しくて……

何を言って居るのかすら分からない

ただ言いたいと、叫んでしまわなければ狂いそうだった  
だから、

「オレはっ、世界でたった一人しか居ない兄でさえも救えなかったんだよっ……！！！」

目から溢れた何かと共に、  
心の奥に溜まっていた全てをぶちまけた

「オレは、何一つ……」

何時もアスベルは笑っていてくれたのに、  
何時もアスベルはオレを受け入れてくれていたのに、  
アスベルは何時も、何時も……

「アスベルの為に何も出来なかった……！！」

自らの願いを言うことなく、人の為に生きていた

そんなアスベルが唯一持った望み　オレが王宮に戻ってくることに

さえも叶えてやる事が出来なかった

(どうしてオレは、)

オレは何一つ、アスベルの望みを叶えてやれなかったんだろう

アイツを、『風の翼』であるアイツを、支えてやれなかったんだろ

う……

後悔しか、残らなくて

悲しみしか、残っていないくて……涙は止まらなかった

「……それが、くだらねえって言うてんだよ！！」

ふいに、今まで静かに笑うか殴るかしかしなかった葵が、  
怒りを吐き出すかのように、

「何、聞いてやがったんだよおまえ……アスベルは言っただろが！  
！『僕は幸せ者だ』って！！幸せそうに笑っただろが！！」

叫んだ

「否定してんじゃねえよ馬鹿野郎！！アイツの最後の言葉も、今まで積み上げたお前もアイツも、何もかも否定して嘆いて、弱いフリしてんじゃねえよ！！」

真っ直ぐなその視線に射抜かれる

行き場のない思い、悲しみ、怒り……

それら全てを暴かれていくかのような感覚に、全てが爆発した  
そして、

「っ……黙れ！！誰もがお前のように強くあれる訳じゃないんだよ！！誰もが先に進める訳じゃないんだよ！！」

気付けば葵を殴り飛ばしていた

葵は吹っ飛び、窓際まで転がって静止した

誰も何も言わなかった

それどころか、時が止まったかのように何も動かない動けない

そして

沈黙が流れて……

「そうか……分かった」

床に仰向けに倒れている葵が一言、  
呟いた

「俺が昨日あの時、死んでれば良かったんだ」

状態を起こし、静かに……本当に静かに、笑う  
ゾクリとするほどの静けさを纏ったその笑みは、背筋を凍らせて才  
レ動きを止める

「何、言っ……」

絞り出せた言葉はそれだけで、  
葵はゆっくりと天を仰ぐように言葉を紡ぎながら、窓を開ける  
そして、

「良いんだ良いんだ、そうだよなあ、おまえも皆も優しいもんなあ、  
面と向かって言えねえよなあ」

クツクツク、と声上げて笑った  
見えるのは後姿だけで、葵がどんな顔をしているのかも此方からは  
伺い知る事が出来ない  
それが余計に、怖くて堪らない  
そんなオレの気持ちを察したかのように、振り返った  
その顔にあるのは静か過ぎる笑顔

「俺があんとき死んでりゃ、アスベルは帝都に行って生きてはいた、  
そうだろう？」

言葉が詰まる

違う……そう言いたいのにな、何も言えない  
ただ、このままじゃ

「な、そうだろう？考えてみりゃそうなんだ、俺が生きた、だから  
アスベルは死んだ、簡単だ」

身を乗り出すように窓の外にある空を仰いで笑うこいつが、  
何処かに消えて……アスベルのように消えていきそうな気がして

「ち、ちが……ちが、う」

自らに言い聞かせるかのように否定し、縊るように一歩、葵へと踏み出した

それでも葵は振り返らないから、もう一度否定の言葉を口にした瞬間、

「違わねえ」

オレの言葉を掻き消して葵は振り返った

その目には悲しみも怒りも、痛みもなくて……ただただ、静かだった  
そして目を伏せ、ゆっくり窓の方へともたれて……

270

「なあ」

その目は一体何処を見ているのだろうか？

誰へと、声を掛けているのだろうか

分からない、何一つ……

(同じじゃ……ないか……っ)

アスベルの時と、

(知っているつもりで何も知らなかったアイツの最後と、まるで同じじゃないかっ！！)

視線は交わっても、心は擦り抜けて行く

(なんで……)

「生きてちゃダメなのは、俺なんだよ」

葵はニツコリ、笑った

身体がそのまま重力に従い傾いていき……

ダメだったんだよ、俺は、あの時から……あの時、死んでりや良かつたんだ

（なんで皆自分だけで背負って笑ってオレの前から消えていこうとするんだよっ！！）

眩きが聞こえた瞬間、言葉よりも先に身体が動いた  
そして、

「この馬鹿っ！！」

あの時届かなかった手を伸ばして、  
落ちようとしているその身体を引き上げた  
フラッシュバックのようにアスベルの姿と重なったが、それすらも  
吹き飛ばし、

「馬鹿かお前は！！」

全力で叫び、殴った



「誰が勝手に死んでいいなんて言った！！誰が死ねばいいなんて言った！！！」

（勝手過ぎんだよ、どいつもこいつも……！！）

オレに許可なく死んでいこうとする

オレに何も話さず、抱え込んで消えていく

もうつんざりだ、もう……目の前で誰かが死ぬ所なんて、

（永遠の別れなんて今はもう見たかないんだよっ！！）

そっだ、見たくない

親しい奴の死も、何も知らない奴の死も、敵の死も、全て……全て

全て全て、

（見たくなんかない）

それに……この世に、

「この世に死んで良かった奴なんて居ないんだよ！！」

『羽有り』と呼ばれ、『生きた兵器』として使われる種族だったとしても

アスベルは死ぬべきじゃなかったように

全てが違っても、

（死んで……悲しいんだよ……っ）

胸が痛い

まるで思い出したかのように、身体が重く感じる

そして、心に溶け込むように姿を見せるのは大事な……

（ああそっだ、死んでしまったのはたった一人の……）

王位継承者でもなく、『生きた兵器』でもなく、

世界でたった一人の、オレの大事な大事な兄さん……

やっと気付いた

オレは馬鹿だと、気付けた

悲しくないフリをして、状況をよく理解したフリをして  
結局何も、自分の事一つとして分かっていなかった

(オレは……はは、ただの、)

ただの愚かな餓鬼じゃないか……

沈黙が流れる教室で、倒れたままの葵を見てただ……そう思った

「っ……ははは」

酷く長い……実際にはほんの僅かな時間が過ぎた後、  
床に大の字になっていた葵が笑った  
そしてゆっくり起き上がった

「その通りだ、死んで良かった奴なんて居ねえ」

いつもの様に、馬鹿っぽい表情を浮かべて

へらりと、笑った

「……俺、馬鹿だからさあ、皆にしてやれることって……これくらい  
いしかなんだよなあ」

サンドバックになるか、仕方ねえ馬鹿だなコイツって思わせる事と  
か、後……あー、なんだ？

指折りしながら数え、頭を搔いてまあいいや……と呟き、オレ達を見渡し、うん、と一つ頷く

「皆さあ、苦しいこと泣きたいこと悔しいこと、もうダメだって思うこと……全部俺に言えよ」

俺が全部受け止めといてやるから……そう言う葵は、何時もの馬鹿で全部なんて無理だろうと、お前が先に潰れるぞと、言葉が浮かんで形にならず消えていく  
何故なら、

「その代わり、俺に、出来るんだって、夢じゃねえんだって……背中で、語ってくれよ？俺は弱いから、守られるだけだから、だからいや、だけど……」

一息付き、

浮かべる表情は何処までも自信に満ちて、何処までも……希望に満ちていたから

否定すべき言葉は掻き消され霧散してく  
そして、

「馬鹿だからさあ、俺……何時でもおまえ等んこと信じてっから」

だから皆俺から離れるな

ああ後……これから改めて頼むわ、俺の最高の親友達

そう告げて満面の笑みを浮かべた  
だから、

(ああちくしょう……)

カッコいい、さなあ……無意識の内に戻った口調は、此処に居ていと、離れるなど……言われた安心からか、全幅の信頼を寄せられた喜びからか、は分からないが

(敵わない……さ……)

凍りつかせた感情を溶かすには十分過ぎるものだった

自然と笑みを浮かべたオレに、見ていた皆も、

「……はは、は……ああ……お前は、危なっかしくて見てられんからな……」

「ふふっ……何処までもお供するで御座るよ、未来の王……」

自然に笑い、頷き……涙を零した

だから、

(ああ……このクラスの皆と一緒になれて)

本当に、良かった……そう思えた

しばらくそんな温かい時間が流れたが……

葵が思い出したように、

「っあー!! 痛え!! マジで痛え、ってか口切れてるしうわぁ飯食う時俺マジ大変じゃん!!」

と殴られた頬を押さえ涙目で何時ものように叫び出した  
だから、

(カッコいいんだかカッコ悪いんだか……難しい奴さねえ)  
呆れたような、微笑ましいような感覚が広がりまた笑えた  
しばらく皆で宥めてやっていたが、

(ああ、馬鹿だから仕方ないんさ、ね)

理由付けとしては万能な馬鹿に、

後悔は笑える程に残って……固いと思っっている決意もすぐに揺らいでいくだろう未来を思っても、怖くは無いとそう思えた

これから先どれだけ泣こうと、怒ろうと、憎もうと……

コイツが居れば、また何時でも自分に戻って来れそうな気がして

「……遅すぎる、けど……」

これから僅かだろうと、這いずって無様だろうと……オレは、進むさ

何時も通りでは無いけれど、

ほんの少し、前を向いて告げる事が出来た

そして、

皆から帰ってきた言葉は……

「当たり前だろう、皆一緒だ」

そんな、温かな言葉だった

(はは……良かった)

この国の未来はまだ……

まだ終わりに向かってはいないのだと、心の底からそう思った  
今はまだ、そう思えた

\* \* \*

夕暮れ時……

下校していく生徒達の姿を屋上で眺める影が一つ、佇んでいた  
吹く風に遊ぶように舞う長い髪は、光を受けて色を変える  
鋭く赤い、双方の瞳は一つの小さな鏡を見つめている  
其処に映っているのはその影と全く同じ姿  
唯一違うのは、その両目は穏やかで、碧眼であることが……

「……………宣戦布告から、もう二日経った……………どんな感じだ」

赤き目を持つ影が、鏡の中の碧眼に話しかける

碧眼は鏡の中でアイコンを起動させ静かに笑い、

『俺達が参入した事による歴史のズレは其処まで無いようだねえ』

嬉しげに告げた

無邪気に笑うその姿に、微かに赤眼が目を細める

碧眼の映っている小さな鏡を優しく撫で、くすぐりたいよ……………と、  
笑う碧眼に息を漏らして微笑む

「それは良かった……………お前が悲しまなくて済むな」

『はは、君は心配症だなあ……………大丈夫だよ、俺は丈夫だから』

ほら……………そう言い、手を広げて鏡の中で回ってみせるがその身体に  
は無数の傷跡が見える

それに微かに赤眼の表情が曇るが、

カンツ、カンツ、カンツ……

ふいに、階段を登ってくる音が聞こえ意識をそちらへと向けた  
大きくなってくる足音に、溜息を吐いた

「……誰か、来てるみてえだな」

『そつらしいねえ……じゃあ、交代しよう』

碧眼が小さく微笑む

それに赤眼は頷きを返事とし、鏡に手を置き、

「……俺は、お前を守る為に生まれたんじゃない……俺は、お前を  
守りたいから……」

だから、自分の意思で生まれたんだ……

最後の呟きは、

「あー？おい、皆帰ってんだ、藍も早く帰れよ？じゃないと、オレ  
が帰れねえんだわ」

そんな来訪者の声に掻き消された  
そして、

「ああ……すみません、ジャンス先生、俺も今帰りますんで」

屋上に佇んでいた藍は、鏡を仕舞い、笑みを浮かべた

何時もの、教師としての笑みを……そして、彼は静かに屋上を後に  
した

(歴史通りなら……特訓する期間は後四日だなあ……)

歴史通りならば、五日後に帝国からの第一精鋭部隊が来る  
そう、歴史通りならば……

「……それまでには、死なない程度に鍛えてあげないと、なあ」

ねえ、真紅……

先ほどの赤眼を思い浮かべ、言葉を掛ければ

『ああ……そうだな、翡翠』

思ったとおりの答えを貰え、満足の笑みを燈し踊り場の窓から外へ  
飛び出した

何もせずともすぐさまマイコンが起動し、着地の体勢を取った頃には  
準備は全て整っていた  
だから、

(全てがこう、上手くいけばいいのになあ……)  
そんな不可能な事を思い浮かべてしまった  
それに気付き、目を瞑って自嘲した

(この程度の事が上手くいっても……)  
歴史はそう簡単には変えられない  
少しずらす事が出来るとしても、精々……

「悲しいよなあ……死ぬ順番、ほんのちよっただけ変えたただけだっ  
たなあ」

死なせたくなかった人をやはり死なせてしまった

これから先はどうなのだろう？

やはり……



(ただの、歴史の再現になっちゃうんだろうなあ)  
アスベル……彼が死んだように、  
エリスに、ウルシエン……彼女等が裏切ったように……  
そう、全ては不可能なのだ

初めから……願ひ乞う事さえもが、神々の怒りに触れる許されない罪  
歴史を、世界を憂いても恐らくそれは、  
変わる事無き……

「悲しいなあ」

言葉は風に掻き消され、

手に持った鏡の中の彼だけが……悲しげに優しく、見つめていく  
れた

願い+信頼〓ほんの微かに開いた扉

この手に掴めるものなどたかが知れている

だから手を伸ばした

だから手を伸ばす前に諦めた

そして両方を経験したからその先に後悔と苦しみしか無いのを知った  
遙か昔……今は無きこの両の手が掴んだものは、

虚無でしかなかったのだと理解した

故に思った

伸ばそうが諦めようが所詮虚無と後悔と苦しみしか手に出来ないの  
なら、

初めから何もしない方が楽ではないか、と

所詮意味のないものならば、

必要なんてないではないかと……そう、思った

そしてまた、世界は……

頑張っても救われないように出来ている

頑張って何かを手にしても、すぐ奪われるように出来ている

(頑張って、頑張って頑張って頑張って頑張って……)

俺の、俺達の夢を叶えた先にあったのは、

理不尽なまでの、全能とされる存在からの破壊

故に、理解した……いや、理解するしかなかった

どれだけ思いが強くて届かない事もあるのだと

絶望しか生まれぬ事もあるのだと  
あの時の俺は、理解することでした……

「生き延びる術が、無かったなあ……」

昔を思い出せば、何の意味もないのにベットの上で咳く  
そして、

こんなにも愚かな大人に成れ果ててしまったと、  
時の流れは残酷だと、

溜息を吐きながらそう結論付け、過去から見つけた抽象的な絶対定  
理を頭の中で暗唱するのを止めた

今は教師としての、

藍「イウィンデルとしての、思考に必要な無いことだ  
それに真紅に叱られて……いや、心配されてしまう

（俺的には……最後のが一番堪えるよなあ……）

真紅は優しい

俺を守る為に、自らの意思で生まれてきたとまで言ってくれたりも  
する

俺とは全く違う、本当に……

そこまで思い、ちらりとベットの从上から、机の上にある手鏡を眺める  
そしてふと、

（あ……別にあれじゃなくとも、鏡がガラスとか自分の姿映るやつ  
なら真紅が居るんだ……）

そんな事を思い出し、苦笑が漏れた

「……ってことで、早速……」

淡い緑のカーテンを自分の姿が完全に映る程度に開く  
そして自分の姿が映っているのを確認してから手を触れ、彼の名を  
呼んだ

すると、映っている自分の姿の瞳の色だけが赤く染まっていき……

『……………どうかしたのか、翡翠』

真紅が、来てくれた

分かりずらいが、心配そうな顔をしているような気がする

（ほらまた、心配かけちゃったよ……………あ、そういえば彼が生まれて  
から、心配しか掛けていないなあ……………）

凄まじい事を思い出し、窓を撫でる

恐らく今俺は苦笑が浮かんでいるんだろう、真紅がまた心配そうな  
顔をした

「何でもないよ、真紅……………俺は、大丈夫、大丈夫」

『……………お前を、苦しめる全てを俺は……………お前の許可さえあれば  
俺は、』

悲しげでいて苦しげな真紅がその先に言う言葉は知っていた  
だから、

「……………大丈夫だよ」

窓の中の真紅の唇に指を軽く触れさせ、その先を途切れさす

（……………本当、真紅は優しいなあ）

契約と『アレ』の呪いとも言える……………この身を流れ続ける血によっ  
て消え行くココロがまだ、

温かいと感じてくれる

それはきつと、生徒達のお陰もあるだろうけど……………

(一番は、真紅……だなあ、もう云何年の付き合いだし)

「ありがとう真紅……嬉しいよ」

苦笑では無く笑みを浮かべるとほんの少しだけ、真紅が安心したような顔をした

だから、またね……そう言い、カーテンを閉めた  
そして、壁に凭れ座り……呟く

「……何時か、彼を俺から……」

何年もの間縛り続けている俺から、  
悲しませ心配を掛けるしかない俺から、  
この、死んでいくしかない……俺から……

(開放、してやりたい……)

いや、違うか……開放しなければいけない

(真紅は、曲りなりとも真紅として生を受けた、だから……俺なんかの中に居ていい存在じゃ)

けど、俺は真紅が居なくなれば俺で居られなくなる

『アレ』の呪いに飲み込まれ……過去の、もう過去になってしまった親友達の生きた証が、  
全てが消えてしまう

「そん、なのは……嫌だよ、なあ」

ああまだ俺は我俣を言っている

せめてせめて、アイツ等の存在の証だけは、と……  
それだけ残せたら死のう……と、もう何十年も同じ事を繰り返し思  
つて

(所詮俺は思うだけ、か……)

嘲笑ともいえる嘆息が漏れた  
その瞬間、

「え、と、あの……藍、先生……だ、大丈夫？」

自らの大き過ぎる失敗を悟った

（まずった……フェルさんは片目見えない代わりに耳が相当良かったんだ）

聴覚が人離れしている葵と住んでないからって油断していた……  
ばれる、ばれたか？

（ばれたならもう、彼女は此処で……）

ココロの奥が凍りついたように一つの指令を下す

だから、彼女の最後になり得るかもしれない質問をした

「……大丈夫だよ、フェルさん……ところで、どうして俺が心配になったのかな」

「ふえ？え、えと……た、溜息が……聞こえたから、だから疲れてるのかなあって……思っ……」

言葉の最後になればなるほど、心配そうな気配が強まった

心の底から心配している……そういった気持ち、声に乗って届くから、

だから、

（……溜息しか聞いてない、か……ウソでは……ない）

『怪しいなら殺せ、全て殺せ』そう叫ぶ何かを抑え込み、  
安心させるように声を和らげた

「そっかあ、ごめんね、心配させて……うん、フェルさんの言う通り……俺も少し疲れたみたいだね」

そう言った直後、

扉に手を掛けるような音が聞こえた

(……本当、いい子過ぎるよなあ)

そう思った

とても優しく誰にでも分け隔てなく接する

それは非常に素晴らしいこと、実に人間としては満点だ

だが、

(そういう子から、死んでいくんだよねえ……)

割と高い確率で、

心の中でだけ呟き、扉が開いていくのが見えたから

「ちよつ、フェルさんタンマ！俺今着替え中で……ズボン脱いでますっ」

恐らく常識人のフェルさん辺りにしか効かないであろう事を叫んだ  
全て演技でズボンなんて脱いでいないが、

「え、へ、あ、ふええええ？！ご、ごめ、ごめんなさあいつつ！  
！！」

慌てた声と同時に扉が凄い勢いで閉まり、一階へと駆けていく足音が聞こえた

(あー……純情で素直な子って、いいよねえ)

大分扱いが楽だ……変人共を相手していると、本気でそう思う

「あ、そう言った意味では、変人を難なく相手出来るジャンス先生も……」

……何故か寒気を感じたのでその先は言わないでおいた

そして、手鏡を何時もの教師服の中に仕込み用意していた服を着る

(よし、準備はOK……って、あ)  
今日の予定をジャンス先生に報告することを、忘れていたのを思いだし

「……し、真紅……あはは、どうしようか」  
『……殺すか?』

手鏡を覗けば、ほんの少し嬉しげにそう返してくるから、  
「ごめん、それ却下」とだけ告げまた服の内に仕舞い

「……今日割と運無いなあ、俺」

溜息と共に部屋を出た

そして、

まだ顔が真っ赤なフェルさんと一緒に登校した  
残り三日……

それだけでどれだけ彼らの底上げを出来るだろうか、と  
教師らしい事を思い、ほんの少し楽しみながら、学校へと……向かった

「あー、セイレンセイレン！あのさあ、今日の授業ってなんだかあれなんだろ?……あれえ?なんだっけ」

学校に着いて、自分の机に荷物を置いてすぐ葵様が話しかけてくる



しかも途中から可笑しなことになっているが、

(まあ、何時も通りですね)

そう結論付け、まだ首を捻っている葵様の頭を、捻っている方向へ押ししてみる

「っちよ、おおおお?!!ギブツ、マジギブだつ?!!死ぬ、首の骨折れるっ?!!」

「ご安心を、痛くしているだけで折れる程はしませんので」

「い、痛えのは嫌いだって?!!てか、マジギブギブ、ギブアップツ?!!」

バンバンバンツ、と机に愛情表現をし出したので、何となく面白くないので放した

すると、首を押さえながら大袈裟に肩で息をして

「セイレーン……ちよ、マジでこれは駄目だぜ……」

と、ぐったりと私を見上げてきたので何となく良しとしてみた

最近、葵様のぐったりしている姿を見るのが日常と化しているよう  
な……

(……ええ、気のせいですね、さもなくば葵様は最弱の称号を……)  
思いかけて、止まった

ああ、そうだ彼はもう……

(とっくの昔に、もう手に入れていましたね……)

ほんの少し溜息を吐き結論付け、まだぐったりしている葵様を復活させるべく話題を投げかける

「それで?今日の授業があれとは何ですか?」

「ああ……あのさあ、なんか藍が授業してー、俺等のクラス全員と涼は授業開始5分前までには校庭来いってー」

ニコニコといつもの様に話す葵様

だが、

(……授業開始5分前?)

ちらりと時計を見る

今此処は最上階から二階下(それでも10階)の教室で、授業開始まで残り……

「……残り4分で10階から校庭まで行けと？」

ピタリ、と周りで話をしていた皆様の動きが固まる

そしてギギギ、と音を立てそうなくらい不自然な動きで葵様を見て、

「いやあ、はは……忘れててなあ、スマーンツ！」

「この馬鹿がああああっつ!!!!!!」

何処から取り出したのか、ハリセーンで一通り葵様をビシバシッと叩いてから全力で教室を出て行った

(ふむ、あれが愛のハリセーンと言う物ですね)

一つ、新たな事を知った……そう思いながら、

少し状況判断をする事にした

教室に残ったのは撃沈した葵様、そんな葵様を心配したフェルディーン様、ノリで残ったらしいアイシス様、私の四人だ  
そして残り時間は3分30秒、相手にとって不足なし

「アイシス様、転移の陣を展開してください」

「あら？構わないけど……いくら私様と言っても3分は最低でもかかるのよ？30秒で転移出来る距離でもないのよねえ……私様の才能を持ってしても、ふふふ」

冷静に校庭に居る藍様との距離を測りつつ、無理だと判断原因を述べながらも、

「まあいいわ！元々こんな長い階段、私様は下りるつもりなんてないんだから！『享楽の扉』よ、特等席に案内しなさい！！」  
<了解致しました>

私の言うとおりに起動してくれた

そして、「これからどうするの？」とばかりに笑う

信頼しきっているかのようなその表情に思わず、

（さすがは、葵様の姉ですね）

そう思わざるは得ない  
だから、

「フェルディーン様、此処から落下するとなるとどのくらいの時間が掛かりますか？」

「え、えと……うん、風の音、色からして……3秒、かな」

「分かりました、では……私がその時間を10倍延ばします、アイシス様、その位置ならば、」

「ええ……30秒以内でも何でも大丈夫よ、ふふ……やるじゃない、セイレン」

全力で信頼に応えるのが礼儀というもの

アイシス様に少し微笑んで返し、未だ地べたに倒れている葵様に近づくと

「……皆すげえなあー……」

微かに羨望が混ざったような声が、聞こえた

床に耳にくっつけているから分かる

飛び出していった奴等も、凄まじい勢いで走っている  
多分、音からしてギリギリ間に合うだろうスピードだ

そしてセイレン達も、自分たちの得手不得手を知り、その上で間に  
合うように行動している

本当に、心の底から凄いと思う  
だから、思ってしまった

(……俺には、)

俺には何が出来るんだろう、と

皆はすごい

本当にすごい、力も頭も満点だ  
だけど俺は、

(俺には……ねえよなあ)

俺は王になると言った、そして皆がならせてくれようとする  
きつと、なれるんだろうと思う

なるんではなく、なれる……俺が何もしなくても、ならせてくれる  
だけ、

(そんなの、あれだよなあ……)

他人に頼りきった王に、人に、誰がついてくる？

答えは最初から出ている、誰もついて来やしない

「……皆すげえなあー……」

眺めて、感じて……そう言うだけの自分は、何が出来るんだろう  
そう思っつて、ほんの少し苦しく、悔しくなつた

(あー……俺滅つ茶カッコわりい……)

カッコ悪くて、情けなくて……

皆には見えないように拳を握り締めた、瞬間

力はイメージだよ、葵

頭の中に直接響くかのような声が、聞こえた

「あ?!」

顔を上げて辺りを見渡しても、声の主と思われる奴は居ない  
見えるのはほんの少し驚いたようなセイレン達の顔で、

(俺だけに、聞こえんのか、これ……)

ただ、驚いた

そんな俺に構わず声は続ける

想像し、創造出来たモノが力を得られる……君のようなモノ達  
は皆、そうだ

(俺の、ようなモノ……?)

皆とは違い、

アイコンをまともに発動させる事の出来ない出来損ないのような奴が、  
他にも居るのだろうか

だけど、今まで俺は見たこと無い

でももしも、この声の主が藍のように世界を見てきたような奴だっ  
たら

俺なんかより膨大な時間を生きてきた奴だったら、

大丈夫……君は、力を手に出来るよ……出来る……で、き……

「あ、ちょ、おい!？」

考えている間に、声は薄れ完全に聞こえなくなってしまった

(い、一体何なんだよ……)

訳も分からず、セイレン達には驚愕の顔で見られるが、

(……出来る、か……)

そう言ってもらえたのは、純粹に嬉しかった

出来るんだと、俺にも、出来るんだと……嬉しかった  
と、

「……状況がよく見えませんが、残り1分、もうすぐ来ますので、」  
「お、おおおっ?!?!」

セイレンのそんな声と共に、身体を凄まじい力で引っ張られそのまま、

(ちょ、マジ窓開いて……ってか、今気付いたけどさっきの計画色んな意味で紙一重的な?!)

焦りが全身を蝕んでいくが、セイレンが小さく

「……では、命運を共に賭けますか」

そんなことを言うから、

(……やべ、マジで悪くねえかもって思ってる、俺)  
俺の服を掴んでいたセイレンの手を、そっと握り……

微かな反応の後、握り返されたから……そのまま、

「紐無しバンジーだなんて素敵ッ!!!」

「ひっ、こ、わ、怖いっ……!?!」

「ぐえっ」

喜びを感じる前に、変な声が出た

後から飛び出した二人に空中で踏まれるような感じとなり、それに便乗したセイレンが手を繋いだまま俺の上に乗るから、

(うわ、ヤバエ、マジ色んな意味でヤベエツ!!!)

俺今乗り物人間的な何かか?! なあ?!

これは得役だと思っただけいいのか悪いのか……複雑な気分のまま、落ちていった

「『進化の扉』……風よ、我等を包め!!!」

俺の胸辺りに乗っているセイレンがアイコンを起動させる

ふわり、と……徐々に加速度が減っていくが……正直この位置は、

(くっ……す、スカートの中身が見えそうで見えねえっ……!!!)

萌え心が刺激される、色んな意味でヤバイ位置だ

しかも右を見れば姉姉ちゃん、左を見ればフェルちゃん……二人とも同じような状況である

(おおお、俺なんかマジヤベエツ!!!)

見えそうで見えない方がぐっと来るなこれっ……!!!

そんな感動を覚えていると、微かにセイレンの手が震えた

「セイレン……?」

「っ……どうやら、予想外に、付加が大きいようです、ね」

何時もの声に、微かに苦しげなモノが混ざっていた  
俺が何か言う前に、

「秘密に、してください……下りるまでは、持ちます、から」

そう言われた

(秘密につて……)

聞こえる呼吸音が微かに乱れてきている  
手から伝わる心拍数が、上がっている

確かに、セイレンの言うとおりに下りるまではギリギリ持つだろう、  
だけど

(俺は……俺は、何なんだ……)

好きな子に苦労させて、目の前で苦しんでいるのに何も……

(カツコ悪すぎんだろ、俺っ!!)

少しでいい、彼女の力になりたい

少しでいい……彼女の苦しみを和らげる、そんな力が欲しい

何も出来ない歯痒さから、心の中で叫ぶようにそう思った  
瞬間、

なあ、葵

聞こえたのは、さっき教室で聞こえた声と同じで、  
だけど今度は分かった、この声の主は……

(っ、この声、藍……?)

藍が居るはずの校庭の方に、目を向けた

此方を見ている藍と目が合い、その口が小さく言葉を紡いだ



イメージ、そして思いの強さ、だよ……葵

そして、付け足すように

大丈夫、おまえは……おまえは、ちゃんと出来るから

言って、笑った

(そっ、かあ……藍、信じてくれてんだな)

なら、何も怖がる必要なんてない

何も出来ないと言わなければならない

だって、

「セイレン」

「……っ？」

(信じてくれる奴が、居るんだもんなあ！)

繋いだ手に、力を込める

ただ願うのは……彼女の苦しみが和らぎますように

ただ願うのは……

「俺も、おまえの力になるから」

俺の初めての友達」

」

おまえの嫌いな大嫌いな、『人』の役に立つことを許してください

その瞬間、

閃光に包まれ全てが見えなく、聞こえなくなった

だけど、

この手だけは離さぬようにと……感覚すらも消えた手で、掴んでい

る善の何かを強く、握り締めた

## 残り三日＝それぞれの過ごし方の決定

今日の授業は何を思ったか、葵に伝言を頼んだらしく体力テストのようなことになっていた

いや、なっている、現在進行形で

……まあそれは置いておこう、普通の授業が行われないのは何時もの事だ

悲しいかな、俺達はもうそういうのに慣れてしまっていて体が勝手に反応してくれるくらいだ

(ああ、嘆かわしいな……)

本当に嘆かわしい

だがそんな事さえも何処かに飛んでいきそうなくらいな非常事態が起こった

もうこの際だからはっきり言おう、訳が分からない

「……なんで貴殿等が、降ってくるのだ……」

しかも、階段を使ってやっと外に出た俺達の真上に

例の如く、必死で袖李と楓が上に乗っかっている四人を退けてくれようとするのだが……

どうやら気絶しているらしく中々うまくいかない

俺と同じように、下敷きになっている鴻苑が溜息を吐き、呟いた

「……マジでオレ、潰れかけてる気がするさ……」

「……言うな……もし、今此処で誰かの意識が戻ったら、」

俺達は殺される、それはもう綺麗に殺られる

そう告げると「はは、確かにそうさねえ」と苦笑された  
その顔にもう翳りは無くて、

(良かった……何とか、前に向かえ出せたのだな……)

気付かれないように安堵の溜息を吐いた

直後、

「や、やっと追いつきましたわ……って、ひゃうん?!」

「な、ちょ、ちよっと待て!!」

「うわ、これマジでやばいさって……!!」

遅れて出てきた涼が、伸びている葵の足に引っかかり此方へ向かって倒れて、

それに柚季と楓が押されて三人一緒に倒れ込み、

(ま、不味いつ……)

恐らく同じ運命を辿るであろう鴻苑を見ると、

「死んださ、これ……」そんな悟ったような横顔が見えた

そして……

「つ……つぶれる……」

「し、しぬ……マジ、息が止まる、さ……」

7人の下敷きになり身動きも取れぬまま

虚しく、授業開始5分前のチャイムが校庭に鳴り響いた

\* \* \*

「……………何だか楽しそうだなあ、向こう」

白い粉が大量に入った線引き用具を押し、校庭に模様を描きながら  
咳く

視線の先にあるのはもちろん、面白い事になっている生徒達

(普通だと怪我したりするけど……………まあ、大分丈夫だから大丈夫だよなあ)

丈夫なのは良い事だ、この先多少無茶な事があつたとしても

「ある程度の事じゃあ壊れない……………って、また俺こんな考え方してるし」

大分『アレ』の呪いにやられてきたかなあ？

思わず苦笑が浮かぶ

そして、予想よりも早く10人分は入れそうな、術式を織り成した陣を完成させた

(うん、割と上手いかなあ)

出来栄えにそんな評価を付けつつ、まだ向こうで騒いでいる生徒達に目を向ける

どうやら少し手伝つてあげた葵も、少し無理をしていたセイレンも、ちゃんと目覚めたらしく元気そうだ

っていうか、毎度のことながら喧騒の中心に……………あ、葵が吹っ飛んだ(……………若いつていいなあ……………)

そんな年寄り染みた事を思い浮かべ、目を伏せた

思い出すのは過去、大切な思い出

親友達と、笑い合った大事な……………

俺はアレを、自分の手で……

『……翡翠？』

無意識の内に手鏡を握り締めていたらしく、  
気遣うような声が聞こえた

はっと我に返り手鏡に映っている真紅に笑いかける

「……何でも、何でも無いよ」

「驚かせてごめん」それだけ言い、

何か言いたげな真紅にもう一度、心の中でだけ謝罪し手鏡を仕舞う

(駄目だなあ、俺……)

思い出はちゃんと箆笥の中に仕舞わないと……そう思い、

「ほーらほらおまえ達、早く来ないと遅刻だよー」

未だ遊んでいるとしか見えない生徒達に手を振った

呼ばれて飛び出て……

と、まあこんな感じで続く登場セリフがあったような気がするけど、  
私様の居る此処じゃ流行ってないから言うのを止めるわ

なぜならば、

（流行について行けない女は古びていくだけだからよっ！！ふはは、負け組みになんてならないわ、私様は永遠の美女よ、美女！！）

……と、いつもの様に騒ぎたいのだけれど

好きなタイプの男性ひと　　藍　　が何だか真剣に準備していたらしいから大人しくするわ

ふふ、私様偉い、偉いわ！！そう、私様はKYH（空気読める人）よ、けーわいえっち！！いやん、何だか破廉恥！！

「……えーと、アイシスさん？俺の話聞いてくれてるかなあ……」

「ええ、バッチグーよ藍！！好みのタイプの男性の話は何時でも何処でも聞いているわ！！クハハ、告った、告っちゃったわ私様！！いやん、恥ずかしいっ！！」

頬に手を当て少し顔を伏せるように言うと、藍が虚を突かれたような表情になる

どうやらこういった話題に耐性がないようなので思わず……

「あら、藍って案外可愛いのね！」

思った事を言ってしまった  
すると、

「……………あ、え、と……………」

耐性云々以前にかなり苦手であると理解した

現に今、藍の顔が微かに赤い

そして困ったように視線を彷徨わせ、言葉を探そうとするが、言葉

にならず……

「え、と……あり、がとう……？」

頬を掻きながら、苦笑しながらそう言った

「　　つ、　」

はつきり言おう

萌えた、色んな意味で……萌えた

（か、可愛すぎるじゃないのよもう！！ほ、本気モードスイッチ入  
つちゃうわ?!）

混乱し出した頭に多少驚きつつ余裕を見せるように笑みを浮かべた  
ありえない程に頬に熱が集まっているがそれは今は無視、無視だ

「っ、ふ、ふふふふ！！い、いいわ、貴方私様のドレウィー二号に  
任命してあげるわ！！」

「えっ?!」

「って、姉姉ちゃん、藍困ってるぜ！まずこついうのはちゃんと順  
序よく……えーと、まずは調教してから」

「す、すすすストップ！！葵殿何処からそんな言葉を覚えてくるで  
御座るかあ?!」

ドレウィーが何やら狼紳士らしき事を言い出した

（ふふふ、何だかカオスの予感ね！！いやん、混沌って素敵よ！！  
けしからんもつとおやりなさいっ！！）

さりげなく藍に抱き付き、その赤く染まった顔をもつと赤くさせな  
がら笑う

その間にもドレウィーは、また問題発言をしだす



「え？そりゃあ……袖李の教科書から？」

「な、なななっ！ー！ちよ、兄者の前でそう言うことはっ……」

「……ほお？袖李、貴様……そんな如何わしいものを学んでいたのか……？」

「ご、ごご誤解で御座るうう！！！！」

涙目な袖李の弁解に薄ら笑みを浮かべる兄、帷の姿といったらもう

……

（こ、これは鬼畜？！鬼畜な雰囲気かプンプンしてるわ！！）

けしからん、もっとやれ

引き離そうにも、触れていいものか駄目なものか悩んでいる初心な藍を尻目に思っ居ると

またもや、

「調教かぁ……私も鴻苑クンにしてもらいたいなぁ……なんて……」

「……楓は、そんなことするまでもなく、オレのモノさっ」

「こ、鴻苑クンっ……う、うんっ、嬉しいっ」

「楓……」

「鴻苑クン……」

頬を染め合い、ノロケ出す二人

これでまだ恋人じゃないって言うのがもう不思議だ、学校の七不思議の一つである

そして傍から見ているとマジで熱い

いや、見ているからこそ熱いのか……

（それが問題ねえ……）

そう思いながら、さり気無く胸を腕に押し付けてみる

藍の頬の赤さが増したので良しとして、

「ラブラブでございますね、皆様」

「え、えと……そ、そうだねっ」  
「そうですね、素晴らしいですわ」

ちやっかりとカオスから離れた安全地帯で傍観している二人を巻き込むべく近づこうとすると、

「っ！」

「……うん？藍？」

ビクリッ、と藍が肩を揺らした

顔を見ると、さっきまで赤かった顔が真っ青だ  
一体何が……そう思った瞬間、

「……ほう？藍、お前……うちの娘に何手え出してんだあ？」

満面の笑みで藍の肩をがっちりホールドしたジャンス……教師が、  
現れた

（こ、ここここっ……これは萌え的展開?!）  
安全地帯に避難しだす皆に紛れて離れると、

「い、いや……お、俺は手なんて出してませんっ」

「ああ？お前、俺の娘がそんなふしだらな女だとも言つつもりか  
あ？」

「そ、そんなことを言ってるつもりじゃ……」

現在藍、劣勢

つていうかマジ泣きしそうな感じだ、てか現在進行形で涙目だ

（涙目も……可愛いわね！）

萌えるわー！と、一人で踊っていたらドレウィーも参加してきた  
（ふふ、意味分かってないのにそのノリの良さは素敵よ!!）

フィニッシュを決め、同時にぐっ……親指を立てて健闘を讃えあった  
ちなみに外野は白い目だった

「だ、だから……え、えーと、俺そろそろ授業の方をー……」

何とか教師から離れられたらしい藍が、おずおずと苦笑しながら言う  
それに「ああそうだったなあ……」と、教師が頷き、それに安堵し  
たかのような溜息を藍が吐いた……  
直後、

「人vs人の勝負つても見せてやらないとな、なあ藍先生？」

そう告げ、

殺気を放って教師がアイコンを起動させたと同時に走り出した

「え、ちょ、待ってくださいよジャンス先生?!」

走ると同時に、顔を一瞬にして青ざめさす藍に思わず笑ってしまう

(顔を青ざめるってこたあ、)

衝突が回避できないって分かってるって証拠だ

(……まあ、マジでびびってるって事も有り得るが……)

同時にアイコンを三つも起動させる事の出来る藍がそんな雑魚思考な  
訳がない

そう結論付け、アイコンを呼び出し

「疾風よ、汝我に属するもの、我が意のままに操作されよ!!」

加速する

それと同時に、何時も腰に常備している2本の剣を取り出し藍に向かつて笑う  
すると、

「っ……本気ですか、ああもう……俺はこっこの、好きくないのに……」

意を決したように溜息を吐き顔を伏せ、

「……容赦、しませんよ、ジャンス先生」

顔を上げてただ冷静に告げた  
迷い無い目で俺を追い、そのまま二つのアイコンを同時に起動させる  
が、

(同時進行じゃ、多少時間が掛かるみてえだな！)  
思った通りすぐには術式が起動していない  
それでもかなりの速さで展開させていく

(残念だな、藍)

「力に頼り切ってる奴にやあ勝てるだろうがなあ!!」

時折雷が飛んでくる

が、それも小さな雷だ

生憎と俺は普段から生身で鍛えてきた  
だから、

加速している俺の速さには通用しない

「そんじゃそこ等で通じてた戦法なんざ効かねえよっ!!」

地面を蹴り、飛ぶ

(初めから全力でいくっ!)

加速したままの勢いで藍に向かって、殺す気で剣を振り下ろした直後、

ガキイツ……!!

と、校庭に金属同士が擦れ合う音が響いた

「……びっくりです、ジャンス先生は、大分早いですね」

アイコンを片手で二つ操作しながら、藍が俺を見て苦笑する  
舐めてんじゃねえぞ、先輩を……そう告げると、

「そのようですね……」と、分かったのか分かってないのか微妙な返事と、

「けど、ジャンス先生……義腕コレはこういう使い方があったんですよ」

少し生意気な報告をされた

そして藍はそのまま、剣を受け止めた左の義腕で押し返し

「Set」

俺に向けて指を向け、ニイツ、と笑う

本当はお前、戦うの好きだろ……と、思わせる程の楽しげな笑み  
そして、

「フレイムレット火焰の弾丸っ」

術式の一つを、起動させた

「おいおい……俺を舐めてんのかよっ？」

炎など、全てにおいて最弱の属性

風、水、土、と……雷を除いた三種類全てにおいて劣等の位置に存在する

故に、

（は、小手調べって奴かよっ！）

俺はまだアイツの中で雑魚の位置に居るのだろうと、結論付け

（腕や足は狙っても意味がない、ましてや物理で胴や頭を狙っても防がれて終わり、なら、）

「過小評価は負けの元、だ！！」

至近距離から、想像以上に遅く飛んで来た炎の弾を軽く避けた後も  
う一度距離を詰める  
剣を握り叫ぶのは、

「疾風来たりて纏えっ！」

属性の無い武器に属性付与する効果のある言葉  
右の、左の、剣に風を纏わせ

「ブチかませ突風……」

狙うは足元……

「これでチェックメイトだっ!!」

全力で左の剣を投げる

直後、

「っ、突風！」

突風に藍が包まれ、アイツの手がアイコンから離れた

(好機っ……!!)

始めに施していた加速の、二段階目を発動させ、

「これで終わりだッ!!」

背後に回りこみ剣を突き立てる

直前、聞こえたのは

「……俺は、ジャンス先生を過小評価も自分を過大評価もしていませんよ」

苦笑したような、そんな藍の声

そして、

「雷の壁っ?!」

「そう、貴方が……俺が隙を見せていたら、背後に来てくれると思っ  
ていましたので」

避雷針代わりに持っていた剣を投げると、それに雷が一気に命中した

それを眺めて、藍はニコニコと楽しげに笑った

(……コイツ……案外、戦い好きじゃねえかよ……)

白々しい嘘吐きめ……そう呟き、

雷が全て止むまで武器の回収は不可能と判断し

「……この勝負、俺の」

「負けですね、これ、俺の」

何故かセリフを先に取られた

「な、てめ、何でお前が俺のセリフ取るんだよ」

「いやあ……だって、俺もっ」

へたり、と地面に座り込み藍が苦笑し、

「体力尽きましたから降参ですよ」何時用意していたのか、教師服の中から白旗を取り出し大きく振る

正直思った

(コイツ殴って良いか……?)

「うわ、ちょ、ジャンス先生っ暴力反対ですっ!!」

白旗を持ったまま、頭を庇うように叫ぶ藍を見て

「ジャンス先生は降伏を求めてきた相手にも暴力振るう教師」

というレットルを貼られそうな気がして、握り締めた拳を解き、座りこんでいる藍を引っ張り立たす

そして、

「あー……まあ、人vs人ってのはこんな感じだ」

酷く真剣な顔で見ていた生徒達に、決着はついたとばかりに告げた



すると、

「……先生達みたいに、強くなるには……」

どうしたらいい？

強い決意の目で、そう言われた

（ああ……こいつ等……）

馬鹿だけど、愚かではねえんだな……そう、思った

この間の……

宣戦布告の事も、忘れていなかったのだと……誇らしくなって、思わず笑みが浮かんだと、

「皆、強くなりたかって……本気で思ってるみたいだねえ」

何故か藍が、

戦闘中にも弄っていたのと同じアイコンを、今もまだ弄りながらそう言った

疑問に思う俺の前で、生徒達が黙って頷くのを確認し、

「なら、後は自分の望む力を手に入れて来てごらん」

そのアイコンに手を翳した

直後、

「っ？！」

「じゅ、術式の陣が……」

校庭に描かれていた陣が光り、それが十個の小さな光りに別れ……

「と、扉……？」

十個の扉になった

模様も色も全て違っており……何やら手の込んだものを感じた、が

「ちょ、お前、俺との戦闘中にこれやってやがったな?!」

「あ、いや、はは……思ったより、時間……掛かっちゃった……みたいで……」

手抜いてやりやがったのか……そう睨むと、縮こまった

言いたいことは山ほどあるが、取り合えず小さくなった藍を捕まえ、この得体の知れない藍の頑張った？らしい産物の説明を促すすると、ちらりと俺を見てから説明を始めた

「これは、まあ……皆に合った、新しい力を手に入れる場所への扉……って所かな」

「新しい、力ですか？」

「ああ、そうだよ……恐らく、俺の調べが正しければ帝国……敵は、後3日後に精鋭部隊を投入してくる」

「み、3日で御座るか?!」

藍は俺等教師や、

国の王にも話さなかった事を生徒達の前でぺらぺら喋り出す  
まるで……

(こいつ等を戦争に……参加させるつもりか……?)  
生徒達を、一戦力として考えているかのようだった

「そう、3日……だから、時の流れを俺が予め設定してあるこの扉

に入っ……約3年、修行してもらっ」

「さ、3年……？」

「ん、こっちの1日があんたの扉の向こうだと、1年……あ、年は取らないから大丈夫」

「なるほど……藍、誰が誰の扉に入れればいい？」

「ああ……決めてないから、皆、直感的にこれだ、って思う扉の前に行っよ」

全員が全員、違っ扉を選んだ

予想外に、淡々と進んでいく事にもう覚悟は出来たのか、とか

(俺の思ってるよか……餓鬼じゃ、ねえんだな……)

ほんの少し、複雑だと思っ

そして、

「……まあ、言っくとくけど……死ぬなよ？」

それぞれの扉のドアノブを持ち、

藍の言葉に満面の笑みで振り返り

「了解！」

力強く返事を返し、旅立っ

強さを手に入れる為に、それぞれが選んだ……扉の先に

x  
x  
x  
x

最後に一つ、残った扉

何だか行きたそうにジャンス先生がしていたから、背中を押した

……突き飛ばした、とも言えるだろうがそれは後で

(……勘弁してもらえたら良いなあ)

そういう風に思うことにしておいた

『……良いのか?』

「うん……?」

校庭に誰も居なくなつたのを確認したらしい真紅が、話しかけきた  
こつこつ気を遣う所は、遣い過ぎなければ素晴らしい長所だと思つ  
(……うん、何だか教師らしくなってきた)

どうでも良い事だが、嬉しくなつた

と、

『また、歴史が変わるだろう?』

心配そうな声で言った

確かに真紅の言う通り、あまり干渉し過ぎて変えたら可笑しな事になる

いや、それ以前に

(『アレ』の呪いが進行する……)

きつと真紅は、それを心配してくれているんだろう

とても俺に、優しい人だから

「……大丈夫、俺さあ……歴史、きつと変える為に此処に居るんだ  
よ」

『変える、為に?』

「ん、そう……」

思い出すのは、最悪な過去

親友を信じ切れなかった故に全て壊れ……独りぼっちになった、馬鹿な少年から愚かな王へと成り果てた自らの……

「同じ結末なんてさあ、嫌なんだよなあ」

皆との思い出が消えるのは嫌だけど、

そう付け加え笑うと、かなり複雑な顔をされた俺もどう返していいか複雑だ、てか分からない故に、

「…………ごめんなあ」

眩き、手鏡を撫でるを返事とした

そんな卑怯な俺に、

『謝るな……翡翠、俺は、』

お前がどうなろうと、必ず助け出す、翡翠のままに居させてやる

そんな、希望を謳ってくれた

無理だよと、咄嗟に出かかったが……

「…………うん」

飲み込んで、頷けた

そして、

(…………空、今日も青いよなあ)

自分が昔居た場所と変わらない青い空を見上げて、  
未来あるこの世界の住民に光りあれ……そう呟き、三日間だけ取っ  
てある有給を有意義に過ごそうと、決意した

「俺も俺で、そろそろ動かないとなあ」

俺をあの小屋に、無人島に縛り付けていたあの子も随分と、  
(……驚いてはないか、あの子だしなあ)

きつと、話聞く相手が無くなったと、悲しんでいる事だろう  
あの子は割と、気に入った人にはかなりの執着を見せるから  
だから、

「さて、行きますか……稀代の天才の元へ」

簡易転移術式を瞬時に作動させ、  
遙か彼方に離れた場所にある島……そこに聳え立つ塔へと、転移した

317

塔の屋上に着地し、目を閉じ一息つく  
そして、

目を開けて辺りを見渡した

無機質過ぎる程の黒、そして灰色で彩られた塔……

何一つ、あれから変わっていない……そう苦笑していると、

「……生きてたんだね、翡翠……」

すぐに扉が開き、

其処に現れたのは黒いローブに大きな本、大きな眼鏡を掛けた……

純白の羽を持つ少女

「俺的に、君が生きてて良かったよ、また、話聞かせて欲しいんだ」  
無邪気な笑みを浮かべ、俺の腰辺りに抱きついてくる  
その拍子にフードがのき、長い白の髪と金の瞳が露になった

「……もちろんだよ、『セレン』嬢」

頭を撫でながらそう告げると、  
彼女は心底嬉しげに笑い

「ぐっ、」

俺をお手製の鎖で縛り上げた  
どうやら俺は勝手に逃げると思われているようで、  
まあ、椅子と一緒にじゃないだけ前よりマシか……苦笑しつつそう思  
っているよ、

「よし、翡翠、さっそく俺の部屋に行きましょう」

ご機嫌に鼻歌を歌いながら、鎖を強く引っ張ってきた  
始めの10分は何とか足取りもしっかりとしていたのだが、

(あー……この鎖……)  
力抜けていく……その感覚に、身体がふらついてくる  
前の奴の改良版か……

ぼんやりと、かなりのペースで吸い取られていく様にそう思い

これ……セレン嬢の部屋に着くまで、俺意識あるかなあ……てか、  
生きてるかなあ……

ほぼ引きずられていくような形となりながら、そんな事を思った  
そして、

(……俺……三日で、帰れる……か、なあ)  
情け無いことを思い、予想通り……

「あれ？あー、翡翠、俺の許可なく寝たら駄目でしょー……もー、  
ちゃんと話聞かせてよー」

ぺちぺち、と頬を叩かれる感覚とそんな声と共に、  
普通の間じゃ干乾びて死ぬであろうペースの吸収に、無様に意識  
を飛ばした

やっぱり、あの雇作するのに大分消費したなあ……

最後に反省として、そんな事を思った



## それぞれの力の根源？

黒い、灰色で彩られた塔の中

どうやらセレン嬢の部屋も同じなようで……

ベットに本棚、そして机……必要な物意外何一つとして存在しない部屋を見て、

(ああ、女の子なのになあ……)

もう少し色んなものを与えてあげてもいいじゃないか……意識が戻ってすぐに、そんな事を考えた  
と、

「ふーん……色々あったんだあ……ねえねえ、次の話！えとねえ、人間が出てこないお話ー！！」

何やら、嬉しげに俺の近くでセレン嬢が何かに話を催促している

(ああ、客人でも来たのか……俺寝てるままじゃ不味いかなあ……)ぼんやり、そう思っ居ると、

『そつだなあ……じゃあ、俺が昔旅した『風の翼』の集落の話でもしようか』

(え、あれ、これ俺の声？)

困惑する意識の中で、重い瞼を開けた

そこで見たのは、相変わらず身体にグルグル巻き付いている鎖(何気に、柱に括りつけられていた)

嬉しげなセレン嬢(フードは脱いで、白いワンピース姿だ)

そして、

「わーい！翡翠大好きー、葵の半分くらい大好きーっつ！！」  
『おっつと、俺潰れちゃうよセレン嬢ー』

デフォルメされた腕に抱えるくらいが丁度いい大きさの、人形  
それから俺の声が聞こえてくる

正直に言おう、  
見た目は人形故に可愛いが、本人にとっては気持ち悪いことこの上  
ない

「せ、れん嬢……なに、それ……」

「あー、翡翠起きたっ！見てみて翡翠！！これね、翡翠だよー！」  
『ああ、どうも宜しく俺』

優雅に（人形にそんなものがあるのか謎だが、確かに優雅に見えた）  
一礼し、笑みを浮かべ握手を求めてくる人形  
見れば、今着ている俺の服……ロングタイプの教師服と全く同じデ  
ザインの服を着ており

正直に言えば、気持ち悪いを通り越して最早見事だ

「え、あ……どうも、宜しく……」

手を握り返そうと、腕に意識を送った  
瞬間、

「　　っつっ？！！」

ビリビリ、を通り越したバリバリッ！！

といった強さの電流が体中を走りぬけ、思わず仰け反る  
と、

「いつ、ぐ、ああっ?!」

仰け反った先からまたもや先ほどの電流が走った

思わず声を押し殺す事が出来ず、無様に叫ぶ

そして、

無意識に反応を示した身体を感知したのか、また電流が……

恐らく動いた先から体中に電流が走るようになっていいるのだろう

連続で襲い来る強烈な電流に痺れよりも先にもう、痛い

本当に痛い、泣きそうだ

「あ、ごっめーん!」

そんな俺に、セレン嬢があちゃあ……と言いたげな顔をし、

何故かノートとペンを持って側に座る

(あ、何気に昔あげた奴だあ……)

電流により、痛みと痺れの同居している思考の中で変な所に喜びを感じ、

「うん、ちゃんと記録取らないとね!」

『頑張れー、俺』

口が勝手に「がっ、あぐ」やら「ぎう、あっ」やら変な言葉を発し出す俺を前に、

セレン嬢はニコニコとノートにメモを走らせる

そして人形の俺が人事みたくエールを送ってくれる

(まあ実際人事なんだけどさあ、これマジでキツイ……てか俺何か悪い事したっけ……?)

涙が零れたか、これは痛みだけじゃないような気がする

これは俺じゃなきゃ普通に死ぬでしょ……

勝手に喋る口は放置し、

割と冷静な思考でそんな事を考えていると、

「んー……翡翠は、やっぱり丈夫だね！じゃあもつと電流上げちゃおっかー！」

(えっ)

ニコニコと天使の微笑みを浮かべるセレン嬢が、スイッチを持って  
いるのが見えた  
けど、

その目はほんの少しだけ、潤んでいるように見えて……

(泣き、そう……?)

泣きたいのは俺、てか現在進行形で泣いている  
そんな突っ込みは置いて心配そうな目で見ると、  
徐々に笑顔が収まり、代わりに泣きそうな顔となり……

「……翡翠勝手にあの小屋から居なくなって俺、寂しかった！だからこれはお仕置きだもんっ！」

何だか理由は可愛い

とても可愛らしく、年相応でそういう所は微笑ましいとさえ思っ  
が、

ポチッ

「あつ、がつ、あ、ああああつっ……!!」

頭の芯が痺れたような感覚に陥る

目の前が見えない、真白だ……オマケに、皮膚が焦げたような臭いがする

(ちよ、こ、れ、まず、)  
思考さえも焦げ付き警鐘が鳴る

まあ、俺の身体は特殊だから多少傷付いてもすぐ自己再生していくのだが、

(ち、血が、ふ、ふっと、うづうつ)  
奇妙な感覚と共に、何かが口やら目やら耳やらから溢れた……気がした

「俺、俺っ……翡翠居なくなって寂しかった、ふえっ……ひっく、うわあああんっつ!!」

これを止めれるであろう張本人はどうやら大泣きの模様

恐らく自分の泣き声と涙で俺の叫びやら諸々は耳に、目に、入っていないだろう

溜息を一つ、

吐こうとしたら別の物が口から零れた

(かがみ、さわれ、たら……)

ふと、そんな事を思ったが動かそうと意識を送れば倍返しに痛みが返って来たので諦めた

永遠に続くかのような拷問(本人はお仕置きのもり)の中思っている、

唯一つ願いが叶うならば……

気付いてね、セレン嬢

いくら俺が丈夫だと言っても

マジで俺……死にそうです

\* \* \* \*

藍様に見送られ、  
小さな花の装飾が施された、薄いセピアと白のグラデーションの見  
事な扉をくぐった私の目の前に現れたのは、  
見たことの無い研究室のような所

「……此処は、何処でしょうか……？」

誰も居ない

自分だけの足音が、声が、木霊する

(……静か、ですね)

こんな静かなところは苦手だ……そう思った瞬間、  
ふと……

私は何時から、賑やかな事が好きになったのだろう

そう思った

直後、

「っ?!」

(空間が、歪んでっ……?!)

研究室だった場所が、見慣れたような教室へと変化する  
机、椅子、教壇、黒板……全てが私達の教室と同じだが何かが違う  
だけど、酷く懐かしい

「……此処は、まさか……」

中等部の教室……？

何故、わざわざ……そう思い、辺りを見渡した時、

『おつれが一番乗りー!!』

「っ?! あ、おい……様……?」

ニコニコと笑いながら、葵様そっくりの中学生が教室に入ってきた  
続いて鴻苑様そっくりな、アイシス様そっくりな……

見慣れたメンバーの幼い頃のような子供が、入ってきた  
が、皆様私に気付く事無く負けた、勝ったと笑っている

(……私の姿は、見えていない……?)

ただ黙って見ていると、葵様が扉の方を見て笑う

『あーセイレン、セイレン!! おはようなあ!!』

その声に釣られて振り返ると、

(……………私が……………)

居た、あれは……………

『……………煩いです、話しかけないで下さい』

拒絶するかのように彼を睨みつけてそう言ったのは、  
確かにあの時の私だ

(……………どうということ、でしょうか……………これは)

力を手に入れて来てごらん

そう言った張本人が作ったこの空間は、まるで過去の再現のようで  
(……………この先で、力を手に入れる事が出来るのでしょうか……………)  
葵様を無視するように席に着く過去の私  
それに構わず近寄り、話しかけ続ける葵様  
其処まで見た瞬間……………

また場面が変わる

昼休み、放課後、偶然会った休日……………  
どれもこれも、葵様が私に話しかけ、私は無視か拒絶するだけ



これは全て事実だ

だから、

(……………どうして……………どうして、葵様は……………)

あんな私に、声を掛け続ける？

何時だったか、答えをくれたような気がしたが……………今、何故か思い出せない

今はただ、答えを与えられない子供のように、

『セイレン！』

『……………近づかないで下さい、邪魔です』

『んなこと言わないでさあ、俺と遊ぼうよ！…！』

『必要ありません、消えてください』

『過去の私』に、

何時も置いてきぼりにされていた葵様が、  
私が居なくなっただ後で泣きそうな顔になるのを、  
見ているしかなかった

『……………明日……………明日、もう一度試そう……………うん、きっと明日は……………  
きっと遊ぼうなあ！…！』

涙の滲む笑顔でそう言い、何度も何度も繰り返す

明日になったらまた、『明日もう一度』そう言って繰り返す

『きつと明日は、』

呪文のようにそれだけを繰り返して、  
次の日も笑顔で私に……………

「どうして、どうしてですか……………？貴方はあんなにも泣きそうな顔をして、傷付いていたというのにっ」

どうしてまだ、諦めない？

どうして泣かない？どうして、嫌に…………

「どうして、私を…………嫌いにならないのですか…………」

彼の、葵様の悲しげな顔を見ると辛い  
胸が痛い、苦しい

「どっ、してっ…………」

俯き、溜息が漏れる

分からない

彼がどうして私を嫌いにならないのか

彼の悲しみを見て、自分の胸がこんなにも痛く感じるのが……  
(どうして……)

答えが、分からない

『……どうして、貴方は……私に構うのですか』  
「っ!?!」

また、場面が変わった

珍しく雪の降り積もった見慣れた公園

(この場所は……!!)  
知っている、これは確か去年の事だ  
雪の振る公園で一人座りこんでいた私に、葵様が上着を被せてきた  
ときの事……

「待って下さいっ……!!」

この先の事は知っている

だから、止めなければいけない  
が、

(身体が、動かないっ?!)  
ピクリとも、足は、手は、動かない  
唯一動くのは目と口だけで……

(そんな……)  
見て居るしか、ないとっ……？

焦る私の目の前で、あの日の再現はゆっくりと行われていく

『私は何時も迷惑だと申しています、ですが、貴方は私に構う……  
どうしてですか、答えて下さい』

座りこんでいた過去の自分が、  
黙って上着を被せてきた葵様に刀を向けて問い質した

『……俺はたださあ……セイレンと、遊びたいだけだぜ！』

ニコニコと、純粹に笑いながらそう言う葵様  
今なら分かる、この言葉は彼の本心なのだ……  
だけど、

(この時の私はっ……)

ヒュッ……

と、風切り音が聞こえ、彼の頬に一筋……赤い雫が伝った

『嘘を言わないで下さい……こんな、こんな人間じゃないただの作  
られた玩具のような私にっ……優しくしてくれる人等居ないっ……  
！！』

泣き叫ぶように、過去の私が言った  
そうだ……この時の私は、誰も信じられなかった  
だって私は……私は、

『……セイレン、大丈夫だよ』

彼が私から目を逸らさずに一歩、近づいた  
右手を差し出し、安心させるかのように笑みを浮かべて……

『っ、近づかないで下さい……殺しますよ、貴方のような……貴方  
のような人間なんて、私はすぐに殺してっ』

『無理だよ、セイレンには』

私の言葉を、真っ向から否定する  
いくら刀を向けても、皮膚を浅く切り裂こうと、彼はただ、

『セイレンは、優しいもんなあ』

信頼しきった顔で、微笑むだけ

『俺馬鹿だからさあ……作られた玩具なんていわれても、訳分かん  
ないよ、だってセイレンは、セイレンだし!』

『何を、馬鹿なことを……』

剣先が、彼の胸に……心臓の真上に、当たる  
臆することなく笑う彼

『セイレンは、俺の友達、大事な仲間！！セイレンは、セイレンだ  
っ！！』

それでももう十分じゃないか、理由付けてーの？そういうの、  
もう大丈夫だよ、セイレンはセイレン！！これ万能な！！

彼が笑みを絶やさなから、  
こんなにも優しくなんてされた事無かったから

『最後の、チャンスです……貴方が……貴方が私に近づく本当の  
目的を言いなさいっ！！』

心の底から、怖かった

優しい物がとてもとても……

怖かった

叫んだ私に、

彼が手を伸ばしてきて……

あの時私は、（ああ、やっぱりこの人もそうなんだ……）そう、絶  
望した……

だけど、

「待って!! 止めてください、葵様はっ!!」

彼の身体に、刀が突き刺さっていくのが見えた

彼が歯を食い縛りながら、過去の私の身体を突き飛ばすのが見えた

向こうから……大きな荷車が突っ込んでくるのが見えた

そして、

そして……

『セイレンさ、あ……』

明日、きっと明日は……俺と、あそぼ

微笑むのが見えて、

キイイイイイイイッガンッ……!!

彼の身体が、宙に舞った

分からなかった

ただ、分からなかった

何故彼が私を庇ったのかも、

何故彼が死に掛けているのを見て叫んだのか

何故彼を……忌み嫌っていた、作られた力を駆使してでも治したのかも

あの時は、分からなかった

だけど、

(……………やっと、分かりました……………)

今なら分かる

私はあの時確かに、嬉しかったのだ

手を差し伸べてくれて、とても嬉しかった

だけど同時に、怖かった

優しくされて裏切られるのかと、騙されるのかと、

怖くて怖くて……人が、嫌いだった

でも、



「仲間……だと……」

彼は、言ってくれていた

私がただ作られただけの玩具なのだと言っても、ただ理解してなかったただだったとしても、

（私は、私だと……）

ずっと昔から、言い続けてくれていたのだ  
ずっとずっと、信じ続けていてくれたのだ

「……葵様……私、は」

もう、逃げない

自分から、貴方から、仲間達から、信じてくれる人から

逃げない

「受け入れます……」

嫌だった事も、否定したい事も、全て……

目を閉じ、

古い記憶の隅に追いやった事実を掘り起こす  
周りの気配が遠のき、音が消えていく……

目を開けなくても分かった

( 此処は、今私が居るのは…… )

始めに訪れた……研究所、私の生まれた場所  
ふいに、

小さな足音が聞こえ目を開ける

其処に居たのは、白く長い髪と金の瞳、純白の羽を持った……

「セレン……博士」

その姿は記憶のまままで、

大きな本を抱え、大きな眼鏡を掛けて、無表情な所まで同じ

( ……私と、同じ容姿…… )

それもそうだ、何故なら私は、

「セレン博士……私は、貴方のレプリカとして作られました」

暇潰しに作られた命

ただの玩具……研究対象

ただ、それだけの存在だった……だけど、

「それら全てを……受け入れて、私は前に進みます」

この扉の世界から出て、本当の世界で会うこととなっても……

貴女から逃げない

『…………セイレン、』

ふと、彼女が笑った

見たことのない、子供らしい無邪気な笑みだった

『現実世界で、また会おうね』

そう言い私の右目に軽く触れる  
と、

「…………っ！」

(この、感覚は…………)

満たされていく感覚…………失っていた何かが、戻って来たかのような  
…………

驚いて彼女を見ると、光に包まれ姿が薄れていて

「セレン博士！！」

『プレゼント、』

無邪気な笑みはそのまま、手を振って

『受け入れた君なら、俺のプレゼント…………嫌な顔せず、受け入れて  
くれると思ってね、バイバイ！』

光に溶けるように、消えていった

と、同時に

「空間が……また、歪んで……？」

目が開けていられないほどの光に思わず目を瞑る  
風の音が聞こえ、そして消えていく……  
何度かそれが繰り返され、全ての音が消えた瞬間、

「思ったより早かったなあ、セイレン」

見知った声が聞こえた

「っ 藍様!？」

真っ白く……

大きな鏡のようなもの一つ以外何も無い空間に、藍様が一人で居た  
「一番乗りだねえ、偉い偉い」  
そう微笑む藍様の顔は心なしか……

「……藍様？あの、顔色が悪いようですけど……？」

加えて言えば、

何やら焦げ臭い臭いがする

そして、藍様の身体には何故か鎖が巻き付いている

(……………何か、向こうであったのでしょうか?)  
聞くと、

「あ……………いや、これは無視の方向で」

死相が見えているような青白い顔で藍様は苦笑する

正直大丈夫なのか大分怪しいが……………

疑いの目で見ると、参ったなあ……………と頭を掻きながら、

「セイレン、貰ったんだねえ」

そう言い、彼は自らの右目を指差し、鏡を見た  
釣られてみると、

(……………博士と同じ、金の……………)

右目だけが、彼女と同じ色だった  
色々と思うところはあったが、

「……………はい、そのようですね」

嫌ではないと……………

そう感じる事が出来たから、微笑んだ

「……………うん、いい笑顔だ」

嬉しげに藍様も微笑み返してくれた

だけど、

(……………藍様……………?)

「さて、セイレンが一番乗りだから……………早速、俺相手に新それしい力試し  
そうか」

「あ……………はい、はい」

ニコニコと、

一瞬怪訝な顔をした私に気付いて居ないのか、気付かないフリをしているのか分からないが藍様は上機嫌にアイコンを一つ、起動させる  
私もそれに倣い、起動させながら……………

(さっき、藍様の……………)

彼の笑みが消え入りそうに見えたのは、  
きつと

「さて……………訓練開始だ、セイレン」

「……………はい、行きます」

(私の、気のせいですよ……………)

向かい来る炎に風を纏い跳ね返しながら、そんなことを言い聞かせた

それぞれの力の根源？

足元に薄く満ちた透明な水

時折飛沫を上げる音が聞こえ水が散る

それと同時に、

『っ覚悟！！』

『……甘いな』

キーン、と……刃物がぶつかり合う音が響く

そしてまた、水の飛沫の音……

(これは……)

これは、一体何なのだろう？

某と袖李が戦っている

何故こんな状況になっているのか分からない

そもそも、某は此処に……

宙に浮かぶ透明な部屋のような物の中に居て、透明な仕切りの向こう側に眠っているらしい袖李が居る

なのに、

『手加減無用で御座るぞ！！』

『貴様程度に出す本気など無い』

また、音が響く

視線の先では某達が真剣で勝負をしていて、

(……藍は、一体何を考えてこのような?)

元々違った扉を選んだ某達が同じ部屋に出た

それだけでは無く、目の前で奇妙なやり取りが行われていて……

『舐めていると……っ痛い目見るで御座る!! 果て無く続く水の流れ……愚かにも塞き止められた、怒りを今此処に……』

(……あれは、)

柚李が手を掲げアイコンの起動無しで展開しているのは、何時だったか某が習得するのを諦め、忘れ去った筈の……

(まさか、湖龍……?)

視線の先の柚李が、口から紡ぐのは思った通りの言葉

『籠の中より出でよ』湖龍『!!』

そして、

(っでかい……)

現れたのは想像以上の大きさの龍を模った水の塊  
それが視線の先に居る某を襲い、

「っ……っ!」

『くっ……』

左肩に、何故か痛みが走った

咄嗟に押さえると手にぬるりとした何かが……

(まさか、血……?)

『……想像以上はやるのだな……』

視線の先の、薄ら笑みを浮かべている某が受けた傷と同じ傷を負っ



ていた

(アイツ等と某達は連動している?)  
それに気付いた瞬間、

『いいだろう、貴様も、某が殺してやる』

(不味いつ……!!)

視線の先の某が、獲物を見つけた目で笑う  
あれは自分だ

騎士として、王に膝を付くものとして生きる為……

遙か昔に殺した、一つの衝動とも言える残虐な思考に支配された、  
(某のつ、)

この先の未来、起こりえるかもしれない自らの姿

『本気で殺してやろう……ありがたく思え』

そう告げ、手を翳しアイコン無しで展開する術式の数は、2

今の某では到底扱えないであろう数の術式を、アイコン無しでいとも  
簡単に起動させていく

(こんなにも、力の差が……)  
歯痒い

同じ姿をしているからこそ余計に、弱い自分を見せ付けられている  
ようで、

どうしようもなく、歯痒い

「柚李!! 起きろ柚李!!」

仕切りの壁を叩き、大声で叫ぶが柚李は反応すらしない

(くそつ、このままじゃ……!!)

視線の先では、またも昔に諦めた術式を二つ作動している某が見え

て……

あれの威力は知っている  
だから、だから……

「何故某は弱いつ……何故、」

何故妹を一人を、守れない……

「……あに、じゃ……」

ふいに、小さく声が聞こえた

(っ 柚李?!)

顔を上げると、

ゆっくりと身を起こし、柚李が苦笑しているのが見えた  
そして柚李は、

「拙者……兄者の、お荷物で御座るか……?」

涙を、流した

『常闇より出でし破滅の導き手』

向こうで、

術式の完成を意味する声が聞こえても某は動けなかった

ただ……悲しげに某を真つ直ぐ見つめる袖李から……目を逸らせな  
かった

「兄者……拙者、兄者の思うとおり……兄者には遠く及ばないで御  
座る……」

ぎゅ、と服の裾を握り締め震える声で告げるのは、そんな言葉  
そして、

『何時までも……拙者は何時までも子供じゃ無いで御座るよー!!』

聞こえてくるのは、力を発動させようと言葉を紡ぐ『某』の声では  
無く、  
術式を発動させようもしない、妹の声……

「だけど兄者……拙者、一杯一杯、頑張ったで御座るよ……?」

『拙者は、貴方に守られるだけの存在じゃない!!』

「共に戦おうなんて……背中を預けて下さるなんて……高望みはし  
ないで御座る……だけど、せめて、」

『拙者は貴方をつ……騎士で、騎士であろうとする兄者を……支え  
る存在に、』

「兄者が守ってくださらなくとも、拙者は大丈夫だと……信じて貰  
えるように、」

「『なりとう御座るっ……………』」

某は、何をしていたのだろう

守ったつもりになって……………何一つ、何一つ分かっていなかった

袖李は、妹は……………

ずっと昔からもう、一人で立てる程に強くなっていたのに

『……………戯言を……………ならば、ならば某の全力を受けて見せよ!!』

視線の先で黒い龍が舞う

叫ぶように、泣くように……………その身を撒き散らしながら袖李へと向かう

(ああ、そっだ……………)

怖かったのだ、某は

失ってしまうのでは無いかと

袖李が……………妹がいなくなる事が、何時も何処か頭にあった

怖くて怖くて堪らなかった

だけど、

彼女はもうとっくに、自分を守れる程に成長していたのだ

(ああ……)

弱かったのは、某の方だったな……

黒龍が袖李に激突する直前、  
弾けるようにその身を爆発させた  
闇に染まったかのような姿だったというのに……視界を埋め尽くしたのは、

(……まるで、光だな……)

穏やかでいて温かい……そんな、真白で温かな色だった  
溶けていくかのような空間の中で、唯一……  
確かな光に触れた気がして、

「……、い……」

名を呼べば、微笑んだような気がした

(この温もりは……)

決して、隠すように守るべきものではないのだと  
共に歩むべきものなのだ……

愚かな事だが、今更ながらに理解したような気がした

まどろむよう状態で、心地良い感覚に目を閉じてしまおうかと思った  
この温もりは目を閉じても無くならないのだと……  
心が、安心しきっていたから……自然と、ゆっくりと……意識が、  
溶けて……

「……これが将にあれですね、世界が認めた兄妹ラブというものですね」

……くれる筈が無かった

「っ?!」

「はへ、せ、せせせセイレン殿おお?!」

じーっと、此方を観察しているような顔でセイレンが某達を見ていた何気に右目の色が変わっている……そう思ったが、

「ラブですね」

もう一度、何故かじっくりと見られて頷くように言われたので起き上がると、

「ああ、大丈夫です、私は帷様が柚李様の膝枕でうとうとしてたなんて見てませんから」

聞き捨てならないことを言い出した

そのせいで、セイレンの右目が何故金色になっているのかを聞きそびれた

だがそれ以上に、

「み、見てるじゃないか!! って……膝、枕……?」

「にゃああああ!!! せ、セイレン殿そっつうのはしーっ! しーっ! しーっ!」

(膝枕って……袖李、何してたんだ……)

そう言った目で見ると、袖李が顔を真っ赤にして騒ぎ出した  
それを無意識かわげとかは知らんが追い詰めるセイレンを見て……

(ああ……変わらん、こいつ等は……)

苦笑が漏れた

色々と聞きたい事があつた気がしたが

「あー、帷に袖李さん……お疲れー」

やってきた藍の、へらりとした笑みに色々と力が抜けた

ふと、

(何気に顔色が悪くて焦げ臭い?のは……)

そう思ったが「ああ、無視の方向だそうです」と、セイレン曰くそ  
うらしいのでスルーしておく事にした

そしてさっきの状況を……

心の底をぶちまけるような本音を聞いた状況を作り出してくれたの  
は藍だったなあ……そう思って、

「ああ……藍、」

「んー?何かなあ?」

素直に、言葉が出た

「……有難うな」

やっと、色んなことに気付けた

そう告げる事が出来た

少し穏やかな気持ちになっていると、藍はニッコリと微笑み……

「うん、俺的に兄弟のラブは世間の目が厳しいだろうけど……頑張

るんだよ」

何をどう取ったのか、そんな事を言った

(は……?)

頭が停止する

誰も何も喋らない

花が舞っているかのような笑みを浮かべる藍

何時も通り無表情なセイレン

そして、

「……………つつー!!」

徐々に真っ赤になっていく柚李

タツプリと、謎の沈黙が流れたが……

「なななななななな藍先生いい?!?!」

「……………ふむ、やはり真実のラブでしたか、いやはや……………おめでとう御座います」

何かの臨界点を突破したかのような柚李の叫びと

セイレンの納得したような声が、すぐさまこの変な空間に響いた

藍を殴りたい衝動に駆られたのはきつと某のせいだけじゃない筈……………

そう言い聞かせ、

「ちょ、いきなりは危なくないかなあつ?!」

「よく分からんが、貴様の勘違い180°の頭を矯正してやる」

「い、いやいや、矯正してくれるのは良いけどその前にスパーンじやないかなあ、それ!?!」



逃げ出す藍を追いかけながら、大剣を振りかぶった

## それぞれの役割＋全力Ⅱ特別授業

水を薄く満たした空間の中、四人の少女が立っている  
皆どうやらこの無の空間に誘われたようだ

（…………アイシスさんに、フェルさん、楓さんに涼さん…………案外、一杯来たねえ…………）

四人は緊張もしてないようで、仲良く花が咲きそうな程話し込んでいる

割と暢気な彼女等に、本当にどうしようかと悩んでしまう  
彼女等は知らないだろうが……

この空間は乗り越えるべき喪失がないものが来る空間だ

即ちそれは、

喪失自体を経験したことが無いが、もう受け入れて先に進んだか、だ  
（…………イコール、新たな力を手に入れる事が無い、って事なんだよなあ…………）

正直に言おう、ここまで田舎な国だと思っていなかった

戦争自体が頻繁に起こる他国と比べて…………は、いけないだろうか、  
喪失が少な過ぎる

いや、まあ、喪失が多ければいいと言う事でもないが…………  
（今は、ねえ…………）

要るんだよなあ、身を焦がす程の喪失が

思い、溜息を一つ

あまり上がり幅の無い者（しかも全員がサポートか後衛）が四人も……と、なると

（戦力的に、厳しいかなあ……）

また溜息を吐きたくなる、が、

（ぼーっとしても意味ないし、ねえ）

てか、

あまりぼーっしていると俺の本来の身体が死ぬ

意識だけセレン嬢の塔から飛ばして来ているのだが……激しく悲惨な事になってそうなのがする

いや、気じゃなくて絶対

「いやだなあ、ほんと……俺の身体ちゃんと破裂はしてないでおい  
て欲しいなあ」

半分無理だろうなあ……

と、まあ愚痴は此処までにして

「さて、始めようかあ」

無理やり脳に喪失を植え込みそれを使い越えてもらうのもいいが、

（嘘の記憶ってばれたら大変だしなあ）

主に報復を喰らうであろう俺が、だが

まあ、それは大変面倒臭いので……

「女の子苛めるのは嫌いなんだけどなあ……」

我儂言ってられないか

それに此処で、

「歴然とした、絶望的な力の差を持つ敵と戦うつてのも……経験し  
とかないとねえ」

前衛三人組みは勝つだけを考える、ならば後衛四人組は

(生き残る事だけを考えてもらう)

例えかつこ悪くとも、撤退も一つの戦術という事だ

どうせ喪失が無いのなら、喪失を知る前に色々回避について覚え  
てもらっておけば便利だ

そう結論付け、

「……あっちと同じで、本来の8分の1程度でいいか」

手を翳し、自らの分身ともいえる個体を生み出す

スライム状のものが徐々に姿をかたどり、自分と全く同じ姿になる

(……正直言えば、気持ち悪いなあ)

思った事が伝わったのか、少し、しゅん……と落ち込んだ分身クン  
に一応フォローしながらあの四人の事を頼んだ

頷き、ほんの少しフラフラしながら彼女達の元へ飛んでいく分身

正直かなり頼り無いが……

まあ、俺の分身だからきつと大丈夫だろう、色んな意味で  
結論付け、

「……ジャンス先生や葵、鴻苑はまだ頑張ってるかなあ」

恐らく頑張っている彼らの元へと向かう事にした

ほんの少しだけ、時計の針を進めて……

× × × ×

俺、葵「ウィンデル」ひすいはただ今何か得たいの知れないものに追われ続けている

彼此10日程だろうか……眠り、起きた瞬間、それを見計らったかのように何故か追われる

まあ、追われていると言っても足音は無いし息遣いも聞こえないが、

「いだだだだ！！ちょ、マジ痛いつてえっ！！」

足を緩めた瞬間、石が飛んでくる

思いっきり後頭部に激突してくるものもあれば、警告のように頬を掠っていくものもある

なんだこれは、イジメかこの野郎っ！！

ぐわっ！！と、10日間なんだかんだで怖くて振り返れなかった自分に喝を入れ、

振り返ると其処に居たのは……

「ひっ……ゆ、ゆゆゆゆゆっ……！！」

宙に浮いている、沢山の鎖と大量の石だった

(ゆ、ゆゆゆっ、ゆーから始まるあれだよなあ、あれえっ！？)

ひいっ……と、思わず短い悲鳴を漏らすと顔なんて何処にも無いのだが

ニイツ、と笑った気がして、

「のおおおおっ！！！！！」

千本ノック宜しく凄まじい量の石が飛んでくる

本当に痛い、怖い、泣きそうだ

（痛えっ痛えって！！何これマジ怖えんだけどってかマジで痛え！！）

恨みが籠っているかのような連続投射に半泣きになりながら取り合えず走る

ふと、

これを作り出した藍に俺は何かしただろうか

そもそも何で俺がこんな目に……………てか、藍ってMじゃなくてSだったんだなあ……………

と、後半逸れたが思ったが……………

「ちょ、石デカクなってきたねえ?!」

何故か、飛んでくる石がドンドン大きくなってくるのに内心冷や汗を掻きながら振り返る

……………またもや楽しげに笑った気がした  
そしてまた、

「痛え痛えって！！ちょ、何処かで見てる誰かさんでもいいからお  
ーたすけーえっ！！！」

情け無いことを叫びながら俺的な全力疾走を再開させる  
いやマジこれ……………鬼畜過ぎやしませんか

「ああもっつ……………へーるーぷみーっ！！！」

叫んでも思ってもどうやらまだまだ

(げ、石増えたあ?!)

鬼ごっこもどきは終わりそうに無いようだ……

「だああああ……!!!!藍の鬼畜めえっっ!!!!」

心なしか投げられる石が増えたような……気がした

「……あーあ……一応それ投げてるの、俺の分身(透明バージョン)なんだけど、なあ」

俺(本体)悪く言っちゃ怒るって……てか、怒ってくれてありがとう  
悲鳴を時折上げながら走っている葵の上……空中に浮かび、葵を眺  
めながら軽く苦笑する

(あ、また悪口言っちゃって……うわ、もう石の量マックスになっ  
てる)

下の彼は、最早走っているのか避けているのか分からない状態にな  
って騒いでいる

いきなりで少々やり過ぎた感は否めないが……

(仕方ないよなあ、葵は基礎が出来てないんだから)

5年前の『羽有り狩り』

その時に受けた全身の傷からか、葵の動きは良く言って年相応だ  
はつきり言えば、

戦闘の役になんて立たない、寧ろ足手纏い

「……せめて、戦争が始まる前までには回避くらいはきちんとしてもらわないと、ね」

聴覚視覚共に人間離れしてるって才能あることだし……

ついに引っくり返ってしまった葵を見て、苦笑しか浮かばない

(うん、まあ……あれは時間かかりそうだなあ)

そう思い、鴻苑の様子見を頼んでいた彼に状況説明を乞おうと手鏡を取り出す

「……真紅、そっちはどんな感じ？」

『基礎は粗方出来ている、が、まだ鷹は目覚めない』

簡潔に告げてくれる彼はどうやら俺の指示を待っているようで、彼自身が判断してくれた方が実は上手くいくんだけどなあ……なんて事を思いながらも

(……鷹が目覚めない、なら……多少無理やりにも、起こさないとなあ)

一つ、決めた

「真紅、彼を呼び出して？彼からイロハを教わった方がいいだろうから」

『……大丈夫なのか？奴は、死んだらろう？』

「肉体はその通り……けど、きつと残り香が漂ってると思うよ」

思っているのは、最期に笑った彼

彼は一言だけでも、一筋の涙だけでも満足出来る……そういつヒトだから

鴻苑が……弟が、途轍もなく可愛いヒトだから、きつと残ってる



そう告げると、微かに納得したように頷いて、鏡の中から真紅の姿が消えた

「聞き分けのいい子で本当助かるなあ……」

眩いてまた少し、時計の針を進める

どのくらい進めようか……と思った時、何故かふと、

脳裏に俺を父と呼んでいた道化ビエロが浮かんだ

着ている服やらから趣味が悪いと判断されがちな彼だが……元氣だ  
ろうか？

もう何処に行ってしまったのやら、生きているのやら色々謎な彼

正直、生きていたら怖い

何故なら……

「初めて会ったのは……数百年前だしなあ」

あの頃彼は人間だったと記憶している

もし今生きていたら……うん、バケモノだ、てか幽霊？

「うわあ……うわあー……」

脳内に凄まじい笑顔を浮かべるうらめしやーな彼が浮かんだ

少し寒気を感じ脳内でクヒヤヒヤと笑う彼を追い出した

瞬間、

「ああああああおおおっ！！！！！！」

雄叫びのように俺を呼ぶ声が聞こえたと同時に、割と頑丈に造っていた空間が裂けた

いや、割れたと言った方が正しいかもしれない

(……以外に、早かったなあ)  
半年ほどかかる予定だったが、その半分で帰ってきた彼にそんな感想を抱き、笑みを薄っすらと浮かべ振り返る

「そんなに叫ばなくても、俺は逃げも隠れもしませんよジャンス先生」

すると肩で息をしている(所々ボロボロである)彼に、手に持っていた(これまた刃零れしまくりの)剣を向けられる

息も絶え絶えで……恐らく今までろくな休みも取らず戦い続けたのだろう

馬鹿じゃないかコイツ……と、思わなかった訳でもないが、その頑張りを賞して彼が破った空間へと降り立つと、

「て、てめえっ……はあ、いきなり訳分かんねえ戦場に放つぽりだすんじゃないやねえよっ!!」

いきなり怒鳴られた

(……割と気は長くなってるみたいだけど、まだ怒りっぱいなあ)そんな感想を心の中でだけ呟き、素直に忘れていた事を謝罪するするとさっきよりも怒り出し……肩で息をしながら言われてもなあ

……と思いつながら

(あー……まだ、折角持っている能力を使わず力任せか……勿体無いなあ)

割と頑固な彼にそんな思いを抱く

俺は力を手に入れるのに苦労した

力が欲しいのに、強くなりたいと誰よりも望んだのに、その時力は

手に入らなかった

どんなに足掻いても俺は、

過去の俺は何も出来ない無力な人間だった

(……ひがみ……では無いけど、さ)

此処には過去の俺と同じように無力で悩む葵<sup>かれ</sup>が居て、その彼は無力  
力なりに全力で立ち向かっている

全力で、運命に抗っている

だから、

「……ジャンス先生」

「だからーって……あ？」

手を翳し、彼の傷を一瞬で治す

すると、驚いたような顔を向けられた

そんな彼の視線を受け止めた後軽く目を伏せ、

「俺が特別授業をしてさしあげます」

実戦訓練ですので御気をつけください

微笑を浮かべ、静かに告げた

そして答えを待たずに今の俺の……

8分の1の俺の、全力を持ってお相手することにした  
笑みが浮かぶ心の内にあるのは、

(貴方だけ手を抜くようなことは許さない)

ただそんな、そんなこと  
そして、

「全力で来ないと、本当に死にますからね」

全力で殺す宣言を放った

驚愕から困惑、そして悟ったように真剣

(ああまるで、百面相の様だ……)

ほぼ同時にアイコンが起動するのを目で確認し叫ぶのは、

「来たれ爆炎、」「来たれ爆風、」

「我汝を生み出さんと欲す者」「我汝の導き手となりし者」

体の周りに赤と緑の光が灯されたように淡く現れる

蛍の光のようにささやかで儂い光は俺の声に合わせて大きくなり……

「属性違うつてのに、同時起動っ……?!」

聞こえる言葉にほくそえむ

(その通り、俺の強みはどんなものでも同時に起動出来ること)

光を纏い、咄嗟に危機を感じたのか風を纏い距離を取るジャンス先生にいい判断だと、心の中で拍手を送り

「ねえジャンス先生、こういうの知っていますか？」

赤と緑の混ざった光の中で、

睨むようにして俺の言葉を聞いている彼に、知らないであろう事を

告げる

「相反し合う属性だろうと何だろうと……」

術者の能力によっては、混ぜり合う事が出来るんですよ？

面白い程に俺を凝視する彼に折角だから、見せてあげよう  
これも授業の一環だから、

「風は炎を導く道へ、炎は風と混じわいその先へ……Set、」  
楽しく遊ぶように学びましょう

「……これが、今日の授業の一つです」

百聞は一見に如かず……  
過去は偉大だと、今でも思える言葉を呟き、

「GOッ!」

叫びと笑みと、驚愕と共に……特別授業が始まりを告げた

命題？ 『人間 X 風の翼 X 〓バケモノ』は偽である（ X 〓ただの後輩）

「Set / Go……フレイムストーム炎の風！」

叫びと同時に炎の風がオレを目掛けて飛んできた  
風を纏っている為倍速となっている為回避を選択した  
が、

（ちっ、掠ったか……）

袖の端が僅かに焦げる

オマケに熱風とも言える副産物に煽られ思考も速度も鈍り、

（っ！！この風、倍速の効果をつ……！！）

倍速の効果が打ち消された

驚くオレに藍はニッコリと笑い

「……あれが、炎と風の合成技とでも言いますが、そんなものです」

効果は見ていただいた通り、攻撃を避けても一定範囲に効力は及ぶ

先ほど授業と言ったとばかりに解説を挟んでいく

そして、

「さて、先ほど出した雷鳴……」

（っんだあれ……あれ、本当にただの雷鳴かっ……？）

視線の先、

藍の腕に擦り寄るようにクルクルと絡みついている雷鳴に、そんな

馬鹿な事を思った

有りえないと知っているのに、そんな馬鹿なことを……

「強ち、ジャンス先生の思っている事間違っではいけませんよ」

またもや笑いながら、藍が言う

(コイツ、オレの心の中をつ?!)

馬鹿なことだと思った事を、肯定された

読心術があるなら報告しようと、微かにそう思ったがそれ以上に、

「雷鳴に意思なんざ、ある、のか……」

怒りよりも驚愕が心を占めた

それに気を良くしたのか何かは知らないが、藍が起動途中で術式を放棄し、擦り寄る雷鳴を撫でる

(撫でてって……)

「……力は、イメージなんですよ」

ニツコリと、触れられるはずのない雷鳴を撫でながら、笑う

「あ、コイツの名前は浅黄あさひっていうんです」なんて聞いてもいない事を嬉しげに喋り、ペットが何かのように優しくに触れていて

(コイツは、バケモノだ)

ただそう思った

危ない奴だ、とか、実は『風の翼』の一族の一人じゃないのか、とかでは無くただ

(……バケモノ、だ……)

そう思った

直後、

「……………」

読心術があるのは確かなようで

バケモノ、そう思った瞬間藍の表情が凍る

固まるを通り越したかのように、ただ無表情で動かない  
だけど、

ぴい、ぴう、びる……

藍が浅黄、と呼んでいた雷鳴が小さく鳴いた

何度も何度も、ぐるぐると藍の腕に擦り寄り、慰めるように一声上  
げ、

「っ!!」

大きな雷鳴の弾が、飛んでくる

(怒った、のか?!)

小さな時に比べて動きは遅いがそれでも、術式強化無しで避けるに  
はギリギリのライン

それが大量に飛んできては、

(くっ……くそっ、)

毛嫌いしている能力を、使わざるを得ない

「数多なる場所に吹き続ける汝よ、我が意に従え!!」  
かせ

( ……っ起動!! )



『ウィンドウォール  
風の障壁』

何時だったか、かつて一生賭けて守り抜くと誓った女性がそう名づけてくれた術式

もう二度と使いたくなど無いと、痛みと共に思ったそれを展開させ雷鳴を一時的に凌ぎ、

「我常世に吹かれし一陣の風に同じ!!」

もう一度アイコン経由で術式を起動させる

そして、刃こぼれしていた筈の剣を握り直し、

「……また加速、ですか…… 肉体に頼るのは、人間では…… 限界があると思いますけど……」

「ほざけっ!!」

ポツリと、呟くように言われた言葉に、叫び返す

時折飛んでくる小さな雷鳴を倍速、3倍速と加速を上げて回避しながら思う

『バケモノ』

そう思った瞬間、微かに見せた傷付いたような表情を、諦めたような悲しみの表情を、

(ああ、そうさっ……!!)

オレは確かに藍の事なんて殆ど知らない

読心術やら何やらで聞いて居るんだろう?

心でそう問いかけると、浅黄が雷鳴を飛ばしてきた

弾の大きさが小さくなったのを勝手に肯定と解釈し、身体に掠っていくものも全て意識の外に追い出し、ただ思う

(『報告』と勝手に義務付けてやった能力報告も上手くいったじゃない)

だってお前、何だかんだで報告しないし、新たに分かってから報告してくるし、どんなめんどくさがりやだよ

思い出しても、報告は全て言い訳交じりだった

まあオレも全部丸々と過去を話せてる訳でもない、秘密にしときたいこともある

(だけどなあおい、これは酷すぎやしないか?)

だから、お前のことなんて分からない

出生も過去も、何一つ本当の事なんざ知らない

知りたい、そう思ったことが多々あった

でもお前は全然本当を見せてくれないから、分からないだけど、

(だけどなあ……)

一つだけお前についてはつきりしていることがある

それは、

「おい藍……」

「何ですか、ジャンス先生?」

「お前は、何処までいってもどれだけ強くても、人間でも『風の翼』でも、それ以外のバケモノだったとしても、」

お前はただのオレの後輩に過ぎないんだよ

そう笑って言えば、

オレの知ってる、生徒達の知ってる藍「イウインデルの顔になった

それを見て、思った

(コイツは何時頃から宙に浮かべるようになったのだろう)

オレの知っている中では規格外の、奇術に近いものを扱うコイツは、  
何時からそんな高みへと一人で行ってしまったのだろう

高みからの素晴らしい景色をたった一人で、見なければいけないな  
ったのだろう？

だから、

「後輩が先輩に授業しようなんざっ……………!!」

全力で叫ぶ

剣を握り締め爆発的に加速させる

向かう先は、

ただ驚いた顔でオレを見る馬鹿な後輩の居る高み……

(くっ……………!!)

時折、微かに足が軋んだように痛んだが今はそれすらも遮断する

(もっと早く、もっと早くだ!!)

今必要なのは、

ぶち当たった壁を何とか乗り越える程度の強さじゃない  
適当に出し切って満足するよんな簡単な力じゃない

今必要なのは高みに、藍に手が届く程の強さ

「百年早いんだよっ!!」

全力で振り下ろした剣が弾かれた

だがそれも、

(想定内なんだよっ!!)

一度、ほんの少し勝負をしたあの時に実力差は分かりきっていたことだから剣を投げ飛ばし、手を伸ばす

高みへ、

高みへ至ってしまった馬鹿な後輩へと、手を……

伸ばし、触れた

微かに抵抗の意を示したから、逃げられないように肩を掴み、そのまま落ちないようにしがみ付いてやった

そしたら、

「……ジャンス、先生は……はは、馬鹿ですね」

「分かってら……一回失敗してんだ、自分が馬鹿なことくらい分かってんだよ」

「はは……前回の、失敗を……拭い去る為に、俺に、手を伸ばしたと……?」

滑稽だと、思いますよ

なんてふざけた事を抜かすから、両手が塞がっていたからすぐ横に

ある頭に頭突きしてやった  
上手くこめかみ辺りに当たったのか、宙に浮いた状態で藍がよるめ  
いた

「おいおい、落ちんなよ？」

「つてて……ジャンス先生が、信じられないくらい、重たいんです  
よ」

「たりめえだ、これが人間の重さって奴だ」

そうですか、

なんて気のない返事が返って来たからもう一度頭突き……と思った  
が、

(……なんだよ、お前、また隠し事かよ)

藍の表情を見て、思わず口の端が上がる

ああ、何だか今はいい気分だ

「何、笑ってんですか……」

「いや？馬鹿な後輩が、オレ様の、人間様の重みを有り難がって  
感無量だと思ってるのが愉快だなあと思ってる？」

「だ、誰が感無量だと思ってる……落としますよ、このまま」  
「あー、安心しろ、落とそうとしてもしがみ付いてお前も一緒に落  
としてやっから」

「な、馬鹿な事を言わないで下さいよ、俺は落ちたくありませんっ」  
「なははっ奇遇だな、オレも落ちたかねえよ、だから飛べ、どんど  
ん飛べ、んで決してオレを落とすな」

「じ、自分勝手だ……なんて自分勝手な人なんだ……」

ぶつぶつと呟き声がした後、はあ……と微かに溜息が聞こえた  
だから頭を思いつきり撫でてやった  
すると、

「ちょ、やめっ……マジで俺墜落しちゃうんですけどっ?!」  
なんてことを抜かすから、

「あ？お前、読心術出来んじゃないのか？」

ならオレが頭撫でようとした事くらい、分かっただろ？  
そう告げると、溜息のようなものを吐かれた

「……いやいや、俺出来るって言うてはいませんよ？」  
「ああ？マジかよ、うわー……オレマジ心の中で一人語りしちまっ  
たってか……恥いなあ」

「あ、いや、浅黄が読心術出来ますから……まあ、俺は浅黄呼び出  
してる時はこう、感覚的に伝わるからその……」

歯切れが悪くなり、藍が小さく何かを呟いた

恐らく聞こえないように言ったのだろうが如何せん……今オレは藍  
にしがみ付いているから、当然耳も近い訳であって、

(んだよコイツ、可愛いところあるじゃねえか)

先ほど呟かれた言葉がばつちり聞こえた  
だから少し痛みを訴えてきている両足も気にならなくなる  
そして、

「おーよしよし、藍ちゃんはいいい子だねえ」

「……マジで此処から地面に叩き落しますよ、ジャンス先生」

（はは、コイツ怒ってやんの）

少しからかうと、怒った声が聞こえた

笑い声で返すと、また溜息が聞こえて……

（ありがとう、か……）

先ほど咳かれた言葉を心の中で呟き、

今度はオレに対して敬語を無くすように指導してやるう、そう思いながら

また溜息を吐いた藍の頭を撫でる

「……何度も何度も何なんですか、ジャンス先生……」

「ああ？意味なんてねえぞ、ただ丁度いい頭が近くにあってたから撫でてるだけだ」

「何なんですか、本当にもつ……」

何度目かの溜息

それが最早震える吐息のようなものになっているのに、コイツはオレが気付いてないとも思っているのか……

（どうしようもねえ後輩だなあ、おい）

また口の端が上がる

一つの事実心底満足しながら、抗議してくる藍の頭を撫でる

出来の悪い後輩は、何時も以上に饒舌で、その声は微かに震えていて……

(ま、お前の授業も悪くなかったぜ?)

だっってお前が、

糞生意気で出来の悪いお前が、

オレの見えない位置で泣いてやがるんだからな……

(ほんと、お前にしちゃ出来な授業だ……)

ワザと顔が見えないようにしがみ付き直した後、

ゆっくりと下降していく震える身体をせめてその震えが治まる間く

らいは離さないよう……

笑みを浮かんだまま目を瞑り、手に力を込めた



命題？ 『人間 × 風の翼 × 『バケモノ』は偽である（ × 『ただの後輩（

## 作戦通達 + 歴史のズレ II デイアム帝国 Side

葵達が居る国、

ウイングダス国から海を隔てた大きな大陸の中心部にある国……

其処には、機械仕掛けの地を走る大きな鉄の塊、空を飛ぶ鋼の、鳥を模した兵器が常時領土を、領空を飛び回っていた

その国　ダイヤモンド帝国　は今、来るべき戦争に向けて国を挙げ  
ての祭りを催していた

人々は口々に言う

「この国の王に敵うものなど居ない」と

そして彼らは笑い、言い放つ

「羽有り如きの為に、この国に逆らうなんて何と愚かな国もあつた  
ものか」と……

「……割とこの国の民は、正常だよねえ」

大きな塔の頂上で、

闇夜に負けじと光を放ち騒ぐ人間達を見ながら僕はそんな感想を抱  
いた

そして思い出すのは、羽有りである自分と、エリスちゃんをしつこ  
く友と呼び続けた彼

元気だろうか……と、姿を思い浮かべてすぐその言葉が浮かぶ程度

には気に入っているのだと、言外に突きつけられた気がした

(……………僕も甘いよねえ……………)

クスクスと、笑いを漏らしながらこの国の中枢軸である城を眺めるあの国は時代遅れのような宮殿だったなあ……………と、思い出しながら

……………

あれから……………

宣戦布告宣言を言い渡してから、4日経った

右腕を失った僕は捨てられるのかと思いきや、

帰国してその日に何故かある人(人間かどうかすら危うい生き物：

…と認識している、何故か羽有りである僕等にも分け隔てなく接する変人)に(超強引に)引き抜かれ、その人が何故か身元預かり人……………という事になっている

その変人から貰った右の義腕はかなり……………信じられない事だが、元の右腕より馴染んでいる

そんなこんなで何とかお払い箱を免れていた僕は日々をのんびりと時たま変人がどういう手段を用いてか連れてくる同族達と一緒に割と平和に過ごしていた(最早これは、御守りでは無いかと思う程、変人の変人度は凄まじいが……………)

そしてまた、どういう訳か戦闘部隊に配置されているエリスちゃんや大勢(恐らく、国中の羽有りが集まっている筈だ)が今僕の居る、変人所有のこの塔に収容されている

(……………何の目的があるんだろ……………)

はっきり言えばそう、訳が分からない

家事は何故かその変人が全て完璧にこなすし、僕等に欲求をぶつける事もしない

戦闘部隊に配置されている同族が、戦闘から皆無事に帰って来たらまず手当て、その後無事帰還を祝って屋敷総出でパーティー  
壊れて死んだものが居れば、屋敷総出で弔い墓を立て冥福を祈る

(ほんと、訳分かんないや……)

お陰である国での生活を、忘れてたくても忘れられない  
そういえば……

「あの変人の彼と、馬鹿な彼……似てるよねえ」

そのせいで……

破天荒で破茶目茶な彼の御守りをするのは苦痛じゃなく、割と心地  
いいと感じているのだろう

戦闘部隊から外れたけど、何だか段々と、普通の羽有りからもかけ  
離れていつているようだ……

「複雑なんだよねえ……まあ、」

(飽きやしないけどさ)

割と日々は平和だ、本当に予想外なくらい  
そして、

そんな平和が続いて早4日の今日の朝、  
羽有りは全て「午後10時ピッタリに(あの牢屋のように頑丈でい  
て暗い)城に来い」と……連絡を受けたのだ、軍の最高指令官に

(僕まで、ってというのが驚きだけど……)

本気である国を潰す気なんだろうね……

思っている、

帝国のやり方を一番良く知って居るのが羽有りだということ  
そして、

「それを一番徹底してやり切る事が出来るのも、羽有りだからねえ」

命令に忠実っていうのも、種族的傾向だし……  
そう吐き捨てるように呟き、

「おい、ウルシー!!」

塔の方から聞こえた声に返事を返し、

恐らくまた変な事をしている変人（まあ、してなかったら変人じゃないけど）が居るであろう塔の中央部へ向かった

無駄に長く広い階段を前に、持ち前の羽を使い無駄な労働（階段下  
りるのも上がるのもめんどくさい）を削減させる  
そのまま羽ばたく事無く、恐らくワザワザ変人が発生させているの  
であろう風に乗る、『事務室パート？』と書かれている部屋の前  
に辿り着いた頃にはもう皆集まっていた

「……ウルシー、遅かったのね？」

「あ、エリスちゃんも彼に呼ばれたんだ？」

「ええ、屋敷総出で集合って……よく分からない事言われて」  
「あー、さすがは変人」

僕の最後の一言に、大勢が頷いた  
妙な所で種族結託あるよねえ、僕等……なんてどうでもいいことを  
思いながら、

「ああはいはい、すみませんネエ、ああ大丈夫ですよ、ええ、ハ  
あーイー」

真っピンクで所々派手にデコレートされている電話を使っている、  
飽きたのが適当に流し始めた声の方を見やる  
見えたのは、机の向こう側でぴよこぴよこ動いている、見事なま  
でに紫系統のグラデーションの掛かった頭

(……うん、今日も変人は変人だねえ)

小さく呟くと、全員が微かに頷いたのが見て取れた  
(うん、今日も皆変人を変人と思える程度に正常だ)  
毎日の変な、心身の健康確認と化してしまっただ「変人は変人だ」確  
認の結果に満足しつつ……

「あーあーあーあー聞きました聞こえましたクヒヤヒヤヒヤ」はい、  
サヨウナラーラーラっ」

完璧に馬鹿にした返事を電話の相手に返し、変人が電話を切ったの  
を見届けた

そして、

「……変人の今日の被害者は誰だろうな？」

「あ……そういや、今日は中等指令官が連絡係だった気が……」

「うわ、俺その人口うるさくて嫌いなんだよねえ」

「あ、私も嫌い」

「ああなら、満場一致で」

「「変人、グッジョブ」「」」

全員で親指を立てて言うといい笑顔で変人が振り返った

「御静聴どうも有難う御座いマシタ！」

いい笑顔でポーズまで付けている変人に、思わず苦笑が漏れる

そして、そんな僕等に親指を立てた後変人は……趣味の悪い服

白と黒を基調とし、左右で色の反転して所々フリフリで……まるでピエロのようである　の上から、セピア色のマントを羽織い、

ゴテゴテにデコレートされた白のミニハットを見に付けた

（あ、今日は紫じゃなくて白のミニハットなんだ……）

どうやら今日は割と偉い方と会う予定のようで、割と健全な色を選びなさっている

そして、

「むうー」

唸りながら椅子に座り、机に足を置き頭の後ろで手を組んだ

その長い爪に彩られた赤紫のマニキュアが妙に毒々しいなあ……と、

どうでも良い事を思っで居ると、

「んでえ、せーくん……電話なんて言っつたとお？」

変人 もとい、せーくん（セリシス＝F＝メリル） の親友、

マーニス（マーニス＝T＝メリル）さんが、

後ろからぴよこつと……天井を仰ぎ見ている彼を真正面から見下ろす形で現れる

翠を基調とした服や髪、その口調に何となく癒された……ところで、

「……マーニスさん、何処から出てきた？」

「相も変わらず分かんないけど、何時ものことじゃない？」

「あー……それもそうか」

「うん、変人の親友は変人って決まってるしね」

「……うん、そうだね」「」

種族間プチ会議を終えた

そして振り返ると、何故かマーニスさんの翼に頬擦りしていた変人が居た

いや、もう変態でいいような気がしたが……何時もの事なのでスルーする

（うん、僕も大人の仲間入りだ）

「Ohー、まーくん！どうやら早く来いヨとの催促のようデスネエ」

「あー……午後10時まで後10分だべなあ……そんりゃあ、怒られてえ当然だつぺ」

うん、どうしてだろう……

今物凄く大変な事をサラツと言われた気がした



(つて、残り10分?!)

羽有りの飛行能力と速度を持ってしても残り10分はキツイぞ……  
そう思い、変人に詰め寄ろうとした  
瞬間、

「こんつのマジキチ変態野郎めっ!!」

「おぶえあ、っ?!」

マーニスさんの翼に頬擦りしていた変人(もとい変態)が綺麗に上に吹っ飛んだ

(な、何か……)

「吹っ飛び方マジ綺麗だな、おい」

取り合えず誰かが代弁してくれたようなので、頷いておく

そして、そんな僕達の前にナイスバディな羽有り……もとい、ひろが嘉華

(嘉華「M「メリル」さんが何故か机の下から現れた

炎をそのまま具現化したかのような服と髪は少し乱れていて

(ああこの人、今日も変人の机の下で寝てたな)

と、満場一致でそんな事を思い、

「てめえ何でこの俺様に全然連絡しねえんだよお、ああ?!」

「おう、あう、の、脳が揺れまくりデースウ……」

「聞いてんのかゴラァ!!ああ?!仲間外れにされて不安だったとか……んなこと思ってる訳じゃねえんだけど……って、あ、てめ!!今笑つたる糞が!!寂しかった気もぜんっぜんしてねえんだからなあ!!」

嘉華さんは耳まで真っ赤にし、変人の胸倉をつかみ激しく上下に揺さぶっている

余裕のあったのはどうやら、笑った一瞬の事のように……変人は、頭を程よくシェイクされて目を回しかけていたふと、

（えーと、一応……変人って人間だったよね？）

あの力で揺さぶられちゃ、脳震盪は軽く起こるだろうし場合によっちゃ死……

其処まで考え、それは困ると止めてもらおうとマーニスさんに視線を送ると、力強く頷かれた  
そして、

「ひーちゃん、あんまし揺ってるとお……せーくんのお、頭がもつと馬鹿になるべよー？」

「ああ?! 良いんだよコイツの頭一つや二つくらいバグっても誰も困りやしねえだろ!! それに、バグって正常に戻りゃ万々歳じゃねえか!!」

最もなことに言葉を失ってしまいあえなくマーニスさん撃沈  
力不足でごめんなあ、と泣きべそをかきながら戻って来た  
まあ、気持ちは分かるので慰めていると

「大体てめえはよお!! まーくんよりっ……その、なんだ!! 俺様の翼の方が肌触り良いってえのにな……か、勝手に俺様以外の奴の翼にすりすりしてんじゃねえ!!」

「ひ、ひーちゃっ、さ、さわらせっ……おおう、くれる、デスカっ？」

「なっ……だ、だだだ誰が触っていいなんて言っただよこの馬鹿野郎ッ!! 変態!!」

ついには、目がグルグルになった変人を床に放り投げ、足蹴し出す  
始末……

(うわあ、この人素直じゃないどころじゃない……)  
何だかもう、收拾付かなくなった気がしたからいつその事諦めよう  
……そう思っていた所、

「お、」

「……？マーニスさん？」

「出て来いー出て来いー……魔法の扉ー……ぼん！」

何かに気付いたマーニスさんが、何だか力が抜けるような掛け声と共に扉を出現させた  
って、

「マーニスさんって……扉出せたっけ？」

「いや……マーニスさんって、トランス恍惚あざなの字を持ってたから……」

「うん、幻術使いじゃなかったっけ？」

プチ会議を終え、振り返る

其処に……魔法の扉？の開いた先に居たのは、

「えと、皆さん……お時間が大分過ぎておりますが……何かあった  
のでしょうか？」

「あ、シエルアさん……」

淡い水色の美しいグラデーシヨンの長い髪を持つ、シエルアさん（  
シエルアⅡⅤⅡメリル）さんだった

彼は僕達に会釈し、まだ騒いでいる変人達を見て苦笑する

「……また、ひーちゃんとせーくんが仲良ししてたのですか」  
「な、てめっ……お、俺様とこのキチガイ変態が仲良しな訳ねえだろー!」

「お……お星様がキラキラ……キユウ……」

真っ赤になって否定する嘉華さんの下で、変人がついに気絶した  
(ああ、今日は割と頑張ったねえ……)

「「ご愁傷様です」」

手を合わせ、呟く

そんな僕達にやっと、変人が気絶した事に気付いたのか嘉華さんが  
愛のビンタで起こそうと試みていた

(……聞こえてくる音が何だかえげつない……)  
後で手当てくらはしてやろう、うん……そう僕等が決意している  
と、

「おんやあ？まだ、誰か来るべかあ？」

「ああ……はい、あまりにも時間を過ぎていらっしやっただので……  
直接、」

「直接私 came という訳だ」

高圧的で、吐き捨てるようにそう告げた声が響いた

(この、声は……)

誰の声かが分かった瞬間、咄嗟に扉から離れ膝き頭を垂れる  
この声は知っている

戦闘部隊に居た時、嫌という程聞いていた声

「最高指令官……三國様……」

同じく離れて跪いていた同族の誰かが、声の主の名前を呟いた  
頭を上げることは許されないので表情は分からないが、恐らく不愉快そうに歪んでいるのだろう

上から吐き捨てるように、

「羽有り無勢が……私に口を聞くとは穢らわしい……」と、聞こえた  
そして、

「其処の下賤な羽有りの女、フィレス塔の主から離れろ」

嫌悪感を露にした声が響く

(あ、不味い……今変人は気絶中で……)

嫌な汗が背に流れた瞬間、

「ああ？それが人に物を頼む時の言い方かよ？ああ……人間様はい  
つつもそういう風にならしか物を言えない愚かな種族だったなあ  
？」

「貴様っ……私は軍の最高指令官だぞ！」

「はん、構いやしねえよ……俺様が信頼してんのは同族と此処に伸  
びてる変態だけだ」

思ったとおり、険悪ムードが流れる

にらみ合ったまま、一瞬即発の雰囲気で溜息が出てくるが何とか飲み込む

聞かれていますは大惨事を招きかねない……人間には聞こえないよう

眩き、思うのは

(だから嫌だったんだよねえ……)  
そんなこと

毎回毎回会うたびにこの二人はこれだ、いい加減にして欲しいと切実に思う

(いや……ほんとうに、お願いだから帰って下さい……)  
無駄とは思いつつ念じてみる、と

「……うーん……イタタ……つて、おりよりヨー？これはこれは……軍の最高司令官殿ではありませんか」

よいしょ、と掛け声と共に気絶していた筈の変人が上体を起こし、そのままの体勢で恭しく一礼する  
その一連の優雅さを伴った動作に怒気を削がれたのが、二人が顔をそれぞれ逸らす

そのタイミングを見計らってか、  
「皆さん、今日は最高司令官様が僕達羽有り達に、直々に任務通達をしてくださるそうです」

ニコニコとシエルアさんが告げ、  
それを受けて最高司令官は、言い放った

「今回、我が帝国に刃向かった弱小国……ウインダス国に居る全ての武力を持つ生物の殲滅を行う」

(武力を持つ生物の、殲滅……)

それはつまり、全ての、生き物の

ウイングス国に居る全ての生物の徹底的排除に他ならない

(っ……予想、以上に……)

一瞬にして脳裏に浮かぶのは、武器を持つには至らない幼い子供達彼らも排除対象となるだろう、小さな石でさえも……此処の基準では、武力と判断されるのだから

当然だが、昔の仲間達も排除対象で……

「情報、の……相互認識の誤差を消す為に、お聞きして構いませんか……」

隣で頭を垂れているエリスちゃんが、消え入るような声で発言したそれに対し、

明らかな嫌悪感を浮かべた最高司令官の口が言葉を紡ごとく動くが、

「あー、どーぞドーズ」

ひらひらと手を動かす変人に、言葉を遮られ無然としながらも口を閉じた

それを見て思わず、

(……最高司令官が、変人の事気に入ってるって本当だったんだ……)

呆然と、そんな事を考えた

そして、

発言を許されたエリスちゃんが恭しく一礼し聞いた

「女子供が降伏を求めてきた時も切り捨てよ、全て焼き払え……そうだった命令と、理解して宜しいでしょうか」

「……皇帝様は、ただ『全ての武力を持つ生物の殲滅』を命じただけである」

返ってきたのは是とも否とも取れない返答

(……羽有りの、せいにするつもりか……)

武力を持たないと、国際的に判断出来る生物を殺せば他国から皇帝への批判が集中する

それを回避する為に、如何様にも解釈できる命令を下す……

いざとなったら、自らにそんなつもりはなかったと、羽有りの独自判断だと弁明できるように

(皇帝は、聡明なお方だなあ……)

ほんの少し胸の奥で何かざわめいたが、結局出てきた思いはそんな事

上手く切り捨ててというものを理解していると、

利用し、犠牲を払うというものが何たるか理解していると……思った  
そして、

ほんの少しの沈黙が流れた後……

「……そのご命令は、皇帝陛下直々のものですか？」

変人が首を傾げて発言した

それに頷き、最高司令官が何やら懐から紙を取り出し見せる

其処には確かに先ほど彼女が言った内容が書かれていて



「……なるホドオ……では、これはお預かりシマス！」  
「なっ?! 貴様!!」

パシ、と変人は紙を奪い取りそのまま懐に入れてしまった  
返せ、と怒鳴り迫る彼女に何を思ったか……眼前で人差し指を向け、

「これを飲むには一つ条件があります」

咄嗟に静止した彼女に、いつもの様にニヤリと笑い、

「ワタクシにその戦争の指揮を御任せ下さるよう、皇帝陛下に御進  
言下サイ」

人を馬鹿にする時に使う、ワタクシという一人称を用い……  
横暴なまでに一方的な条件を突きつけ、話は終わったとばかりに背  
を向けた  
その背に親友である三人が続き、

「……お前は……この塔に押し包められても、変わらぬのだな……」

嬉しげでいて悲しげな……  
様々な思いの籠った言葉を、彼女が発した  
そして、

「……私は……か弱き人間でも、美しき風の翼でもありません……  
故に、」

その声に振り返った彼は、

見たこと無いような悲しみに、寂しさに染まった表情をしていた

「寛和……三國 寛和、最高指揮官殿……貴女が知っているのは、  
私の全てでは無いのデスヨ」

そんな言葉と何時もの笑みを残し、姿を消した  
残された彼女は少し俯いた後、

「……通達は以上だ、作戦は明後日決行する……以上だ」

真つ直ぐ前を向き、扉をくぐって行った

「人間なのに、強いな……」

誰かがポツリと呟いた言葉に、

明後日恐らく見えるであろう見知った人間達を思い浮かべ……

(彼らも、本当に……強いよ……)

ほんの僅かに、ざわめいた心に蓋をし、与えられた部屋へ戻った

「……………ねえ、皆……………」

窓から見える月は赤い  
向こうで見えた月は、美しい黄金で輝いていたからか……………妙に干渉  
に浸ってしまう

こっちに来てから数日しか経って居ないのに、古い昔に感じられる  
黄金の月を脳裏に描き、

「さようなら、は……………思ったより早く、訪れるもんだねえ」

小さく笑って、  
来るべき、さよなら……………を思い描き、目を閉じた

最後は、  
心の底からの、笑顔を……………

満面の笑みを浮かべて、君達への、僕が人間だった証への饑にするよ  
そうしたらね、僕は完全に羽有りとして生きていける

此処に住む同族達と、完全に同じ羽有りとして……………

「僕ね……………さよならが、待ち遠しくて……………酷く、怖いんだあ……………」

眠る直前に呟いた最後の言葉は、  
誰にも聞かれず、独りぼっちの部屋へと溶けていった

そして、

これは葵達が、扉に入った丁度その日の事だった

藍の知る歴史に刻まれていた筈の、帝国とウィンダス国との全面戦  
争勃発の時の歯車は少し進んだ

歴史はほんの僅かに……一日のズレを、生み出した

## 作戦通達 + 歴史のズレ ≡ デイアム帝国 Side (後書き)

デイアム帝国 Side

登場人物

名前：セリシス ≡ フィレス F ≡ メリウス

呼び名：変人(変態)、せーくん、塔の主

参考：超変人なフィレス塔の主。主に敬語、語尾はカタカナ、認めた相手には私、馬鹿にしてる時はワタクシで、羽有り大好き、あの羽が堪らないらしい。ピンクで紫でピエロな人

名前：マーニス ≡ トランス T ≡ メリウス

呼び名：まーくん、マーニス、トランス 恍惚

参考：恍惚の名を持つ羽有りさん。幻術の使い手でセリシスの親友の一人で、喋り口調は、主に訛り交じりである。昔からずーっと、セリシスとつるんでる人で、癒し系、翠の人

名前：嘉華 ≡ むしん M ≡ メリウス

呼び名：ひーちゃん、むしん 夢魂

参考：むしん 夢魂 < 死者の魂の意 > の名を持つナイスバディーな羽有りさん。死者の魂を操る使い手でセリシスの親友、そしてただ今彼に片思い中……だが、ツンデレ俺様横暴故に、恋の成就是難しそう。(に見えつつ種族補整で何とかなりそう?) 昔からずーっと、セリシスとつるんでる人で男口調な赤の人

名前：シエルア ≡ ヴォイド V ≡ メリウス

呼び名：しーくん、ヴォイド 虚空

参考：虚空ヴォイドの名を持つ礼儀正しい羽有りさん。割と常識人＋皆のス  
トッパーで、重宝する皆の相談場所となりつつある、セリシスの親  
友。ヴォイドは、虚空の他にも無効化という意もあるが……？昔か  
らずーっと、セリシスとつるんでる人で穏やかな水色の人

名前：三國みくに 寛和かんな

呼び名：最高指揮官、寛和

参考：軍の最高指揮官であり、皇帝に直接接触出来る唯一の、皇帝  
一族の血を引かない女性。割とセリシスを気に掛けたりと……彼の  
昔を、少し知っている模様

## 塔からの脱出＋転移＝違和感を抱えてのブラックアウト

(身体が、マジで……だるい……)

やっぱり思ったとおり、塔に置いてきた身体が大分大変な事になっているようだ

けどこれ以上放置していると、本当に肉体が色んな意味で浄化されそうなので、

(起きたくないなあ……)

なんて事を思う心を捻じ伏せて、無理やり目を開ける

すると見えたのは、自分を模して作られたと紹介されていた人形のドアップ

「あ、おはよー、本体ー」

「……おあゝよ……じや、まゝ、ず……」

ニコニコと一礼して挨拶してきた人形に返事を返すが、有り得ないくらい声が嘎れていた

(喉、痛い……)

どれだけ吐いたのか分からないが、血の味がこびり付いている

もう少し早く帰ったら良かったかなあ……なんて少し後悔するが、

「本体ー、タイミングいいなあー……せれん嬢、丁度出かけたところなんだあ」

(わお、俺マジ今日ついてるわ)

と、白々しく前考？撤回し……

鎖が正しい具合に絡み付いて地面に縫い付けられている身体を擦る





け出す

着ていた服やらが本当もう、初めから赤黒かったんじゃ無いかって  
くらいだが、これも無視

身体が勝手に反応し、荒くなってしまうた息を整え……

「はあ……あー……ちょっと俺モドキ、其処に落ちてる両足の義足  
取って……」

「本体は人形遣いが荒いなあ……はいよー」

「うん……ありがとう……」

両足をまずくっ付ける

精神的に割と参ってるが……

明後日敵がやってくると思えば早く準備を終わらすに越した事無い

「あー……うん、嫌な感覚だなあ、これ……」

プツン、プツン……と、時折神経が義足に同化していく音が響く

ふと、

この義足、義腕全てを作った（自称）息子モドキに感謝しないとな

あ……と思った

まあ、数百年前の事だから本人なんて生きて居ないだろうが……

（……生きてそんな気もするけどなあ、何か……それくらい怪奇っ  
ぱい服装で笑い方だし……妖怪かなんかの血でも引いてたら面白い、  
てか笑えない……）

段々息子モドキを懐かしむような思考に傾いていくが、

プチンッ

と、景気いい音が鳴ったので考えるのは終了とする

(……………うん、良好良好)

立ち上がり、さて右腕も……………と思った瞬間

<あー！！翡翠起きてる！！しかも俺の鎖解いてるう！！>

セレン嬢の声は何処かから響いた

ああ、見つかったヤバイなあ……………

なんてのんびり考えながら彼女の部屋を飛び出す

後ろで「ばいばい、またなあ本体ー」と、小さな旗を振ってくれた俺モドキにほんの少しだけ癒された

何やらぞろぞろと、携帯出来るようになったらしい近代兵器を持って黒いローブ集団が追いかけてくるが、近代兵器から鋼弾が飛んでくるが、

そんなの蚊帳の外に置いてしまえるくらい、ほんわかした

やっぱりデフォルメ人形は心のオアシスですなあ……………なんて一瞬脳まで老化したが、この塔唯一の窓を見つげ、

「それでは皆さん……………また俺がセレン嬢に捕まるまで、さようなら

あっ！！」

肉体が耐えられるギリギリの量の炎を纏い、全力でぶつかった  
(っ、マジでこの容鬼畜いよねえっ！！)

五重構造となり、防犯対策バツチリとなっているそれは、ミシミシ  
と音を立てて輝が入っていく  
が、

「うっわあ……これ、前より強化されてない？」

予想外に割れない

見事なまでに割れず、左の義腕が軋んで痛い、てか涙零れた  
そして、追いついてきた黒ローブ集団の先頭の誰かが、

「ええ……博士が、『翡翠が逃げないよーに、今の俺の全力で翡翠  
の脱出経路防ぐもーん！！』と、仰っていられたので」

近代兵器を容赦なく構え、何気に一発打ち込んできながらも親切に  
俺の疑問に答えてくれた

意外と優しい人この塔、多いよねえ……なんて思い、

「わお、親切にどうも……って、そういう問題じゃなくて……俺対  
策かあ……まいつちやうなあ……」

思わず口の端が上がる

面白い……

ああ本当に、面白い

(稀代の天才と呼ばれる彼女が……)

前回の失敗を踏まえて、後手に回るように挑むという形を取っていることが  
そして、

「俺に手を伸ばすなんて、あの人間達みたいじゃないか」

脳裏に浮かぶのは、

人間にも関わらず、喪失を覆そうとするかの如く高みに手を伸ばした先輩

無力で、能力一つも具現する事の出来ないにも関わらず高みの頂点へ進むと叫んだ生徒  
そして

(遙か昔……数百年前に、俺を父と呼び手を伸ばした……アイツも居たなあ……)

酷く、懐かしく……満ち足りた感覚が広がった

全てが消えていってしまったあれから、二度と味わう事の無かった至福……

「……いいだろう……」

何処かで見ているであろう君にまた一つ、俺の力を見せてあげよう  
( いい気分になんてさせてくれた、お礼だよ )

ありがたく、受け取って欲しいなあ……

天井の隅に、その色に紛れるようにして存在していたアイコンに一つ、  
笑みを向ける

そして、

「風は炎を導く道へ、炎は風と混じわいその先へ……」

高みへ手を伸ばした先輩に見せた術式を展開させていく  
それに気付いたのか、数十の近代兵器が向けられ、

「撃てっ!!」

声と同時に向かって来る鋼弾を見て、苦笑が浮かぶ

( ……減点、かな )

上級術式は完成していなければ如何様にも姿を変えられるというの  
に……

完成していないそれを扱う者に対し、不用意な攻撃は致命傷となる  
事が多い

( 俺の生徒達でも知っていますよ )

風で向かって来る弾の速度を奪い、展開中の術式の一つを分散させる  
そして、

(だって、彼らはとても優秀だ)

その一つを起動させた

「過程その？、プロセスset……スプレッド拡散」

炎の弾を爆発させ、鋼弾を全て溶かして消し去る  
全てに優位とされていた属性：鋼が、全てに劣等とされている炎に  
打ち消され、酷く驚いたような黒ローブ達に苦笑しか浮かばない

(少し考えたら簡単なんだけど……)

きつと、一生かけても分からないだろうから一言ヒントを残しておく

「人間らしい生活、もう一度してきた方がいいかもしれませんよ？」  
「っ貴様!!!」

親切でいうと、何故か激怒した顔で見られた

(……あれえ?)

人間って、難しいなあ……

一瞬思ったが、すぐさま打ち消し残りを起動させる  
本来よりは弱いが十分だろう

(恐らく彼女も合成については知らないだろうから、)

次に期待でもしでしょうか……薄っすら笑みを浮かべ、思い、

「風は炎を導く道へ、炎は風と混じわいその先へ、Set……あ、  
そうだローブさん達」

恐らく何が起こるか分からず、恐怖故に動けないのだろう  
そんな黒ローブ達に振り返り深々と一礼する  
理解不能だと、そう言っている視線を甘んじて受け止め

そして、

「セレン嬢に、宜しくね?」

術式、起動……

耳を劈くような爆音と衝撃に一瞬感覚が消える  
まあ鼓膜の一つや二つくらい……破れたら非常に困るが、今は何度  
目かの無視をしておく  
そして、

視覚が戻って来た目で見たのは、辺りを包んでいる炎

(……ちよつとやり過ぎたかなあ?)

警報機がけたたましい音で鳴り響いて、黒ローブさん達の大半が気  
絶している

……まあ、焼け死ぬということは無さそうだから、俺は左腕で頭を  
庇い、

「じゃあ、さようならー」

二度の熱と衝撃で脆くなった窓を割って飛び出した  
追ってくる者は当然居ないが……

(へえ……今日此処、満月なんだあ……)

夜空には何処までも無機質に光を放つ灰色の月が輝いていた

まるで俺を追いかけているようだ



離れては近づき、近づけば離れて……月は、俺達と似ているのだと……  
そう幼い頃は、なんだ人間らしいなあ……等と可笑しげに楽しげに思っていた

そして、

少し大きくなった頃は太陽と違って、汚い部分だけは闇に隠して綺麗な部分だけ照らしてくれているように感じていた  
押し付けがましくない、

ただど大人になった今は、

（あの月の意味が分かってしまったんだよなあ……）  
あれは追いかけている訳でも逃げている訳でもなく、  
（ああ、ほんと……）

「今日は吐き気がするほど美しい、ラムアルトゥン灰の月だよ」

ずっと俺達を、監視していたんだ

無慈悲に全てを見下ろす無機質なこの月には、神と呼ばれるモノが居るといふ

どうやら、此処もそういつた伝説が伝えられてはいるようで  
（……何処に行っても、あの月だけは……）

あの月だけは、脳裏に色濃く焼きついて離れない  
俺を何時まで経っても縛り続ける呪いと化して……  
(……あんまり、こういうこと考えたくないなあ)

意識してしまえばすぐだ  
灰アレの月の呪いに飲まれてただの、灰あてこの月に居る奴等の道具と成り下がってしまう

そうならば全てが無駄に……

「あー……大変だよなあ……」

何が、とも誰が、とも分からないまま呟いた言葉は闇に溶け消えていく

まるで雪のようだと……溶け行く様に、呆気無いとは思いが儂いとは思わない

(いや、思えない……が正しいか)  
言葉の影響力は知っている

何千もの人命を救い、何千もの命を消し去れる……

「無責任にも、それを所有する生き物たちは誰も気付こうとしない  
……」

そして消えなくてすんだ命さえも消えていく……これぞ、憐れ世の無常というものか

思い、苦笑する

(珍しく詩人になってしまったよ……大分疲れてるなあ)

「んー……俺、今日もお疲れ様でしたっ」と

ちよつと意識を現実世界に戻して呟いてみる

落下の速度はある程度、風に頼んでゆつくりにしてもらっている

(……そのお陰で、思考モード入っても地面にドグシャツてならないんだよねえー)

生徒達もこういう力を早く操れるようになれば大分楽だ、主に俺がその時を想像し、若干疲れも癒えてきた……

瞬間、

「本体ー」

「ふぐっ！」

ドベシツ、と上から俺の鳩尾辺りに猛スピードで何かかヒットした一瞬気が遠退きかけたが、もそもそと顔辺りに移動してきたソレに意識も裸足で戻って来た(くらいに早い)

「ちよ、え、何で俺モドキが?!」

「えとなあー、せれん嬢がこう、ぎゅぎゅーってぐぐーって、猛すぴーどで投げたあ」

俺の胸辺りで落ち着いたらしいソレは、少しむくれたように訴えてくる

(……これ、俺モドキじゃなきゃ本当、癒しで可愛いんだけどなあ……)

見た目は可愛い、本当に可愛いが……

(自分を模して作られた人形だと知っている……何だかなあ……)

色々複雑だが、取り合えずセレン嬢が何らかの意図で俺にコイツを託したという訳だから仕方ない

(……確か名前、翡翠って言ってたよなあ)

恐らく、俺が一番初めにセレン嬢に名乗った名はそれだったからそうなんだろう

これなら向こうでそう呼んでもまあ……問題は無いはず  
ふと、

(いやあ……偽名は沢山あると便利だよなあ)  
そんな事を思い

「じゃあ翡翠？おまえは俺と一緒に行くって方向でいいんだよな？」

「いいー、じゃないと俺せれん嬢にばいされちゃうー」

えーん、と言いながら泣きまねをする俺モドキ、もとい翡翠

一瞬……おまえ、本当に俺を模して作られてるか？むしろ葵系統の誰かを模してないか？

と、本気で思った

けどまあ考えても仕方が無いので……

「……取り合えず、行くかあ」

「うんー、行くー」

少し奇妙な同行人と一緒に、

各自に家で泥のように眠っているであろう生徒達の居る国へと

「転移術式、展開」

「しゅっぱー……しんこー」

転移する事にした

ふと……

(真紅や浅黄は、コレ連れて返つたらなんて言うかな……)

気になったが、

「到着」

そんな翡翠の声と共に黄金に輝く月が見え、

ああ帰って来たんだなあ……そんな安心感に怪訝は掻き消された  
少し伸びをし、不穏な気配が辺りにしないと確認した後……

一息ついて、気付いた

(……静か過ぎる……?)

音がしない

生き物の声が、一つもしない

今は確かに遅い時間だが……此処まで静かなのは可笑しい

「……戦争が、行われるのは明後日だ」

歴史上ではその筈

だがもし、それが俺や何かの介入によつてずれていたら？

(……それにそもそも、『過去の俺』は本来この時点でこの国から  
居ない筈だった……)

無人島での俺との出会いに、その要因は全て掻き消されてしまった故に、

(過去の俺は……当時の俺は、この国の滅亡を導いた戦争の開始と終了とされている時間しか知らない)

「本体、誤算ー？」と肩口で可愛らしく尋ねてくる翡翠に癒され、苦笑出来る程には回復した  
そして思うのはただ一つ、

「……まさか、未来の俺が……過去のあの事で、また後悔するなんてなあ」

未来の俺に迷惑かけ過ぎだぞ、過去の俺の大馬鹿め

嘆息を漏らし、少し疲れてはいたが……取り合えず、原因を探るべく動く事にした  
きつとこの行動はまた大きく歴史を変える  
だからアレの呪いが俺を侵食し尽くすのもすぐだろう  
けど……

(……いいよなあ、もう……過去の俺は、カッコつけられなかったんだし)

未来の俺が過去の俺の汚名返上と洒落込もう  
仕方ないのだ、これは俺の誤算……とは言っても、何とかかなりはするだろう

俺の身体も、力も、呪いのせいで反則状態だ

万が一……ということさえも、無い……と言いたい

「まあ……最悪、過去の俺の喪失の一部になれたら幸いかなあ」

そうすれば世界はやり直される

彼に自分と同じ結末を辿らせるのは正直心が痛むが、仕方がない  
その時は、その時だ

「さて……名探偵でも気取ろうか、ねえ翡翠？」

肩口の彼に話しかけると、いつの間に着替えたのか探偵風の服を着  
ていた

(……さすが、セレン嬢って所かなあ)  
遊び心満載だ、やり過ぎって思う事も多々ある程に満載満載

「本体ー、いくぞおー」

「……俺が助手、みたくなってるねえ……」

恐らく今の構図だと助手兼乗り物といった所だろう

(……いやあ、翡翠が肩口に乘るサイズの人形で良かった)  
等身大の大きさでこの構図いくと無理じゃないかもしれないけど、  
うん、

「吐き消しちゃうよなあ」

だって大の大人の肩にこれまた大の大人だよ？しかも肩に居るのは  
ただの野郎だよ？

女の子ならまだ絵になりそうな気もするけど……  
いやそもそも、男女云々以前に俺結構なで肩だから落ちるわ、ははは

「……本体？ほーんーたーいー、はやくうー」

「あ……うん、分かった分かった、行くよ」

人形に急かされるといいうのも、物凄く情け無い構図……

一瞬間に浮かんだがすぐ消し、静か過ぎるこの空間の原因を探るべく奮闘……しようと思う

だけど、

(……大分疲れてるなあ……足がガタガタ……って、義足だから単なる力の供給不足か……)  
行動維持が困難なほど、危なくなってきたようで……

「本体？だいじょうぶうー？」

「あー……うん、精神的には色々と癒されたけどちよっと……っとお？！」

「わあー」

ドシャツ、と凄まじい音を立て顔から地面に激突した

(……咄嗟に翡翠両手でチャッチしたからってこれは……)  
酷く情け無い気分になりながら、うつ伏せに転がった状態で後ろを見る

「うつそお……俺何も無い所で転んだ……」

どいぞのドジッ子じゃないんだから……いい年して、ねえ？



精神的にもダウンしたのか、

「本体ー、ねえ起きて起きてえー」とゆさゆさしてくる翡翠が二重にも三重にも……

(やば、これ……)

「ごめ……俺、ちよい……ね、る」

それだけ何とか口から絞り出すと、

すぐさまずると……暗闇の中へ意識が引きずり込まれていく

「本体ー……此処で寝たら風邪引くよおー」

意識を失う直前、

困ったようできて、何処かズレている翡翠の声が聞こえた……気がした

## 弱さ+補いと分かち合い＝家族

(あれ……俺、いつの間に……寝て……?)

目を開けば見えたのは見慣れた天井

姉ねえちゃんかジャンス先生が運んでくれたんだろう……と、頭の中の何処か遠いところで思った

頭の中は何やら靄のかかったような感じがしたが、もう一度寝ようと身体をベットに沈めようとしたが、

(あれえ……? 違っつて俺の体……起きるんじゃないくて、寝るんだっつて……)

思いとは裏腹に身体は起き上がり、オマケに布団を剥いできた外気に晒され反射的に震えるが、そんなことさえもお構い無しのように身体は意思に関係なく行動を続ける

(……なんだっけ、これ……)

何時だったか授業で聞いた事があったような気がする

確か、第二次成長期には身体と心がバラバラになるものだと……と、いうことは、だ

(俺の身体……今成長期かあ……)

故にこの行動は親に反抗する子供という事だ

そう思えばなんだか許してやろうという気にも少なからずなる……  
が、

(あれえ、何でドアになんて手え掛けて……って、おおう?)

ガチャツ、と軽い音を立てて軽く服を羽織った俺の身体(俺の意思  
関係なく)がドアを開けて出て行く

当然、身体と心はバラバラだといっても物理的には一つなので

「ちよ、え、ええ?!ま、待てよ俺の身体!!こんな時間に何処行  
こうってんだよお!!」

このままじゃジャンス先生に、

「深夜徘徊とはいいい度胸だなあおい?」とか言われてボコボコにさ  
れちまう……!!

焦って叫ぶが身体は全然止まってくれず……寧ろ、歩くスピードが  
早くなったような気がする

「む、無視かよ!!俺の体の癖に生意気だぞこの野郎!!」

またもや無視された

精神的に10のダメージを受けた……が、俺は強い子だ

この程度の無視、昔のセイレンで大分慣れた、うん、俺は強い子だ  
何度も一人で呟き、頷き、自分を慰める

……傍から見れば恐ろしくかわいそうな子に見えるだろうが今は誰も  
居ない、怖いほど静かなので自然と声も大きくなる

「な、なあ俺の身体、話し合おうぜ、なあ?!俺等ってさあ、生まれて以来の付き合いじゃん?もう一心同体じゃね?だから落ち着いて無視せず俺の話聞いて……って走るなあ!!」

無視所か、話の途中で走り出す始末

(俺はそんな身体に育てた覚えはねえっ……!!)

一瞬思ったが、口に出すと変態っぽく聞こえるので自重した

「うん、俺偉いぜ!!って言ってる場合じゃなくて!!マジで何処行くつもりっ、とお?!」

何かに躓き、地面に派手に転がる

何気に顔を庇ってくれたことに感謝しながら転がっていた物体Xに目を向けると、

「って、あ、藍?!なんでこんなところに転がってたんだよ?!」

転がっていた物体Xの正体は藍だった

うつ伏せの状態で倒れているらしく、その服は何やら赤黒く……

(ま、まさか……血……?)

取り合えず足のつま先で頬辺りを突付いてみるが、ピクリとも動かない

俺達と分かれてから藍に何があったかは知らないがこれは一大事だ

「だ、誰か助けを呼ばねえとっ……!!」

けど、俺が離れている間に藍をこっした敵が来たらどうする?

藍が敵わなかったなら俺など一息でノックアウトになるだろうが、そもそも逃げられるかどうか危うい以前にっ……!!

ちらつと、倒れている藍を見る  
躓いた時には気付かなかつたが、その頭にはデフォルメされた藍コ  
スチュームの人形が乗っている  
と、いうことは、だ

「藍お前……彼女に振られたショックでこうなっちまったのか……」

好きなヒトに振られるということは相当ショックらしい  
まだ経験は無い俺だが、本当に……物理的的刺激に例えれば……  
男でいう、大事なアレを蹴られ踏まれ……拳句の果てに「はっ、こ  
の（ピーー）がっ！！」と蔑まれる程の痛みと悲しみらしい  
俺も少し、セイレンに振られた所を想像してみた  
（やべえ、マジで涙が滝のように流れそうだぜ……）  
現に少し涙が零れた、想像しただけに本当に、まっことしやかに悲  
しい  
取り合えず、藍が無事成仏できるように合掌する  
と、

「あー、おまえ葵だなあー」

「ひぁえっ?!」

（あた、あた、あああああああ?!）  
頭の上に乗っている無機物ワッショイ（?）な筈のお人形さんが喋  
った  
と、いうことは有機物だという事だ  
しかも、藍に良く似た有機物

（あれか、あれは藍の隠し子か?!出来ちゃった婚フラグで断られたってかあ?!）

そもそも子供とは頭に乗る……肩にも軽く乗れそうな大きさなのか、とか

明らかに見た目人形って始めに認めただろうが、という全ての突っ込みを無意識に脳が回避する

そんな俺の視線の先では、んー……と少し伸びをしながらソレは俺の言葉を待っているらしく、パチパチと瞬きしている

（あ、何か可愛い……）

少し冷静な思考が戻って来たので、色々とぐるぐるする頭を整理しようとして説明を請うと

「俺は翡翠ー、本体を模して作られた人形ー」

とのことなので、隠し子線は消えた

だがまだ恋人に振られた線は消えておらず、そっちの方が色濃くなってきた

……藍が振ったという線もあるが、藍は割りといい奴だと思つので意識的にその線は排除した

「って事で勝手に藍は振られたに決定ー」

うんうん、と頷きながら言うつと人形……翡翠は首を傾げる

その仕草に、藍を模して作られたと言われても……そのつぶらな瞳に、いくら藍を模して作られたと言っても、

（いかん、マジで今萌えたんだぜ……）

一瞬本気でセイレンバージョンが欲しいとか思ってしまった  
そんな自分に脳内だけで制裁を加えていると……

「葵ー、本体こんなところで寝たから風邪ひくうー、運んでー」

と、言いながら翡翠が俺の身体をよじ登り……頭の上で落ち着き、催促してくる

確かに昼間は温かいが朝と夜はまだ寒い

こんな所で寝ていては必ず、と言っていいほど風邪を引くだろう

(……しゃーねえなあ、貸しーつだ)

「分かった分かったあ……よーいーしょいっ」と

地面に座らせ、背に凭れかからせるようにして背負う

一瞬よろけたが思いの他力の強かった翡翠に手伝ってもらい、無事成功した

思ったとおり……服の赤黒い物は血だったらしく、背負った今、物凄く血の臭いを感じる

(……マジで藍、何してきたんだろう……)

首元を感じる吐息は思った以上に穏やかで、ただ眠っているだけと推測できたのでゆっくりと歩き出す

「何処運ぶうー？」

「ん？えとなあ……あー……フェルちゃんとは、起こしちゃ悪いしなあ……うん、俺の部屋に運ぶかあ」

今はもう相当遅い

黄金に輝く月が真上にまで昇っている……こんな遅くに女性の家に行くのは紳士じゃない

(うん、俺偉い、偉いぞ)

心の中でだけ自分を褒め、

それに……と今思ったことに付け加える

フェルちゃんは優しい

昔俺が大怪我した時……姉ねえちゃんと一緒に毎日俺の見舞いに来てくれていたらしい  
そして、

一ヶ月もの間……目覚めない俺の側でずっと泣いていたらしい  
(……だから、フェルちゃんの泣いてるところ……見たくねえんだよなあ……)  
本当に、フェルちゃんは優しいから……  
だからこんな状態の藍を見れば酷く心配して心を休める所ではなくなるだろう

藍が言うには、戦争は明後日だ

予想外に皆が早く強くなったから、明日一日休んで戦いに備えるべきだと言っていた

(……皆マジですげえよなあ)  
扉を出てから久しぶりに会った皆は、変わっていた  
セイレンのように目の色が変わるとか、目に見えての変化があるものは居ないが……  
表情に子供っぽさが抜けたというか、兎に角立派になっていた  
強く、なっていた

「……俺……置いてかれてるよなあ」

少し落ちかけていたので、もう一度背負い直し呟く



俺は扉の中で約2年……ひたすらに回避と体力付けしかしていない  
皆みたいに関か新たな扉の先を掴んだ訳でもない……そもそも、扉  
が見当たらない

(所謂論外的な、なあ……)

素質が無いから鍛えるだけ無駄だと、そう言外に言われているよう  
で寂しい

皆が眩しく見えて、

皆と同じ位置で戦う事など無理なのだ……はっきりとした位置づ  
けを見せられたようで、

「葵ー、本体を信じてあげてー」

考えているとふと、

頭の上にいる翡翠が何やらクシャクシャと髪の毛を混ぜるように触  
った

頭を撫でられているのだと気付いたのは、

「大丈夫ー……葵はー、葵にしかない力あるうー」

だから大丈夫ー……と、何度も何度も藍と同じ声で、

慰めるように翡翠がよしよしー、と声まで付けて頭を触り始めてか  
らだった

(……こういう、訳もねえ根拠つてのが……案外多いよなあ……け  
ど、それに救われた気分になるのもまた……)

思い、少しだけ頬の先が上がる

何時もの俺が、戻ってくる

だから、

「……有難うなあ……よし、翡翠が信じてんなら俺も俺を信じるぜ  
!」

「よし、その意気だあー」

頭でピョコピョコ跳ねる翡翠と一緒に拳を上へ上へ伸ばし

藍がずり落ちそうになって慌てて支えなおすとその衝撃で葵が地面  
に落ちたり

それに笑うと頭をグシャグシャにされたりと……

何時ものように、

俺だけは大人になった皆と違って変わってねえから

(俺は、これで……)

馬鹿みたいな事言つて、

馬鹿みたいな事平気でやって、馬鹿みたく皆を巻き込んで騒いで、

(俺はこれで、いいんだよなあ!)

何時ものように、俺らしく、皆らしく笑えたら花丸満点だと思う事  
にした

そして……

ようやく家の前に辿り着いた時、反抗期だった自分の身体の事も忘  
れていて、

そんなことあったことさえも頭の中から消し去っていた

「葵の家ー?」

家の扉に手をかけると、頭に乗っている翡翠が尋ねてきた

（マジで此処まで運べるとは思ってなかったぜ……藍って案外華奢いなあ……）

ぼんやりとそんな事を考えていた為、気付かず頭にチョップを喰らってしまった

想定外の衝撃に額を扉にぶつけて本気で悶絶した

（に、人形といえど、侮り難し……）

目頭に涙が滲んだが、気を取りなおし扉に手をかけ返事を返す

「おう、此処は俺の家だ！俺の大事な、家族……まあ、誰とも血は繋がってねえけど、マジで大事な家族が住んでる家」

「そうかあ……いいなあ」

音を立てないよう慎重に自分の部屋へと上っていく

……まあ、話している時点で音を立てないも糞もないのだが……

取り合えず、何事もなく自分の部屋に辿り着きせめて血濡れのコートくらい脱がせようと椅子に藍を座らせ、四苦八苦する

どうにか脱がし終えたが……

（……全部血塗れとか……俺のベットが……全部脱がすか……いやもう、いっその事風呂そのまま入れた方が早いか……）

解決策を模索しつつ、これは色々と厳しい戦いになりそうだと……そんな事を思う

そして、

「よし、俺も血生臭くなったから風呂入ろう、風呂……！」

決意表明した後、

隣の部屋（ジャンス先生の部屋）から少しだけ服を拝借し、また藍を担いで浴場へと連れて行く

翡翠に聞いた所、俺の義腕と違って藍の義足義腕は入浴時に付けて

も大丈夫なようで……

更に翡翠も人形だが入浴可能らしく、

(……何かいいよなあ……ハイテクだ)

ほんの少し羨ましく思いながら左の義腕を外し風呂に入った

「んー……いい湯だなあ……」

外に居た為大分冷えた体が温まっていく

藍の髪やら義足やら義腕やらにこびり付いたようになっていた血は、  
翡翠がせっせと洗ってくれているのをぼーっと……眺めながら……  
さっきの会話を思い出した

「……なあ、翡翠……おまえ、家族欲しいの？」

「……うんー……本体は、本体だし……製作者も、製作者……  
だから俺も、」

俺も家族欲しい……

呟くように放たれたその言葉は、何一つ期待などして居ないかのよ  
うに感じた

無感情、というよりももっと別の物……強いて言うなら、空虚な、  
声だった

(……なんか、何だろう……)

酷く、胸の中がモヤモヤする

藍と同じ声だからだろうか？まるで藍が言ったかのような錯覚を覚  
える

まるで藍が、

(何一つ期待なんてしてねえみてえに……)

自分の知らない彼を垣間見たような気がして、酷くモヤモヤする  
だから俺は、

「なあ、おまえも家族になっか？」

あえて平然を装ってそう告げた  
すると俺の言葉に一瞬、翡翠の動きが止まった

「……嫌なら、いいんだぜ？」

重ねて言うと、ふるふると全力で首を横に振られる  
そして一息吐くかのように、翡翠は少し間を空けた後

「……俺も家族、なれるー……？」

不安げに、怯えたように呟いた  
だから……当たり前だろ、と告げて頭を撫でる  
パアツと、嬉しげに頷いた翡翠に言ってよかったと思いつつながら

「よし、じゃあおまえは俺の弟なあ！欲しかったんだあ、弟！！」

そう満面の笑みを浮かべ歓迎の意を示すと、無邪気に喜んでくれた  
そして、洗い終わったららしい藍を翡翠と一緒に湯船に浸からせ笑い  
合った

しばらく浸かり、先に風呂から上がると……  
まだ湯船に浸かっている、眠っている筈の藍の口元が微かに綻んで  
いるような気がした

(……藍と翡翠って……こう、何か繋がってんのかなあ)

そうだといいなあと思う

(一人じゃねえって……俺達皆家族なんだって、ちゃんと伝わって  
たらしいなあ……)  
そうすれば、きっと……一人で頑張ろうとしなくて良くなると思う  
そうすれば……必ず、背負っている何かを皆で分かち合えるんだと  
……信じてる

「……何時か、翡翠みたく笑ってくれたらいいのになあ……」

翡翠と一緒に藍を運び、

二人がベットで眠った後小さく呟いた

藍が見せるのは外向きの笑みと、困った笑み……苦笑が多い

(……大人になるってそういうもんなのかなあ……?)

ふと思ったが、俺の知る大人は皆良い顔をして笑う

なら大人だから……という事にはならない

「……笑えー」

むにー、と風呂場で見ただ笑みを思い出し眠っている藍の口端を上  
上げてみた

(……うん、何かごめん)

眠っているのか笑っているのか酷く中途半端な顔になってしまった  
事に謝り、床に敷いた布団の上に転がる

色々とうまく行かないことが多い……それを嘆いても変わらないが、  
それで割り切れる訳でもない

だって俺は仙人でも悟りの先生でもなく、ただの馬鹿な餓鬼だ

(餓鬼は餓鬼なりに足掻きますよーっだっ)

そう思い、

「だーあーあーあーあーあー!!」

兎に角床をゴロゴロ転がったが

「いだっ?!」

足の小指をたんすの角にぶつけてあえなく撃沈

ついでに、小指を触ろうとして身体を曲げると背と後頭部をぶつけた、これは最早沈没レベルだ

「いてえ……あー……」

天井を見ても知りたい答えなんて、解決策なんて見つからない  
何一つとして見つから……あ、埃ついてら

「って俺……埃は見つけない……って、そうか……」

(何も見つからないと思っても、何か見つかる事はある……って事  
だなあ!)

何の解決にもなっていない気はしたが、何故か明るい気分になった  
だから、

(うん、有難う埃……出来れば俺の真上には落ちてこないでくれな  
あ)

そう念じ、いい加減寝る事にした

何時もよりも静かなこの夜は……

やけに月が輝いているなあと、ぼんやり思い

「……………ん……………笛……………?」

急速に身を包む眠気の中で……………

繊細で優しく……………そして、ほんの少し物悲しい笛の音を聞いたよう  
な気がした

それは、まるで……………



響く音色＋飛ぶ変態Ⅱ数ミリの火蓋

「……………まあた吹いてんのかよ、変態」

この国の全てを見渡せるのでは無いか、と思える程高い崖の上  
まるで悼むかのように横笛を吹く今回の作戦の指揮官……………セリシス  
ファイルス  
「F」メリウスに呆れたような声で言うと、薄く笑みを浮かべられた  
まるで何も感じて居ないかのよう……………常闇の深淵を覗き込んだか  
のような虚無感を感じ、思わず身体が震える

(ちっ、コイツまた……………)

脳裏に過ぎつたのは、前回の戦場……………今と全く同じ状態になった姿  
戦場となる地に行く度に、戦の前日必ず吹くあの横笛……………それを奏  
でると決まってあんな状態となる  
本人も分かっているらしい……………この状態の時も、思考は正常なのだ  
と言っていた  
だがそれも、あくまで……………

「向こうで……………アイツ等が呼んでる、てめえも来い」

「……………何故？ワタクシは必要アリマセン」

それだけ告げ、目を瞑り背を向けまた横笛を吹き出す  
その背に向かつて聞こえるように舌打ちしても相も変わらず無反応だ

「……………なあにが思考は正常だ……………おい変態、てめえのその状態での

正常判断は通常に比べりゃ……酷く異常だろうがよ……」

声を投げかけても、薄く開けた瞳で微かに笑みをよこしてくるだけその、張り付いたような薄ら笑みを浮かべる今のコイツは嫌いだ  
普段のアイツの方が100倍も、1000倍も……それ以上もマシだ

「っふざけてんじゃねえぞこの野郎……!!」

叫び、胸倉を掴み無理やり演奏を止める

「……何をスルのデスカ」

演奏は実はどうでも良かったのか、止めても薄ら笑みは消えない  
酷く、ムカつく

何時もより増えた片言、俺様達までもを馬鹿にしたワタクシという  
一人称

気に入らない、全てが……

「気に入らねえ……てめえ、『フラロック預言者』にでもなったつもりか  
？」

預言者……神と呼ばれる管理者から、ソイツの望む結末に向かうよ  
う声を聞き届けそれを命をもって遵守する存在

正常である彼が忌み嫌っていた言葉を投げかけると、ほんの少し、  
ソイツは表情を変えた

ほんの少し、俺様等の慕うアイツに戻った

(後……後、少しか……?)

もう少し頑張ればアイツは戻ってくる

そう言い聞かせ、言葉を並べようとした……瞬間、

「貴女は……『私』が好きデスカ？」

浮かべていた笑みも消え去った無表情で言われたその言葉に、一瞬  
時が止まる

だがそれも束の間のこと、

「つたりめえだ！俺様達にまでワタクシなんぞ使っふざけたてめ  
えなんかより数億倍好きだっ！！」

咄嗟に浮かんだ言葉を、思いの丈を……ぶちまけるように叫んだ  
そして……

しばらくの間、沈黙があたりを包んだ

(っ……糞恥いっ……!!)

顔に熱が集まって居るのが分かる

正常じゃない状態のアイツだと分かっている、マトモに顔を見ら  
れない

ふと、

カラン、と……軽い音を立てて何かが地面に転がった

(これって……)

先ほどまでアイツが持っていた横笛だ……

気付いた瞬間、弾かれたようにして顔を上げて目に入ったのは、

「……っはは……んだよ、そんな顔も出来んじゃねえかよ」

目を酷くまん丸にした状態で、まるで呆気に取られた子供のようだ  
(初めて会った時みてえな……餓鬼臭え顔、まだ出来んじゃねえか  
……)

少し安堵し、普段なら羞恥で爆死しそうな台詞を勢いだとはいっても  
も言えた事に満足した  
と、

「……ひーちゃん……有難う御座いマス」

落としたことに今更気付いたのか、横笛を拾い、着ている服の中に  
仕舞い……

何時ものような、ヘラリとした笑みを浮かべてそう言った  
その笑みを見た瞬間、

(っ……あ、あああああっ!!)

羞恥が、油を注がれた炎のように爆発した

「て、てててめえっ!!お、おれ、俺様がてめえを好きな訳じゃね  
えんだからな!!」

「……分かってマストモ……それ程に、あの状態の私が嫌いだとい  
うことデスヨネ」

うんうん、と軽く頷く彼に、当たり前だあ!!とまたしても勢いで  
叫んでしまっってから後悔した

折角自分の本当の気持ち可言えたというのに、それを激しく否定し  
てしまっている

(だあああ!!何で俺様はいつつもこうなんだよお!!情け無いっ

たらありやしねえ!!)」

うがあああ——!!——!!と黄金に輝く月に向かって吠えろと、後ろで、

「キヤ〜!!狼が出たデス〜!!」等と調子に乗って騒ぎ出すから謝るまで本気で関節技を決めて絞める事にした

「ぼ、暴力反対デス!!」

「ああ?!暴力しねえと理解できねえが悪いんだよ!!」

「いえいえ分かりマシタ、マジにリアルにまっことしゃかにバツチグーデス!!」

「……なんかその返答にイラついたから絞める」

「っ……ど、ドントタツチミーっ!!」

どこのその異国語を口走りながらキヤイキヤイ逃げる彼に、ああ何時もの変態に戻った……という安堵を感じたが、何だか腹立たしいので関節技を一つ二つ適当に決めておいた  
そうこうしていると、

「大丈夫ですか?」

そんな声と同時に、心配そうな顔の同族達が見えたが

「へるぷみー!!おーたすけぷりいいいずっ!!」と、謝罪やら何やらを口走り始めている変態を見て、

「あ、良かった何時もの変態具合だ」

「うん、良かった……相も変わらず、変態だ」

「だな、変態だ」

などと口々に頷きあう

薄情モノ……と、寝技を決めた際半泣きで変態が言っから

「……そういう、俺様達がためえは好きなんだろ？」

そう返すと、一瞬驚きすぐに満面の笑みを浮かべ……

「ええ、もちろんデス」

そんな声と同時に、一瞬にして変態が視界から消え、

(……………あ?)

視界の超至近距離に、見事なまでの紫系統のグラデーションが映るオマケに、その向こう側に見える同族達は何やら頬を染めていて……  
…って、

「…っ！……！！！」

状況が飲み込めた瞬間、一気に顔や耳やら……全身が発火したかのような程に熱くなる

口を開くが、水から出された魚のようにパクパクと動くだけで言葉にならない

羞恥と(不本意ながら)喜びが体中を駆け巡り、脳内でその二つが激しい物議をし出す

その間に何やら、背に回されていた手が羽を撫でるように動き、

「オオ、本当にひーちゃんの羽は極上の触り心地デスネエ！！！」

等とふざけた事を抜かしたので、

「っ……この野郎いつぺん死んでこいやあああ……！」

ほぼ全力で叫び、全力で変態を殴り飛ばした

どうやらもろにヒットしたらしく、綺麗に円を描いて崖の上から吹っ飛んでしまった

飛んで行った途中、完全に力が抜けていたので今頃気絶しているだろうと推測できる  
そして、

「……………」  
「……………」  
「……………」

残された俺様たちは沈黙を余儀なくされた

…… たつぷり数分は経ったであろう後

「と、取り合えず……指揮官不在の為、作戦執行は……し、指揮官の迅速な搜索と保護の後ということ……」

宜しいでしょうか……？

苦笑を浮かべてそう言うしーくんの言葉に、皆無言で頷く

自業自得だと割り切りたいが……割り切れないのが俺様達だ

溜息を吐き、それぞれが寝床と決めた場所に戻って行くのを確認した後空を見上げる

輝くのは、帝国の『赤き月』エリムティイアセレネとは違う……

(…………… 『アウルムセレネ』黄金の月』か)

早ければ明日……  
数多の血で染まるであろう大地を見て、帝国と違つこの月はなんと  
思うのだろうか  
ふと、そんな事が気になったが

(……あの変態を探すのが先決だよなあ……あー……)

何処までいっても迷惑掛ける奴め……  
半分以上は……それよりもまず、実行犯は自分のなのだけど、  
どうにもこうにも腹の虫が治まらないのでそういつ事においておいた

そして……

全ての準備は終わりを告げて、

カウントダウンも終わりに近づく

後はもう……開始の合図を待つだけで

歴史に刻まれる大規模戦争……その火蓋は、数ミリを残して切り  
落とされた



## 足りないものは後一步

(……俺は、馬鹿だなあ……)

そう思ったのは一度や二度じゃなくて、  
もう数えきれないほど……それこそ、耳にイカやタコが出来るくらいである(あれ、イカって出来たっけ?)

(あー、まあ……脳が現実逃避し始めてらい……俺ってトリップ好きだなあ)

そんなくだらない事を思っては、少し苦笑が漏れる  
そして、ゆっくりと緩慢な動作で顔を上げる(正確に言えば、無理やり上げられた)

見えたのは、丁度俺達の真上辺りで眩しいほどに輝く太陽 プラス、俺に視線を合わせるようにしゃがんでいる人……ちなみに、顔は逆光になって見えない で  
ワザとではないが、もう昼かあ……なんて、目の前に居る 俺の顔を手で上げさせている 人の事を視界から追い出し、そんな事を思った

すると、ちゃんと話を聞け、と言わんとするように顎を少し強めに握られた

(うん、マジで痛え……)

「っ 葵!!」

「葵様!!」

無意識に痛みで顔が歪んだのだろう、少し離れた所で食い入るように俺を見ていた皆が叫ぶ

(あー、また俺心配かけてら……)

動きたいのに動けない

そんな表情の皆に、申し訳程度に顔を向け 恐らく途方に暮れたような顔で 苦笑し、大丈夫かも、と返すと上から同じような苦笑が降ってきた  
そして、

その人は続いて一言、馬鹿だと言った

だから、俺は最初からそう言った筈だぜ？と、ニツコリ笑って言えば、なるほど落ち度は私にあつたかー的な事を顎に手を置き、ぶつぶつと呟き始めた  
顔は見えないが、見た目に似合わず割と真面目系統の人だなあ……  
と、ぼんやりそんな感想を抱いた  
そして、

コイツを帰して欲しくば 差し出せ

なんて悪役っぽい事を言う(その後一度言ってみたかったとかキヤツキヤと言ってるから、何となく俺と同じ臭いがするとか思った訳でもないかもしれない)

自慢じゃないが、俺の素晴らしい聴覚と視覚はどつやら顎を掴む悪役モドキの術で 現在進行形(動詞の原型+ing) 奪われ続けているようで、

段々と聞こえずらく、見えずらくなってくる

(あー……俺ってほんと役立たずー……)

顎を掴む手を外されたので、そのまま地面にうつ伏せで(マジ熱烈大好きです結婚してください、いやまずはキスから!!的な暴走した思考が流れた後)感動のこんにちは、をした

(俺のファーストキスは、地面に奪われたんだぜ)

なんて何時ものようにギャグめいたことを考えてみるが撃沈、普通に悲しくなった

そんな俺を知ってか知らずか、無理やり引つ張りあげる誰かさん……もう声も姿も上手く認識出来ねえけど、首筋に冷たい何かか添えられたのは分かった

(つて、あれ?見えねえのは俺がただ目を瞑っただけかあ)  
馬鹿だなあ、俺の頭……なんて、自分でもツツコミを始めた 若  
干ぐるぐるし出した 頭を置いて行くように、

ガギイツ……やら、ドスン、やら今の状態の俺でも聞こえる……いや、直接脳天に響いてくるような音がした

直後、衝撃を感じ、今の俺的に超頑張っつて(だって何か悲鳴っぽいの聞こえたし)薄っすら目を開ける  
見えたのは、

(……あれえ?)

掴まれている誰かの体と、それを掴んでいる人の、超下からの  
それこそ地面から見上げてんじゃねえのってくらい  
の アングル  
カッ

向こうでは、俺の名を叫びながら泣き喚いている仲間たち  
そして、むせ返る程の血の臭い

(あ……？うっそ、マジ、で……？)

ゆっくりと思考が回っていく

そんな俺の目の前に、狂った訳でもなくあくまで冷静に喋る誰かが、  
その抱えていた身体をゴミのように捨てた

視界に入ったその身体には……首が無かった

一瞬の疑念の余地さえ挟む隙を与えぬように、思考が結論に至った  
そして胸に去来したのは、諦めやら無念やらの悔恨の思い

……それを経て、徐々に消えていく思考の中、最後に思ったのは  
(……ちぎ、しょっ……お、れ………)

セイレンやフェルちゃん、涼辺りの足元に転がったら、スカ―  
トの中身見えたのに……

そんな最も俺らしく、

最も馬鹿な思春期青年に相応しいくだらないことだった  
そして、

ゆっくりと思考は闇に溶けて……

俺は此処で死ぬんだと

そのことに、酷く安心したような気がした

\*\*\*\*\*

今日は、明日が戦争が始まるとの事で修行も学校も休みだ

……と、いう事を学校に登校してすぐ言われた

(来る前に……連絡して欲しかったような気もしますが……)

まあ、何時もの事だと……回りを見ても、うんうん頷いてらっしゃったので不問とする

そして、

最近珍しいと判断出来る自由時間を手に入れたこの日は、明日の事も考えて皆様で集まったのんびりしようと決めた

その旨を話すとどうやら皆様もそう思っていたらしく、何処かに集合しよう、という事になった

「集合場所だが、どう決め……」

ふと、帷様の言葉が不自然な形で止まる

何事か、とその視線の先を見ればフラフラと葵様が教室を出て行くところだった

「っ葵!!」

「葵様!!」

その背に全員で叫んだが、足を止める所か……

歩みを遅らせることすら叶わず、出て行ってしまった

(……葵様……)

一体、どうしたのだろうか？

何時もの彼なら、こういう話には飛びつくように食いつき……自ら  
意気揚々と仕切るほどなのに

先ほどの彼は心此処に有らずで……そういえば、昨日扉から出てき  
た時も少しぼーっとしていた  
何か、あったのだろうか……

「……私、少し葵様の様子を見てきます」

何となく……そう、何となく嫌な予感がしたのでそれだけ言い残し、  
教室を飛び出した

ただ思うのは、扉から出てすぐの彼の表情と言葉

『皆すげえ強くなってるんだなあ……俺なんかより前に先に……ほん  
と、すげえなあ!』

屈託無く笑っていたのに、泣いているように見えた  
心の底から賞賛の言葉を言ってくれたのに、寂しそうに感じた  
(……どう、して)

どうしてそう感じたのか、見えたのか分からない

相変わらず彼は屈託無く笑う

それこそ、扉に入る前と何ら変わりない笑顔

だが……扉の中で過ごした日々で、彼の何かが変化したのだろうか？  
様子が変わったのは分かった

何処か遠くから寂しげに微笑む事が増えたのには気付けた  
だけ、

(……何が原因で、なんて私には……)

まだ彼の事が何一つ分からない

分からない、葵様の事が、何、一つ……

外に出て、辺りを見渡しても葵様の姿は見つからない

(葵様……何処ですか……)

胸に去来したのは不安でも悲しみでもなく、

焦燥感……

「葵様っ……!!」

どうか無事で居てくださいと、

柄にも無い事を必死で思いながらとにかく走る

戦争は明日だと、それは知っているけれど……

(何か……何が、)

得体の知れない何かが既に起こっているように感じて……

「葵様、何処ですか!!」

酷く酷く、怖かった

(お願いです、返事をつ……声を、聞かせてくださいっ!!)  
必死で叫び続けながら見知った森を走り続ける  
何時も見慣れているこの森が……この時だけは、酷く遠い物に見えた

(……柔らかい……土の臭いもシマスネエ……これは、草木の感覚……?)

自国には無い、優しい自然の感覚にゆつくりと身を起こす  
微かに身体が痛んだが、どうやら骨折も何もして居ないようだ  
その事にまず一つ息を吐き出して、辺りを見渡した  
見えるのは木、草、木、草、草、木、木、偶に花だ

(……森、と結論付けて良さそうデスネエ……)  
何故こんな所に一人で……と、其処まで思って思い出した  
確かひーちゃんに殴り飛ばされたのだ

「本気で殴らなくても……まあ、ひーちゃんらしいデスネ」

どっこいしょーいしょいつ、と今適当なので思い浮かんだ言葉を  
呟き、立ち上がる  
ふと、この森は親友達の故郷にそっくりデスナア……なんて懐かし  
く思い、

(……こんな良い環境なら……まだ、羽有りがこの国に居る可能性  
は有りマスネエ)  
どうやら吹っ飛ばされた衝撃にも耐えたらしい笛を、服の内から取  
り出す

(あの曲さえ吹かなければ……怒られるようなこと起きませんヨネ



エ……)

あまり頻繁に殴られては本当に馬鹿になってしまう  
人知れず苦笑を漏らし、それを口に当て……

「羽有りの為の独奏曲…… 『テンタシオン・マルチャ誘いの行進曲』」

羽有りにのみ聞こえる……本能に、その血に誘いかける曲を奏でる  
今居る場所が何処かは分からないが、恐らく仲間達には聞こえてい  
ることだろう

出来るだけ早く来て欲しい、とぼんやり思いながら笛に身を任せよ  
うと思っただが、

(……あ……そういえば、作戦実行は今日でしたネエ……遅れれば  
最高指揮官殿に怒られてしまうカラ……)

うん、自分の保護より先に作戦実行して貰おう

これ以上最高指揮官殿に迷惑かければ恐らく、彼女の胃に穴が開い  
てしまう

彼女は陛下と同じで、人間だが嫌いじゃない分類に入っている

ああ本当に仕方ない……そんなことを思いながら、左人差し指をく  
るりと回す

すると、

ポンッ

と擬音が相応しい音を鳴らして、自分好みにデコレイトした そ  
の真白な首にはピンクのリボンを、小さな頭にはお揃いのミニハッ  
トを付けた 半目で眠そうな小鳥が現れる

演奏を止めるのも気が引けた　演奏を止めると、万一の確率で誘われていた羽有りが正気に戻り近づいて居ても帰ってしまう　ので、片目を瞑って笑みを浮かべて見せると、若干不機嫌な顔をしながらちやんと飛び立ってくれた、が……

（飛び立つ寸前、八つ当たりとばかりに頭を踏んで飛ぶのは止めて欲しいデスネエ……）

踏まれた頭が少し痛い

まあ何時ものことなので良しとしよう……そう思い空から目を戻した瞬間、

（……これは、珍シイ……）

少しトロンとしたオッドアイを此方に向け、近づいてくる少年が見えた

大分長い時間生きてきたが、赤と翠のオッドアイを見たのは初めてかもしれない

そんな事を考えている間にも少年は、覚束無い足取りでフラフラと近寄ってくる

その姿からして羽有りである確率が高い

（さて……どうシマスカ……）

下手に笛を吹くのをやめれば、正気に戻り逃げてしまう確立が高いそもそも、以前羽有りを探しに行った二人が見逃していたのだ

契約も、自らが羽有りだと言う事も知らない可能性や、ただ単に羽有りに近い人間、という可能性も捨てられない（時たま非常に羽有りに近い人間が居るのだ、現に五年前もそういった理由で研究材料としてその者の目を片方持ち帰ったらしい、非常にけしからん）

取り合えず、といった感じで演奏を続けていると、

（なッ……?!）

その少年が、いきなり地に伏した

「ちよ、だ、大丈夫デスカ?!」

(不味いデスネ、私の干渉に耐え切れない程に敏感な享受をするモノが居たトハ……!!)

駆け寄り、地に伏した少年の上半身を何とか起き上がらせ顔色を確認する

目は相変わらず干渉の名残で虚ろだが、血色は良い

干渉が原因で倒れた訳ではないようだ

(一体全体………どういったことデスカネエ、これは………)

どうしよう、と途方に暮れたような笑みしか浮かばなくなった瞬間、少年が一言呟いた

「さ、いじ……す、かーとの……なか……」

畜生、覗けなかった、と

「……………」

久しぶりに絶句してしまった私の腕の中でゆっくりと、

少年の瞳に光が戻ってくる

この少年は私より遙かに変態なのだろうか、いや待て、先ほどの干渉によってどんな夢を見ていたかも定かではない、故に変態と位置づけるには………いやだがしかし………

混乱している私はそれに気付かず、

故に……

「……あ……？……おまえ、だれ……？」

目が覚めたらしい少年が欠伸をしながら私の腕から這い出し、  
じー……っと眠気眼で問うた質問に、本当の事を言ってしまった

「え、あ……私は、帝国所属フィレス塔の主セリシス<sup>フィレス</sup>「F」メリシ  
ス、デ……あ」

後悔しても後先立たず、

頭の冷静な部分が蔑むように呟いた

（不味い……私とした事が……いくら子供だからって、愛しい羽有  
りの可能性が高いからってコレハ……）

不味い、不味い……惜しいが、言われる前に殺すべきか？

一瞬、不穏な考えが脳を過ぎったが

「あー……ていこく？とう？フィレス？セリシス？後……なんだあ  
……？どれが名前なんだよ？」

心の底から意味が分からない、といった顔で

再度名前を求めてくる目の前の少年に、変態ではなく馬鹿なようだ  
……良かった、と本気で思った

故に、

少し居住まいを正して帽子を片手で掴み、胸に持っていく……頭を<sup>カッ</sup>  
少し下げて、一礼をする

「始めマシテ少年……私はセリシス、と申しマス……以後、お見知り置キヨ」

驚いたような、まるで馬鹿で無垢な少年に、

殺さなくて済みそうだと……

それが嬉しくて、笑みを向けた

何も知らない少年が同じように笑みを浮かべて名乗った名を、頭で復唱させながら

## デジャビュ + 名乗り // 落ちた火蓋

道化<sup>ビエロ</sup>みたいだなあ、と……目の前で一礼した相手にそう思う  
兎に角全身カラフルな男性……いや、まだ青年だろうか？  
独特の雰囲気と喋り方をする彼は、恐らく異国人だろう  
ニコニコと笑みを浮かべて俺を見ているから、名乗ると更に嬉しそ  
うな顔になった

(なんか……見たことあるような……)

初対面にも関わらずそう感じたのはこれで恐らく三度目で……  
一度目はセイレン、二度目は藍、三度目はセリシスと名乗った目の  
前の彼だ  
不思議な事もあるもんだと……うん、七不思議の一つに加えておこ  
う、と勝手に決めた後  
ふと……じーっと俺を見ている彼に気付いた

(……?)

首を傾げてみれば、どうやら俺が知り合いに似ているとのことだそ  
うだ  
俺も丁度そう思っていたから、偶然って怖いなあ、と少し笑いあった  
……何となく、今日は偶然が多い気がした

(俺の気のせいか……?)

少し悩んでいる間に、近くに生えている木々が目に入り、一瞬此処

が何処だか分からなくなる

確か俺は、今日は学校に行って休みだと言われて……それで、教室に居て……

(うっわ、俺この年でボケたのかよっ?!)

不味い、非常に不味い

教室から此処までの記憶が全く無い

いや、何か夢を見ていたような気はするが……それも、非常に残念で、何かが惜しかった夢

(思い出せねえ……何かすげえ気になんだけど……)

思い出せと頭を叩いてみる

うん、少し呆けた視線と痛みを頂戴しただけで進展なし

(ははは、滅茶苦茶虚しいなあおい)

脳内で思考が一回りし、虚しくなって体操座りをしていると、

「えーっと……葵クーン？」

後ろで苦笑している声が聞こえた

(あ、そっぴやセリシスも居たんだっ) 若干失礼な事を思った後、何でもないと首を降っておいた

…割と気にしない性格らしく、その後好きな女性のタイプ セリシスと名乗ったそいつはどうやら『アレ』がもふもふな女性が好みらしい(アレって何だアレって) やらを話し、良くは分からないが何だかどこかが似ているような気がした  
だから、

「なあ、セリシス」

「ソー？何デスカ？」

「……おまえって、この国の奴じゃねえよな？」

ほぼ無意識の内に口からその言葉が出た

何故今更そんな事を呟いているんだ、なんて全然思わなくて  
答えてくれると妙な確信を持って彼を見た  
瞬間、

(っあ……？)

小さく、笛のような音がした気がした

だけど俺にそれを確かめる術は、無かった

だって何故か俺の視界はぐにやりと歪んで頭がぼんやりして……

(あ、れ、つめ、た、い)

無機質とは少し違う、だけど固い冷たさを感じた

薄ぼんやりと視界に移ったのは土の色で……

あれえ、何これデジヤビユ？

意識が消える直前、冷静な事を思った自分に賞賛の拍手を送りたい  
そんな馬鹿げた事を思いながら……俺の意識はそこで途切れた



(……あの変態が居ない方がよく寝れたような気がする)

そう思ってしまう程僕の目覚めは遅く、  
目を開けてすぐ日が空のてっぺんに昇っているのを確認できた  
隣を見ると、エリスちゃんや皆がまだ寝ていて……

(あー、皆僕と同じだったんだ)

何となく、あの変態は目覚まし役を見事に果たして居たんだなあ……  
…と、今更ながらに気付いた

まあ、起こし方はなんともユニークで毎回変態がお星様と消えかけるのだが、それは今は触れないでおこう

「おー、ウルシーじゃねえか、遅ようさん」

「確かに遅ようさんだべなあー」

「今日は皆さんよく寝入っていたようですね……ウルシー君、遅ようございます」

掛けられた声に、寝ていた場所から這い出して空を仰ぎ深呼吸を一つ  
そして、色々複雑な思いを飲み込んで笑顔で会釈を返した  
すると、ぼん、と何かを押し付けられた

「……これは？」

「見て分かんذار？あの糞ド変態からの文だよ、文」

変態にデコレートされ、哀れ変態仕様にされてしまっている鳥を撫  
でながら嘉華さんは不機嫌そうに言う

……何処となく、その鳥は半目で何だか偉そうに見えるが……

(うん、これは僕の気のせいだ)

いかななあ、最近屈折してる変人達と触れ合う機会が多すぎて……

(おっと、睨まれた)  
慌てて視線を逸らすと、苦笑を零したシェルアさんは困ったような顔をする

「『自らの保護よりも作戦実行を優先されたし』……との事です」  
「何時もの……『別行動したいデスー』なーんて事はあ、最近治まってきたと思っただんだどもなあ」

うーん、と二人は苦笑する  
慣れてる……とも思えるその顔に、同じく慣れているから苦笑を返すしかない  
だけど浮かべた苦笑も、

「……居たんじゃねえのか、此処にまだ……同族が」

その一言に、掻き消された

(……不味いなあ……)  
少し重くなった空気に内心ヒヤリとする  
そう、変態が別行動をするという事は、同族が居る可能性が高いという事  
そしてもしも、  
もしも同族がまだこの国に存在していたならば

(僕の、)  
全ては僕の失態で……

「私と、ウルシーで彼の保護に向かわせて下さい」

ふいに、真っ直ぐな声が後ろから聞こえ振り返ると、

(……………エリスちゃん……………)

強い瞳に意志を宿した、彼女が居た

じっ、と見つめ続ける彼女に少し考えるような素振りをして嘉華さんは言った

無理だ、と

「私達じゃ、力不足、ですか」

少し悔しげに彼女が言う

ほんの少し、僕が付属品と化すしか無いから……………つまり、僕は足手纏いだから無理だと言ったんじゃないかな、と思う

なら答えは簡単だ、彼女を一人で向かわすのは気が重いけど、それで僕のせいで被った彼女の失態も、帳消しに……………

其処まで思った瞬間、何故か、でこピンされた

(っい、いたっ……………！)

はつきり言おう、目の前が揺れた、そりゃあもう大きく

……………取り合えず、何とか踏ん張ることに成功した僕は頭を押さえながら嘉華さんを見る

何だか苦笑しているようにも見えた

そして、

「あ……………んな顔すんな、お前等を過小評価してるって訳じゃねえんだ、ただ、お前等顔われてんじゃん」

「あ……………」

(……………忘れてた)

初歩的なミスを言われ、失念していた事を認めざるを得ない  
てか、

(エリスちゃんがミスって……珍しい)  
それ程この失態が大きく心に響いているのかもしれない  
見ると、少し申し訳無さそうにしている  
これは、僕が何とかしないと……

「嘉華さん、僕に……」

言いかけて一瞬頭に過ぎったのは、

おい、ウルルー!!!

満面の笑みで僕をウルルーと呼んでいた、

「……僕に、その作戦の花形を務めさせて下さい」

大切な……いや、大切だった、

「……いいのかよ、お前の……あれだろ、お前をダチ、つってた奴  
の父親を、」

「この島につ!!!……この島に、国に、居るのは全て、」

ただの、他人でしかない

別れを告げようと思います

未練たらしい男は、嫌われるでしょう？

そう告げ微笑めば、

「お前の矜持プライドはよく分かった……けど、無理すんなよ」  
嘉華さんにそんな事を言われ、頭を軽く叩かれた

そして彼女はまだ寝ている皆を起こす為に洞窟へと向かい……

シエルアさんやマーニスさんも肩を叩いて、嘉華さんと同じようにすれ違っていった

(一体、何なんだろう……)

少し疑問に思うがそれは、

「……ウルシー……」

「ん、どうしたのエリスちゃん？」

「そんな顔、しないで」

泣きそうだよ、と小さく呟き、僕の頬を撫でるエリスちゃんが答えを与えてくれた

(泣きそう、か……)

気付き、自然と俯く

大丈夫かと、エリスちゃんの優しい声と彼女の体温を感じた  
ふわりと、優しい香りに抱き締められているのだと認識したけど……

……僕は……

「僕は、弱くなったんだね」

言葉に、ぎゅっと強くなった力にそつと……添えるように背に回した

(ああ、僕は……)

可笑しいなあ、僕は、僕は……

少し歯を食い縛り、青い青い空を見上げる

風に舞い、彼女の美しい金系の髪が時折視界に映る

何もかもが美しくして無機質で……僕はただ、腹の底から沸き上がる  
笑いを噛み殺すしか無かった

\*\*\*\*\*

「　　っ!?!?」

音が、聞こえた

隣で同じく葵を探していた楓が、急に顔を上げたオレを心配そうな顔で見たのが分かった

が、それどころじゃなかった

確かに聞こえたのだ

右耳　扉の奥で兄という人物の魂を継承した右半分　　が音を拾った

ならば答えは一つ、

(風の翼が、来てっ……!!)

「あ、こ、鴻苑クン!?!」

背に楓の音が聞こえたが、オレは振り返る事無く走った

恐らく葵は大丈夫だ、皆が皆、葵を探しているのだから

(あっちは大丈夫、さっ……)

自らに言い聞かせ、ただ走る

嫌な予感がする……しかも、こういう嫌な予感に限って数分の狂いも無く当たるのだ、正直かなり恨めしい

心の中で毒つく間に、島の中心にある王宮へと辿り着き、

(何も……何もありませんようにっ!!)

祈るように、

絶るように心の中で叫びその大きな扉を開いて見えたのは、倒れているヒト、ヒト、ヒト……そして、アカ

「っ……！！」

鴻苑、君は覚悟していた筈だろう

思わず立ち止まり目を見張るオレに、右側が音を拾う

一瞬、反射的に体が震えたが構わず駆け上がる

(この時間帯、この状況……なら父さんが居るのは謁見の間……！)

全力で走り続けたからか、それとも襲い来る恐怖からか、息が上がるただ怖かった、ただ嫌だった

もう失うのはたくさん、さっ！！

階段を登りきり、

目の前に大きな扉が現れて、

(無事でっ……無事で居てくれっ！！)

バンッ……！！

「父さん！！」

「っ鴻苑?!」

勢い良く扉を開けて見えたのは……

漆黒の翼を背に生やした、人間と同じ姿の見知らぬ誰か達とそいつ

等に囲まれるようにして女子供の前に立つ父の姿  
服に切られた後はあるが、遠目だが見た所深い傷は無いようで少し  
息を吐いた  
と、

「…………だから、早く済ませたかったのに…………」

右耳が、微かな声を拾った

それと同時に、驚いたように右側が反応を示した

(…………にい、さんが反応したって事は…………)

まさか、とはもう思わない

覚悟はずっとしていた…………扉の中に入り、全てを受け入れる決意を  
した時から、

(覚悟はしていた、さ…………)

浅く息を一つ吸い、吐き出すと同時に笑みを浮かべる

かけるべき言葉は一つだけ

それはとても簡単で、それはとても残酷な…………

「…………ダイヤモンド帝国所属の兵とお見受けした！我が父と民から離れ  
て頂こうか！」

其処に居るであろうかつての友達へ、決別とも言える言葉を叫んだ  
ほんの少し、動揺のようなものが広がったのが目に見えて分かった  
だから、

(葵に知れたらきつと怒られるんだろうさねえ…………)

瞬きと見えるよう、微かにゆっくりと両目を閉じ右目に集中させる  
脳裏に描くのは兄の、あの日見た背中



鴻苑、君はまだ使えこなせないだろう、大丈夫かな？

心配そうな声が聞こえて、  
死んで尚心配性で仕方ない兄に苦笑を浮かべ、ずっと言いたかった  
言葉を紡ぐ

（大丈夫にしてみせるさ、オレは、兄さんの弟だ）  
微かに、もう形が存在しない兄が、優しく微笑んだ  
だから、

（今度は、オレが守るんさ）

「纏いしは風の韻符、我が身運びて吹き荒れよ！」  
「っ、離れる！！」

オレが動いたのと鋭い女性の声が響いたのはほぼ同時だった  
そして、さすが風の翼というべきか……弾かれたように距離を取る  
様は見事としか言いようが無くて……

（けど、オレの目的はそっちじゃないっ）  
避けられるのは初めから分かっていた  
そもそも、オレ一人で勝てる等と思ってやいない

「っ父さん！！」

父の前に降り立った瞬間、発生した小さな竜巻のような風が壁を壊  
した

（っし、狙い通り！）  
父の目を見た後、開いた壁に目を向け頷く  
少し驚いたような顔を浮かべたが、父はすぐさま、皆を率い、壁の  
穴へと走り出す

「っな、正気の沙汰か？此処は、」

此処は5階の高さだぞ……？

一瞬、隙が生まれた

生憎と、武器は持っていないし強くも無いオレがそのチャンスを逃す訳にはいかない

(落ち着くんさ、オレ……勝つことは考えるな)

「響くは閃光、煌くは『太陽』！！」

「っ！！」

「今の内に飛び降りるんさ！！」

目を開けてられない程の閃光に、やはり視力がかなり良いらしい彼らが苦痛の声を上げた

何とか逃げられるかもしれない

そう思い振り返った時、ほんの少し皆の迷った視線が送られただから……

(大丈夫さ……オレを、信じる)

ただ力強く頷きと、意を決したように皆が前を見据えたことに安堵した

そう、勝つのはオレの役目じゃない

ただの時間稼ぎでいい

(オレは……ヒトを救う事を第一に考える！)

「っ……我が声に答えよ、雪を纏いて光を享受せよ、『氷花』」

青のグラデーションが光に煌いたのを認識した瞬間、

声と共に氷自体を纏ったかのような大きな花が無数に現れ影を落とすようにしていく

(っ、このままじゃ、)

光が弱まり影が出来れば、少しの時間で目を元の感覚に戻す事は容易だろう

早く次の手を……

そう思った瞬間、

「鴻苑！民は皆逃げさせたぞ！！」

そんな父の声が聞こえ、一瞬安堵し意識がそちらに向かった直後、

「……いい作戦だったけど、なあ」

「っ！？」

すぐ間近で聞こえた声に背筋が凍る

咄嗟に身体を捻ると、左肩辺りを斬撃が掠った

「へえ、人間にしちゃ瞬発力もあるなあ、人間にしとくのが惜しいくらいだ」

軽く口笛を吹きながら赤い髪の女が言う

(まずっ……)

二発目が来る、避けなければ死

最悪の状況が頭に過ぎり、

「『エリュティアマイム深紅の水』！！」

咄嗟に能力を発動させ、二発目の斬撃を軽減する事を出来た

が、  
（くっ……！！）  
咄嗟だった為、軽くしか軽減できず鎖骨辺りから臍の上辺りまでを切り裂かれた  
それでも深刻な深さではない、そう判断した瞬間

ゴッ！！

「　　つつ……！！」

斬撃に少し遅れて襲ってきた衝撃刃に吹き飛ばされ思いつきり後頭部を強打した

一瞬意識が遠のきかけたが、父の焦ったような顔が目に入り、意識は薄れただけで終わった

（っ………損傷、は、）  
左と右に意識を送る

ほんの僅かに動いた、いける、大丈夫だ

微かに体中が痛んだが、何とか立ち上がる

すると酷く女性が呆れたような、疑うような顔で見てきた

「　　……お前、よくそんななって動けるな………本当に人間か？」

（失礼な奴、さなあ………オレはれっきとした人間だ、馬鹿）

と心だけで突っ込み睨みつける

どうやら先ほど出した深紅の水を諸に被ったらしく今のオレは血塗れに見えるらしい

ああ、どうりで服とか靴とかその他諸々引っ付いて気持ち悪いなあ、とか思っただがオレの気のせいじゃなかったらしい  
感覚はやられてないらしく、酷く安心した

……鴻苑、変な所に安心してる場合じゃないよ

うん、分かっているけど其処で冷静な突っ込みはしないで欲しかった  
割と今オレ頑張って疲れて……じゃなくて、

「王、に……触れるのは、まだ早いん、さ」

まだオレはやれる

まだオレは守る意思がある

だから、だからまだ……

「まだ、負けないさ！！」

風の翼の大群が相手だろうと、

身体を切り裂かれようと、血を流そうともまだ戦える、負けてない  
いや、

（負ける、ものかつ）

歯を食い縛り睨めば、少し感心したような視線を送られたような気が  
がした

そして、

「……決めた、お前は俺様が殺す、てめえら俺様がコイツ殺すまで  
これ以上誰にも手え出すんじゃないぞ！！」

不敵に笑い、女性が好戦的な笑みを浮かべ剣を構えた

どうやら向こうも土俵に立ってくれたらしい  
思ったとおり……風の翼は、兄のように優しい奴ばかりらしい  
心の中でだけ感謝しながら、

「オレは鴻苑！…この国の全てを守る為に……勝たせて貰うぞ！」  
「はっ、ひよつこだと思ってたがいつちよ前に国を守ると語るか…  
…いいじゃねえか、俺様は嘉華！嘉華！M！メリウス！…一騎討ち  
のルールに基づいて、お前を討ち取るまでは他に手を出さんと誓お  
う！…！」

「さあ、尋常に勝負！…！」

共に、名乗りを上げた

公式？：増える衝突 訪問者Ⅱ 混沌へ向かう道標

夢を見ていたような気もするし、何も見ていなかったような気もする  
そんな事を少し思いながら、眠りから意識を離れさせる  
すると、微かにだが聞こえてくるものがあった

(……………おと……………？この、おとは……………)

ああ、酷く懐かしい

何時だったか誰かに弾いて……………いや、これは、

「っ……！」

勢いよく起き上がる

心臓が早鐘のように打っているがそんな事はどうでもいい  
そうだ、この音は、笛の音は、笛は、

「何であの笛の音が聞こえる……………嘘だろう……………あの笛をあげた彼は  
もう、」

数百年も前の事だ、あの時彼は紛れも無く人間だった

風の翼と呼ばれる彼らと違う人間が、生きている筈が無い

(彼から笛が受け継がれた……………？いや、けど、この曲は)

確かに俺が笛をあげたと同時に教えてあげた曲で、

この曲を操る事の出来るのは俺から直々に伝えられた彼だけで……………

「……………考えても始まらない、か……………」

溜息を一つ吐き、

何時もの服に着替えようとして……無かった  
そもそも、昨日ベットで寝た記憶も無い  
誰かが運んでくれたとして、此処は何処で誰が……？  
其処まで思った瞬間、

「わっ?!」

「本体ー、遅いー……葵が行っちゃうよー」

ばふ、とも言える効果音と共に顔に何かが……考えるまでもなく翡翠だった

(確かに外は太陽が昇りきって……って、)

「葵が行っちゃう? どういうことだ?」

「この笛の音色ー……呼んでるのー」

心配そうな顔をする翡翠の言葉になるほど……この笛を吹いている人物は確定したな、と溜息を吐きたくなる

あの笛を其処まで使いこなせるようになってるのなら、

(……殺す気でいかなないとこっちがアウト、か……)

酷くめんどくさい事になった

生徒達の前で全力を晒すことは避けたかったのだが……

、インッ……

「……ん?」

ふいに、かすかな金属音が聞こえた  
聞き間違いか、と思った瞬間……

(息遣い……? 誰かが、走ってる?)



荒い息使いが近づいてきているのを感じた  
取り合えずそこら辺に掛けてあった服を借り、翡翠が肩の上（どうやら定位置としたらしい）に座るのを確認して窓から飛び降りると、

「ひゃう?!」

思った以上に早く走っていたらしく、丁度目の前に降り立ってしまった  
った

ああ、失敗した……慌てると何時もこうだ、と治らないすっかり癖に内心溜息を吐きながら、尻餅を付かせてしまった相手に手を差し出す

「あ、ごめん、大丈夫かな、楓さん」

「あ、だ、大丈夫です……っ、あ、藍さん！お願いです、鴻苑クンを助けて下さいっ!」

叫ぶように縋るように楓さんに抱きつかれたのと同時に、破壊音のようなものが聞こえた

(この音の位置……王宮?!)

金属音が聞こえた時気付くべきだった、恐らく歴史は変わって……

「楓さん、彼は王宮に居る……そして敵も殆どが王宮に居る、だから君は危険を皆に知らせて、」

「い、嫌ですうっ!」

俺の言葉を掻き消すように叫んだ楓さんは……泣いていた  
けどその瞳は強く……

(……無理だなあ、これは……)

この瞳は知っている、例え危険に……死に向かうだけだとしても、

そちらに向かうという意味

「……翡翠、葵の方は頼めるか？」

「うんー、任せるー」

ぽん、と胸を叩いたと思えば翡翠は、

「わっ?!」

「!?!」

「行ってくるー」

小さなその背に純白の羽根を生やし、風のように飛んでいったその姿を見て頭に過ぎるのは、俺を模して作ったのだと言った無邪気な天才の姿

(は、はは……これはセレン嬢……貴女には適わないなあ……)

最早苦笑しか浮かばない

最早……

(……力の分布的に、葵の方は皆が向かって……合流した、かなら、)

こっちは急いだ方がいいだろう

そう判断して、この国に来てからすぐ仕掛けた細工を起動させるべく小さく息を吸う

そして、

「『リアン・ラオム繋がりし空間』」

ピシリ、ともグニヤリ、とも言えない感覚が体中に広がる

その不快感に顔を顰めないよう気を遣いながら、後ろに居る楓さんに手を差し出し

約束だよ、と一つの言葉を告げる

「俺が良いと言つまで目を閉じて……俺の手を、離さないで」

コクリ、と頷き一つ受け取りその小さな手を握る

(……あの時代とここ……どちらがこの手の温もりは暖かったんだろう……)

両の手を失った俺には最早分らないけど、

(この手を引くべきは俺じゃなかった、あの時代に本気でそう思った……だから、)

さあ、この子の手を引くべき人を助けに行こう

片手を目の高さまで上げ、横にスライドするように動かすと同時に王宮の事を思い浮かべる

あの時代に、本来玉座に座るべきだった彼を、思い浮かべて

そして視界は赤に、青に、紫に……

最後に全てを諦めたような黒に塗り潰されていった

空間が歪み、二人が何も無い筈の場所から消えた

いや、歪んだ空間に吸い込まれたといった方が正しいのかもしれぬ  
そしてそれを……高い崖の上　風の翼達が寝床にしていたその場所　から、眺めていた人影があった

深緑のマントとそれについているフードで顔は見えないが、フード

から零れるようにして風に揺れる髪の色は、初雪のように穢れ無き  
純白

しばらく二人が居た場所を眺め、

「……………あれは、どういった術なんだろうな」

様々な他国の術は見てきたがああいった類のものは初めて見た  
そう言い、賞賛を讃えるかのような表情で頷き人影は島の中心にあ  
る王宮へと、そして森へと視線を移す  
そして、

「この国の王は、どっちに居るんだろうな」

小さく、困ったように笑う  
直後、

「っと、おお、すっげえ風ー……………」

人影を吹き飛ばすかのような風が吹き、その人は右手でフードを押  
さえた

マントがまためき、軍服のような物の上からでも分かる線の細い華  
奢な体には……………

左腕が、無かった

嫌な予感がする

そもそも今日は何故か嫌な予感しかしない

(何処、に、居るのですか?)

見渡すこの森はこんなに深かっただろうか

こんなにも静かだったろうか? 分からない、分からないけれど……

「っセイレン!」

気付けば、楓様と鴻苑様以外(藍様の代わりに教師ジャンスも居た)の何時もの仲間が居た

立ち止まって初めて気付いた

息が、苦しい

胸が痛くて息が上手く出来ない

「すみま、せん……嫌な、予感がして……」

根拠の無い不安に囚われて行動するなど私らしくも無い

そもそも、私が、不安、など……

俯く私に、皆様が優しい声を掛けてくれる

それがとても嬉しくて申し訳なくて……口を開こうとした瞬間、

「アレラー? 大勢で……ドチラ様でシヨウカ?」

聞いた事の無い声が聞こえた

振り返ると見えたのは道化のような姿

見事な紫のグラデーシヨンの髪に、普段ならば感嘆の声の一つくらい漏らすだろが、彼が腕に抱えている彼が目に入った瞬間、思考が停止した

「っ 葵様!!」

「葵っ!!」

「おやア? ご知り合いデシタか……これはこれは、ならば自己紹介しないといけませんネエ……ワタクシはセリシスファイルス「F」メリウス、デス……以後お見知りおきを」

クスリ、と笑った彼は優雅に一礼する

その間も、葵様はピクリとも動かずただ抱きかかえられているだけだった

「……セリシスさんとやら、お前が抱えてる奴を帰してくれねえか?」

争う気は俺等にはねえんだ、

と私達を庇うように前に教師ジャンスは笑みを浮かべて言う  
そして下がれ、とでも言いたげに手を動かした

「……そうですネエ……まず、貴方はドチラ様でしょうか?」

「俺は、ジャンス……此処に居る奴等とお前が抱えてる奴の先生だ」  
「なるほドオ……ンー、どうしますかネエ」

彼はクスクス、と笑いながら品定めするかのような目を遠慮なく私達にぶつけてくる  
半端無い不快感に襲われるが奥歯を噛み締めた耐える  
すると、

<あ、の……一瞬だけど、あの人……複雑な色、してた>

か細い声が微かに耳に届いた

(複雑な、色……?)

<えと、何だろう……上手く言えないけど、迷いの色、みたいな…

…>

その言葉に、もう一度気付かれない程度に彼の顔を窺う

が、ただ緩やかに得体の知れない笑みを浮かべるだけでよく分からない

しばらく考えるような素振りで笑っていたが、

「……拒否シマ〜ス」

ニツコリと、本当に楽しげに笑った

「ど、どうしてですか?!」

叫ぶ涼の声も、

「……ワタクシのユメの為には、彼も必要なのです」

更に笑みを深くし、笑う彼の声も耳に入らなかった

(失う、失ってしまう……?)

体を支配するのは、無人島の帰りの……

崩れる彼の体と悲鳴……身が凍ったような、恐怖

そして、

「セイレン?! 落ち着け!!!」

焦ったように叫ぶそんな声も、聞こえなかった

右手でアイコンを呼び出しながら彼を睨み、全力で走る  
いや、でも私には彼さえも見えていないのかもしれない  
ただ、ただ

(婆様……!!)

何の反応も示さない彼だけを、見つめていた

「ヒュウ、好戦的なお嬢さんですネエ……そういう子は嫌いじゃない  
デスヨオ」

ケタケタと、上から笑い声が降ってきた時にはもう、術式発動は終  
わっていた

(纏いしは風……!!)

「来い、突風!!」

竜巻程の大きさの風の塊が彼居た場所に激突したが、  
彼は居ない

(っ、斜め右上!!)

すぐさま刀を抜き視線を巡らせ見つける  
全力で地面を蹴り、一気に距離を詰める

(もっと、もっと早く!)

思いを乗せて振り抜いたが、掠りもせず

「……思いっきりいきますネエ……彼に当たったらどうするのデス  
か」

「くっ……!!」

トン、と刃先に着地し



「いけませんネエ」と、笑う

「っ!!!」

「おっトオ」

振り払うように振れば、かなり遠くまで距離を取られる  
そしてまた、笑う

「っ風よ集いて吹き荒れよ!!!」

「……どこを狙っているのデスか？」

クスクスクスクス、ケラケラケラケラ  
笑う笑う、嘲笑う……

刀を振りぬき、風の力を行使しても当たらない  
時折聞こえる制止を叫ぶ声は私に届く前に風に掻き消される  
そして、

耳障りな笑い声は、絶えることさえない

時間にしては僅かで、

だけど私には無限に感じられた

当たらない、助ける事さえ出来ない、それすら私は、私は

(っ、どうして……私は確かに強くなったのに、)

どうして彼を倒す事が出来ず、葵様を守る事が出来ない………？

「……お嬢さんに良い事を教えてあげまシヨウ」

ふいに、笑みを止めて彼は哀れむような顔で真っ直ぐ近づいてきた好機、と頭は判断しても身体は動かない  
その悲しげでいて真っ直ぐな瞳から逃げる事が出来ない  
そして、

ゆっくりと……彼の手が、頬を撫でた

「セイレン!!」

「戦場においては……決して持つていけない感情があるのですよ」

教師ジャンスに、強い力で引っぱられたのと

彼の手は思いの他不快では無かったことに気付いたのは、同時だった  
後方に追いやられ、フェル様や涼様が心配そうな声で話しかけてくるが、何も喋れなかった

何故なら、

「憎しみは、瞳を曇らすものでしかない……そして、戦場においては仲間との信頼が不可欠！冷静さを欠いて一人が走れば他の者がフォローに回らなければならぬ！！貴様にとって仲間とはなんだ！？自らの失態を拭うだけの存在か、その程度の者でしかないと？！それで人を救うなどと片腹痛いわ!!」

射殺さんとするかのような強い瞳に、

歴戦の将のような威圧と威厳に、ピクリとも身体を動かす事が出来なかった

そしてゆっくりと……彼の言葉が頭に染み入った瞬間、分かった  
私はただ一人で、ただただ……空回っていただけだと……

「……セイレン、は……ほんと、は……そ、いう……奴じゃ、ねえんだ、ぜ、セリシス」

俯いた私の耳に、声が聞こえた

弾かれたように顔を上げると、いつの間にか葵様が帷様と柚李様に抱えられていた

何時葵様は助けられたのだろう、と思考が止まるが

(そう、いえば……)

二度目に風を使役していた時、彼は葵様を抱えていなかったと思いが当たった

それすらも今の今まで気付かない自分が齒痒くて拳を握り締める  
と、

「セイレンは……すっげえ、優しくて強くて……カッコいいんだぜ  
！」

満面の笑みを浮かべ、握り締めた手を包むように優しく握ってくれた  
その温かさにやっと焦りは消えて、

(よか、った……)

どうしようもなく、嬉しくなった

その時、

「あんれえ……？せー君、苦戦してたべか？」

「やっと付いたー、葵ー、大丈夫かー」

初めて聞く声が二つ響いた



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2550y/>

---

馬鹿の世界リフォーム記

2012年1月1日01時38分発行